

至高の兄（骸骨）と究
極の妹（小悪魔）

生コーヒー狸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モモンガ様に、リアルで目の中に入れても痛くない程、可愛い妹がいて、一緒にユグドラシルをプレイしていて、2人で転移してしまったという設定のお話し。

※色々なメディアから設定やネタを参考にさせて戴いております。

それが不快な方は読まない方がいいでしょう。

目次

悟と幸子	1	野宮（ナザリック基準）	154
2人の気持ち	17	ンフィーレアの告白	171
究極の妹	28	森の賢王	185
ナザリックの中心でアイを叫んだがいこ	48	純白の英雄譚（上）	204
つ	61	純白の英雄譚（下）	223
初めての外出と戦闘	78	周辺国家の動向	242
王国戦士長と陽光聖典隊長	93	その後のエ・ランテル	263
様々な問題	109	ハゲとキチのその後	278
エ・ランテルへ	123	今後の対応	296
ためてうれしい♪さつちんポイント	139	スタメン抜擢	312
メイドNの受難	139	大墳墓への挑戦者（1）	332
		大墳墓への挑戦者（2）	347
		大墳墓への挑戦者（3）	362

大墳墓への挑戦者(4)	381
大墳墓への侵入者	396
クレーマー	418
逆転お白州	436
真の狙い	459
純白の冒険譚(1)	474
純白の冒険譚(2)	494
純白の冒険譚(3)	507
純白の冒険譚(4)	525

悟と幸子

西暦二一三〇年代の日本で、その常軌を逸した完成度と自由度で、最も隆盛と人気を誇ったDMMO—RPGである「ユグドラシル」。そのユグドラシルにおいて最強最悪のDQNギルドとして名をはせた「アインズ・ウール・ゴウン」のギルド拠点である「ナザリック地下大墳墓」の第九階層にある「円卓」において、全ギルドメンバーが参加する定例会議が開催されていた。

ギルドメンバーであるペロロンチーノは、会議の進行を退屈そうに眺めていた。定例会議といっても、開催されるのは月に一度。特に重要な議題が有るわけでも無く、ゲーム内でのイベントやアイテムについての雑談が殆どだ。彼にとっては、現在攻略中のゲームである「幼稚園ソドム」のほうが重要だったりする。

実際、ギルドメンバーの何人かは、ログインの頻度も減ってきており、こうして全ギルドメンバーが円卓に揃うのも、定例会議くらいのものだ。普段は仲の良いメンバー同士で狩りやダンジョンへ行ったり、ナザリック地下大墳墓のどこかの階層で駄弁っている事が多い。

アインズ・ウール・ゴウンはギルドメンバーが社会人である事と、ゲーム内でのアバ

ターが異形種である事以外は、特に制約の無いギルドである。ガチなギルドに有りがちな、イベント参加やログインの強要といった行為や、ギルドを優先したキャラクターのビルドや装備への指定などもなく、雰囲気の良い、居心地の良いギルドである。

しかしながら一癖も二癖もあるメンバー達は、廃人プレイヤーにも匹敵するキャラクターを造り上げており、アインズ・ウール・ゴウンはギルドメンバー41人という規模からはあり得ない、ユグドラシル内でのギルドランク9位という実績を誇っていた。

そんなギルドのトップであるモモンガから、会議の最後に、とある議題が提起されたのだった。

「私事で申し訳ないのですが、アインズ・ウール・ゴウンのギルド長として、皆さんには非お願ひしたい事があります。」

ギルド長であるモモンガの一言に全員の注目が集まった。変化の無いアバターの表情からは読み取れないが、言葉の節々に緊張と申し訳なさが感じられた。

彼はギルドのトップというよりは、調整役としてのイメージが強く、自分の意見や要望を強く出す事は殆どなかった。普段から癖のあるギルメン達（虫と悪魔、肉棒と鳥）の間の緩衝材のように立ちまわっている事が多く、ペロロンチーノもよく世話になっていた。

そんなモモンガの今までにない言動に、ペロロンチーノの興味は高まっていた。

「モモンガさんをお願いなんて珍しいですね。何なんだろう？」

「ギルド長にはいつもお世話になってますから。遠慮なく言って下さい」

ギルメン達の屈託の無い返答が、彼の仁徳を証明していた。この場に居る全員が、よほどの事でない限りは、彼のお願いを聞く事を受け入れていた。「ギルド長として」のお願いなのだから、ゲームに関する事なのだろう。どうしても欲しいアイテムでも有ったのだろうか？などとペロロンチーノは考える。

自分としても、ギルメンの中でも特に仲の良いモモンガの為なら、現在鋭意行楽中の「幼稚園ソドム」を中断してでも協力する事に吝かではない！そんな雰囲気を感じたのか、モモンガはとても嬉しそうに、そして頭を深々と下げながら、ギルメンに対して告げた。

「私の妹を、アインズ・ウール・ゴウンの四十二人目のメンバーとして加入させる事を、皆さんにお願いしたいのです！妹は以前からユグドラシルに興味があつて、小学校の卒業記念にインターフェースを買ってあげたのですが、これを機にユグドラシルを始めると言つてまして、それで私の所属するアインズ・ウール・ゴウンに入りたいと頼まれたのですが…」

思いがけない内容に全員の動きが止まった。アインズ・ウール・ゴウンは随分前から、

様々な理由を勘案して新規メンバーの加入を打ち切っていたが、それ以上に「モモンガに妹が居た」という事に驚いていた。彼はゲーム内ではリアルでの事情を殆ど語らなかつたからだ。

そんなギルメンの様子に動揺したのか、モモンガは怒涛の如くあれやこれやと語り出した。貧困層の家庭に生まれ育った事や、年の離れた妹の為に、小学校を卒業してすぐに働き始めた事。両親は既に亡くなり、二人きりの家族で、妹をとても可愛がっている事、そんな妹を進学させてやれない事が情けなくて、それならせめて興味を持ったユグドラシルで少しでも楽しんで欲しいと思つた事等：

「もちろんギルドメンバーの条件は理解しています！妹は小さい会社ですが就職も決まっていますし、アバターについても異形種を選択させます！当たり前ですが、わがままな姫プレイなんて許しませんし、ゲームのやり過ぎにも注意して、課金の額もしっかりと制限して…」

「モモンガさんストップ！ストップ！落ち着いて下さいっ!!」

モモンガの余りの狼狽ぶりに、ギルメンから待たされたがかかる。何とか周りがモモンガを落ち着かせると、彼の隣の席に座っていたタブラ・スマラグディナが、モモンガに代わってギルメンへ問いかける。

「私は良いと思いますよ。アインズ・ウール・ゴウンの理念にも反しませんし、モモンガ

さんの妹さんなら、信用の面でも心配は無いでしょうし…皆さんはどうですか？」

「『賛成!!』」

アイズ・ウール・ゴウンで何かを決定する場合は、多数決を重んじていた。重要な決定ではメンバーの過半数の賛成を必要としていたが、今回のモモンガからの提案は全会一致で可決される事になった。

「み、皆さん…ありがとうございますっ」

モモンガは立ちあがると、本当に嬉しそうにギルメンへ礼を述べた。

「新規メンバーなんて何年ぶりだ!?!わくわくするなあ!」

「モモンガさんに妹が居たなんてビックリしましたよ!早く会ってみたいですね。」

「いや、ウチは女の子が少なくて、肩身が狭かったから嬉しいよね」

「ホントホント!これで女性の意見も通りやすくなるといいね♪」

「『えっ?』」

メンバーが口々に歓迎の意を表している事にモモンガが感動していると、彼とは特に仲の良いペロロンチーノが、モモンガの席まで訪れて来た。

「モモンガさん!『小学生の妹』がいるなんて聞いてませんでしたよ!水くさいなう!!何で紹介してくれなかったんですか!?!大親友のモモンガさんの妹なら、俺にとつても妹も同然です!妹ちゃんが加入したら、しっかりと面倒見てあげますからね!!アバ

ターのデザインは任せて下さい！妹キャラなら一押しのカラが居るんですよ！いまハマっている「幼稚園ソドム」っていうゲームに登場するヒロインで、主人公の妹なのは当然として…」

「おい！それ以上は黙れ弟！」

「ダメだあつ!!お前の様な変態に、大事な妹を近づけるかああつ!!」

こうしてアインズ・ウール・ゴウンに四十二人目の、そして最後に為るメンバーが誕生する事となった。そしてギルドメンバーはギルド長が重度のシスコンだったことを初めて知るのであった。



私は鈴木幸子12歳。両親は私が小学校にあがる前に亡くなっているが、10歳以上離れた悟という兄が居る。両親が亡くなってからは、お兄ちゃんが私を育ててくれた。

この春、小学校を卒業して地元の小さな会社に就職する事になった。私が住むアーコロジは貧民層が大部分を占めて居て、治安や経済状態もあまり良くない。通っていた小学校でも、同級生で進学出来たのは三割以下で、私の友達も殆どが、卒業後に働かなければ生きていけない貧困層の出身だ。中にはお金の問題で学校に通えなくなつて、卒

業出来なかつた友達も少なくなかつた。

だからちやんと卒業まで小学校に通えた私はとても幸せだ。お兄ちゃんは、私に「不甲斐ない兄でごめん。」と謝っていたが、とんでもない！お兄ちゃんが私の為に、どれだけ大変だったかを知っている。

私が生まれる前は両親も健在で、家族は貧しいながらも、ささやかに暮らしていたと、亡くなった父が言っていた。成績の良かった兄は中学校へ進学するはずだったが、私が生まれた事と、母の産後の肥立ちが良くなって、働く事が困難になつた事もあつて、小学校を卒業してすぐに働く事になつたのだという。

私は両親にも兄にも申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、亡くなつた両親は私をととても可愛がってくれたし、お兄ちゃんもことある事に「お前は俺の宝だ」と言ってくれて、とても幸せだった。

お兄ちゃんは両親が無くなつた後は、よりいっそう私を大切にしてくれた。衣食住も私を優先してくれて、私の面倒をみる為に出世も断つてしまった。友人も恋人も作らず、私との生活を最優先にしてくれていた。

そんなお兄ちゃんが唯一ハマつたのが「ユグドラシル」だった。父の形見のインターフェースを装着して、一喜一憂しているお兄ちゃんを見て、最初は寂しかったり、少し気持ち悪いかな？と思つたりしたけど、ユグドラシルでの出来事をととても楽しそうに話

しているの聞いて、私もユグドラシルに憧れるようになっていった。

その後、無事に小学校を卒業して社会人となった私は、憧れだったアインズ・ウール・ゴウンの42人目のメンバーになった。ユグドラシルを始めるにあたっての最初の作業になるアバター作成は、お兄ちゃんよりも、むしろギルドメンバーの人達がこぞって協力してくれた。

お兄ちゃんと特に親しいという、ペロロンチーノさんやウルベルトさんのおススメで、プチデーモンという種族を選んだら、タブラ・スマラグディナさんがとても詳細な設定テキストを送ってくれた！

私のアバターである「さつちん(リアルでの愛称をそのまま使う事にした)」の外装は、ホワイトプリムさんがとても可愛くデザインしてくれた！赤紫の髪と瞳で、一見カワイイ女の子だけど、頭から小さな角が生えてて、口には牙があって、背中からはコウモリっぽい羽根と悪魔の尻尾が生えている。真黒なワンピースに真っ赤なグローブとブーツ！武器はフオークみたい在先端が三つ又になった特製の槍。他のメンバーの人達も、もう使わないからという理由で色々アイテムを譲ってくれたりした。

初心者で低レベルの私を心配して、クエストや狩りにも同行してくれた。特に同じ女性メンバーでもある、館ころもつちもちさん・ぶくぶく茶釜さん・やまいこさんと、お兄ちゃんの大親友？というペロロンチーノさんは私を可愛がってくれた。※ペロロン

チーノさんという時は、何故かモモンガお兄ちゃんが私から離れなかった。

ギルメンだけの特権で、ナザリック地下大墳墓の拠点NPCの作成もさせて貰えた！
すでに限界以上に拡張されていたNPC製作可能レベルを、さらにメンバー全員の間金で拡張してまで割り振ってくれた時は、兄妹揃って恐縮しまくりだった！

こんな感じで、私はユグドラシルを心から楽しむ事が出来た。「モモンガの妹さつちん」として沢山の冒険をして、色々なアイテムを手に入れて、数多くの敵と戦った。

異形種PKを繰り返していた敵対ギルドの拠点に、メンバー全員で強襲してギルド武器を破壊して、ギルドを解散に追いやったり、参加メンバーの半数が死亡と言う被害を被りながらも、ワールドエネミー討伐を達成したし、お兄ちゃん曰く「ナザリック地下墳墓を攻略した時より厳しかった」という極悪ダンジョンを制覇して、ワールドアイテムを手にする事も出来た！

ナザリック地下大墳墓に1, 500人ものプレイヤーによる、アインズ・ウール・ゴウン討伐隊が攻めて来た時には、私が倒された事に激怒したお兄ちゃんによる「プレイヤー千人殺し」があったりと、沢山の事があった。

そんな楽しいユグドラシルから、ギルメンが一人、また一人と抜けていってからも私たち兄妹は、毎日ログインしていた。2人だけしかログインしない日も多くなり、寂しい思いもしたけれど、兄妹二人きりで狩りやクエストをこなしたり、拠点への侵入者を

撃退するだけでも楽しかった。

私にとっては、ユグドラシルが楽しいというよりも、大好きなお兄ちゃんと一緒に遊べる事の方が楽しかったのだろう。

でも、私がユグドラシルを初めて3年目の2138年、運営会社からユグドラシルのサービス終了が発表された：



「またどこかでお会いしましょう」

そういつて古き漆黒の粘体は画面から消えていった……

「最後に来てくれたへろへろさんも帰っちゃったね、お兄ちゃん：」

「そうだな：へろへろさんも相変わらずのブラック勤務で大変みたいだったな。さっちゃんも明日、仕事なんだろう。ログアウトしたらどうだ？」

「ううん：今日でユグドラシルがお終いなんだから最後まで居たいの。それにまだ誰か来るかもしれないし：」

ユグドラシルのサービス最終日、サービス終了まで30分を切った現在、ナザリック地下大墳墓九階層の円卓の間に残っているのは、ギルド長モモンガと妹のさっちゃんの二

人だけだった。

この日を迎えるにあたって、ギルド長のモモンガは、既に引退したメンバーを含む全員にメールを送った。全員から返信こそあったものの、最終日までにログインしてきたギルメンは、先程のへ口へ口を含めても半数以下で、ゲームの終了をナザリックで迎えるのはモモンガとさっちゃんだけだ。

寂しいという気持ちもあったが、2人は満足していた。久しぶりに会えたギルメンも居たし、攻めてくるプレイヤーも無く放置状態だったナザリック地下大墳墓へ、終了記念にと侵入してくるプレイヤーが何組もいて、久しぶりに充実した気分も味わえたからだ。

「それにしても儲かったよね♪ここ一週間で100人以上も攻めて来たけど、ボーナスやドロップ品で大儲け！ワールドアイテムまで入手出来ちゃうなんて♪」

「まあ最後だしな…それにしても、とうとうナザリックを攻め滅ぼすような勇者は現れなかったか…ウルベルトさんあたりがいたら「不甲斐ない奴らめ！」とか言いそうだな。」

「あははー、そうだよねー。ウルベルトさん、どうしても外せない事情があるって言うていたけど…最後に会いたかったなー。」

「仕方ないさ。リアルの事情を優先させるのは当然だ。仕事、家族…他にも色々ある

からな……」

ユグドラシルの終焉が迫る中、2人の兄妹の胸に去来するものは……まだ入手していないアイテムがあつた、まだ行つた事のないエリアがあつた、まだ見た事のないモンスターがいた……もつともつとユグドラシルを楽しみたかつた！それでも終わりの刻はきてしまう……

「さつちん、最後の時は玉座の間で……と思つていたが、どう思う？」

「そうだね……さすがにもう誰も来ないと思うし、いいんじゃない。」

そう言つて2人は円卓の間を後にしようとしたが……

「あつ、そうだ！せっかくだからスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを持って行つたら？それ、お兄ちゃん用に造られたのに、あの時の1回きりしか使わなかつたでしょ。装備もしないで、ずーっと円卓の間に飾りっぱなしだったし！最後なんだからビシッと決めてみたら!？」

「アインズ・ウール・ゴウンの心臓部のギルド武器をホイホイと使えないだろ！でも、まあ……これで最後だしな。」

モモンガは円卓の間に飾られたスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを手に取りると、さつちんを連れて円卓の間を後にする。一部を除いて、ナザリツク内部を自由に転移可能なリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを使用して、第十階層の玉座の前

へ転移すると、扉の前に複数の人影があった。ナザリックの家令セバス・チャンと、彼をリーダーとした6名の戦闘メイド部隊ブリアデスである。

彼らは元々、第十階層において、侵入者を迎撃する最終一手前という設定をされていたのだが、リーダーであるセバスのみが、カンストの100レベルで、ブリアデスの6名は平均50レベルと、第十階層まで到達したプレイヤーに対しては、時間稼ぎにしかならないものだった。

かつてナザリック地下大墳墓に侵攻した1,500人の討伐隊すらも第八階層で全滅の憂目に遭った為、ギルメン以外に披露される事も無く、とうとう役目を果たす事になったNPC達である。

そんな彼らを不憫に思ったモモンガ達は、「付き従え」と命令すると、彼らを従えて玉座の間へと入って行った。

「ここに来るのも随分と久しぶりだな。ナザリックの最重要部分って設定だったけど、特に用事がある訳でも無かったしな。このNPCはアルベドだったか？タブラさんの造ったNPCで、ナザリックの守護者統括に設定されていた…あれ!?何でワールドアイテムのギンヌンガガブを持っているんだ？」

「あれ…??お兄ちゃん知らなかったの？タブラさんが「これでお前の愛するモモンガさんを守るのだぞ！」って持たせていたんだよ。」

「全く…タブラさんも勝手に…おいしいー!!」「愛するモモンガさん」ってどういう事だよ？」

「あはは♪前にアルベドの設定に「ちなみにピッチである」なんて書かれていたから、タブラさんにヒドイですよって言ったら「さっちゃんの好きに変えていいぞ」って言われたから「モモンガを愛している」って書き換えたの♪タブラさん大ウケしてたよ!」

「あんのタコがあ〜!!ウチの妹に何という事を…」

「お兄ちゃんが怒るポイントってソコなの!？」

「いけませんっ!!女の子がそんな言葉を使うなんて、兄として絶対に許しません!」

そんな遣りとりの後、モモンガは最後の時を迎える為、玉座へと腰掛けると、さっちゃんはモモンガの膝にチョコンと乗っかった。

「もうユグドラシルもお終いなんだね…楽しかったなあ…」

「そうだな…最後は何時もの言葉で締めくくろう」

「「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ!!」」

モモンガが時計を確認すると、時刻は23:59:51。ユグドラシル終了は間近に迫っていた。コンソールには「ユグドラシルのサービスは間もなく終了します。長らくのご愛顧ありがとうございました」と、メッセージが表示されている。23:59:57、58、59…流れる時間をカウントしていく。サーバーが落ちたらすぐに寝ないと、

明日の仕事に差し支える。

23：59：58、59、0：00：00：時間と共に画面がブラックアウトし、ネットとの接続が終了され……なかった!?!?

「ん…どういう事(だ)!?’」

「ぎゃつ!!何コレ!?キモイっ、痛いっ!!何で?何で?お兄ちゃん助けてえ〜」

「ど、どうしたんだ、さっちゃん?何かに攻撃されたのか??いや、ゲームなのに痛みを感じるはずは…とにかくログアウトだ!さっちゃん、緊急終了ボタンを押すんだ!」

「モモンガ様!さっちゃん様!いかがなされたのですかああ?!?!?’」

「何者かが侵入した??一体どこから?敵はどこから攻撃を?’」

「ルプスレギナ・ベータっ、急いでさっちゃん様に回復をっ!」

「こちら守護者統括アルベド!緊急事態発生!現在第十階層玉座の間において、さっちゃん様が何者かに正体不明の攻撃を受けているっ!全階層守護者は、各階層に不審が無いか確認…いえ、そのような場合ではないっ!全NPCは大至急玉座の間へ集結して、モモンガ様とさっちゃん様をお守りするのですっ!不審な者がいれば、命に代えても即時殲滅を命じますっ!!」

「ちよ…何でNPCが喋ってるの?それにもう終了時間は過ぎて…何で?コンソールが開けないぞ!?一体どうなっているんだあぁ〜」

「キモイよ〜痛いよ〜お兄ちゃあ〜ん」

突然の不快感と激痛に襲われた私は、時間になってもユグドラシルが終了していない事や、NPCが勝手に動き回って喋っている事、コンソールが開けなくなつてログアウト不可能になっている事を疑問に感じる余裕も無く、床を転げ回っていた…

2人の気持ち

ルプスレギナの《ヒール／大治療》で回復した私を見て落ち着いたお兄ちゃんは、NPCに色々と指示を出していた。「ナザリックに異変が起っているー」「各守護者達は持ち場へ帰還し、それぞれの守護領域を確認せよ」「階層守護者は2時間後に第六階層に集合せよ」「セバスはプレアデスを連れてナザリック周辺を探索」等と、矢継ぎ早に指示しているお兄ちゃんは、さすがギルド長といった貫禄だった。

「アルベド、これより私は自室でさっちゃんと2人だけで話す事があるので、何かあればメッセージで連絡せよ。」

「かしこまりました。ですが、せめて自室までの警護をお認め下さい。また万が一に備えて、部屋の外にプレイアデスを一名待機させて戴けますでしょうか？」

「転移で戻るのでその必要はない。室外での待機はその様にはからつてくれ。人選は任せた」

私は何がどうなっているのか考える事を放棄していたので、お兄ちゃんに言われるままに、第九階層のお兄ちゃんの部屋へと転移した。

「さっちゃん！本当に具合は大丈夫なのか？どこか痛まないか？気分は悪くなっていない

か？」

「うん…大丈夫だよ…でも、さっきのは、やっぱりお兄ちゃんのを《ネガティブ・タッチ／負の接触》だったの？」

「ああ…どういったわけか、時間がきてもユグドラシルは終了せず、ログアウトも出来ない。痛みや臭いを現実の様に感じるし、NPC達は生きていようだ！さらにフレンドリーファイアも有効になっている！これではまるで……」

「…ゲームが現実になった!?!まるでラノベみたいだね…信じられない。」

本当に訳が分からない。今の私の姿はゲームのアバターの「さっちゃん」だけど、ちゃんと「鈴木幸子」としての記憶と意識は残っている。でも今の私の感覚は全然違う。だって目の前のお兄ちゃんは「鈴木悟」じゃなくて「オーバーロードのモモンガ」だけだ、この人が私のお兄ちゃんだという事は、当たり前のように理解出来る。

普通なら目の前にこんな骸骨がいたら、怖いどころじゃないはずなのに、そんな事は少しも感じない。何が何だか分からないけど、お兄ちゃんと一緒なら大丈夫だと信じられる。そう思ったら急に気が抜けてグウ〜グウ〜とお腹が鳴った。

「ハハハ、夕食からけっこう時間が経ったからな。何か食べる物は…」

そう言うとお兄ちゃんは立ちあがって、部屋の外にいるプレアデスに声をかけに行つた。

「すまないがさっちゃんに食事を用意出来ないか？軽くつまめるもので良いので、急いで欲しいのだが。」

「かしこまりました。直ちに料理長へ伝えますので、少々お待ち下さい。」

凄いな美人な黒髪ポニーテールお姉さんがそこに居た！あれはプレアデスのナーベラル・ガンマちゃんだったはず。ゲームでは気にならなかつたけど、本物つてあんなに美人だったんだ！

そんな事を思っていたら、あつという間にナーベラルが大勢のメイドさん（彼女達もすつごくカワイイ！）と大きなワゴンを押しながら戻つて来た！そしてテーブルの上にたくさんのサンドイッチやドーナッツ（本物？初めて見た！）、それに色んなフルーツに、何種類ものジュースを次々に並べ出した！何これ凄い！！こんなご馳走見たこと無い！お兄ちゃんもビックリしてるよ。

「大変お待たせしました！お急ぎとの事でしたので、簡単なものですがお持ちいたしました。お飲み物は、さっちゃん様にオレンジジュース、レモンスカッシュ、ミルク、アイスティーを用意させていただきました。モモンガ様にはコーヒーと紅茶を用意しておりますが、アルコール類をご希望でしたら、直ぐにお持ちいたします。」

「お、オレンジジュースでお願いします…」

「お、おう…それじゃあ、コ、コーヒーをお願いしますか…」

「かしこまりました。ミルクと砂糖はいかがなさいますか?」

「あー、ストレートでかまわない。」

メイドさんが私とお兄ちゃんに、付きつきりでお世話してくれる! 私のコップ(すごい豪華! 宝だ!)にはオレンジジュース、お兄ちゃんのカップ(これも宝だ!)にはコーヒー(いい臭い!)が注がれる…というか、良く見るとこの部屋つて凄い! 映画で見た超高級ホテル? お城? 天井になんか宝石(シャンデリア)がある!! メイドさんもそうだったけど、ゲームが現実になるとこんなに凄いの!?

「それじゃあさっちゃん、頂こうか。好きなものを食べるといいぞ。うん、このコーヒーも素晴らしい香りだ。」

そう言ってお兄ちゃんは目を閉じると、香りを楽しむようにカップを傾けた後に、グイツと口元にカップを近づけた…そしたら骸骨の隙間からビチャー…ダラダラダラ…

「「モ、モモンガ様あーっ」」

うん…骸骨がコーヒー飲んだらこうなるに決まってるよね。



「ど、どうしたんだ、さっちゃん?? 何かに攻撃されたのか?? いや、ゲームなのに痛みを感じ

るはずは…とにかくログアウトだ！さっちゃん、緊急終了ボタンを押すんだ！」

ゲーム終了を迎えて、その余韻に浸ろうとしたモモンガの意識は、愛する妹の悲鳴で一気に覚醒した！目を開ければ見なれた妹のアバターが、悲鳴をあげてのたうちまわっている！

（一体何があつた？攻撃魔法を受けた??おれはさつきまで妹を膝の上に乗せていたはず…俺には何のダメージも無い…いや、ユグドラシルはたつた今、終了したはずでは??周りが何か騒がしいが、誰が居るんだ？いや、そんな事はどうでもいい。いまは妹を助けなければ！どうすればいいんだ!?)

「《ヒール／大治療》!!」

聞きなれない掛け声とともに、妹の身体はユグドラシルで見なれたエフェクトに包まれていく。これはユグドラシルでの回復エフェクト?それならまだゲームが続いている?どうやら無事に回復出来たのか、妹の悲鳴が止んだ…とりあえずは安心だ。

「いったいどうなっている!!ゲームの中で痛みを感じるとは!?!バグか?インターフェースの故障か?とにかくGMコールをして…コンソールが開かない?」

原因不明で理解も不能の状況にモモンガの混乱は加速するが、まずは妹の安否だ！

「大丈夫かさっちゃん?とにかくログアウトだ！俺のコンソールが開けないのだが、さっちゃんのほうはどうだ?」

モモンガは蹲る妹に駆け寄り、助け起こそうとするが直前で閃く！まさか俺のスキル《ネガティブ・タツチ／負の接触》によるフレンドリーファイアか？いや、そうだったとしてもゲームで痛みを感じる事などあり得ないはず…

「モモンガ様！まだ敵は見つかっておりません！ご注意を！」

「さっちゃん様の回復は完了しましたが、まだ安全は確保されていません！増援はまだなのでしようかつ!？」

「モモンガ様、さっちゃん様ご無事ですかつ！デミウルゴスでございます！」

「マーレっ、モモンガ様とさっちゃん様にありったけの防御魔法を！魔獣達はお二人の盾になるのよっ！」

「えいっ！《ボディ・オブ・イファルジエントベリル／光輝緑の体》《ネイチャーズ・シエルター／自然の避難所》《パワー・オブ・ガイア》」

「モモンガ様！この場は安全とは言えません。原因が判明するまで、さっちゃん様を御連れられて宝物殿へ避難を！あそこなら安全と思われます。」

「絶対二許サンゾ！侵入者共メ！コノコキユートスが皆殺シニシテクレルツ!!」

「ブチ殺すぞクソがあああつ!!《エインヘリヤル／死せる勇者の魂》っつ」

右往左往するNPC達を見てモモンガは立ちすくむ。周りが狂騒すればするほど、不思議とモモンガは冷静になっていく。

（うーん、有り得ん。さっきのはフレンドリーファイアだとしても、ゲームの中で痛みを感じるとは…それにNPC達の言動は何なのだ？こんなのはどんなAIでも不可能だぞ！というかこの騒ぎの原因は俺か！俺のせいなのか!?

コレどうすればいいんだ？ 收拾はつくのか？ 今さら俺のうっかりミスの勘違いなんて知られたら…：ええい！とにかくこの騒ぎを止めないと…）

その時モモンガの全身を連鎖する龍雷が貫いた!! そして同時に、空洞のはず頭蓋骨の中身が天地改変され始めた！

「お前達！騒々しいぞ、静かにせよ！」

モモンガの口八丁手八丁により、落ち着きを取り戻したNPC達は、それぞれに命じられた指令を果たす為に、次々と玉座の間を後にする。

依然としてナザリック地下大墳墓にはデフコンワンが発令中である。



「おいしかったあ〜♪ちようサイコー♪」

「それは良かったな。さっちゃんが喜んでくれて嬉しいぞ。」

「ホントに美味しかった！甘くてプリツとしててサクツとしてムホツとしてて！」

あたふたするメイド達を言いくるめて、二人きりになってから食べたものは本当に美味しかった。いつも食べている流動食やサプリメントは、最低限の栄養だけは保証されてるらしいけど、味とか食感とかはまったく考えていないものだしね。小さい頃の私は食事の時間が苦痛でしかなかった…

「実際に飲食が出来たうえで、味覚や香りまで再現されているか…ますますゲームでは考えられない事態だ。」

（そうそう！もうこれって決まりだよね！姿もゲームのままだし、これで姿はリアルでのままだったら異世界転移になるんだろうけど？ここってやつぱりユグドラシルなのかな？もしそうだったらナザリックは超豪華（富裕層専門アークロジ）だし、お兄ちゃんはそのギルド長（大企業の社長）で、私はその妹（とっけんかいきゅう！）なんだから安心安全の勝ち組決定だ！ウケケケケケケケケケケケケケケケケ…）

「ここの設備や内装、NPCの陣容から、ここがナザリックなのは間違いないだろうし、手持ちのアイテムも確認できた。さっちゃんも手持ちのアイテムを確認してごらん。」

「アイテムって、無限の背負い袋に入れてるやつ？でもコンソール出ないしどうやるの？」

「ああ…こうフワつとした感じでホイつとすれば！」

「おおー！出た出た！さすがお兄ちゃん！」

（これはすごい！私が転げまわったり、スイーツを貪っている間にも、色々な事を進めているお兄ちゃんに感謝感激だ！このままお任せしちゃおう。）

「この後は第六階層の闘技場で、魔法やスキルの確認をしてみる予定だ。また階層守護者達を集めて、彼らの様子を確認するつもりだ。」

「おーけー♪あつ、そうだ！ぷーにゃんを連れてつてもいいかな？」

（「ぷーにゃん」は私が創造した100レベルNPCだ。種族はケット・シー。外見は変な翼と2本の尻尾が生えている猫で、灰色で極上の毛並みを持っている。私のペットという設定だが、アインズ・ウール・ゴウンの有志の皆様によるガチビルドで、ナザリツクの全NPC達の中でも上位の戦闘力を持っている。ぶっちゃけ私より強いはずだ。）

もともと私は猫が大好きで、ペットの猫に憧れていたのだが、それを知ったお兄ちゃん達が、ユグドラシルの猫好きで知られる有名ギルド「ネコさま大王国」に連れて行ってくれた時は、とつても楽しかった。どんな方法で話をつけたのか分からないけど、ネコさま大王国のギルド長から「永久名誉会員証」というのを貰ったおかげで、あそこには何度も遊びに行く事が出来た。）

「そうだ！せっかくだからパンドラも連れていこうよー！」

「ブッフオオーwwww」

「ど、どうしたのお兄ちゃん？」

「いつ、いや…何でも無い！何でも無いぞ。うん、そう、パンドラな、あいつは宝物殿にいる唯一の守護者だ、あそこはナザリックでも重要なところで無人にする訳にはいかな
いから、また今度！そうしよう！」



「アムアム…ハムハム…ンまあ〜いっ！」

モモンガは、目の前で心の底から美味しそうに食事する妹を見ながら思った…

（本当に飲食している！オーバードである俺が飲食不可なのは設定通りだが…それにしても本当に美味そうに食べているな。未だに状況ははつきりしないし、こうなった原因も不明だが、幸子だけは何としても守らなければ！何とか元の世界に戻る方法を探し出して…）

モモンガは考える。考えて考えて考えぬく…アンデッドの最上位種族であるオーバードに備わった、深遠で大いなる知謀が、世界の真理を導き出す！

（あれ？別にこのままでも良くないか？ナザリックにいれば衣食住の心配は無いし、今までの様子から考えれば、NPC達も敵対する可能性は低いはず…万が一があつたとしても宝物殿にあるアイテムや装備があれば大丈夫だろうし。だいたい元の世界に帰っ

て何になるんだ？所詮俺達は貧困層の負け組……大企業に搾取されて、大事な妹を進学させてやる事も、満足な食事をさせる事も出来なかつたじゃないか？)

モモンガは考える。自分はリアルの世界で、妹に満足な生活をさせていたのだろうか？あの荒廃した世界に自分達兄妹の幸せはあるのだろうか？あんなところに帰って、何かいい事があるのだろうか？

唯一未練が残っているとすれば、ギルメン達の事だ。このまま元の世界に戻れなければ、彼らとは二度と会えない……いや！とにかく幸子の事が最優先だ！他の事は後から考えればいいんだ！

「美味しいよう〜♪ 凄いや〜♪ さすがはナザリック、世界一！」

「そうだな！俺達みんなで創りあげたナザリックだからな！」

「もうずつとここに居たいよね〜。他のみんなも一緒に来れば良かったのにね！」

(うーん、コイツは思ったより心配しなくてもいいのか？それに他のギルメンも来ていれば……か？その可能性もゼロではないのか？)とにかく情報が必要だな。)

「よし！それじゃあ第六階層へ行くか。まずはさつちんの部屋にいるぷーにやんを迎えに行くぞー！」

究極の妹

お兄ちゃんと第六階層の闘技場で色々試したけど、スキルや魔法もバツチりだった！フレンドリーファイアの事とか、多少の齟齬はあったけど想定の内訳でやつた。

お兄ちゃんがノリノリでスタツフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを見せびらかしながら、《サモン・プライマル・ファイヤーエレメンタル／根源の火精霊召喚》で召喚したモンスターとアウラ&マーレ姉弟が戦うのをワクワクしながら見学したりした。

モンスターを的確なチームワークで撃破した姉弟に、お兄ちゃんが「無限の水差し」でお水をご馳走していたのを見たので、私も手持ちのアイテムにあった「ペロスター」という星型のペロペロキャンディーをあげたら凄く感激された。

それにしても第六階層の守護者アウラ&マーレ姉弟可愛すぎー!!この子達の創造主であるぶくぶく茶釜さんには、とても可愛がってもらっていたから、この第六階層のジャングルによく招待されたな。同じ女性メンバーの館ころもっちもちさんや、やまいこさん達も集まって、4人でお茶会とかしてたな。

ちなみに第六階層のジャングルには、調合スキルに使用出来るレアな希少植物が定期的にポツプするポイントがある。他の階層にも様々な希少金属が、定期的に採掘可能な

鉱床が存在しておりナザリックの資産形成に寄与している。

そうこうしているうちに続々と階層守護者達が集まって来た！アインズ・ウール・ゴウンに入つてすぐの頃、案内をかねてナザリック地下大墳墓を巡った時に、ギルメンの皆さんが、自分で作成したNPCの事をそれは熱心に語ってくれたから、彼らの事はよく知っている。

一部を除いて階層守護者が集まって、アルベドが「忠誠の儀を！」とか、お兄ちゃんが「お面を上げよ」「素晴らしいぞ！守護者達よ!!」とかやつてる。あつ何か光り出した!?!これって絶望のオーラ？凄いな、これならナザリックも安泰だね！

あれ？向こうからセバスが小走りして来てる？何かあつたのかな？え？ナザリックの周辺が草原になつている？これってどうゆう事？お兄ちゃん説明プリーズ!!

とにかく異常事態という事で、引き続いてさらなる警戒という話になつたが、お兄ちゃんの「ナザリックの隠蔽」という問いかけに、マーレ君が「ナザリック表層を土で隠蔽」と進言すると、アルベドが「栄光あるナザリックを土で汚すと？」と揉め出した。「ちよつとおー!?!そんな事したら、ナザリックにお客さんが来なくなっちゃうよ!!」



ナザリック地下大墳墓は、ユグドラシルのサーバーの一つである「ヘルヘイム」の、グレンデラ沼地にあったダンジョンである。そこを新進気鋭の異形種ギルドだったアイズ・ウール・ゴウンが攻略して、自らのギルド拠点としたのである。

ユグドラシルには攻略する事で、ギルド拠点として所有する事が可能なダンジョンや遺跡が多く存在した。このようなギルド拠点を所有した場合に、その拠点到任意のプレイヤーを侵入者として受け入れる事で、プレイヤーの侵攻度合いに応じて、拠点对して金銭やアイテムのボーナスや、様々な事に使用できる拠点EXPが収入として計上されるというシステムだった。特に拠点到配置するNPC達は、この拠点EXPでしか成長させる事が出来ない。

ちなみに「伝説のプレイヤー」500人大侵攻において、全てのプレイヤーを撃退して、拠点的陥落を最後まで許さなかったアイズ・ウール・ゴウンには莫大な収入が齎されて、おおいにメンバー達の溜飲を下げる事になった。

侵入者の受け入れは、ある程度ギルド側でコントロール可能で、ダンジョンを「開店モード」にしていれば、侵入者というデメリットがある代わりに、撃退時の収入や拠点維持費用の低減といったメリットがあった。

また拠点到配置するNPCやシモベには、拠点内での戦闘時に3〜5レベル分に匹敵するバフ効果がある。これが「ボス扱い」として特定の階層や領域の守護者に設定され

ている場合は、最大で20レベル分にも達する。これはギルドに所属するプレイヤーにも適用される。このようなキャラを撃破した場合は特別な報酬が発生する為、プレイヤーはこぞつてNPCを撃破しようと試みる。

ナザリック地下大墳墓の例では、ギルド長のモモンガが第十階層の玉座の間において、ソロで戦う際には特殊スキル「大魔王の矜持」により、ワールドエネミー並みのステータスとなるのだが、ユグドラシルにおいて、このスキルが発動される事は終ぞ無かった。

逆に「閉店モード」にしていけばプレイヤーの侵入を阻止できるが、ユグドラシルの拠点監視システムである「システム・アリアドネ」に抵触する為、一定時間を過ぎると強制的に解除されてしまう。この為にどのギルドも、拠点防衛用のNPCにはかなり力を入れていた。

そういった理由から適度な侵入者は、ナザリックにとつては実に美味しい収入源なのだった。なにせナザリック地下大墳墓は運営の公式発表で、九つあるサーバーにあるプレイヤーが攻略可能な、全てのダンジョン・遺跡・施設の中でも総合攻略難度において第2位にランキングされていた為、ユグドラシル最盛期においては、ナザリックの24時間あたりの来場者数は数百名にものぼっていたのだった。

※公式発表の総合攻略難度第1位は「エルナーク大神殿」という遺跡で、ユグドラシ

ルが運営されていた12年間で、最後まで攻略者が出現しなかった。さすが糞運営である。



「まさにさっちゃん様の仰られるとおり!」

「ナザリックへ土足デ立ち入ル不埒者ヲ誅殺スル事こそ我が使命!」

NPC達が妹を讃えるのを聞きモモンガは焦っていた!

(またやってしまったああ〜! あいつに言われるまで気付かなかった! でもさすが俺の妹だ! 偉いぞ幸子!)

「そのとおりでさっちゃん! よってナザリックの隠蔽については中止とするが、先程の事もあるので、ナザリックの警戒レベルはデフコン3とする。最初に侵入者と相対する事に為る、第一〜三階層守護者のシャルティアは特に警戒せよ!」

「ははあ! このシャルティア・ブラッドフォールン。この身に代えましても、果たして御覧にいきます!」

「最後に守護者達に聞いておきたい事がある。お前達にとって私達兄妹はどういった存在だ?」

これはモモンガが是非とも知っておきたかった事だ。NPCの離反など心配しないが、自分達へのイメージは知っておくべき事である。

「まずはシャルティア。」

「モモンガ様は美の結晶。その白きお身体に比べれば、宝石すらも見劣りします。そしてさっちゃん様は、そのモモンガ様すら霞む究極の美を体現する御方…その玉体をクンカクンカペロペ…」

「ペ、ペロロンチイーローノオオ……」

あまりにも酷い内容にモモンガはドン引きする。

「次、コキュートス」

「モモンガ様ハ守護者各員ヨリモ強者デアリ、ナザリック地下大墳墓ノ支配者。ソシテさっちゃん様ハナザリック全テノ者ニ愛サレシ、ナザリック究極ノ至宝デアラセラレマス。」

「ほう……アウラは？」

「モモンガ様は慈悲深く、配慮に優れた御方で、さっちゃん様は勇敢で、カツコ良い御方ですー」

「ほほう……マーレ」

「モモンガ様はす、凄く優しい方で、さっちゃん様は強くて、頼りになる方だと思います。」

「ほほほーう……デミウルゴス」

「モモンガ様は知勇に優れた、まさに端倪すべからず、という言葉が相応しい御方であり、そのモモンガ様の妹君であられるさっちゃん様は、ナザリツクの全てに優先されなければならぬ究極の存在でございます。」

守護者達の美辞麗句が続き、モモンガのライフが削られていく……

「あー、セバス。」

「モモンガ様こそ至高の方々の総括に就かれていた御方。そしてさっちゃん様は、全ての至高の方々に慈しまれた、まさに究極の御方です。そして御二方とも最後までナザリツクに残っていただけ慈悲深き御方です。」

「さ、最後になったがアルベド。」

「至高の方々の最高責任者であるモモンガ様は、私達の最高の主人です！そして私がモモンガ様を愛する事を定めて下さったさっちゃん様は、私が全てを捧げて感謝しても足りないほど御恩のある御方です。」

「……なるほど。お前達の考えは理解した（とはいってない）。今後とも忠義に励め。」

拜謁の姿勢を保ったままの守護者達の前から、モモンガとさっちゃんはモモンガの自室へと転移する。周囲を何度も見渡して誰も居ない事を確認して、どつと息を吐く。

「ぶつつつはあああー」

「何あの高評価？美の結晶？至高？慈愛？支配者？端倪すべからず？あいつらはいったい何を言っているんだ？」

「私なんて究極だよ！？何で？私はただのザコメンバーだったのにな。」

「いやいや、そんな事はないぞ！さっちゃんが究極に可愛いのは当然だぞ！」

「お兄ちゃん！！」「妹よ！！」

骸骨と小悪魔がひしつと抱き合う。とりあえずNPCの忠誠心に問題は無いという事で2人は安心し、今後について相談をしている時、第六階層に残された守護者達の美麗句は続き「さすがはモモンガ様！」「さっちゃん様を守護らねばならぬ」との結論に至っていた。



「とりあえずは何とかかなりそうだよね。明日になったらナザリックの中を色々と見て回ろうか。」

「お前ってポジティブなんだな。まあ、外の事も気に為るが、まずは足元を固めておくのが重要だな。」

能天気な妹のおかげで癒されるなくとモモンガは思っていたりする。リアルでの敵

しい暮らしの中でも、妹は明るく元気に振る舞っていた。そのおかげで自分がどれだけ奮起できた事か！

「そういうえばNPCも外に出られるんだよね!？」

「ああ、ちよつとした思いつきでセバスに命令してみたら、ソリュシャンとエントマを連れて偵察に行つて来たからな。やつぱりユグドラシルとは違う世界だからか…他にも異なる事がありそうだ。」

「それじゃあ私、NPCを連れて外に行つてみたい!…ここしばらくは狩りやクエストも、いつもお兄ちゃんと2人だけだったでしょ。」

モモンガは妹の言つた事に、成程…と納得する。ほぼ兄妹2人きりの状態になつてしまつていたアインズ・ウール・ゴウンは、かなりプレイに制限が掛かつていた。戦力・人数の不足から断念したイベントもたくさんあつた。

「ふあくく何か眠くなつてきた…そういうえば今何時なんだろう?…ここに來てから気にしてなかつたけど?」

「あく、どうなんだろうか? 確か時計機能が付いたアイテムがあつたはずだが…それより眠くなつたのなら、部屋に戻つて休みなさい。体調を崩しては大変だからな。もう会社へ行かなくてもいいんだから、好きなだけ寝ていいんだぞ!」

「はい。それじゃお兄ちゃんおやすみなさい。ぶーにゃんも行くよ。」

「あー、エトワルにシクスス…だったな。私はよいのでさっちゃんを部屋に連れて行って休ませてやってくれ。」

「かしこまりましたモモンガ様。」

恭しく頭を下げたメイドがさっちゃんに付き添って退室していく。彼女達はナザリツクの第九階層に配置されていたレベル1の一般メイド達だ。第六階層から戻っていくらも経たないうちに、セバスから謁見の申し出があり、何かと聞いてみれば「至高と究極の御方に供が付かないとは大変に由々しきことでうんぬん…」と苦言を呈されてしまったので、そういえば？と特に重要な理由もなく、せっかくだからという事で第九階層に配置されていたメイド達を思い出して、側付きを命じてみたところ、その事に対しての反応は劇的であった。

異様に気合の入ったセバスと、ナザリツク地下大墳墓のメイド長であるペストーニヤ・S・ワンコがあつという間に人員編成を済ませて、モモンガとさっちゃんには、常にメイドが待る事が決められてしまったのだった。

「ふむ…セバス達も言っていたが、NPCは仕事を与えると喜ぶのか。じつさい配置したままで放置状態のNPCも結構いたしな。深い階層の守護者たちなんて普段はどうしているんだ？設定された事の他にも命令が可能なのは確認できたのだ。NPC達のさらなる活用を考えていかないと…」

さっちゃんが退室した後も、アンデッドの特性により食事・睡眠の必要も無く、疲労も感じないモモンガは、ナザリックの今後についてあれやこれやと考えたり、遠隔視の鏡を使ってナザリック周辺を探ろうとして、使い方が分からずに苦労したりして、気付けば徹夜で朝を迎えてしまった。



「お兄ちゃんおはよー。」

「お早うさっちゃん。よく眠れたか?」

ナザリックで最初の目覚めを体験した私は、メイドのシクススちゃんに手伝ってもらって、簡単な身支度を済ませるとお兄ちゃんの部屋へとやって来た。目が覚めた後に寝室から出た私は、寝る前に着替えとかを手伝ってくれた彼女が、寝室の前で待機していてビックリした!

「お早うございます。さっちゃん様。」

「あれ?お、お早うございます?もしかしてシクススちゃん…あれからずっとここに居たの!?!」

「もちろんでございます。さっちゃん様に命ぜられた際に、即座に対応可能な様に待機し

ておりました。」

「ええっー?!?!?眠くならないの?大丈夫!?!」

「はい。私達はナザリックで24時間休みなく働ける様にと、睡眠・疲労を無効にするアイテムを与えられておりますので。」

(なんとというブラック企業!!社畜!社畜だよー!ブラック企業断固反対!これはお兄ちゃんに言つて何とかしないとダメだよね!)

この後シクススちゃんから「朝の湯浴みはいかがですか?」と言われて、自分の部屋に併設された浴室に行つて驚いた。ゲームの設定上では存在したけど18禁どころか15禁でも厳しかったユグドラシルには、入浴なんて行為はなかったので、こんな設備が自分の部屋にあつた事を忘れていた。

もちろん貧困層出身の私はスチームバスくらいしか使つた事が無かつたので、シクススちゃんに「それじゃお願いするね(好きにして!)」と言つたら、それはもう凄笑い顔で全部やつてくれました!身体中の隅から隅まで、あくんなところやこくんな所まで手とり足とり……ヤバイ、コレは癖になりそうだよ!

そんなわけで隣にあるお兄ちゃんの部屋へとやつて来たのだが、部屋の中にはお兄ちゃんの他にも「アルベド」「デミウルゴス」「セバス」「ソリュシヤン」がいた。

「シクススよ、さっちゃんの面倒を見てくれて感謝する。下がつて休むが良い。」

「とんでもありません。さっちゃん様のお世話という大変な名誉に与かれて光栄です。直ぐに代わりのメイドと交代します。」

（おく、さすがお兄ちゃん！ブラック企業への勤務歴が長いだけある！）

「あー、今は守護者達と大事な相談をしているのでな…それにセバスとソリュシャンが控えているので問題は無い。」

「モモンガ様、メイド達の勤務体制については、改めてメイド長と相談いたしますので。シクسس、この後についてはメイド長の指示を仰ぐように。」

（うん、この様子ならみんなに任せておけば大丈夫だね。）

「それよりさっちゃん、朝食はまだなのだろう。私の事は気にしないでいいから、何でも好きなものを食べなさい。」

「お兄ちゃんオーバードロードだもんねー。他のみんなはどうなの？もうご飯食べちゃった？」

「む!? 面白いえばお前達も、食事はどうしているのだ？ 飲食不要のアイテムを装備はしているのだろうか…」

（何という事だ！ ナザリックの暗部を垣間見てしまった！ NPC達は食事も休息も取らずに酷使されていたなんて!? いくら仕事とはいえ…仕事？ 仕事になるの?? あれ? じゃあ給料とかどうなってるんだろう? そういえばぶーにゃんに給料なんてあげてなかつ

た……でもぷーにゃんはペットだったし、でもエサとかはどうしてたんだろう??)

そんな兄妹のやり取りを眺めていたNPC達の動きが氷のように固まる。さつちんのお腹が「グ〜」と可愛らしく鳴ったからだ。

「モモンガ様っ！そのような細事は後程でかわないと愚考いたします。まずはさつちん様に朝食を摂っていただきませんか〜！」

「料理長に伝えて、大至急でお食事を用意させて頂きます〜！」



朝から大騒ぎになったけど、お兄ちゃんから「とにかく食事をすませてからまた来てくれ」という事で、アルベドとシクススを連れて食堂へ向かっている。一般メイド達はホームクルスという種族で、大喰らいという設定があったのを、全てのメイドのデザイナーをたつた一人で手掛けたホワイトプリムさんから聞いていたのを思い出して、シクススに「メイドさん達のご飯はどうしてるの？」と聞いたら、食堂の存在を教えてくれたからだ。

アルベドを連れて来たのは、やっぱり一人で食べるのもどうかと思っていたら、お兄ちゃんがアルベドに命じてくれた。何でアルベドにしたんだろう??

わざわざ食堂に行かなくても、自室までお持ちいたしますすって言われたけど、ビュッフェスタイルと聞いたら是非とも行ってみたくなったのだ。だって「ビュッフェ」だよ！あの上流階級にしか許されないという「伝説の食べ放題!!」だ。しかもナザリックの食材の素晴らしさは実証済みだ！これはもう行くしかないよね♪

伝説のビュッフェに期待して食堂に着いたら、入った途端に室内の空気が固まった。私の事を見た瞬間に、それまでキャピキャピしていたメイドさん達が、一斉に立ち上がっておじぎをしたまま微動だにしない。

「お、おじやまします。私は朝ごはんに來ただけですので、み、皆さんも気にせずにご飯を食べて下さい。」

(わーっ、何か予想外の事になっちゃった！どどど、どうしよう??)

「そうだーアルベドさん、皆さんに言っておいて下さい。上司としてー」

なんとか私の意向を伝える事に成功して？皆は食事を再開してくれたが、食堂内の雰囲気がおかしい。すごい視線を感じる。みんなニコニコして私の事を見ている…まあ、避けられるとかじゃないみたいだからいいのかな？

とりあえずやり方を聞いて、食事を始める事にした。シクススはすごく私の世話をしたがっていたけど、それじゃシクススがご飯を食べられないし、私も自分でビュッフェしたかったので、アルベドも連れて3人で色々と料理を選んだ。

ふかふかのパン、プリプリのソーセージ、瑞々しいサラダ、チーズと野菜がたっぷり
のピザ、いいにおいのコンソースープ：どれも凄く美味しそう♪よーし食べるぞ〜！

やっぱりナザリックの食事は最高だった。シクススや他のメイド達がもの凄い量を
モリモリと食べていたのにビックリしたり、アルベドが「さっちゃん様が口にされるなら
もつと高級な食材を：」とか言って、これ以上があるの!?!とか思ったりした。

デザートにメイド達のイチ押しという、パティシエ謹製ケーキを食べた。おいしい：
本当においしい。こんなにおいしいのに……どうして涙が止まらないんだろう……

昨日まで私達兄妹がいたりアルの世界は、弱者にとって凄く厳しい世界だった。自然
が失われた劣悪な環境での重労働、食べるものは料理ではなく、栄養摂取のみを目的と
した「物体」だ。

ナザリックで食べたものには遥かに劣るけど、私は年に数回だけリアルの世界でも
「料理」を食べる事が出来た。全てお兄ちゃんのおかげだ。今食べてるケーキよりずつ
と小さくてみすばらしいケーキだったけど、お兄ちゃんは私の誕生日には、必ずケーキ
を用意してくれた。クリスマスとかにも私にだけ、ふだん食べられない様なご馳走を食
べさせてくれた。

お兄ちゃんは「俺は食事なんてどうでもいいから」「たいした物でなくてすまないな」
と言っていたけど、そんな物でさえ入手するのが、貧困層の人間にとってどれだけ大変

だったんだろう……

「『どうなされたのですか!? さっちゃん様!』」

泣いている私を心配して、アルベド達が大騒ぎになってしまった。彼女達の誤解を解く為に、私はリアルでの事情を説明する事にした。もちろんゲームのNPCには理解出来ないだろうから、色々と言葉を換えてだけど、ナザリックに来るまでの私達兄妹が、両親を亡くして貧しい生活を送っていて、そんな中でもお兄ちゃんが身を削るようにして私を育ててくれた事を語っていた。

「な、なんと御勞しいつつ、至高の御方ともあろう方が満足な食事も出来ず、あまつさえ奴隷のごとき扱いを受けていたはっ?!?!」

「そのような過酷な状況でありながらも、命をかけてまでさっちゃん様をお守りしていたなんて! モモンガ様はなんと慈愛に溢れた御方なのでしょう!」

「私は我が身の無能が恨めしいっ! 栄光あるナザリックの料理人でありながら、モモンガ様が食する事のできる料理を創り出せないとはっ。」

なんか周囲がどんどん騒ぎ出しているのを見て、ちよつと醒めてきた。お兄ちゃんにも美味しい食事を体験してもらいたいとは思ったけど、オーバードロードじやどうにもならないよね。それを選んだのはお兄ちゃんなんだし! どうしてあんな骸骨にしたんだろ? 同じアンデッドでもヴァンパイアや肉体があるゾンビとかなら飲食出来たかも

しれないのに！

あつ：でもさすがに腐った死体は引くかも。臭そうだし！しかも名前が「モモンガ」とかおかしくない？あの見た目でモモンガとか：私がアバターの名前を相談した時も「ムササビなんていいんじゃないか」とか言ってたし！前から思っていたけど、お兄ちゃんってセンスが「何か変」なんだよ！

「ああつ、我が創造主であるタブラ・スマラグデйна様っ！どうして私を創造する際に「モモンガ様でも食事可能な料理」を創るスキルを、お与えして下さらなかったのですかっ。」

「守護者統括のアルベド様にも不可能だなんて!?やはり至高の方々の御力がなければ、私たちはなんて無力なのでしょう。」

「そうよっ！至高の御方であるモモンガ様なら、如何にか出来るのではないかしら？私達には考え付かない凄い魔法やアイテムをお持ちのはずだわ！」

「いや、そんな都合のいいもの無いからね。外装を変化させるアイテムとかはあつたけど、種族特性は変わらないし。だいたい、都合良く願いを叶えてくれる魔法みたいな事なんてあるわけない……………あつたあああつ!!」

魔法あるじゃん！私魔法使えたじゃん！って、そうじゃなくてユグドラシルにはあつたじゃないか！願いを叶えてくれる超位魔法《ウィツシユ・アポン・ア・スター／星に

願いを《が！これを使えばお兄ちゃんにも美味しい食事をしてもらえるんじゃない？

超位魔法《ウィツシユ・アポン・ア・スター／星に願いを》は、経験値を消費する事で、その量に応じて用意された願い事から、好きなものを選んで叶えてくれる魔法だ。かなり取得条件が厳しくて私には使えないけど…ウフフ♪私にはあるんですよ♪この超々レアアイテム「流れ星の指輪」が！

これは本当にスパーレジェンドレアなアイテムで、アインズ・ウール・ゴウンでもたった2人しか所持していなかった。一人はやまいこさん。何でもお試しでやった課金ガチャで一発で当てたらしい。るし★ふぁーさんなんて「夏のボーナス全突っ込み」しても出なかったのに！！と悶絶していた。

そんな「流れ星の指輪」をやまいこさんが引退する時に「モモンガさんには内緒よ」と言つて、私にプレゼントしてくれたのだ。あまりにもつたないもので今まで一度も使った事がない。やまいこさんも使わなかったのだ。使用回数は3回まるまる残っている。

もう一人の所有者はなんと我がお兄ちゃんだ！それも課金ガチャではなく、お兄ちゃん「特殊能力」で手に入れたのだ。お兄ちゃんは「ゲームに課金するなら、妹に課金する」と言つて、殆ど課金をしていなかった。ギルドの為の共同での課金とか以外では、自分のプレイを有利にする為の課金を全くしていなかった。

それでもあの能力のおかげで、他より少ないプレイ時間でもあれだけキャラを鍛え上げて、多数のレアアイテムや装備を入手できたのだから、お兄ちゃんもチートだよね。

「そのような魔法が存在するとは!？」

「さすがは究極の御方!!」

「ちよー、ストップストップ! 落ち着いて!」

とりあえず私は超位魔法《ウィツシユ・アポン・ア・スター／星に願いを》と「流れ星の指輪」について説明して、皆と相談の上でお兄ちゃんに指輪の力を使う事にした。今は私個人の所有アイテムだから、例え失敗しても誰にも迷惑に為らない。

もしこれがダメなら、後は宝物殿にあるワールドアイテムの「アレ」しかないけど、さすがにアレはお兄ちゃんが許さないだろう。そんな事を考えていたらアルベドが、物凄くくイイ笑顔で私に聞いてきた。

「さっちゃん様♥こんな事を言うのは恐れ多いのですが…、わた…コホンツ…モモンガ様の為にも、是非とも願ひ事に加えて戴きたい事があるのですが……」

ナザリックの中心でアイを叫んだがいこつ

さっちゃんを送り出したモモンガは、先程までNPC達と話し合っていた、ナザリック外の情報収集と防衛体制の見直しについての相談を再開する事にした。ちなみにアルベドと一緒に行かせたのは、転移後からずっと感じている、アルベドからの強烈な肉食獣的プレッシャーのせいだ。リアルでも大魔法使いに成りかけていた自分に耐えられるものではなかった。

「あー、セバスは下がってくれて構わないぞ。メイド達を含む使用人の勤務体制については、適度な休息と食事を考慮したものをペストーニャと相談してくれ。守護者やシモベ達についてはこちらで考えておく。ソリュシャンはそのまま控えていてくれ。」

「かしこまりました。モモンガ様。」

「それではデミウルゴス。先程の続きを聞かせてくれ。」

デミウルゴスから提案された内容は驚くべきものだった。モモンガが重要視した情報収集については

1、・遠隔視の鏡による定期的な広範囲偵察

2、・発見された人間種の都市、集落への恐怖公眷属、シャドウデーモンによる偵察

3、・上記の偵察完了後は、セバスを始めとした人間種の外見をもったNPCによる情報収集

4、・不可視化に優れたシモベによる住民の拉致。拉致した人間からの直接的、強制的な情報収集

5、・都市の有力者、富裕層の洗脳による、より重要度の高い情報収集と財産の接收

6、・ナザリック北方にある森林は、アウラをリーダーとした調査隊を派遣

ナザリックの防衛体制についても

1、・現在の状態（デフコン3）を維持する

2、・飛行・隠蔽・伝達能力を持つシモベによる、ナザリック周辺の半径500mを

範囲とした早期警戒網

3、・適度なレベルの者を拉致し、疑似的な侵入者とする事で防衛体制の再確認を図る

4、・守護者間にある戦闘経験の格差均一の為に、ナザリック地表部を第零階層（仮称）として、配置する者を定期的に交代させる事で、より多くの者に実戦経験を積ませる

どれも実行すれば多大な成果が得られるだろう。一部に非人道的な事があるが、アンデッドになった自分にとって忌避感はない。妹にはとても言えないが……

もちろんリスクを伴う事も多く、真偽が不明なものもあるので慎重に検討するべきだが、モモンガは「もうコイツに全部任せたらOKじゃね？」と思うのも事実だった。

「以上となります。モモンガ様は情報収集を優先させるとの事で、防衛体制に関しましては提案できる事が少なくて申し訳ございません。勿論モモンガ様であれば、私達の考える事など既知の物ばかりであつたでしょうが、最後まで私の愚案を聞いて戴きありがとうございます。」

「……そ、そんな事はないぞデミウルゴス。一部に改善点や問題点があるものの、おおむね満足のいくものだった。」

（すみません！嘘です。どっちも最初の1つめくらいしか思いつきませんでしたああ）

「おおお、ありがとうございますモモンガ様。それでは矮小なるこの身に、どうかモモンガ様がお気づきになった事をお教え願えないでしょうか！」

（ヤバいつ!!何かないか……えーと、えーと……よしっ、これだ!）

「うむ。そうだな……まずは人間が住む都市についてだが、まずは適当な集落へ私とさっちゃんが行ってみようと思う。お前達の能力に不安はないが、ナザリックの外での活動は私達に一日の長がある。何事も経験というだろうか？」

「それはっ!!確かに仰るとおりですが、みすみす危険な可能性のある事に至高の御方を……」

「実はさつちんがNPC達と出かけたがっついていてな。我儘になってしまいが分かってくれ。」

「おお！さつちん様がその様な事を！その際には是非ともこの私を供にして頂きたいものです！」

（これで納得したか？しかし昨日も思っただけど、こいつ等って俺よりさつちんを優先してるよな…まあ当然だけど）

これは1名のNPCを除いて事実である。NPCには作成時の設定が及ばない部分については、創造主たちの影響が色濃く見られる。さつちんを除いた全てのギルメンにとって、さつちん（越えられない壁）モモンガであったのだから、当然NPC達もさつちん（越えられない壁）モモンガ≧自分達の創造主となっている。

「防衛体制については…そうだな！侵入者を妨害するギミックやトラップを増設しよう。幸い費用には十分な余裕があるからな。配置するシモベの増員も可能だし、残っているNPC製作可能レベルと、拠点EXPを使えばNPC達のレベルアップも可能だ」

モモンガとさつちんは、ギルメン達がどれだけナザリックとNPCに情熱をかけていたかを理解していた為、彼らが去った後に、勝手にそれらに手を加える事はしなかった。拠点EXP等についても、ギルド共有の財産という認識から浪費はさけていた。しかしこんな状況なのだから「背に腹はかかえられない」「それはそれ、これはこれ」というや

つだ。

モモンガは心にくっつかの柵を持っていたし、可愛い妹の為ならその柵を取っ払って、全く新しい柵に交換する事に何の躊躇もない。

実のところナザリックの拠点NPCの数は、その規模に対してあきらかに少ない。これはユグドラシルの運営が、ナザリック地下墳墓を数百人規模の超大型ギルド用の拠点として想定していたからだ。

そのナザリックを運営の想定する半数以下の人数で攻略したうえで、たった42人という大手ギルドとしては考えられない少人数でありながら、最後の最後まで守り通してきたアインズ・ウール・ゴウンがおかしいのだ。

※ギルメン達にとって、ユグドラシルというゲームは、あくまでも仲間同士で様々な冒険をする事がメインの目的で、ギルド拠点に関する事ばかりに労力を割くわけにはいかなかったのだ。それが原因でNPC製作可能レベルと、拠点EXPを使い切る事はなかったし、ナザリックの設備の一部が未完成だったり、NPCのビルドが中途半端だったりする。

「まあ、そういう事で私の話も踏まえたうえで、これからも気付いた事があれば言ってくれ。」

デミウルゴスは歓喜の念に打ち震えていた！なんとという偉大なるお方だろう！至高の方々造り上げた神聖にして完璧なナザリックに不満など無いし、そこに手を加えるなどという畏れ多い事は考えられなかったが、至高の御方自らが行うのであれば何の問題も無い！このナザリックが更なる進化を遂げるとは何と素晴らしい事か！

NPCのレベルアップについては驚愕どころではない。ナザリックのNPC達は全員が至高の方々によって創造されたかけがえの無い仲間と思っているし、仲間達自身にも能力にも不満は無い（1名を除く）が、その仲間達が更なる力を得る事が可能とは、想像すら出来なかった事だ。

100レベルの階層守護者としてウルベルト・アレイン・オードルの手によって創造されたデミウルゴスは、己の全てに対して一片の不満も持っていない、持つてはいないが：もし新たな力を与えて戴ければ、よりいつそう御二方に忠義を捧げられるという甘美な思いがふつつつと湧きあがってくる。

「ギミック等については、責任者である各階層守護者達の意見を募ってくれ。レベルアップについては、お前達の生みの親であるグルメン達の事もあるから早計には決められない。そういうった事も可能だとだけ認識して欲しい。」

これでうまく纏まったか？とりあえずこの話はこのあたり（ボロが出る前）にしておきたいものだ、モモンガが考えていると、愛しい気配が近づいてくるのが感じられた。

モモンガやさっちゃんには感知出来ないが、ナザリックに所属するギルドメンバー・NPC・シモベ達には特有の気配、ナザリックオーラともいえるものがあり、NPCとシモベはその気配を読み違えることは決してない。だから例えばモモンガが漆黒の全身鎧に身を包んで変装した気でいても、彼らにはバレバレである。

繰り返しですがモモンガにナザリックオーラを感知する事は出来ない。しかし愛する妹の気配を読み違えることは、リアルに於いても無かった。これはモモンガ、いや鈴木悟の魂に刻まれた能力である。

モモンガは愛しい妹を出迎えようとデミウルゴスへ目配せする。当然デミウルゴスも気配を察知している。何故かさっちゃん様以外にも多数の気配を感じるが……それに随分とお急ぎの様子。よほどモモンガ様と一緒に居たいのだろうとほっこりする。

激しくドアが開けはなたれると、さっちゃんが右手を突き上げながら叫んだ。

「指輪よーわたしは願うっ!!お兄ちゃんがご飯を食べられる様につ……そしてこ、こ……子作り出来る様にして下さいっ!!」

さっちゃんを中心に、強大な光の奔流が吹き荒れ、幾層もの複雑な魔法陣が展開している。そしてモモンガの身体が凄まじい波動に呑みこまれていった。



指輪に願った瞬間に《ウィツシユ・アポン・ア・スター／星に願いを》がどういった物なのか分かった。正しく不可能を可能にする魔法。対価を捧げて願えば望みが叶う事が理解出来た……出来ただけけど!?

「あばばばばばばばば……（ピクンピクン）」

これって大丈夫なの？魔法が発動した瞬間に、願った事が叶えられたと感じる事ができたけど、お兄ちゃんが苦しうに……苦しうなのかな？

「フオオオオオオオオオオ（ポツキンポツキン）」

うん。なんか「みwnなwぎwつwてwきwたwvw」って感じだ……おや!?お兄ちゃんの様子が……おめでとう!お兄ちゃんのむすこがふっかつした!

「ハアーハアーハアー……こ、これは一体……さっちゃん、俺に何をしたんだ……って何じゃこれはああああ!!」

「モツ、モモンガ様……♡♡♡」

一部の登場人物のイメージを保つ為に、このシーンの描写は省略させていただきま

す。

「そうか…私の為を思って、貴重な流れ星の指輪を使ってくれたのか。うれしいぞ！ さっちゃん。」

「え、えーつと、その…怒って無いの？お兄ちゃんに言わないで勝手な事しちゃって。」
「少ーしだけ驚いちゃったけどな。次からはちゃんとお兄ちゃんに言ってからにするんだぞ。はっはっは！」

よかつた♪お兄ちゃんが喜んでくれて！NPC達も嬉しそうだ！いつの間にか集合してきたNPC達が笑顔と拍手で祝福してくれる。

シャルティア「まっことめでたいであります。」

コキユートス「オメデトウゴザイマス！」

アウラ「おめでとうございまーす！」

マール「お、おめでとうございます。」

デミウルゴス「おめでとうございます！」

セバス「おめでとうございます。」

プレアデス「おめでとうございます。」

メイド一同「おめでとうございます！」

他NPC一同「おめでとうございます！」

シモベ一同「※★♪◆☆△○〒@！」

パンドラズ・アクター「Herzlichen Glückwunschn!!」

ギルメン一同（特別出演）「おめでとうモモンガさん！」

さっちゃん「おめでとうお兄ちゃん！」

モモンガ「ありがとう。」

妹に、ありがとう

アルベドに、謹慎三日間

そして全ての子供達（NPC）に、

おめでとう



飲食可能になったお兄ちゃんは、料理長渾身の一品を食べて「うー・まー・い・ぞーっ
!!」と咆哮した。うんうん、ナザリックの料理は最高だからね♪これからはお兄ちゃん

と一緒に色んなご馳走が食べられる！

その後は予定通りにナザリックの各階層を順番に回っていった。もちろん広大なナザリックだから、途中でおやつ休憩や昼食（NPC達も参加した第六階層でのバーベキューは最高だった！）を挟んでだ。

それぞれの領域や階層守護者達が超VIP待遇で案内してくれた。何箇所かで、お兄ちゃん曰く「見せられないよ！」な場所があったけど何があるんだろう？そういうえばナザリックには「5大最悪」と呼ばれる……おや、誰か来たみたいだ。

しかし魔獣系はともかく、悪魔系や虫系のモンスターを見てもまったく嫌悪感を感じない事に驚いた。むしろ悪魔にはすごい一体感を感じてしまう！やはり身体だけでなく精神までも人間でなくなっているのか!?

え？死霊系はどう感じているかって？「そうは言っても女の子はゾンビとか苦手なんでしょ？」とか思ってたりする？私のお兄ちゃんは何でしたっけ？ウケケww

最後に立ち寄った第二階層にあるシャルティアの居住区「屍蠟玄室」は立ち入り禁止になってしまった。ペロロンチーノさんに何度か招待された事があつた事をお兄ちゃんに伝えたら「あんの変態チキン野郎、ウチの妹に何てモノをみせやがるう……殺す！首を撥ねて、羽毛を筆りとして串刺しにして焼き鳥に……」と唸っていた。

シクススから聞いたのか「ペロロンチーノ様の夢と希望と感動が込められた浴室へご

招待したい」とシャルティアにとても必死に懇願された。入浴には拘りがあるらしいので気になる。今度お兄ちゃんに内緒で行ってみよう。

夜は玉座の間にNPC達を集めて、お兄ちゃんが飲食（&子作り）可能になった事を記念した「モモンガ様を讃える会」を開催した。メイドさんや使用人達、料理長達が総出で準備してくれた晩餐会は超豪華なものになった。

私達が一緒に座っている玉座の前には、お酌をする為にNPC達が行列を作っている。私は飲酒を禁止されているからジュースをチビチビと頂いている（そんなに飲めないって！）けど、お兄ちゃんはNPC達から注がれる色々なお酒をグイグイ飲み干しているけど、お兄ちゃんが飲んだり食べたものは何処へ消えたんだろう？

お兄ちゃんは「飲食（&子作り）可能になっただけで、それ以外の種族特性に変化は見られない」と言っていたけど、満腹無効化とかあるのかな？アンデッドには酩酊無効の特性があるはずなのに、とってもご機嫌だ。

「皆の者よ！聞くがよい！」

お兄ちゃんがいきなり私を抱っこしたまま立ちあがって声をあげた！

「私はこの素晴しき時を記念して名を変える事にした！これより私の名を呼ぶときはアインズ・ウール・ゴウン——アインズと呼ぶが良い！」

突然の宣言に私もNPC達もびっくりだ！でもいきなりどうしちやっただろう？

「愛する妹よ！お前の可愛らしい唇から、我が新しき名を呼んでくれまいか？」

「ア：：アインズお兄ちゃん？（酔ってる！（自分に）酔ってるよ！）」

「ご尊名伺いました。アインズ・ウール・ゴウン様万歳！アインズ・ウール・ゴウン様に絶対の忠誠を！」

おおつ！アルベドが真つ先に声をあげた！さすがお兄ちゃんの嫁（仮釈放中）！

「アインズ・ウール・ゴウン様万歳！」 「アインズ・ウール・ゴウン様万歳！」

「アインズ・ウール・ゴウン様万歳！」 「アインズ・ウール・ゴウン様万歳！」

「さっちゃん・ウール・ゴウン様万歳！」 「アインズ・ウール・ゴウン様万歳！」

「アインズ・ウール・ゴウン様万歳！」 「アインズ・ウール・ゴウン様万歳！」

それからはNPC全員の大合唱だ。うん？何か聞こえたけど気がするけど空耳かな？何故お兄ちゃんがこんな事をしたのか理由は分からないけど、たまくにあるんだよね。中二病ってゆうんだっけ？今までのパターンだと、だいたいしばらく経つとしようきにもどって悶絶する事になるんだけど……

翌朝、アインズの自室から「友よ！」「誇りある名」「ならばここまで」「その時は」等の単語が断片的に漏れ聞こえて来た。その事をメイドから不安そうに伝えられたさっちゃんは「ふーん。今回はけっこう早かったね」と答えたのだった。

初めての外出と戦闘

この世界に私達兄妹が、ナザリック地下大墳墓と拠点NPCごと転移して1週間がたった。圧倒的に情報が不足している状況で、ナザリックの外での活動をお兄ちゃんから禁止されていた私は、ナザリックで引き籠もって第九階層「ロイヤルスイート」にある様々な施設に入り浸っていた。

ロイヤルスイートには「何でこんなのが?」という施設がいっぱいある。「ネイルサロン」や「エステサロン」に「美容院」なんて生れて初めてだ♪女性メンバーの為に造られたはずだけど、私は利用した事がなかった。私以外の女性メンバー(粘体とか半巨人とか)は外見的に利用不可能だろうから、誰が何の目的で造ったんだろ?

お兄ちゃんに聞いたら「ナザリック・ショッピングセンター」という計画があったらしいが、途中で中止になったそう。そういえば空きテナントがちらほらと見える。他にも「ナザリック学園」なんて計画があったみたいだけど、担当メンバーが居なくなつて、データも行方不明になってしまったと言っていた。

そんな感じで私がナザリックライフを満喫しているのをよそに、「アインズ・ウール・ゴウン」と名を変えた我がお兄ちゃんは、優秀なNPC達を使って世界征服(笑)の準備

備を進めているらしい。

あれは気分転換にお兄ちゃんと一緒に、ナザリック地下大墳墓の外に出てみた時だった。指輪で地表部の霊廟まで転移すると、デミウルゴスとその直轄の悪魔たちがいた。同族？だけあつてなんとなくシンパシーを感じるけど、どうしてこんな場所に居るんだろ？地表部にはNPCもシモベも配置されてなかったよね？

「防衛体制見直しの一環だな。それに地表部やナザリック外で敵を倒した際の収入の有無の確認も必要だからな。」

「ふーん。そういえばお客さん来た？私もそろそろ戦つてみたいなく。」

「おいおい、現地産キャラの種類や強さも不明なんだぞ…この周囲は草原で虫や小動物しか居ないらしいが。」

「小動物つて…ここつてそんな初級者向けフィールドだったの!？」

我がナザリックもぬるくなったものだ。ユグドラシル時代は、レベル80オーバーのツヴェーク系モンスターが闊歩する、無耐性なら3分で死ねる猛毒地帯のど真ん中という、カンストプレイヤー以外お断りのエリアだったというのに！

「現在は周辺地域の偵察を兼ねながら、MAP作成に取り組んでおります。これもアイズ様にお借りしたアイテムのおかげで、大変スムーズに進んでおります。」

へえ〜NPC達がそんな事までやってくれるんだ！これなら他の事も頼んでみよう

かな？

「ところでこちらへはどんな御用で？ 供も連れておられないようですが？」

「さつちんと一緒に散歩でもと思つてな。ここ数日ナザリックに籠りきりだったからな。」

「左様で御座いますか。しかしこの状況下で供を連れずに、となりますと、私も見過ごすわけには……」

「じゃあデミウルゴスさんも一緒にどうぞ？」

「っ!? よろしいのですか？」

こんな感じで夜空の空中散歩に出発して、素晴らしい星空に感動していたら「キラキラ輝く宝石箱」「星々が私の身を飾る」「世界征服」とか聞こえて来た、うわあくまたお兄ちゃんの病気が始まったよ……デミウルゴスも凄く笑顔！ なんかウルベルトさんにそっくりだ！

翌日からデミウルゴスを責任者とした「プロジェクト・ナザリック」が開始された。周辺の地形情報も整理されてゆき、ナザリック近辺にある都市や集落の情報も続々と集まっているらしい。

南東にあるこの近辺では最大の都市には、冒険者という武装した人間がいるみたいだけれど、多くが10レベル以下のザコで、一番レベルが高いハゲでも20ちよいみたいだ

けど、低すぎじゃないだろうか。

複数の人間をアイテムとスキルで詳しく分析したら、ユグドラシルとほとんど同じ職業構成になっていたそうさ。スキルや魔法も同様(但しレベルは低い)で、ここつてやっぱりユグドラシル?と疑いたくなるような結果だった。ちなみにアイテムについては、お兄ちゃん曰く「ゴミ」との事だ。

「ナザリツクも落ち着いてきたから、明日は外に出かけてみないか?どこか行ってみたい所はあるか?」

「お兄ちゃん、わたし町や村を見てみたい!ユグドラシルみたいに偽装していけば大丈夫でしょ?」

「そうだな。この世界ではシステムのペナルティが無いから、さっちゃんは装備でちよつと外見を誤魔化すだけで大丈夫だと思うぞ。おれは適当なマスクでも探してみるか?」

ユグドラシルでは異形種ペナルティがあつて、ステータス等が低下する偽装アイテムで外見を変えていないと、人間種の都市に入れないシステムだった。他にも一定のカルマ値でないと入場不可の場所、特定の種族以外お断りとか色々あつた。この世界では「バレなければOK」という、異形種にやさしい?仕様になっている。

「プレアデスを連れて行ってあげたいと思うけど、どうかな?」

「ん？　そういうえば、最近プレアデス達といる事が多いみたいだな。一緒に遊んでもらっているのか？」

「遊んでもらっているって……一般メイド達は掃除とかお仕事があるし、他のNPCもお仕事があるみたいだから邪魔しちやいけないと思って。」

「そういうえばク・ドウ・グラーズさんが「第十階層で立っているだけのお仕事です（笑）」とか言っていたな。」

その後、アインズがデミウルゴスに外出予定を告げ、「供周りは如何なさいますか？」と問われ「さっちゃんがプレアデスを連れて行きたいそうさ。ついでにセバスも誘ってみるか」と応えると、デミウルゴスの尻尾がピシッピシッと跳ねるのを見て、どうしたんだコイツ？　と思ったりした。



「お兄ちゃん、始めて見たけど、そんなマスク持ってたんだ？　おもしろい（変な）デザインだね。どんな特殊効果があるの？」

「これは「嫉妬する者たちのマスク」といってな、毎年クリスマスに限定配布されていたらしい。特に何の効果も無いんだがデザインが気に入ってな、毎年異なるデザインで配

布されていたんだが、取得条件が厳しくて一度も入手出来なかったんだ。それが全年度コンプリートセットが売り出されていたので買ってみたんだ。安かったしな。」

「へ、へえ〜…そうなんだ〜（やっぱりヘンだよお兄ちゃん!）」

鈴木悟は、クリスマスを毎年必ず妹と過ごしていた。彼にとつて少くない金額を費やして、妹の為にプレゼントや料理を用意して、妹と一緒に遊んであげていた。

そんな彼が、この呪われたアイテムを入手出来る筈もなく、同じく嫉妬マスクを入手せず済んだたつち・みーと共に、男性メンバー10名VSモモンガ&たつち・みーという変則PVPで執拗に叩かれたのも良い思い出だ。

ちなみにペロロンチーノも嫉妬マスクを入手していなかったが、彼がその事でギルメンから責められる事はまったくなかった。

「しかし素晴らしいな〜こんな大自然溢れる景色を見る事が出来るとは〜!」

彼らがいいた世界では遥か昔に失われた景色に兄妹は感動していた。もちろんリゾートや研究目的で自然が残されたアークロジューも存在したが、選ばれた階級の人間しか往く事が許されなかったのが、彼らには縁のないものだった。

「これから行く村はどんな所なのかな〜?」

「ちよつと待て、フムフム…デミウルゴスによると120名程の人間が住む開拓村、住人も平均2〜3レベルで危険は無し。最低限の施設、住居に畑があるだけ……」

「アインズがデミウルゴスに相談して実行された、この「兄妹はじめてのおでかけ」は順調に進んでいた。楽しそうにしている妹を見て、アインズも満足していた。」

「もう一度確認するが、俺達のロールプレイは覚えているな？」

「うん、ばっちり！お忍びのVIPと執事&メイドさんでしょ？なんか何処かで見た設定だね。」

「別に戦いに行くわけじゃないんだ。のんびりといこうじゃないか。」

「何かイベントでも起こらないかな。村の若者が勇者として旅立って、村の近くにある最初のダンジョンに入ったら、チュートリアル用だと思ったら隠しダンジョンで、そこで冒険が終わってしまうとかさ！」

「ハハハ！そうだな…こういうシチュエーションだと、俺達が乗っている馬車が盗賊に襲われて、そこにチート主人公が助けに来てくれるんだったか？」

アインズとしては、この機会にこの世界の住人とコンタクトをとって、色々と情報収集をする予定だ。元サラリーマンとしては自分が現場に出てみないと安心できないという点もある。油断などしているつもりは無かったが、妹の雰囲気につられてほっこりしてしまう。

万が一に備えて、不可視化したシモベが周囲を散会して警護しているし、デミウルゴスの部下が上空からの監視体制を執っている。プレアデスで対応不能な敵に遭遇した

場合は、シャルティアを隊長とした強襲部隊が《ゲート／転移門》で駆けつける事になっている。何より自分が居る限り、目の前でむぎむぎと妹を傷つける事を許しはしない。

近隣に危険な戦闘力を持つ存在は確認出来なかったが、デミウルゴスからの報告書では「周辺国家最強と言われる王国戦士長」「アダマンタイト級冒険者」「バハルス帝国の主席魔導師」「評議国の竜王」という存在が確認出来た。

過去には「13英雄」というプレイヤーの気配を感じさせる存在も確認されている。油断は出来ないが、必要以上に不安になる事もないとアインズは考えている。仮にプレイヤーが居たとしても、彼らは同郷人なのだから交渉の余地は充分あると思っている。

何故ここまで詳細で膨大な情報が入手出来たかと言えば「デミウルゴスがやってくれました」の一言に尽きる。近隣で最大の都市である「エ・ランテル」に配下を送り込んでデミウルゴスは、その都市長を洗脳・支配・調教して、情報を根こそぎ奪取してしまっただ。

さらに配下に一部の貴族や商人から財産を収奪させ「ナザリックの財から見れば砂粒にも満たぬものですが」と大量の財貨と物資を持って来たのだ！さすがにこれ以上はマズイ！とアインズは中止させたが、ナザリックの利益になった事は事実であったので叱責する訳にもいかなかった。事実、スクロール素材等のナザリック内で調達が難しい資源もあるのだ。

（それにしてもデミウルゴスを働かせすぎだ：アルベドがあの状態ではやむを得ないが、今後の状況次第ではニグレドやコキユートスも動かせなくなる可能性がある。やはりアイツを宝物殿から呼び出すしかないのか…）

微笑ましく見える兄妹の「お出かけ」には、あらゆる事態に対応可能な、万全の警備態勢が敷かれていた。



「アインズ様、さっちゃん様。間もなく到着いたします。到着後のやり取りは手筈どおりに行いますので、こちらからお声掛けするまで、今少しお待ち下さい。」

「うむ。たのんだぞセバス。」

「ハッ、お任せ下さいアインズ様！（俺って執事として輝いてるぜ）」

セバス・チャンをリーダーとするプレアデス達はナザリックが転移して以来、我が世の春を謳歌していた。今回の転移後初の外征（兄妹はピクニック気分）にも、綺羅星の如き戦士が集うナザリックの拠点NPC達の中で、護衛として最初に随行を許されるといふ栄誉に与かった（実はデミウルゴスが達成済み）のだ！

不敬となるので決して口に出したり、いや考えることすらおこがましい事だが、自分

達プレアデスは創造されて以来、長く無聊を託っていた。ナザリツク地下大墳墓への侵入者を、最後に迎え撃つ最終絶対防衛線（只の時間稼ぎ）という大役を仰せつかっていたが、至高の方々があまりにも偉大なおかげで、侵入者共がナザリツクの最奥部まで到達する事がなかったからだ。

只の一度も戦う機会に恵まれなかった自分達は「本当に戦闘未経験!?!戦闘未経験が許されるのは一般メイドまでなのではありませんか?」とか「戦ったら負けかなども思っているのでしょうか?」や「戦闘（しない）メイド（の仕事もしていない）のみんなは私達の憧れです」などと姦しい一般メイド達に噂されていた。

※そんな事実は一切ありません。S氏の偏見と誤解に満ちたイメージです!

特に同格という扱いになっている、同じ100レベルNPCの階層守護者達からも

……

※繰り返しますが、これはS氏の偏見と誤解に満ちたイメージです!

「つらいでありますー。3階層も担当していて、しかも最初に侵入者を迎撃しないといけないから、まじつらいでありますー。」

S氏（真祖・第二階層在住）

「ザシュツザシュツザシュツ……ッターン!」

K氏（蟲王・第五階層在住）

「ねえねえ、私が闘技場でぶくぶく茶釜様のフォローした話して聞いてるう?」

A氏（闇妖精・第六階層在住）

「ぼ、僕が何人プレイヤーを倒してきたか知ってますかあ?」

M氏（闇妖精・第六階層在住）

「昨日ウルベルト様に話しかけて戴きましたよ。ねえ聞いて下さいよ!昨日ウルベルト様に話しかけて戴きましたよ。」

D氏（最上位悪魔・第八階層在住）

「私がモモンガ様を愛しているですってえ♥それってどこ情報♪ねえ♥それってどこ情報よ♪」

A氏（女淫魔・第十階層在住）

「ホラ、私ってアイテムフェチじゃないですか?宝物殿の管理者じゃないですか?監禁されてて大変ですよ♪」

P氏（二重の影・宝物殿在住）

等と揶揄されてきた様な気がする。しかし転移してからというもの、ナザリツク外部への偵察任務に始まり、御兄妹の生活のお世話など多くの任務に携わる事が出来た!今回の任務も必ず達成して見せる!



「あつ第一村人発見！さつそく話しかけてみよう！えーと…こんにちは？で、いいのかな？」

「お、お待ちくださいお嬢様！」

事前に打ち合わせていた設定をまるっと忘れたさつちんが、村の中を見て回っているのを見てアインズはやれやれと思いつつも、油断なく周囲に注意を払う。

「こ、これは貴族様でいらっしやいますか？カルネ村になんの御用で？」

「我が主人とその妹君はお忍びで村々を見てまわっている最中ですので…皆様に於かれましては、あまり騒がれないようお願いいたします。」

「そ、それではとりあえず村長に知らせてきますので…なにぶんお偉い様が、こんな辺鄙な村に来る事などなかったものですから。」

アインズはセバスの対応に満足する。辺境と言えども村長ともなれば、村人よりは色々な事を知っているはずだ。そして随分のんびりとした村だな、と思う。ここに着くまでにオーガとゴブリンに遭遇したが、この村には柵等のモンスターへの対策がみられない。武装している人間もみられないが大丈夫なのかと思ってしまう。

ちなみにオーガもゴプリンも、プレアデス達が一瞬で殲滅してしまった。これでこの世界のモンスターにもユグドラシルでの攻撃が通用する事が証明できた。オーガとゴプリンもユグドラシルでもおなじみのモンスターだが、種族的に最下級ランクの個体だった。

ただ、そんなザコモンスターでもこの村にとっては充分脅威になりそうなのだが、と考えていると、村長らしき老人が慌てた様子で駆け寄ってくるのが見えた。



「色々と参考になった。感謝しよう。(ほとんど知ってたけどな…しかしこのリ・エスティーゼ王国というのは酷いな)」

それでも実際に生の話を聞いてみないと分からない事もある。どうやらナザリツクが転移してきた土地がある国は、庶民にとっては生き辛いようだ。横暴で腐敗した支配層、搾取され続け日々の生活もままならない末端の民の姿は、アインズにぶすぶすとした怒りを感じさせる。

「こんなにも素晴らしい世界なのに…それでも虐げられる者はいるのか…」

アインズがやるせない気持ちに耽っていると、頭の中に《メッセージ／伝言》の聲が

響いた！

『アインズ様、今は宜しいでしょうか？』

「デミウルゴスか？少し待て。」

村長の家を後にしたアインズは、村外れに移動する。周囲はセバスとソリュシャン、エントマが警戒している。

「待たせたな。それで何があった？それとセバスにも聞こえる様にしろ。」

『はい、アインズ様が居られる村へ、統一した装備で武装した人間の集団が向かっております。この集団は近隣の集落を襲っていたようで、既に複数の集落を滅ぼしていた模様です。後15分程で、そちらに着くと思われまます。発見が遅れて申し訳ございません。』

「かまわない。それで相手の強さはどうだ？」

『最大でも5レベル。人数は50名。脅威と思われる装備やスキルもございません。御許可頂ければ即座に殲滅いたしますが？』

「ふむ。少し待て。セバス聞いたな？すぐにさっちん達を連れてくるのだ！」

セバスに命じられたソリュシャンとエントマが駆けてゆく。

「デミウルゴス、対処はこちらで行う。引き続き警戒を続けてくれ。」

『かしこまりました、アインズ様。』

《メツセージ／伝言》を切ったアインズは考える。それはゲームではない実戦につい

てだ。アインズは転移後にさっちんと話し合っていた。ユグドラシルでの種族で、この世界で生きていく上で戦いが避けられない事。自分達は突然、強大な力を手に入れたが、それに溺れる事になってはいけない。

妹の為なら全てをNPCに任せて、ナザリックに永久に籠る事も考えたが、妹自身がそれを望まなかった。妹はちゃんと覚悟を示した。それなら兄の覚悟も見せねばならない。

実際のところ、今回は戦闘も想定した外出だったのだ。今考えると、村に着く前に遭ったオーガ達は、実に手ごろだったのが悔やまれる。アインズ達も戦ってみたかったのだが、セバス達があつというまにサーチ&デストロイしてしまったのだ。

「アインズ様、我々が御二方には指一本触れさせません。ご安心を！」
「お兄ちゃん。」

妹がプレアデスを伴って戻って来た。強い決意を感じられる目だ。ユグドラシルで戦った時もこんな雰囲気だったなと思いつつながら、アインズはこれからの行動を考えていた。



喚者を放置して、敵中に突貫して殺戮の嵐を撒き散らすような事はなかったはずだ。

「グエーッ!!」

「ウギャー!!」

「神よ、お助け下さいっ!!」

「かね!かねをやる!500金貨だ!」

デスナイトに殺された者は、殺された者と同レベルのスクワイア・ゾンビとなり、そのスクワイア・ゾンビに殺されたものはゾンビとなる。その設定どおり、騎士たちは次々と殺されてアンデッドとなっていた。

「おぎゃああああ!おかね、おかねあげまちゅううう…なんでもじまずう…おだじゅげええ…」

気付けば生き残りはほとんどいない。アインズは慌てて叫んだ。

「そこまでだ!デスナイト!!」

デスナイトがその動きを停止した時まで生き残っていた騎士は、瀕死の隊長ベリユースを含めても10名に満たなかった……

王国戦士長と陽光聖典隊長

結局、私達兄妹の初戦闘はお預け？になってしまった。私の得意戦法である「ピュートと飛んでいってプスッ」が炸裂するはずだったのに…解せぬ。

村に着く前に戦ったゴブリンの時と同様に、倒された相手はデータクリスタルに変換される事も無く、周囲は「絶対に検索してはいけないワード」もかくやとなっている。お兄ちゃんからも心配されたが、現実なら卒倒しているはずの光景にも、グロ耐性に定評ある悪魔系種族の恩恵で耐えられている。

プレアデス達が、装備の剥ぎ取りと死体の焼却をしている側で、生き残った騎士たちは最低限の治療をされて拘束されている。相手の隊長は非常に饒舌な様で、聞いても居ない事までペラペラと捲くし立てている。

要約すれば「帝国兵に偽装した法国兵による王国国民の虐殺」「他にも本命の部隊が居るが、その目的は知らされていない」という、非常にナーバスな問題に巻き込まれてしまった訳だが、そういう難しい事はお兄ちゃんに任せてしまうのが一番だ。

「この世界での初ドロップは幾らかの硬貨、そして破壊されずに残った装備品か…ユグドラシルと違って装備品の全取りも可能とはお得だな♪」

「そんな事よりさあ、これからどうするの?」

「そうだな。セバスよ、村人達に安全を伝えてきてやれ。こいつ等はナザリックへ運んで色々な実験……ゴホンゴホン、あー情報提供に協力してもらおうさ。」

どうやら何か良からぬ事を企んでいるみたいだけど、ナザリックに無関係なやつらには情け無用だ。こいつらが他の村を襲って、大勢の村人を殺してきたのは聞いている。そしてこの村を襲おうとしていた事も……この村には知り合いになった子もいるのにもし彼女達が酷い目に遭わされたりしたら、さすがに気分が悪い。

「それではナザリックに帰るとする——デミウルゴスか?何か問題でもあったか?」

デミウルゴスからの報告によれば、この村に向かう二つの集団があるらしい。ひとつは馬に乗ってかなりのスピードで、この村を目指している30名程の集団。かなり粗末な装備で、平均レベルは10台前半の戦士職ばかり、ただし一人だけ30レベルが混じっている。監視していた行動からこの国の治安部隊と思われるとの事。

もうひとつは、最初の集団を追跡するような動きをしている20名程の集団。ナザリックの基準では低レベルだが、魔法効果を付与されている統一された装備で、平均レベルが10台後半の信仰系魔法詠唱者、リーダーと思われる男はレベル26、この村を襲っていた騎士達を指揮していた部隊と思われる。

「まったく……次から次へと、さてどうしたものか?」

連続イベントの発生に、さすがのお兄ちゃんも困惑ぎみのようだ。妹としてはこの辺りで兄孝行の一つでもしたいところなのだが：ポクポク：ポクポク：ツチーン！

「お兄ちゃん♪私とってもイイ事を思いついたんだけど（ウケケケケケ）」



リ・エステイーズ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフは激しい怒りに燃えながら、部下達を引き連れて必死にカルネ村を目指していた。

王より「国境周辺の開拓村を襲撃する帝国兵討伐」の命令を受けて駆けつけたが、既にエ・ランテル近郊の開拓村4つが襲撃されている。どの村も再建不能な壊滅的被害だったうえ、僅かに生き残った村人の保護に半数近い兵士を残してきた為、只でさえ不安な戦力が減ってしまっていた。部下からは反対されたが、自分達が守るべき民の為に、強引に説き伏せた。

思えば今回の任務は不可解な事が多かった。未だ状況がはつきりと確認されていないにも拘らず、考えられないほど迅速に決定された（ある貴族が強硬に主張）ガゼフ達戦士団の派兵。そして貴族派閥による不可解な提言による「ガゼフに達に与えられた装備の制限」等、色々な思惑が感じられた。

努めて政治からは距離を置いてきた自分には理解出来ない事ばかりだが、何者かの悪意を感じられずにはいられない：いや、今考えるべき事ではない、一刻も早くカルネ村へ向かわなければ！何とか間に合つてほしいものだ：

ようやくカルネ村が視界に入ると、襲撃された様子もない。間に合つたか！と安堵するが、帝国兵の存在を思い出して警戒を強める。最悪は村を守りながらの籠城戦も覚悟する必要がある。

村に入ると様子がおかしい。帝国兵に荒らされた痕跡はないが、村人の雰囲気は尋常ではない。武装した集団が村に入ってくれば、そういった事に慣れない村人が怯えたりする事は理解しているが、どうも違うらしい。まずは村長に会つて確認をせねばと考えていると、村の広場に人だかりができていた。

「私は王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。王の命令でこの近辺を襲っている帝国兵を追っている！何があつたか話を聞かせて欲しい。」

広場の中心に帝国兵らしき男達が拘束されているのを、村人達が遠巻きにしている。兵の近くには何故かメイド？が控えている。メイド？は美しく手入れされた黒髪を結いあげ、縁の無い眼鏡をして、非常に整つた容姿をしている。このような美女は王宮でもなかなか目にする事は無い。かなりの上級貴族に仕える者だろう。

「何があつたかのかを聞かせてくれないか？」

ガゼフは近くに居た村人に尋ねる。村が無事なのは事実だが、のつびきならない状況の様だ。

「へ、へい。この村を襲撃して来た帝国兵を、お忍びでいらしていた貴族様（と村人は思っている）が退治してくれまして。」

「何だと!?!」

ガゼフは慌ててメイドに話しかける。信じられない事だが、この村に居合わせた貴族の私兵が帝国兵を撃退してくれたのだろう。それにしても自分が望んでいた「弱き者を助ける貴族」が王国にもいた事がガゼフの心を熱くさせる。

「私は王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。この村を守って下さった、貴方の主人に是非ともお礼を申し上げたいのだが?」

「ボ、私は至高の主人アインズ・ウール・ゴウン様にお仕えする「戦闘メイド（フン）」のユリ・アルファと申します。主人は現在、この村の村長と対応を相談なされております。御用がおありでしたらご案内いたしますが?」

「!?!」

初めて聞く名前にガゼフは困惑する。王国の貴族ではない? という事だ……いや、疑問は後でいい。自分に代わって王国の民を守ってくれたのは事実。相手が何者であろうと感謝の意を伝えるのが先だ。

「お願いするでしょう。この者達については部下達に監視をさせて問題無いだろうか？」

「かまいません。それではご案内いたします。」

メイドに案内されて村長の家に入ると、村長らしき男と、非常に豪華な服装をした仮面の男、それに着き従う初老の執事がいた。



「我らに代わってこの村を守っていただき、感謝の言葉もない。」

非常に畏まった態度で礼を言われてアインズは困惑する。王国戦士長という立場にある男が、自分の様な初対面の、身分も不詳（あなたのお姿はどうみてもVIPです）な男に敬意を表しているのだから。特にこの王国では身分の格差が激しく、特権階級の間は身分が下のものにはかなり横柄だったはずだ。アインズはこの実直そうな男に好意を抱いた。

「降りかかった火の粉を払っただけの事ですが、戦士長殿の感謝は受け取っておきましよう。」

「それでは詳しい事情をお聞かせ頂きたいのだが？それにゴウン殿のような方が、この

ような開拓村に何の用で？」

「それについては……セバス、あれを戦士長殿へ。」

渡された書状を見てガゼフは驚愕する。その書状にはエ・ランテル都市長のパナソレイ・グルーゼ・デイ・レットンマイアの署名が押されていた。今回の任務の途中にエ・ランテルへ補給に立ち寄った際は、ガゼフも時間が惜しかったので面会はしていなかったが、彼は王に忠誠を誓う数少ない信頼出来る貴族の一人で、ガゼフも面識がある。

書状には「至高の御方であるアインズ・ウール・ゴウン様とその妹君については、自分の名でその身分を保障するので、最大限に便宜を図る事。絶対に無礼が無い様にする事」という事が、これでもかと大仰に記されていた。

「こ、これは大変失礼いたしました！何卒、無礼を御許し頂きたい。」

書状に書いてあった事が事実なら、彼は他国の重要人物である。只でさえ周辺国との軋轢に悩まされている王国としては、絶対に無碍には出来無い存在だ。それに王派閥のパナソレイが発行した書状を所持しているのだから、ガゼフが忠誠を誓う王にとつても重要人物のはずだ。

このアインズ・ウール・ゴウン殿については、王から何も知らされていなかったが、平民出身であり、政治的な問題について距離を置いている自分には知らせる必要は無いと考えていたのだろう。そうガゼフは結論する。

「それでは後の事を任せて構わないでしょうか？そろそろ帰宅しようと思っ
ているのですが。」

「今から？他にもお聞きしたい事が…いえ、ゴウン殿のような方を煩わせる訳にはいき
ませんか。日を改めて御話を伺いたいのですが、どちらに滞在されているのですかな
？」

「そういった事は全てパナソレイ氏にお任せしているので、何かあればそちらにお願い
します。」

アインズとしては、今回は王国戦士長であるガゼフと面識が出来た事で充分だった。
いずれ王国の上層部とも関わりが必要だが、王国上層部には良いイメージが全くない。
ガゼフの様な者は少数だろう。お近づきにはなりたくないと思っっている。国との関わ
りについては相互不干渉で良いと思っっている。落ち着いてきたら交易をしても良いか
くらいは考えている。

かつて自分達が暮らしていた世界では「国家」という枠組みが崩壊していた。人々は各
地に点在する大企業が所有するアーコロジーで生活を送っっているが、庶民達が物理的に
アーコロジー間を移動する事は殆どない。

アーコロジーの特性上、一旦完成した後施設を拡大する事は困難な事と、資源の枯
渇から新規アーコロジー建設が途絶えていた事もあり、領土問題と言うのは存在しにく

かった。

欧州や中東では、思想や宗教による紛争があつたが、鈴木兄妹の住む日本では、国民性からもアーコロジ間の関係は良好・活発とはいえないが緩い相互干渉という情勢だつた。

だからアインズは、ナザリック地下大墳墓の周囲が誰も住んでいない平原だつた事もあり、ここがリ・エステイーゼ王国の領土とされている事、自分達が国境侵犯の状態にあるとは考えもせず「まあ、そのうち近所に挨拶に行くか」くらいに考えているのだつた。

「それでは戦士長殿、また機会があればお会いしましょう。」

こうしてアインズの現地人とのファーストコンタクトが終了した。



「お兄ちゃん♪私とってもイイ事を思いついたんだけど。」

「どうしたんださっちゃん。心配する事は無いぞ。何があつてもお兄ちゃん達がいるからな。」

「そうじゃなくってさ！ここに向かっている集団がいるんでしょ？そのうちの村を襲つ

てきた奴らの仲間の方をさ、ナザリックに送ってみない？」

私が考えたのは「ナザリックへようこそ作戦」だ。広告宣伝活動の不備から1週間も来客が途絶えたナザリックに、罪も無い村人を害する悪党どもを招待（拉致）して、「おもてなし」してあげようというものだ！ともかくにも移転後初のお客様だ。せいぜい歓迎してあげようじゃないか！ウケケケケケ：

転移でナザリックに戻った私は、玉座の間にデミウルゴスとシャルティアを呼び出した。侵入者を招くのだから、ギルドのNo.2（実質的序列1位）として、玉座で指揮をとる必要がある。

アインズ・ウール・ゴウンのモットーとして「侵入者を拒まず、勇者に敬意を！」というのがあった。これは自分達もナザリックを攻め落として、その所有権を手にしたのだから、他の物にもそれに挑戦する権利はあるべきだという考えと、この難攻不落の鬼畜ダンジョンに挑む勇気を讃えて、どんな弱者だろうとも可能性を否定せず、侵入者が来た場合は必ずギルメンの誰かが玉座に座して、堂々と侵入者を待ち受けるというものだ。まあ、例外もあつたけど。

「デミウルゴスさん、これから報告のあつた集団の片方を、この特殊アイテム《ハイエース》を使ってナザリックに拉致しちやいます。お客さんは第二階層に転移させるので、シャルティアはそいつらを生かさず殺さずで、適当に相手してやって。侵入者をどうす

るかはお兄ちゃんが帰って来てから相談するから。OK?」

「かしこまりました（でありんす）！」

「今回のお客は「相応しくない」ヤツらだから、セーフゾーンも宝箱も必要ないからね。但しナザリックの外には逃がさない様に！」

ナザリックには侵入者への救済措置&接待として、一定時間モンスターに襲われない「セーフゾーン（但しお得意様に限る）」や、ダンジョンのお約束として「宝箱（なお50%でトラップの模様）」を用意してあるが、相手が敵対ギルドやマナーの悪いプレイヤーだった場合は、それらのギミックを停止して、ガチで殺しにかかる体制に移行する。

実際、ユグドラシル時代の侵入者の半分は「ファンによる聖地巡礼」だった。DQNギルドとして有名だったアインズ・ウール・ゴウンだが、それゆえにヒールとしてのファンも多かったので、「あこがれのナザリック地下大墳墓」を訪れる者も大勢いたのだ。

難攻不落のナザリック地下大墳墓に正々堂々と挑戦したいプレイヤーは、事前にギルド宛てにメッセージを送って日時を伝えてくる事が多かったし、一部のファンには「シャルティア様に吸血され隊」「アウラちゃんにムチ打たれ隊」「マーレ君に撲殺され隊」という意味不明なりピーターもいた。

ワールドチャンピオンだった、たち・みーさんやバトルマニアの武人建御雷さんなんかは、知り合いの有名プレイヤーを第六階層の闘技場に招待しての公開PVPを開催

してたりもした。

ギルド長だったお兄ちゃんにも結構な数のファンがいて「非公式ラスボス」とか呼ばれていて、お兄ちゃんを真似てオーバーロードの種族を選択するプレイヤーまでいた位だ。



「あ、あ、ありえるかあ〜！総員傾聴っ！とにかく天使を召喚し続けよう！」

スレイン法国が誇る「六色聖典」のひとつ「陽光聖典」の隊長ニグン・グリッド・ルインは混乱の極致にあった。法国の最高執行機関である神官長会議で議決された「リ・エステーゼ王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ抹殺」の指令を受け、囃部隊による陽動作戦の結果、ガゼフ率いる戦士団を追い込んでいた最中に、謎の転移に巻き込まれて何処とも知れぬ地の底で、人類の敵であるアンデッドと激戦を繰り広げる事態に陥ったのだから。

突如として足元に魔法陣が出現し、気付けば目の前の風景が変わっていた事に困惑した。自分達はガゼフがいる村へ向かっている最中だったはずだが、現在は石壁で造られた通路に居る。窓が一切無い事から、この場所が何処かの建物の地下であると推測され

るが、この肌を感じる邪悪な気配は何だ？

うろたえる隊員達を宥めながら、ニグンが今後の対応を考えていると隊員から報告があった。

「敵襲！敵襲！前方にスケルトンの集団！数は多すぎて判別不可能！」

そして激戦が始まった。本来、巫人やモンスター殲滅を得意任務としている陽光聖典にとつて、最下級アンデッドであるスケルトン程度なら、1000体以上であろうと敵ではない。

陽光聖典は全員が最低でも「第三位階」の信仰系魔法を行使可能な、一流の魔法詠唱者のみで構成された精鋭部隊であり、ニグン自身は第四位階魔法まで習得している。自分達にとつて生者を憎むアンデッドは最も得意とし、そして憎むべき敵だ。得意とする集団戦法「召喚した天使を盾としながら神聖属性魔法で攻撃」で数百体のスケルトンを無傷で殲滅する事に成功した。

その後現れたゾンビ、アンデッド・ビーストにも陽光聖典は完勝したが、続いて出現した10体ものエルダーリッチには苦戦させられた。《ファイヤーボール／火球》や《ライトニング／雷撃》といった魔法攻撃で、召喚した天使を倒されたところを、スケルトン・ウォリアーとの白兵戦に持ち込まれて、かなりの被害を被った。

そして満身創痍の陽光聖典の前に新たな敵が現れた。先程のスケルトン・ウォリアー

に似ていたが身に纏う武具は一見して最上級クラスと判るものだった。炎や雷を宿した武器、禍々しいオーラを発する鎧や盾等、全てが魔法の力を宿した武具であった！そんな存在が20体！

神々が残した様々な伝説の武具を有するスレイン法国でさえ、一部隊でこれだけの装備が揃えられているのは、六色聖典最強の「漆黒聖典」ぐらいのものだろう。ニグン自身は国から与えられた、かなり上位の武具、アイテムを身につけているが、それに匹敵する装備だ！

そこからの戦闘は筆舌しがたいものだった。次々に倒されてゆく部下達。幸い死者は出ていないが、わざとトドメを刺さない様に闘っているのだろう。そんな様子を見てニグンは思う。

「やはりアンデッドは邪悪な存在だ…あの御方以外は…」

自らが召喚していた《プリンシパリティ・オブザベイション／監視の権天使》が消滅し、立っている者が自分を含めても片手の指にも満たない数になって、ようやくニグンは決断する。出撃の際に与えられた切り札というべき存在を使う事を。

「万が一の際にはこれを使ってガゼフを抹殺せよ」と最高神官長より与えられたのは「魔封じの水晶」と呼ばれる超希少マジックアイテムだ。

かつて大陸中を荒らし回り、世界を滅ぼしかけたと伝えられる「魔神」という超常の

存在。その魔神を単騎で滅ぼす事が可能な最高位天使《ドミニオン・オーソリテイ／威光の主天使》。この魔封じの水晶にはそれが封じ込められている。

「これより最高位天使を召喚するっ！それまで何とか時間を稼ぐのだ!!」

ニグンが叫んだ時、再び足元に魔法陣が発生する。光に包まれたニグンが目をあけると、そこには思いがけない光景が広がっていた。

「ここ、ここは一体？またしても魔法による転移か!？」

「夜空だつて？ここは地上なのか!？」

「な、何だあの化け物たちは…もう、おしまいだ…」

部下達の声はニグンに届かない。ニグンはあまりの驚愕に打ち震えている。あまりにも信じられない存在を目にしてしまった為、それ以外の何も目に入らず、部下達の叫びも耳に入らない。

「はじめまして、諸君。そしてようこそナザリック地下大墳墓へ。私は——」

「ス、スルシャーナ様あああ!!!」

「は?..」

ニグンの絶叫が第六階層のコロシウムに響き渡った。

様々な問題

「——平伏したまえ。」

デミウルゴスのスキル《支配の呪言》によって、見苦しくうろたえていた侵入者達が一斉に平伏するのを、シャルティア・ブラッドフォールンは醒めた目で眺めながら思う。一瞬だけ主人が動揺したように感じられたが気のせいだろう……

（今回の侵入者もハズレでありんした。さっちゃん様が直々にナザリックへお連れしたというのに、あの体たらく……たしかにわらわが手ずから相手をするまでも無かったという事でありんすね。さすがはさっちゃん様♥）

ナザリック地下大墳墓の第一〜第三階層という、最も浅い階層の守護者として創造されたシャルティアは、これまで数多くの侵入者と相對してきた。そんな彼女の持つ強さを図る物差しでも、今回の侵入者たちは「さすがにミリ単位まで測るのはちょっと……」という有様だった。

創造者であるペロロンチーノが「馬鹿な子ほど可愛い」をコンセプトにしただけあつて、普段の言動は残念なものが多い彼女だが、その本質は「残酷で冷酷で非道で——可憐な化物」の吸血鬼の真祖。ナザリックNPCでも随一の戦闘経験を誇る最強の階層守

護者なのである。

本来、この程度の侵入者であれば至高の御方である主人が相對するまでもなく、シャルティアの裁量で一方的に蹂躪して終わらせて良い案件だが、ナザリックが原因不明の事態に巻き込まれ（愛しのさっちゃん様が傷つけられる事をみすみす許してしまったのは痛恨だった）て、ユグドラシルと異なる世界に転移して以来、初めての侵入者という事情で特別な歓迎を催しているのだ。

（これが終われば今回のご褒美として、ついに、ついにさっちゃん様と一緒にのお風呂タイムが!!アインズ様にも内緒で2人っきりの……ジュールツ♥……）

——キーンツ—— 陶器同士がかち合った様な硬質な音が響き、第六階層上空の空間が少しだけ震える。妄想に耽っていたシャルティアは即座に覚醒する。この様な現象をシャルティアは知っていた。

これは情報系魔法を完全に防いだ際の現象で、さらにこちらの攻勢防壁が発動した事を示している。情報系魔法が完全に成功すれば、魔法を受けた側は感知すら出来ないし、一瞬でも探查に成功した場合は空間が罅割れる様な現象が起こる。

「むっ!?何者かが情報系魔法を使ったようだな。対象は……その男達か?気の毒な事だ。このナザリックに対してゲスな覗き見を目論むとは……この反応ではこちらからの攻撃は完全に届いているな。それにしても迂闊な奴らだ。「深淵をのぞく時、深淵もま

「たこちらをのぞいている」だったか？タブラさんに聞いた言葉だが。」

「おおっ!!さすがは至高の方々が造り上げたナザリックでありんす!!いったいどの様な事が起るのでありんすかえ?」

「ナザリックに施された自動攻勢防壁システム《遺憾の意》は、相手が仕掛けて来た内容に応じて報復するシステム。今回はレベル8の「真に遺憾である」だな。不届き者には正当な報復が為された事だろう。」

こうして最高神官の命令で、スレイン法国の秘宝と姫巫女による大儀式による《ブレイナーズ・アイ／次元の目》を使い、定期的に陽光聖典を監視していた土の神殿は壊滅的な被害を被る事になった。

※ナザリック自動攻勢防壁システム《遺憾の意》の尺度

（ナザリックへの見戯はやめよ）

L v 1 推移を見守りたい

L v 2 対応を見守りたい

L v 3 反応を見守りたい

（…少しだけ…不快だな）

L v 4 懸念を表明する

L v 5 強い懸念を表明する

—— (これほど不快な事があるものか) ——

L v 6 遺憾の意を示す

L v 7 強い遺憾の意を示す

—— (私を不快にさせるのもそれぐらいにしたらどうだ?) ——

L v 8 真に遺憾である ↑ 今回はこのレベル

—— (糞! 糞! 糞!) ——

L v 9 甚だ遺憾である

—— (クウ、クズがああああああ!!) ——

L v 10 悲鳴と呪詛以外、もはや聞きたくないぞ



「スルシャーナ?…誰と勘違いしているのか知らないが訂正しておこう。私の名はアイ
ンズ・ウール・ゴウン…このナザリック地下大墳墓の支配者だ。」

「な、何故?その御姿は經典に描かれていたものと…いや、その恐ろしいまでの力を感じ
る装備は…」

「ほう!?この世界にも私の同族が居たとは!実に興味深い。」

「世界……同族……ま、まさか貴方様は、ふれいやー様ではっ!?」

アインズは思いがけない事を聞いて激しく動揺するが、すぐにオーバーロードの精神作用無効によつて抑制される。その後は聞いても居ないのに「六大神」「ふれいやー」「人類の惨状」についてペラペラと捲くし立てるニグンを黙らせようとしたデミウルゴスを制止し、話を続けさせる。この男が語つた事が事実であれば、やはりこの世界に他のユグドラシルプレイヤーが存在し、そして死んでしまったという事だ!

自分達以外のプレイヤーの存在を意識しなかつた訳ではないが、どうやら自分達には警戒心が不足していたと認めざるを得ない。この男からはまだたつぷりと話して貰う事がありそうだ——そして生きたまま帰してやらなければならぬ。

「しかし本当に不愉快だ。死を司るオーバーロードである私の前で、未だ死ぬべきではない命を、私以外の者が無下に奪おうというのだから。お前の部下だという騎士達の行いは非常に醜かつた。」

ニグンは何も言う事が出来なかつた。四部隊がやり過ぎていた事は否定できない。殺された村人ごとき、人類全体から見れば取るに足らない存在と考えていた。そして自分自身が「取るに足らない存在」になつて初めて、それが如何に理不尽な事を思い知らされる。

「諸君には生きて帰つて貰おう。そして諸君の上——飼い主に伝える。」

ニグンの元にアインズが迫り、絶望に染まった瞳を覗きこむ。

「この辺りで騒ぎを起こすな。そんなに騒ぎたいのなら、いつでもこのナザリック地下大墳墓にやって来るがいい。たつぷりと歓迎してやるぞ、とな。」

ニグンは信じられないといった様子で、必死に頭を上下させて了承の意を示す。

「さて、このままかえってもらうのは忍びない（許さない）。一晚（氷結牢獄で）泊まっていたといい。色々歓迎（拷問）しよう。傷を癒して英気を養って（拷問の痕跡と記憶を消して）から国へ帰ってくれたまえ。シャルティアよ、第五階層への《ゲート／転移門》を開け。」

「畏まりんした、アインズ様。」

「それでは、コキュートス…部下に命じて客人を第五階層に案内してやれ。客人の応対はニユーロニストに任せる。但し私がゆくまでに最低限の治療を施し、他は何もすると伝えておけ。」

「ハッ、畏マリマシタ。アインズ様。」

しばらく経つとコキュートスの部下達が現れ、ゲートの向こうへと侵入者たちを連行していく。それを見送ったさっちゃんアインズに問いかける。

「お兄ちゃん、この世界に他のプレイヤーがいるんだね。私そんな事全然考えてなかった…」

「ああ。お兄ちゃんだって、あの男に言われるまで実感がなかったよ。注意しないといけないな。」

「プレイヤーに会ったらどうするの？戦うの？」

「相手次第だな。こちらから喧嘩を売るつもりは無いが、いたずらに慣れ合うつもりも、下手に出る気も無い。利益がぶつかった場合は、多少の譲歩はやむを得ないだろうが……」

「ギルドのみんなが居てくれたらよかったのに……」

アインズは妹の不安を打ち消す言葉を掛けてやりたかったが、妹の言った事は、自身も心の底から思っている事だ。何と頼りない兄かと臍を噛む

「わ、私がぶくぶく茶釜様に代わって戦いますっ！」

泣きそうな声でアウラが叫ぶ。

「アウラの言う通りでございませう！ウルベルト様の足もとにも及ばぬ身ではありますが、この身に代えましても、御二方の事はお守りいたします！」

デミウルゴスの血を吐くような叫びが続く。

「僕も頑張つて戦います！ぶくぶく茶釜様に頂いた力で！」

普段の様子からは考えられない強い調子でマーレが断言する。

「このシャルティア・ブラッドフォールン。ペロロンチーノ様より授かった力で、ナザ

リックに仇名すものは、尽く滅ぼして御覧にいきます！」

廓言葉を忘れる程に激昂したシャルティアが宣言する。

「如何カゴ安心ヲ！武人建御雷様ノ教工ニ従イ、ドンナ強敵デ在ロウト、ナザリックニ属スル全テノ者ハ最後ノ一兵マデ戦イマス！」

コキュートスが力強く宣言する。

「エへへ…みんな…ありがとう！それはとつても嬉しいなつて…」

「私からも礼を言わせてくれ。我ら兄妹とお前達で力を合わせれば、どんな強大な敵にも打ち勝てる、今この瞬間、はつきりと確信した。」

アインズはNPC達の言葉に、まるで彼らの創造主がこの場にいるような頼もしさを感じる。先程までの不安は嘘のように掻き消された。心が熱くなる…こんなにも頼もしい気持ちは初めてだ！もう何も怖くない——



ナザリックの最重要部である第十階層宝物殿。この場を守護するのはアインズが自ら創造した唯一のNPC「パンドラズ・アクター」である。アインズ、さっちゃんを含むアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバー42人の外装と能力の80%を再現可能な

上位二重の影であり、アイنزの黒歴史（現在も進行中）ともいえる存在である。

「フム、非常に参考になりました。これで我が創造主であるアイنز様へ満足のいく報告が出来ますね。」

パンドラズ・アクターはアイنزの命令で、ニグン達の戦闘を徹底的に調査していた。さらに言えば、彼が調査完了の合図をアイنزにメッセージで伝えるまで、ニグン達は戦闘させられていたのである。ギルメンの中で最も探查系職業に特化していた「ぬーぼー」の姿で、ワールドアイテムすら併用しての徹底した調査によって、かなり興味深い事実が判明した。

先日、主人が久しぶりに宝物殿を訪れた際に、ナザリック地下大墳墓が見知らぬ世界へと転移したという驚愕の事実を聞かされた。そして理由は明かされなかったが、主人がアイنز・ウール・ゴウンと名を変えた事。

幸いアイنزが最も愛するさっちゃん様も一緒だったが、仮にさっちゃん様と離ればなれになった場合に、アイنزがどれだけ嘆き絶望するかを知るパンドラズ・アクターは密かに胸を撫で下ろした。

「待たせたな。パンドラズ・アクター」

「パンドラおひささ〜♪」

「Oh〜!!我が創造主であるア〜インズ様。そして美しくも可憐なさあ〜っちゃん様あー

ン!!」

「ウヒヤヒヤヒヤwwwパンドラは相変わらずカッコいいね!」

「Danke, ich bin glücklich.」

「……（絶対ドイツ語止めさせよう）」

耐えきれなくなったアインズは、挨拶もそこそこにパンドラズ・アクターへ報告を促す。もちろんオーバーリアクションと余計な装飾語、ドイツ語を禁じてだ。それさえ無ければ、彼の報告は簡潔で判り易かった。

「まずは現地の人間種の強さですが、確認できたのが最も高いレベルは王国戦長の30です。職業構成がユグドラシルと酷似していますが、異なる点もある様です。今後はサンプルが不足している亜人種・異形種の調査を進めていく事になります。」

「まあ一部にユグドラシルでは無かった…俺が知らなかっただけかもしれないが、そういう職業もある様だな。亜人種・異形種についてはデミウルゴスとアウラの担当だな。」

もしユグドラシルの職業ツリーの範囲を逸脱した構成が可能なら、思わぬ強敵になる可能性もあるだろう。

「次に魔法ですが、ユグドラシルの位階魔法が使われています。確認出来たのは最高で第八位階の《プレイナーズ・アイ／次元の目》ですが、殆どの現地人は第三位階までが限度です。この世界では第四位階は一部の天才、第五位階は英雄クラスという扱いで

す。バハルス帝国の首席魔導師は第六位階を行使する「逸脱者」と呼ばれています。「魔法に関しては、現地のレベルはかなり低いと見てよいか。」

「但し、氷結牢獄に捕らえている者達に施されていた「特定条件下で3回質問されると死ぬ」という魔法はユグドラシルには無い魔法でしたし、第0位階という扱いの「生活魔法」という現地特有の魔法もございます。さらに「オリジナル魔法」を創り出している者もいるとの事です。」

「非常に興味深いな。可能であれば習得してみたいものだ。」

魔法職として一家言あるアインズとしては、可能であれば、ぜひともチャレンジしてみたいと思っている。

「ハイハイ質問！生活魔法ってどんなのがあるの？」

「ハツ、少量の食材や調味料を創り出したり、攻撃力の皆無な量の火や水を発生させるものが確認出来ております。」

「おお〜！飯が作れるなら働かなくてもいいかも!？」

魔法でそんな事まで可能というのは、ちよつとしたカルチャーショックだ。

「次が「武技」と呼ばれるものです。主に戦士職が身につけている技です。ユグドラシルのスキルとは異なる物の様ですが、職業に由来した技なので、スキルとの類似性があるかもしれません。習得条件は不明ですが、我々でも習得可能であればナザリックの戦力

向上となるでしょう。」

「ふーん、私にも使えるかな?」

「かなり有用そうな技もあるらしいな。武技を使える人間を拉致…いやいや、スカウトして研究してみるか。」

「おお〜! さすがは大魔王。」

ナザリックの戦力向上は重要な問題だ。背に腹はかかえられない。

「そして「タレント」と呼ばれる一部の人間固有の能力があります。数百人に一人の割合で所持している者がおり、能力は様々。中には「あらゆるマジックアイテムを使用可能」という破格の性能も存在しております。」

「ふむ、非常に有用で…そして危険な能力だ。詳しく調査し可能であれば奪取したいな。」

「タレントってユグドラシルにあった「ギフト」に似てるよね?」

ユグドラシルで新規にキャラクターを作成すると、キャラクター毎に固有の能力が与えられる「ギフト」というシステムがあった。能力は完全ランダムで決定され、中にはゲームバランスに影響する程のものまで（宝くじ並みの確率だが）あった。微妙なものも多かったが、プレイヤーが不利になる能力はない。リセマラ防止の為に、所有するギフトが判明するのは、アカウント作成から100時間後となっている。

鈴木悟がユグドラシルを始めた時に獲得したギフトは「24時間に1回の無料ガチャ」だった。ユグドラシルにあった課金ガチャは1回500円。それが毎日1回とはいえ無料で可能という破格の能力である。鈴木悟はこの能力によって数々のアイテムを入手して、人より少ないプレイ時間を補う事が出来た。そして遂にスーパーレジェンドレアアイテムである「流れ星の指輪」までも入手したのだった。

この能力はこの世界に転移してからも失われず、アインズは現在も1日1回の課金ガチャを回す事が出来る。心の中でガチャつとすると、何も無い空間からカプセルが落ちてくる光景は非常にシニールで、アインズも「本当にどうなっているんだ？」と悩みつつも、毎日楽しみにしていたりする。

ちなみに転移して以来1週間連続でハズレアイテムの代名詞である「小さな変わった彫刻」が出現しており、今日こそは！明日こそは！と一喜一憂するのが日課になっている。

「そうだとすると…本当にどんな能力があるのか不明だな。これも要注意だ」

「それにしても、お兄ちゃんのチートは反則だよね。ていうか何でこっちでも使えるんだらうね？」

「そんなのこっちが聞きたいぞ。」

「Oh～！無からあらゆるアイテムを生み出す！まくさに至高の能力っ！！さすがは我が

創造主であるアインズ様！」

「おいパンドラ…素に戻ってるぞ。それに、そこまで万能じゃないからな。全く…今日もハズレだった。明日こそは…」

「ウヒヤヒヤヒヤwwww」

(やっぱりコイツ何とかしないと…このまま外に出したら、他のNPCの視線が…)

アインズはパンドラの扱いを真剣に悩む。アイテムフェチの中二病を部下に紹介するのには勇気がいる。

「そして最後はアイテムです！この世界のアイテム・武具はユグドラシルと比べて非常に低位です。ごく一部にマジックアイテムが存在しますが、それらも効果は極めて小さいもので、この宝物殿に収められた至宝には遠く及びません！但し！あのニグンという男が所持していた「魔封じの水晶」は、ユグドラシルにあった物と同一の効果があるものでした！込められていた魔法こそ第七位階という低位でしたが、これがユグドラシル産であればプレイヤーの存在が確定的となり、現地産であったなら、このクラスのアイテムを生産可能な者が存在するという事！この事から——」

怒涛の如く現地産アイテムへの見解を述べ続けるパンドラス・アクターに、アインズは無いはずの胃が痛む錯覚を覚える。

「わかった！わかったから！とにかく落ち着け！」

「ウヒヤヒヤヒヤｗｗｗｗ」

「失礼しました。それと回復ポーションに関してですが、現地産のポーションは「青色」をしており、保存性に欠陥があるのか、《プリザベーション／保存》を使用していないものは劣化してしまう為、使用期限があります。効能も低く、さらに制作者によつてかなりの差異がでます。そしてこの世界にもMPを回復するポーションの存在は確認出来ておりません。」

ユグドラシルのポーションは赤色だった。もちろん使用期限なんて無かった（あつたら大問題だ）し、低位く完全回復までのランク分けはあつたが、同ランクのポーション同士に差異は無かった。このあたりは現実にも則した？仕様なのかと思つてしまう。

「現地のポーション職人からも話を聞いてみたいものだ。ナザリックでは生産系メンバーが抜けてからというもの、ポーションや武器作成が弱かつたからな。優秀なら拉致監禁：ではなく専属契約というのもアリだな。」

「お兄ちゃんつてホントにレア物が好きだよね。ヘンなマスク買つたりするし。やつぱりパンドラはお兄ちゃんに似たんだよ。」

「おお！光栄です。さつちん様。」

今日は様々な問題点があきらかになつた一日だった。アインズは改めてこの世界に対する警戒を強める。プレイヤーに関して、NPCだけに任せる訳にはいかない。や

はり近いうちに自らがナザリツク外で本格的行動する必要性があると感じるのだった。

エ・ランネルへ

NPC達の活動以外にも現地人とのコンタクト、転移後初のナザリックへの侵入者と多くの情報入手に機会に恵まれたアインズ。疑問や問題点も幾つか判明したが、情報収集は順調に進んでいるとみて良いだろう。

これからはアインズ自身が、ナザリックの外での活動を本格化させたいところだが、ナザリックにおいて極めて重大な事案が発生してしまい、今後の活動について考え直さざるをえないのだった。

問題の発生源は守護者統括のアルベドである。先日の「モモンガJr復活事件」の際に、「至高の御方への事案発生未遂事件」を起こし謹慎3日間の処分を受けた（ギルド初の懲戒案件）アルベドは、謹慎が終了した後は心を入れかえて、守護者統括の任に邁進した——という事はなく、己の欲望にそれはもう忠実に行動した。

謹慎が終了したその日の夜にアインズの私室へ突貫し、アインズとの壮絶な要塞戦を繰り広げて、見事「アインズ要塞」を陥落せしめたのであった。そして一度陥落した要塞は、二度とその機能を果たす事は無くなったのだった。

その結果がどうなったかという点、アインズまさかの初弾命中でアルベド歓喜のご様

妊となった。この事でナザリツク全体は祝賀モードとなり、元凶の一人であるさっちゃんも驚きと共に祝福の言葉を贈ったという。

この慶事に色々な意味で、強く反応すると思われたシャルティアも「兄より優れた妹（自分の好みに）」の存在のおかげで、アインズとアルベドに祝福の意を伝えただけであった。一部のメイド達で噂されていた「正妃争奪戦」は始まる事無く終了していた。

サキュバスの特性により、既に臨月となっている（ハムスター並みである）アルベドは、自室として与えられたロイヤルスイートで出産を心待ちにしていた。得意の裁縫で胎内の我が子の為に、せっせと服や小物を編んでいる姿が微笑ましい。そんな姿を眺めながら、アインズは彼女の狂喜を思い出し「女の事はわからん」と唸っていた。

「アルベドよ、気分はどうだ？何か問題があればすぐに言うのだぞ。」

「大丈夫ですアインズ様。子を産むのは女の役割ですから、アインズ様はナザリツクの支配者としての職務に専念なさって下さいませ。」

「そ、そうだな。なにぶんこのような事は経験が無いので、私としても、どうしたら良いのか分からないのだよ。」

「わあ、凄いやね。もうお腹がこんなに膨らんでるんだね!？」

「はい、さっちゃん様。サキュバスは子を孕んでひと月で出産ですから。」

アインズの子を懐妊したアルベドは、現在のナザリツクで最重要の扱いをされてい

る。万が一の事も起きせない為に、100レベルNPCにしてプレイアデスの末妹であるオーレオール・オメガが第八階層桜花領域より呼び出され、彼女を隊長とした、全員が女性の特別親衛隊が結成されている。

親衛隊員はアインズが溜めこんでいた余剰経験値を、ほぼ全て消費して召喚された最強の傭兵NPC（100レベル）が3名である。それぞれ「エヌワン」「エヌツー」「エヌスリー」と名付けられた女性隊員達が24時間体制で警護の任にあたっている。

彼女達は「ヴァルキリー」「ガーディアン」「パラディン」等の種族・職業で構成された、防御と回復に優れた戦士だ。3人いっしょで守勢に徹すれば、守護者最強のシヤルティアと互角に戦えるスペックだ。ユグドラシルでは装備や能力が、予め設定済みで変更不能な傭兵NPCはあまり人気が無かった。あくまでも予備兵力の使い捨てキャラという位置付けであったが、この世界では国が落とせるレベルである。

この様に警備面では安心の出来る体制を構築していたが、生活面でのサポートに問題が生じていた。子供の誕生と言う、ナザリック初の事案に対応する人材の不足である。当初アインズはペストーニヤを始めとするメイド達に任せる予定だったが、そのペストーニヤ本人から不安の声が出たのである。



ナザリックには41人の一般メイド達が存在しているが、彼女達は全員が1レベルしかないのである。彼女達を創造した3人がそう決めたのだが、彼らは全員にそれぞれ個性的で魅力的な外見を与えた以外に、特にスキル等の設定はしなかった。

そのくせ「腹黒」「ドジッ娘」「絵がうまい」「甘い物に目が無い」「読書好き」等の個人設定は全員分用意されていたりする。中には「ナザリック一の駄メイド」という不名誉な設定をされている者さえいた。その為に、清掃や雑務以外の事で、特にこれといった能力は持っていなかった。

ユグドラシルでは職業としての「メイド」があつたが、彼女達はホームクルスの種族レベルしか持っていない。よって設定上ではメイドという事になっているが、システム上では「無職」という扱いだ。ちなみにプレアデス達、戦闘（の職業とスキルしかない）メイドは言わずもがなだ。なんちやってメイドである。

実はナザリックでメイドの職業レベルをキッチンと取得しているのは、メイド長のペストーニヤ（驚異の15レベル。神メイドである）だけだったりする。そんなナザリックを彩る華やかなメイド達を陰で支えるのが「男性使用人」と呼ばれる名無しモブ達である。

彼らはギルメンが創造したNPCではなく、全て「傭兵キャラ」と呼ばれるゲーム内

にデータが用意されていた汎用キャラである。これはメイド達を担当した3人が「男キャラはこれでいいだろ」と手抜き：では決してなく：効率化を図り、他のギルメンも「別にいいんじゃない」と言った為である。

彼らは使用人としての職業レベル、料理等のスキルを取得しており、メイド達の食事の世話までさせられていたりするが、ナザリックにおいては、ギルメン自身によつて創造されたNPCとそうでない者（傭兵キャラ・シモベ）の間には、絶対たる身分の壁が存在しているので何の問題も無い。これら現状を踏まえて、アインズとさっちゃんは「一般メイドキャリアアップ計画」を実行する事にしたのだった。

ユグドラシルでの職業レベルは1〜15レベルまで存在しており、レベルによる習熟度は以下のようになる。

- 1レベル：見習い。その職業としての最低限のスキル・魔法が使える。ザコ。
- 2レベル：見習いを卒業し、その職業として一般的な能力。
- 3〜4レベル：その職業として一人前。プロ扱い（並）。
- 5〜7レベル：その職業の熟練者。一流のプロ。
- 8〜10レベル：超一流のプロ。天才。
- 11レベル：伝説・英雄の領域。
- 15レベル：神の領域。

このような構成なので、職業レベルを最高である15レベルまで上げる事は少なく、大体が5レベル〜10レベルに留めて、他の職業レベルを上げるプレイヤーが多かった。その方が多彩なスキル、上級職の取得に有利だからだ。当然レベルアップに必要な経験値も大量に必要なので、10レベルより上は趣味の世界という扱いだった。但し、中には一芸特化を狙うロマンビルドも少数ながら存在した。

これは現地の人間にも当てはまる様で、大体1年位修行・訓練して1レベルを取得。3〜5年で2レベル。常人が真剣にその道に打ち込んで3レベルに到達するのに約10年にかかる。そして一流の壁である5レベルを目指すなら一生かけて到達出来るかどうかの世界だ。

この所為で現地の村人はほとんどが1〜2レベルしかなかった。日常生活を送っているだけでは、なかなかレベルは上がらないようだ。冒険者等の戦闘を行う職業は、経験値を得る機会が多いので、レベルは比較的上がり易くなっている。

そして一部の才能ある人間はレベルアップも早く、数年で5レベルの壁を突破するが、それでも10レベルの壁は厚いようで「事実上、人間の限界」となっている。

この事実からパンドラズ・アクターは「現地人は個人毎に経験値テーブルが異なり、レベルキャップや才能限界があるのでは？」という考察をしていた。

「メイドさん達をレベルアップさせるのはいいけどさ、操作するコンソールが使えない

けど、どうするの?」

「ん? 出来るぞ。玉座に座っていればマスターソースが閲覧出来るからな。フフフ:ギルド長にだけ許された特権だな。」

「それなら大丈夫そうだね。じゃあスキルとかはどうするの? ユグドラシルのスキルつてややこしくて、よく解らないんだよね。」

「うん: wikiが見ればよかつたんだが:」

「さすがにそれは無理だよな。うん、メイドといえど家事——掃除・洗濯・料理・裁縫つてところ? あとは子育てとか?」

いくらユグドラシルが、異様なまでに作り込まれたゲームだったとしても子育てスキルはなかった。

「料理スキルくらいしか知らないな: そういえばアルベドは裁縫が得意なんだよな。タブラさんがそう設定してたから、その設定通りの能力を持っているんだよな?」

「ねえ? メイドさんの設定を変えたらどうなるのかな? 例えば万能メイドとかさ?」

「それはダメだ。NPC達と過ごして理解しているはずだ。彼らは自分の意思をもって「生きて」いるんだ。それを歪めてしまうのは、例え創造主でも許されないだろう。」

「あ: : : : そうだよな、うん。そのとおりだよな。ごめんなさい。」

短い間だが、NPC達とのふれ合いから分かっていた事だ。彼らは一人一人が個性を

持つて生きていることを考えれば、とても出来るはずがない。

「分かってくればいい。それに…アルベドもそうなのかもしれないが、ぶつちやけ後からの変更がどんな影響を及ぼすのか、まったく不明だからな。やり直しが可能かも分からない。」

なにせ「ただしビッチである」という一語を「モモンガを愛している」と書き換えただけで、全NPCの優秀なトップとされていたアルベドが、あそこまでとんでもないキャラになってしまったのだ！もとからそうだったのかもしれないが、少なくともゲーム内で抱いていたイメージとのギャップが凄すぎた。

そういえば彼女達の創造主は「ギャップ萌え」だったな…とアインズは思いだす。とにかくNPCの設定変更はダメ！絶対！——でもレベルやスキル・魔法を追加したり、装備を変更するのは許してくれるよね？とアインズは結論した。

「ああ、失敗しました。ゴメンナサイじや済まないもんね。」

「いやね、俺も考えなかつたと言えばウソになるぞ。パンドラの設定を少し…少しだけ変更、というか改善？出来ないかな…？なんて。」

こうして「一般メイドキャリアアップ計画」は、最初に数名のメイド達を対象に開始したが、レベルアップの効果は一目瞭然だった。対象になったメイド3名をそれぞれA・B・Cと呼称するが、まずは1レベルだけメイドの職業レベルを与えられたAは殆

ど変化が見られなかったが、3レベルを与えられたBは明らかな変化が見られた。セバ
スとペストーニヤ曰く「一般メイドの3倍の能力」ということだった。

そして5レベルという大盤振る舞いを施されたC（ナザリック一の駄メイドとされて
いた）にいたっては、誰もが目を見張る変貌を遂げた！アインズやさっちゃんの素人目か
ら見ても分かりすぎる程だった。

但し、時折見計らったかの様に的確に？ちよつとした——笑って済ませられるレベル
のミスをする事から、創造主の設定による影響の強さを再認識する事になった。

アインズとさっちゃんは知らなかった事だが、ユグドラシルにおいてメイドという職業
には「レベルアップとともに、メイドとしての家事能力も上昇する」という、単なるフ
レーバーとしての設定があつた為である。そのテキストには「レベル5ともなれば、王
侯貴族の使用人として引く手数多。最高レベルまで達したなら、その統率力で部下にも
絶大な影響を与える。」という一文もあつた。多分ナザリックの生活方面が、転移後に機
能していたのはペストーニヤのおかげだろう。

この結果により「一般メイドキャリアアップ計画」は一般メイド全員と、おまけのプ
レアデス6姉妹に実施される事になり、最終的にはレベルを200以上、ナザリック地
下大墳墓のNPC製作可能レベルの残り半分ちかくを投入しての大プロジェクトに
なった。

る王国戦士長ガゼフ・ストロノーフが逗留しているが、そのガゼフとの応対を部下に丸投げしてまで、彼自身が相手をする人物こそアインズの命令で派遣された「さつちんと愉快な御供達」であつた。

「セバスきーン、今日の予定はどうなっているの？」

「今日はエ・ランテル冒険者組合へ行き、組合長のプルトン・アインザック氏と面会し、冒険者の斡旋をしていただく予定になっております。」

アインズは当初、自分が何を何名か連れて冒険者にもなろうかと考えていた。妹はナザリックで指揮を執っていたら安全であるし、元サラリーマンとして部下に傳かれる生活からの息抜きも考えていた。それに「冒険者」には誰もが憧れをもつだろう。

しかしアルベドがアインズの子を身籠つた事により、ナザリックの指揮を任せられる人材がいなくなる事態となつた。情報収集と防衛の指揮を執るデミウルゴスにこれ以上の負担はかけられず、パンドラズ・アクターは現地の人間・魔法・武技・タレント・アイテム等の多方面に及ぶ研究をさせている。

そうしてアインズが悩んでいるところへ立候補したのがさつちんである。「可愛い子には旅をさせよ」とは言うが、アインズとしては妹にそんな事を許せるはずも無く、申し出を却下したのだつたが、妹はNPC達を言いくるめて、再び兄へ言い寄つた。

究極の妹からの「おねがい」に抗えるNPCはナザリックに存在しない。某上位悪魔が彼女へと奏上した、理路整然とした一部の隙もないカンペを棒読みされたアインズは、主に自分の感情から来る反論の事如くを論破されてしまい、妹の安全にも充分な配慮がされた計画を認めるしかなかった。

そうして決定したナザリック外での任務に就く一行の内訳は、さつちんを始めとして、親衛隊長セバス・チャンをリーダーとしたプレアデス6姉妹。彼らは護衛と身辺の世話、そして対外交渉を任務としている。

さらにさつちん専属護衛として、彼女のペットであるネコのぷーにやんとアルベドの為に召喚された100レベル傭兵NPCからエヌスリーを引き抜いて完成したのが、以前カルネ村へ訪れた時の設定を流用した「お嬢様と御供&護衛の一行」である。さらに影の護衛として、隠密に優れた50体のモンスターからなる一団がフォローとして付く布陣である。

さつちん達の今回の目的は「冒険者のスカウト」である。最初は冒険者に憧れるイメージを持ったアインズも、報告された冒険者の実態がモンスター駆除業者の下請け作業員（基本給ゼロ、各種保険皆無、完全出来高制）というブラックさに呆れはて、かわいいためにそんな事をさせるはずもなく、思いついたのがこの作戦だ。

有力な冒険者を子飼いにする事で、ナザリックの事を表に出さずに活動可能というメ

リットから、この作戦の重要度は高い。よってアインズは現在の實力・実績のみを優先して対象を決定するのではなく、将来性や普段の素行、評判を考慮する事にした。

「1から新人を育てるのも楽しそうだな。ゲームだつていきなり強いキャラを使つても詰らないしな。」

…等とアインズは語つたが、妹の為に複数の100レベルNPCを同行させ、他にも御供全員に神器級という、現地では国宝以上、ユグドラシルプレイヤーですら垂涎のブーツや、ワールドアイテムさえ持たせようとしたりと、チート三昧の男は言う事が違う。結局は伝説級を最高とした装備に落ち着いたが、それすらも冒険者の最高位と言う「アダマンタイト級」の装備を凌駕する品々である。

ちなみにNPC達は各自1つ以上は、自分達の創造主に所縁のあるアイテムを、アインズが手ずから「これで我が妹を守ってくれ。頼む…頼む…」と下賜した事で、非常に恐縮&感激していた。これらの出処は宝物殿とロイヤルスイートの各ギルメン達の私室である。

アインズは転移後に彼らの私室を「皆さん…こんな恥知らずな行為を許して下さい（妹の為に許されますよね）」といいながら、有用なアイテムが無いか家探ししていたりする。かなりのレアアイテムや、死蔵された素材が発見されホクホクであった。

さらにギルメン達が遺した莫大なユグドラシル金貨も、ゲーム時代は「これは彼らか

ら預かっているだけのもの。唯の1枚だろうと使うつもりはない（キリツ）」と言っている。たのが「ち、違う…これは一時的に借りているだけだ。大丈夫、いずれ返す」になっている。

こうして決定された作戦の為、さっちん達はエ・ランテルの冒険者組合へと向かったのだった。

ためてうれしい♪さっちゃんポイント

「お兄ちゃん、私もう寝るから〜。おやすみなさーい。」

「ああ、しつかり休むんだぞ。おやすみ…さっちゃん。」

左手にペットのぷーにやんを抱っこし、右手を一般メイドのデクリメントに引かれたさっちゃんが、円卓の間を後にする。その場に残されたのはアインズ——そしてヴェイクティムとガルガンチュアを除いた階層守護者5名、宝物殿の領域守護者であるパンドラズ・アクター、セバス・チャンとプレアデス6姉妹である。

「さて…ナザリックが誇る最高のNPC達よ。」

非常に威厳に満ちた声で語る支配者に、NPC達の身が引き締まる。

「——私が最も信頼するギルドメンバー達によつて創造された、彼らの分身にも等しいNPC達よ！」

アインズからの絶対的な信頼を感じさせる言葉に、NPC達は歓喜の念を抱き、偉大な支配者からの信頼を絶対に裏切る事はすまいと誓う。

「明日は、いよいよ私が最も愛する妹（貴方の子を身籠ったサキユバスさんは？）である、さっちゃんが冒険に旅立つ。」

先程まで綿密に打ち合わせていた事だ。ナザリックの為に危険を顧みず行動する究極の妹君には、全てのNPCが一層の忠誠心を抱く事になった。

「分かるな？分かってるよな？」

非常に強い口調でアインズは問いかける。

「勿論でございます。先程ご報告しました様に万全の警備態勢を敷いております（デミウルゴス）」

「さっちゃん様に、万が一の事態が発生したおりには、即座に強襲殲滅救出部隊が出動する手筈になっているであります（シャルティア）」

「さっちゃん様ノ警護ニリソースヲ割イタ分、手薄ニナルナザリックノ防衛ハ責任ヲ持ツテコナシテ御覧ニイレマス（コキュートス）」

「ナザリックにある全てのアイテムつ、ワールドアイテムの使用まで御許可頂いた以上、どのような事態となっても対処可能と自負しております！（パンドラ）」

「さっちゃん様が見たがっていた「森の賢王」の所在は確認済みです！（アウラ）」

「ぼ、僕もコキュートスさんのお手伝い頑張ります（マール）」

「さっちゃん様の直掩、身の回りの御世話はお任せ下さい。また不埒者がさっちゃん様に無礼を働かぬ様、関係する人間には厳しく目を光らせます（セバス）」

NPC達は其々に任せられた役目を命に代えても果たす事を宣言する。

「うむ。素晴らしいぞ。お前達であれば私の目的を理解し、失態なくことを運べると強く確信している——だが！」

アインズの全身から凄まじいオーラが吹きあがる。アインズのスキルである「絶望のオーラ」に似ているが、レベルⅠ〜Ⅴまであるどの効果とも異なるそれは「激情のオーラ」とでもいうべきか。激しい感情が抑制されるはずのアンデッドの精神耐性効果すら及ばないそれは、奔流となって部屋を吹き荒れる。

「だがしかし！冒険というものには危険やトラブルは付きものだ。それは私も十分に承知している——それでも！それでも我が妹であれば、例えどんな困難が立ちふさがろうとも、それに打ち勝つ事が出来ると信じている！」

アインズの激白に、NPCの誰も言葉を挟めない。

「我が愛する妹は、必ずや輝かしい成果を携えて、ナザリックに凱旋することだろう!!私 はそれを心待ちにするでしょう。」

「もちろんでございませす!!（NPC全員）」

今回の冒険の行為判定は「クリティカル」以外は許されない。その為ならどんな事（接待・イカサマロール）でもすると宣言したゲームマスター（兄）と、その無茶振りを物ともしないNPC達の事など露知らず、プレイヤー（妹）は惰眠を貪っていた。



エ・ランテル冒険者組合にある待合室。その中でも最も広い部屋に、組合長の名で招集された複数の冒険者チームが集まっていた。銀級冒険者チーム「漆黒の剣」もその中の1チームだ。

「今回の組合長の招集……都市長がらみの案件だつて話だが？エ・ランテル近郊を襲っていた帝国軍と関係があるのだろうか？」

漆黒の剣のリーダーの戦士、ペテル・モークが問いかける。

「そいつはねえだろ。俺達冒険者は国同士の事には不干渉だぜ。噂じやかなり高位の貴族がらみつて話だ。都市長は、今もエ・ランテルで指揮を執ってる王国戦士長をほっぽつて、その貴族サマにつきつきりつて話だ。」

チームのムードメーカーである、レンジャーのルクルト・ボルブが応える。

「焼け出された民がエ・ランテルに避難して来ているというのに……これだから貴族どもは！」

マジックキャスターであるニヤが忌々しそうに呟く。彼女は姉を貴族によつて奪われた過去があり、この国の貴族を憎んでいる。現在は冒険者として力を付け、姉を救う事を目標としている。チームメイトには女である事を隠しているが、メンバーにはば

れていたりする。

「そうでもないのである。その貴族は他国からお忍びで来ていて、村に居合わせたところに襲撃してきた帝国兵を、捕らえて戦士長殿に引き渡した事で、その礼としてエ・ラントルに滞在中という話である。」

「王国の貴族どもには是非見習って欲しいですね。まあ無理でしょうけど。」

「そうそう！その貴族に仕えるメイドがすんげー美人揃いって話だぜ！このチャンスにお近づきになりたいところだー！」

「まったくルクルット…貴族の相手なら、私達のような銀級ではなく、この都市最高のミスリル級が選ばれる可能性が高いです。私たちまでお鉢はまわってこないでしょう。」

「夢見るくらいはいいじゃねーか。それに会って話を聞くだけで金貨10枚だろ？帝国兵のせいで、都市の外への依頼が規制されてるコッチとしてはありがてー話じゃん。」

「糊口を凌ぐのに有り難い話である。」

現在、エ・ラントル冒険者組合に所属している冒険者達へは、近隣を襲撃していた帝国兵の残党とのトラブルを防ぐ為に、組合の許可なく都市外の依頼を受ける事が規制されている。

冒険者としても、好んでバハルス帝国と事を構えたいと思うはずもなく、騒動が落ち着くまで、多くの冒険者達が都市内で燻っている現状で在った。その為、本来は貴族関

連を避けがちな冒険者達も、この「話を聞くだけで金貨10枚」という話には好意的だ。ちなみにこの予算は全てエ・ランテルの予算から支出される。

「それがそうでもないみたいだぜ!？」

漆黒の剣の4人が話していると、他の冒険者が声をかけてくる。

「依頼で都市を離れてる「クラルグラ」以外の「天狼」「虹」のミスリル級チームと幾つかの白金級チームが、依頼を受けてエ・ランテルの北東に発見された遺跡探索に出発したって話だ。すげーお宝が眠ってるらしいぞ！見本として遺跡で発見されたアイテムを見た組合長と魔術師組合長が、あまりの凄さに大騒ぎしたって話だ!」

「遺跡探索ですか？それなら尚更、私達のような下級クラスは御呼びじゃないでしょう?」

「いや、それがな、その貴族様はこの国の事に詳しくないってんで、案内の為の冒険者チームも探してるんだとさ。」

随分と景気のいい…そして怪しい話である。遺跡探索ともなれば事前費用でもかなりの金額が発生すると聞く。遺跡で財宝などが発見できれば、費用の回収も可能だろうが、遺跡の奥で目も眩むような財宝を発見などというのは御伽話の類だ。そしてエ・ランテルの近くに遺跡があつたなど初耳だし、その遺跡の探索を他国の貴族が依頼するのは不自然だろう。

それに案内目的で冒険者を雇うという事は、当然護衛も含まれるはず。それこそ上級冒険者：それほどの貴族ならオリハルコンやアダマンタイト級冒険者に依頼するのはないだろうか？

「それでしたら護衛の為に強いランクの冒険者が選ばれるのでは？」

「いやいや、聞いて驚けよ！ 実は昨日の事なんだが——」

この饒舌な冒険者が語る話は、血生臭い事に慣れているペテル達にとっても、ドン引きせざるを得ない話であった…



「おおー！ここに冒険者組合！雰囲気あるじゃん♪」

セバス、サンちゃん（傭兵NPC）、ルプスレギナ、ソリュシャン、プーにゃん、を連れた私は、都市長さんに連れられて冒険者組合の偉い人に会いに組合へ来ていた。この都市の有力冒険者を紹介して貰う為だ。他の4人は屋敷に残って、都市で情報収集しているデミウルゴスの部下からの報告を聞いている。私達が建物に入って受付へ行こうとすると……

「へっへっへ…すげーべっぴんさんじゃねーかよ。如何だい？こっちでお酌でもしてく

れねーか？何だったらもつとイイ事も…ねーちゃん銀貨何枚だ？」

「プツ…：ウヒヤヒヤヒヤWWW何このテンプレWWWおんなじだ！お兄ちゃんが持つてるラノベとおんなじだ！WWW」

あまりのテンプレクソザコかませキャラの登場に、私が爆笑していたら

バギツ!!ズガン!!ドガツ!!ゴキヤツ!!

あつという間にセバスが瞬殺してしまった…死んでないよね？あつ、ピクピクしてるから大丈夫!？」

「おつきやあああああ!!」

ん？なんかぼさぼさの赤毛の女の人がか叫んでるけど、どうしたんだろ？

「ちよつとあんたらっ！何てことしてくてんのよおっ!？」

どうやらザコー号がぶつ飛ばされたせいで、持つていたポーションが割れてしまったらしい。これはセバスに落ち度が無いともいえない。ザコ2号達は弁償するお金を持つていないようだし、部下のフォローするのも上司の役目だ。ここは私が泥を被ろうじやないか！ポーションくらいならアイテム袋にたんまり持つてる。横暴な印象を持たれちゃわないように下手に下手に…

「お嬢ちゃんも聞いているの？アンタの家来のせいでこうなったんだから…」

「し、失礼しま——」

突然、私の視界が塞がれた！耳も塞がれて何も聞こえない！！このボインボインな感触はソリユシャン??いったい何が??



「それで、ブチ切れたブリタとかいう鉄級冒険者が、そのお嬢さんに喰って掛かったらよ、突然ブリタの右手がスパッと切れ落ちてな!!」

「そ、それはそのお嬢さんの護衛の方の仕業ですか?いくらなんでも、さすがにやり過ぎだと思えますが。」

これにはペテル達もドン引きだ。いくら主人に無礼があつたとしてもやり過ぎだろう。暴力稼業の冒険者なら喧嘩くらいは日常茶飯事だが、街中、それも組合の建物で血を見る事は多くない。

「いや、俺もその場で見てたんだが、誰も何もしちやいなかった!本当にいきなりブリタの手が切れたんだ。」

「魔法とかじゃねーのか? ニニヤなら何か分かるか?」

「魔法が行使されたなら、誰も気づかいはずはないでしょう?」

「おう、うちのチームのマジックキャスターも言ってたな。まるで時間でも止まってる。」

「みたいに、いきなりだったぜ！」

「なんとも不可解で物騒な話である。」

「それでどうなったのであるか？ 最初にちよつかいを出した男はともかく、ブリタという冒険者は災難だったのである。」

「片腕を失っては冒険者としては再起不能だろう。そこまでの大怪我では最初に持っていたポーシヨンがよほど高級——魔法で造られた金貨数十枚以上の最高級品でもなければ、治癒できないはずだ。そんなポーシヨンを鉄級冒険者が所持している可能性は低い。」

「それが、お付きのメイドの一人が聞いた事もねー回復魔法を使って、あつという間に元どおりだよ！」

「そこまでの効果となると、かなりの高位階の信仰系魔法であるな。それこそアダマンタイト級冒険者か高位の神官でもないが無理なのである。」

「王国のアダマンタイト級冒険者には蘇生魔法を行使する者がいる。かのスレイン法にも周辺国家より優れた神官が大勢いるとの話だ。そしてそういった高位魔法は莫大な対価が必要となるので、庶民や下級冒険者には縁のない存在だ。」

「そうしてブリタに向かって「これでポーシヨンの弁償になったっすよね♪」って笑顔で言うんだからよお……」

どうやら今回の依頼主になるかもしれない相手は、かなりの力を（色々な意味で）持っているようだ。興味は湧くがあまり関わりになりたいとも思えないな…とペテルは思うのだった。



「これはこれは…お嬢様！むさ苦しい場所へようこそいらっしゃいました。」

冒険者組合へ到着すると、組合長のアインザックさん自らお出迎えだ！昨日の事は全0でこちらの勝利？一切のお咎めは無しだ！代わりにザコーく5号は冒険者の資格を剥奪のうえで、鉾山に永久就職が決定したそうだ。

私に喰ってかかった女冒険者は銅級へ降格&嚴重注意という事になったそうだ。厳し過ぎない？と思つたが、それでも寛大な処分と言う話だ。治癒魔法の代金を不問とか私には分からない話をしていたが、どういう事だろう。あの後はソリュシャンに目隠し&耳に栓されたまま組合長の部屋まで運ばれちゃったから、どうなったか分からない。

そういえば帰宅後に、王国戦士長のガゼフ・ストロノーフさんという人が訪ねて来た。お兄ちゃんに話があったみたいだけど、不在を伝えて代わりに話をきいた。カルネ村の

件での御礼を伝えられたけど、このオジサンは良い人そうだな。うんプラス1ポイントだね。

例の「陽光聖典」を探しているそうなので「あの人達は(身ぐるみ剥がれて)国へ帰っちゃいましたよ」と伝えたら、ビックリしていた。え?不味かった!?!ごめんなさい!お詫びにもう1ポイント差し上げます。

「組合長さん、今日も宜しくお願いします!」

これから紹介してもらおうのは金・銀級の冒険者だ。これより下は組合でも情報不足で責任が取れないとの事で、紹介はお断りされてしまった。ちなみに昨日紹介されたミスリル&白金級チームはナザリックにご招待だ。レベルも20以下で微妙だったし、有用そうなタレント持ちもいなかったのだから、せいぜいナザリックの糧になってもらう事にした。

あ!もちろん初回はお試しコースだから生きて帰れるよ。お土産も用意してあげる様にお兄ちゃんに頼んであるから。それに味を占めたら……ウケケケ

「まずは改めて昨日の不手際を謝罪いたします。お嬢様に無礼を働いた不届き者達は、2度とこの都市に現れる事はありませんのでご安心を。そして見当違いの言いがかりでご迷惑をおかけしたブリタに寛大な処置を願っていただけばかりか、治療費まで不問にして頂けるとは!」

「——という訳ですが、何か質問などはございますか?」

セバスが「漆黒の剣」に説明しているのを、黙って聞いていた私は「これってもしかして?」と思っていた。あのニニヤって人、マーレ君の逆パターン!?でもどうして??そういう趣味なの?あまりアブノーマルな人はちよつと:マイナス1ポイントかな:と考えていたら

「はい!」質問宜しいでしょうか?」

とても元気な声をあげる男がいた。レンジャーのルクルットという人だ。

「その美しい黒髪のメイドさん!お名前をお聞かせ下さい!あつ、もちろん眼鏡が似合う知的なメイドさんも、アイパッチがお洒落なメイドさん、それに凛々しい女騎士様も!とうぜん可愛らしいお嬢様も美人ですよ!でも貴女に決めました!」

コイツは何をいつているんだ!?!その場にいる1人を除いた全員の視線がルクルットに集中する。

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤww何それ!?パンドラみたいww」

これはプラス1ポイントだ。

「お、お嬢様…」

「も、申し訳ありません。チームの者がご無礼を!ルクルットつ、いい加減にしないか!」

「そうだよねー♪ナーベラルちゃんは美人さんだからね。」

「ナーベラルちゃんという名前なんですネ！惚れました！好きです！お付き合ひして下さいー。」

「だまれ下等生物^{ゲジゲジ}。身のほどをわきまえなさい。」

「厳しいお断りのお言葉ありますがどうぞごいませす！それではお友達ということでお願ひします！俺はルクルット・ボルブと言います。ルクルットと呼んで下さい。」

「この男はおもしろい！おもしろいぞ！さらにプラス1…いや2ポイントだ！」

「殺すぞ。下等生物^{ゴキブリ}。マキシマイズマジック・チェインドラゴン——」

ナーベラルちゃん毒舌！知らなかった！というよりストップ！ストトップ！

「わかりました！それでは貴女のファンとして応援させて下さい！」

そしてこの男めげない！ここまで女性に積極的とは、どこかの骸骨とは違う！さらに1ポイント！

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤWWWナーベラルちゃん、ファンは大事にしないとダメだよ。式炎雷さんも自分のファンにはサービスしてたんだから。」

ナーベラルの創造主である式式炎雷さん。忍者プレイにハマっていたあの人は有名人で、他のゲームでも忍者キャラをしようしていた。超巨大な忍刀「素戔嗚（スサノオ）」による超火力と隠密特化の紙装甲。そのロマン溢れるプレイに多くのファンが付いて

いた。

「なっ!? 式式炎雷様がつ! そ、それでは…いや、しかし…ぐぬぬぬぬ。」

「ゴホンゴホン! それでは他に、依頼についての質問はございませんでしようか?」

「はいはい! ニニヤさんはどうして男の格好をしてるんですようか? 私すつごく気になります!」

「そうだ、この勢いにつけて聞いてしまえ!

「なっ?」

「は?」

「??」

「えっ?」

「あちゃー…」

この後、色々あったけど「漆黒の剣」との雇用契約は無事に締結されました。ニニヤさんのマイナスポイントも取消されました。

メイドNの受難

「それでは明日の朝にカルネ村へ向けて出発。道中で野営を1日はさんで、カルネ村到着後はトブの大森林へ向かう、という事で宜しいですね。あちらでの滞在は1〜2日を予定、現地で改めて相談という事で。」

「先程も伝えましたが、必要な資材、食糧については全額経費として計上しますので、くれぐれも不足が無い様お願いします。予算はお渡した金貨100枚で足りますね?」

「こんなにあつぷりと前金を貰えるとは!さすがナーベラルちゃんのご主人様だ。気がいいねえ♪」

ピキピキピキピキ…

さすがセバス。テキパキと話を進めている。うん、このままお任せでよさそうだ。そしてナーベラル笑顔!笑顔!

「ルクルツト!これは必要経費として頂いたんだぞ。俺達が好きに使えるお金じゃないぞー!」

「これは今後の活動にも使って頂きますので、余った予算はそのままお持ち下さい。もちろん予算が不足するようでしたら、お知らせいただければ都合しますのでご安心を。」

「ありがとうございます。もちろん使った分についてはキチンと報告しますので。何でしたら、そちらから人を出して我々を見張ってもらっても構いませんよ。万が一にも持ち逃げなんてないように。」

うんうん、信用できそうなパーティーで何よりだ。

「ハイハイツ！監視役はナーベラルさんがいいと思います！俺の事をもっとよく知ってほしいので！」

ブルブルブルブル：

こうして無事に段取りを終えた私たちは解散する事にした。既に組合長さんには、残りのチームに用が無くなった事を伝えてある。まあ金貨10枚は払ったんだから文句ないよね。今後の活躍をお祈りするでしょう。この後、私たちは組合長さんに挨拶して帰宅。漆黒の件は冒険に必要な買出しだ。冒険者の買物物はちよつと気になるかも？

「お願いしますっ！どうしてもカルネ村へ行きたいんです。あの村には僕の大事な人が住んでいるんです。」

「ですが現在、バハルス帝国兵の事が解決するまで、都市の外へ出ることは禁止されています。王国戦士長様からも安全の保証が出来ないと——これは冒険者も同様で、特別な理由が無い限りは都市外での依頼は凍結中なんです。」

「そこを何とかお願いできませんか!?報酬も僕に用意出来るだけ払いますから！」

「おや？なにか揉めているみたいだぞ。金髪の少年が受付のお姉さんに喰い下がっている。」

「あー、そういえばそうだったな。こんな状況じゃ仕方ないわな。」

「うむ。帝国兵がまだ近辺に残っている可能性があるのですが、本来は都市の外へは出れないのである。」

「その村に大切な人が住んでると言っていたけど、無事だといいですね。」

「んん？カルネ村といえは……」

「あの少年はインフィーレア・バレアレさん。エ・ランテル最高のポーシオン職人であるリイジー・バレアレ氏のお孫さんで、彼自身も優秀な錬金術師です。また非常にレアなタレントの持ち主としても有名ですね。ご存じでしたか？」

「ペテル君！的確な説明にポイントだ。彼はけっこう拾い物かもしれない。しかしインフィーレア……聞いたことあるぞ。たしか「あらゆるマジックアイテムを使用可能」という凄いタレント持ちで、ナザリックでも要注意とされていた人物だ。それに錬金術師……ポーシオン職人？といえは……おやおやおや！これはこれは……ウケケケケ」

「そこのお兄さん、カルネ村に行きたいみたいだけど、私達も明日からカルネ村へ行く事になっているんだよねえ。」

「ええっ！本当ですか？そ、それなら僕も連れて行って貰えませんか？もちろんタダで

とは言いません。それに僕は第二位階魔法まで使えますから旅の足手まといにはなりません！ですのでどうかつ！」

すごい喰いつきだ。これはレアタレント持ちと仲良くなるチャンスゲット♪

「まあまあ落ち着いて。とりあえず上の部屋でお話ししようか？自己紹介でもしてさ〜。」

「あつ、そうですね。取り乱してすみません。ほ、私はンフィーレア・バレアレといいます。」

「うんうん、君の事は知ってるよ。あの娘からよく聞いてるからね♪」

カルネ村へお出かけした時に知り合ったエモット姉妹。この世界で知り合った初めての同年代？という事で、けっこう仲良くなったのだ。姉のエンリにはお近づきの印でプレゼントもしたし、ネムちゃんには同じ妹としんパシーを感じる。

そしてネムちゃんからは、エンリに会いに定期的にカルネ村を訪れる錬金術師の少年（ヘタレ）の事は聞いていた。エンリ自身は全くそういった気持ちはないそうだけ（笑）

ンフィーレア君にカルネ村とエモット姉妹の無事を伝えたらとても安心していた。「近隣の村は全滅したらしい」という噂と、実際に避難して来た人達を見て気が無かったみたいだ。そして私達がカルネ村を救った善意の貴族（笑）と知って、とても恐

縮&感謝していた。それでも直接カルネ村へ行って無事を確認して、丁度いいのでトプの大森林で薬草採取、そしてあわよくば今度こそ（今年3回目の挑戦）告白したいという事なので私達と同行する事になった。頑張れンフィーレア！



「んでペテル、今回の依頼…というかお嬢様御一行をどう思う？」

「組合長の態度で分かるでしょう？おそらくは都市長も同様ですね。かなり高位の貴族でしょう。」

「買出しを終えた漆黒の剣は、宿屋に戻り今日の出来事を相談していた。」

「変わったお嬢様でしたね。執事やメイドの方はそれらしかったですけど。」

「いきなりニニヤに「なんで男の格好してるんですか？」だもんな。こっちはずっと気付いてない振りをしていたってのに…」

「あ、あれは!?!いや、その事は悪かったと思います。皆を疑っていた訳でないんです！・本当に！」

「大丈夫なのである。皆、納得して黙っていたのである。」

「こっちから理由なんて聞かねえ。でも話ならいつでも聞かぬ。仲間だからな。」

「あ、ありがとうございます。いずれ気持ちの整理をしてお話しますから、もう少し待って下さい。」

「私たちはチームですからね。何かあれば相談して下さい。」

「どうやら雇い主の問題発言による、チームの人間関係への影響は問題ない様だ。」

「それにしてもナーベラルちゃんのキツイ事！さすがの俺もめげるよな。」

「あれはルクルットが悪いと思います。その…女性視点で見ても当然だと思います！」

「言うじゃないかニニヤ！まあ明日以降で挽回してみせるさ。」

「見込みは無いと思いますけどね。仮にも雇い主の使用人なのですから、怒らせたりしないで下さい。それより執事の男性と、護衛の女騎士の方はどう思います？かなりの達人と見受けられましたか？」

チームの前衛としては、同じ戦士職（自分より遥かに格上）に興味を湧いた様だ。

「レンジャーとしての意見だが、メイドのお姉さま方含めて、動きや姿勢に全然隙がなかった。ありやかなりヤバイ感じがした。」

「今日は来ていなかったが、同じ神官職だというメイドが気になるのである。あとネコが可愛かったのである。」

「ナーベラルさんもかなりのマジックキャスターだと思いますね。僕なんかよりずっと上の。」

メンバーが其々の職の視点から感じたものを述べる。銀級といえどもプロの冒険者だ。見るべきところは押さえている。

「まあ雇い主のお嬢様は、気さくでノリもよくつて金払いは最高♪職場には綺麗な花がたんまり♪俺としては言う事なしだ。」

「執事殿は誠実そうな人柄が伺える御仁だったのである。女性については分からないのである。」

「お嬢様さまはちよつと変わったところがありましたけど……それでも素晴らしい人だと思います。この国の貴族どもなんかとは比べられないくらいに……」

「とにかく！他のチームを差し置いて我々を選んで頂いたので、その期待に応えられるよう全力を尽くしますよ！」

そんな漆黒の剣の面々を、影の中からじつと伺う姿があった。

「——以上がシャドウデーモンからの報告になります。まったく、ガガンボ下等生物の分際です。さつちん様を評価する等おこがましい……多少の見る目はある様ですが。」

「ふーん……ただのチャラ男じゃないんだ。他のメンバーもいい人そうだし……あとは実力がどの位あるのか、かな？」

「私としても彼らには好感を覚えました。残念ながら実力は甚だ不足していますが……」

都市長の邸宅に用意された部屋で、さつちん達はシャドウデーモンからの報告を聞き

ていた。すでに漆黒の剣達は彼らの監視下に置かれている。シャドウデーモンはナザリック基準ではザコモンスターだが、この世界でならミスリルくオリハルコン級冒険者でなければ、まともに戦えないモンスターだ。銀級冒険者の彼らが監視に気付く事は無い。

窓際に《ゲート／転移門》が展開される。あらかじめ知らされていた事なので、動じる者はいない。

「お待たせしんした、さっちゃん様。シャルティア・ブラッドフォールン愛しき御身の前に♥」

「シャルティア〜♪いらっしや〜い。」

さっちゃんは両手を拡げてシャルティアを出迎える。そして2人の少女は部屋の中央で抱き合いながら再開を喜びあう。

「御使いなんて頼んじやってゴメンネ。ありがと〜。」

「とんでもありません！さっちゃん様の為でしたらこのシャルティア・ブラッドフォールン、どの様な事であろうと喜んで！（クンカクンカスーハースーハーサワサワサワ）」

「ちよつ…くすぐつたいよシャルティア〜。」

さっちゃんとシャルティアはとても仲が良い。それこそアインズが変な心配をしてし

まう位には。彼女の創造主ペロロンチーノがさっちゃんを紳士的に可愛がっていた影響もあるのだろう。アインズ以外のギルメンでさっちゃんと一番仲が良かった彼の意思をシャルティアは受け継いでいるのだろう、若干邪な想いも混じっているかもしれないが……

さっちゃんは最後発で最年少のギルドメンバーだった事もあり、自分を他のメンバーより下に置いて遠慮していた部分があった。その事もあつてか、メンバーの創ったNPCにも似た感情を持っていて、謙ったりする事はないが、一部を除いてNPC達を呼び捨てにはせず「くさん」「く君」などの呼び方をしていて、転移後はNPC達が恐縮していたが、アインズが「妹なりの親愛表現だ」と語った事で事態を落ち着かせた。

しかしシャルティアだけは、ユグドラシル時代にペロロンチーノに「俺が考えた最高のキャラだ。可愛がってあげてくれ」と言われて、一緒にコスプレを楽しんだり関わりが深かったので、遠慮を感じたりせず気軽に名前を呼んでいた。

「シャルティア様、さっちゃん様にたいして少々馴れ馴れしく接し過ぎではないでしょうか？手の動きも怪しいのですが……」

「あの……シャルティア様、お顔の表情が……（とても乙女がしてはいけないものに……）」

「ん？シャルティアがどうかしたの？」

「オホホホ……き、気にしないでほしいであります。」

ちなみに転移後は急速に仲を深めており、「一緒にお風呂」「部屋に呼ばれて添い寝」等のイベントをクリア済みで、某骸骨に完全勝利を決めた統括守護者に匹敵する戦果を挙げている。もちろん清い？関係であり、シャルティアの弁によれば「コンシューマー版（全年齢対象）でありんす」だ。もし万が一、可愛い妹に尻尾が1本増える様な事態になれば、ギルメン達の装備を身に着けた大魔王が降臨する事態になる事は言うまでも無い。

「そ、そんな事よりもさっちゃん様、アインズ様からお預りした「ワールドスカウター」であります。ワールドアイテムなのでくれぐれも取扱いには注意して欲しいと、アインズ様が仰っていたであります。」

「うんうん分かっているよー！これさえあればバツチリ。お兄ちゃんよろしくねー！」

アインズ・ウール・ゴウンが所有するワールドアイテムのひとつである「ワールドスカウター」は、相手の全ステータス、習得スキル・魔法、装備品・所持アイテムの情報を看破するという、鬼の様な性能を持つアイテムである。こんな物をPVPで使われれば、情報は相手に丸見えで、欺瞞情報を掴ませる事も不可能だ。

これを使用したアインズのPVPの勝率は9割を超える。たっち・みーやウルベルトの様なワールドチャンピオン級の実力で、ゴリ押し可能なプレイヤーでもない限り勝てないだろう。

「それじゃあ私はもう寝る事にするね。セバスさんとナーベラルちゃんも早めに休んでね。それじゃシャルティアばいばい。」

さっちゃんが退室した後で、セバス達は細かい報告をしたり、今後の確認をする。一通りの相談が終わった後で、改めてセバスがシャルティアに苦言を呈する。

「改めて申し上げますが、さっちゃん様への態度が少々礼を失しているのではないのでしょうか？アインズ様より、さっちゃん様へ不埒な行為をする者は、誰であろうと容赦はするなど仰せつかっておりますので——」

「あ、あ？セバスさま……もう一回言ってくれない？それとも……竜人であるあなたがその形態で——」

セバスの言葉を遮ったシャルティアから凄まじい殺気が溢れだす。三日月になった口からは2本の牙が飛び出し、真っ赤に染まった瞳がセバスを睨みつける。

「戦えるとは思っておりません。です……」

そのシャルティアの言葉を遮ったセバスも凄まじい殺気を漲らせる。ゴゴゴゴ……という地響きのような音とともに、セバスの全身が隆起していく。床に映っている影は人間の形ではない。

両名共が肉弾戦を得意とする最強の100レベルNPCだ。その凄まじい殺気と敵意が部屋を渦巻くが、隣室で休むさっちゃんの睡眠を妨げる事が絶対に無いように、その

範囲は限定されている。しかし2人の側に控えていたナーベラル・ガンマは2人分のそれに晒されてしまい……

チヨロロロ……ドサリツ（以下N氏のプライバシー保護の為、描写をカット）

ナーベラルの捨て身の行為？によって、2人は冷静さを取り戻す。

「礼を失しているつもりはないであります。」

「とてもそうとは思えません？」

「そもそも我が創造主であるペロロンチーノ様とアインズ様は義兄弟の契りを交わした間柄。ペロロンチーノ様はアインズ様のことを「お兄様」と呼びんでいたであります。」

「なんと!?御二方にそのような御関係が？」

アインズはその様な関係を認めた事は一度たりともない。ペロロンチーノが勝手に言っていただけだ。

「ペロロンチーノ様は「俺の事はもう一人のお兄ちゃんだと思ってくれ」とさっちゃん様に仰っていらしたし、さっちゃん様もペロロンチーノ様を慕っていたであります。」

だからといってシャルティアの行為が正当化される訳ではないはずだ。

「そしてペロロンチーノ様は、さっちゃん様の空中戦の師匠であります。わらわもペロロンチーノ様より薫陶を受けた身。つまり私たちは姉妹弟子とも言うべき間柄であります。」

す。あれくらいはスキンシップというやつでありんすよ。」

「おお！そうでしたか、これは何という勘違いを。ですがシャルティア様の行いが少々行き過ぎているのも事実では？親しき仲にも礼儀ありと申します。あまりスキンシップが過ぎる様ですとアインズ様へご報告しなければならぬと考えますが。」

「くうううう…：わかつたでありんすつ！あ・り・ん・す！」

さすがにアインズの名前を出されれば引かざるを得ない。100レベルNPC同士のぶつかり合いは、セバスに軍配があがったようだ。



「リーダーっ、もう駄目だ！」

「クソッ、なんて装甲だ!?武器でのダメージが殆ど通らない！」

「もう魔力が切れた。何とかしてくれ！」

さっちゃん達がエ・ランテルで過ごしている一方、ナザリックに控えていたアインズは「招待客」の相手をしていた。

「これで最後のチーム——ミスリル級だという「天狼」も全滅か…：チームワークはそこそこだったが、圧倒的に実力が不足しているな。コキュートスよ、お前の目から見て何

「か見るべき点があったか？」

「特二見ルベキ点ハ御座イマセンデシタ。私ガ出ルマデモアリマセン。」

もし目に叶う様なチームがあれば、コキユートス直々に第六階層で相手をする手筈であったが、残念ながら彼が認めるほどの輝きを魅せる戦士はいなかった。

「まあエ・ランテルにはミスリル級より上の冒険者はいないという話だからな。もう1チームだけミスリル級チームがいるらしいが、この様子では期待できそうにないな。やはり最高位のアダマンタイト級を見てみたいが……まあしかたあるまい。」

これでさつちんの依頼を受けた冒険者チームは全滅してしまったわけだが、彼らは死んでしまった訳ではない。あくまでも「お試し」なので、殺してしまわない様に通達されていた。倒された冒険者達は回復魔法で治療を施された後で、入口の近くにある部屋へ転送される事になる。

「うーん……今回のチームは火力不足が目立ったな。」

「確力ニ。モウ少シ程度ノ良イ武器ヲ使エバ、多少ハマシニナルデシヨウ。」

「そうだな。残念賞はオリハルコン製武器を全員分でいいな。こいつらが使っていたのと同じ武器、剣×2・槍・弓・メイスを見繕ってやれ。品質は最低限でもかまわん。それでもこいつらにとっては充分だ。」

「ハッ、仰セノママニ。」

なんと！今回の参加者にはもれなくナザリック謹製オリハルコン武器が進呈される事になっている。この地へ転移してからナザリックの鍛冶NPCに造らせていた品々だ。この程度の武器は第八階層の鉱山から採掘される金属が余り気味なので丁度良かったという事情があった。

無論、このようなサービスは今回限りである。彼らがこの「お土産」を持ち帰って、他の冒険者に自慢してくれれば、ナザリックへのチャレンジャーが増えるだろうという見込みだ。

彼らが目を覚ました後、何故か目の前に置かれた宝箱に入っていた、これらのアイテムを見て驚愕する事になる。喜び勇んでエ・ランテルへ帰還した彼らは、雇用主へ成果を報告した際に「残念賞だね。もう少し頑張りましょうってところかな」と言われ、腑に落ちない思いをする事となるが、持ち帰ったアイテムは全て自分達の物としてよいと言われ大喜びした。※通常は取り決めが無い場合は、遺跡で発見された財宝は依頼主に優先権がある。

こうして強力なアイテムと報酬を手にした彼らの成功譚は、エ・ランテルの冒険者にとって大いに刺激となり、彼らを新たに発見された「謎の墳墓」へと駆り立てる事になった。そしてこの墳墓の情報は急速に王国と周辺諸国にも拡まって行く事となる。

野營（ナザリツク基準）

今日はカルネ村へ向けて出発だ。同行者は漆黒の剣4人とンフィーレア君。都市長の屋敷で朝ごはんを食べていたら、彼らが到着したと報告が来た。

「おはようございます。私達の準備は完了していますので、何時でも出発できます。」

「僕の方も大丈夫です。無理を言って同行させていただくうえ、馬車にまで同乗させていただけで感謝します。」

ンフィーレアはじつくりと調べたいので、私達の馬車に乗って貰う事にした。漆黒の剣達は大変だけど頑張つて歩いて貰おう。そう思っていたんだけど…

「何か荷物が多くない？大丈夫？」

漆黒の剣達は、それぞれが荷物をたくさん背負っている。あのままでは戦いの時にすぐ動けないんじゃないかな？

「さっちゃん様、彼らの荷物はこちらの馬車でお預りしますから問題ありません。」

「お世話になります。普段は銅級冒険者をポーター（荷物持ち）として雇ったりするんですが、ユリさんから野營道具などはそちらで運搬していただけると申し出ていただきまして、御好意に甘えさせていただきます。」

ふーん、ポーターなんて仕事もあるんだ。これはパーティーメンバーが決まっている新人がよくやる仕事で、冒険者として最低限の体力さえあれば、特に有用なスキルな魔法が使えなくても問題無いので、コネや才能の無い新人はポーターとして他のチームに雇われる事で、冒険者としての知識を学んだり、顔売ったりするそうだ。

ちなみに希少なマジックキヤスターや有用なスキル・タレント持ちなら、逆にスカウトの対象になるので、ニニヤは当時は3人で活動していた漆黒の剣（当時はチーム名は無かった）に、なかなかの高待遇で迎えられたらしい。

「もう少し貯金が出来たら、私たちもマジックバッグを購入する予定です。ンフィーレアさんはマジックバッグをお持ちのようですね？」

ンフィーレアの荷物はシオルダーバッグひとつ。これに色々と荷物が入っていて、さらには採取した薬草類も入れられる位の容量があるそうだ。

「マジックバッグは高価ですからね。容量が小さめでも金貨100枚以上はしますから。これは祖母から貰った品なんです。」

駆けだし冒険者は大変だね。ユグドラシルなら最初からアイテムボックスがあったから、そんな苦労はなかったよ。

「そうだ！イイものがあるんだけど使ってみない？」

私はアイテムボックスから丸いカプセルを取り出した。真ん中で色が分かれていて、

カパッと開くアレだ。

「何でしょうか？丸いボールのようですが…」

これはお兄ちゃんがギフトの力で毎朝回している課金ガチャのカプセルだ。大きさは手のひらに乗るサイズだけど、中にはどんな大きなアイテムでも入れられる。ユグドラシルではこの中から巨大なドラゴンや家が一軒出てくる事もある。

つまり1種類1個に限り容量無制限でアイテムを入れる事が出来るのだ。ゲームではカプセルを開けたら消滅していたけど、この世界ではそのまま残っている。毎朝ハズレアイテムを入手しているお兄ちゃんが、捨てずに取っておいたのを貰った物だ。

「こうやってカパッと開いて中にアイテムを入れると——」

実際に見せてあげたらとても驚いていた。10個もあるからプレゼントしてあげよう。どうせ毎日増えるし。

「こんな便利なアイテムを頂いてありがとうございます。ありがたく使わせて頂きます。」

「こりや便利だな！嵩張る荷物も簡単に持ち歩けるぜ！」

「かなり身軽になったのである。荷物が大幅に減らせるのである。」

「半分透明になっているので、中身が確認出来るのも素晴らしいですね。」

「1種類1個しか入れられないけどね。ンフィーレア君もどう？」

「ナーちゃん昨日からヘンつすよ。どうしたんスか？」

「ウフフ…ナーベラルはねえ、昨日の夜…ゴニヨゴニヨ」

「うわー、それはひどい。」

「エントマああく、黙っていてと言ったのにいい！」

ん？昨日の夜に何かあったのかな？失敗でもしちやった？おや、そうこう言っている間にモンスターを倒したようだ。

「オーガ2体、ゴブリン10体の討伐を完了しました。これより討伐部位を回収するので、もうしばらくお待ちください。」

「ふーん、モンスターの一部を組合に提出するとお金が貰えるんだ。」

「これが冒険者の主な収入源なんです。数年前にこの国の第三王女様の発案で始まった制度なんです。治安が良くなり、移動も安全で活発になり経済面でもプラス。冒険者も仕事に困らないと、大変に優れた制度なんです。いまでは周辺の国でも行なわれています。」

ほほう、うまい事を考え付く人がいるんだね。この国はブラック・オブ・ブラックだとお兄ちゃんが言っていたけど、そんな人もいるのか。「黄金」とよばれるお姫様で、画期的な施策を次々と発表してはポツにされているらしいので、めげずに頑張つてほしいものだ。

その後何回かモンスターに遭遇した。ここ数日は冒険者が間引きをしてない所為で、いつもより数が多いそうだ。漆黒の剣だけに戦わせるのもどうかと思ったので、プレアデスチームと交代で戦闘している。

プレアデスには「やっておしまい！」の一言で充分だ。彼女達の素晴らしいチームワークと圧倒的戦力に漆黒の剣とソフィーレアはとても驚いていた。彼らは私の方が彼女たち全員より強いと知ったらどう思うのかな？



そろそろお昼にしようかなと思うたので、馬車を停めて準備をして貰おうとしたら驚かれた。この世界の野外移動では朝食を多めに取って、日中は水分補給と軽く食べられる保存食くらいしか摂らないそうだ。モンスターや盗賊などの危険が多いので、比較的安全な日中は移動に専念するのだ。

でも私達には関係ない。この世界に来て食事の楽しさにハマった私にとっては、昼食を抜くなんてとんでもない！依頼主権限で強制昼食の時間だ。せっかくだから君達も御同伴するがよい！

さっそくプレアデス達が準備に取り掛かる。彼女達は新たに付与されたメイドの職

業レベルのおかげで料理スキルもバッチリだ。今日のメニューはバーベキュー、野外で食べるのにピッタリだ。

さつそく焼きあがった串をソリュシャンが渡してくれた。お肉と野菜が交互に刺さっていてとつても美味しそう！アムアム——美味しい♪エ・ランテルの食事も、都市長さんが最高の食材と料理人を手配してくれただけあって、とても美味しかったんだけど、やっぱりナザリックの料理とは比べものにならない。ナザリックは食材も調理人もゴツズ級だからね。

「食べないの？美味しいよ。あつ！やり方わかんない？」

私達はそれぞれ手にした串焼きを味わっていたが、漆黒の剣とンファイアは口を開けたままポカーンとしていた。

「この料理はお好みの食材を串に刺して、このコンロで焼くだけです、皆さんも自由どうぞ。こちらに調味料も用意してありますよ。」

ユリの説明で彼らもバーベキューに参加し出した。

「シズちゃん、次は海鮮でお願ーい。野菜はパスで。」

「わかった。でも野菜もちゃんと食べないとダメ。とうもろこしをつける。」

私は調理スキルがないので、こうして食べたい物を彼女達にリクエストしている。ちなみにセバス、ぷーにゃん、サンちゃんも食べる専門。ぷーにゃんはバーベキューとい

うより焼肉かな？

スキルが無いと「肉を焼く」ことすら出来ないのには困っている。以前、第六階層でバーベキューをした時もそうだった。食材を串に刺すとかの下ごしらえまでは出来たのに、実際に調理（焼く）しようとするとも身体が金縛りにあったように固まって、気が付けば真つ黒焦げの串焼きになっていた。

これはアイテムにも同じ事が言えて、例えば装備出来ない鎧を「身に着ける」のはOKだけど、着たままで行動が不能になる。武器も「持つ」のは問題ないのに、それで何かを攻撃しようとする、やっぱり身体が金縛りにあったように固まって、武器を落としてしまう。知識があつて、やり方も分かる事が出来ないのは何かモニヨモニヨする。うくん、クソ仕様？パッチ対応を要求したいものだ。

もし私達兄妹がナザリック地下大墳墓無しで転移していたら大変だったかも？アンデッドで飲食不要だったお兄ちゃんとはともかく、私は調理スキルがないから食事が必要でも自分で料理が出来なければ、買ってくるか誰かに作って貰うしかない訳で、生活の為には現地人から略奪する悪の兄妹ルート一直線（現状も大して変わらない模様）だったかもしれない。

そして漆黒の剣とンファイレアは普通にバーベキューをしているので、全員が調理スキル持ちという事になるのだが——彼らのスキルを確認した時に調理スキルを所持し

ていないのを確認している。ンファイレアとダインが調合スキルを持っていたが調理とは関係ない。というか調合スキルなら私も持っている。やはり現地人との差異が色々あるみたいだ。

「いやあ、本当に美味しいですよ！こんなに美味しいものを食べたのは初めてですよ！」

「いったい何の肉なのでしょう？かなり高級な食材だと思うのですが……」

ンファイレアとペテルが食材の味と値段について話している。

「こちらはフロストドラゴンの胸肉、こちらがレインボーロボスター、こちら——」

「フロストドラゴン!?アゼルリシア山脈に生息しているという、あのフロストドラゴン!?!」

「おいおいマジかよ……フロストドラゴンって難度幾つだよ!?あと金貨何枚するんだ?」

ユリの説明にみんなめちやくちや驚いている。やはりこの世界でもドラゴンという種族は別格らしい。そしてアゼルリシア山脈という場所にフロストドラゴンが住んでいるという情報は初めて聞いた。

「難度というのは冒険者組合が使用している、モンスターの強さを測る数字ですね。今日の食材は全て難度150以上の食材が使われていますね。値段に関しては、全て主人より与えられた品物ですので返答いたしかねます。」

「ア…ハ…ハ…ハ…」

ナザリックの料理に満足してくれたようで何よりだ。そして食事をいっしょにした事で思わぬ情報も手に入った。やはりこういったコミュニケーションは大事だね。



昼食後しばらくは休憩時間だ。ちょうどいい機会なのでンファイレアとポーシオンについての話をした。彼のお婆ちゃんもエ・ランテル最高の——周辺国家でも有数のポーシオン職人だ。ユグドラシルとは見た目も効果も異なる、この世界のポーシオンについて聞いてみよう。そう思ってたまずは自分で作成した下級ポーシオンを試しに見せてみた。

「げええええっ！このポーシオンの色はっ!?まさか伝説にある「神の血」なのか?いいつたい何処で手に入れたんですか?」

「へ?私が調査した下級ポーシオンだけど…」

何でそんなに驚いているんだろう?見た目は違うけど効果は大したことない——HPを50だけ回復させるといふものだ。この世界でもこれくらいの効果のポーシオンは作れるはずだ。

「貴女が調査したですって！こ、このポーシオンを？それはどんな材料や調査方法なんですかつつ!？」

「ちよ、落ち着いて！落ち着いてつたら！」

ヒュツ——ドスツ——ボタンキユ……ンファイレアの剣幕に、ソリュシャンから制止がかかった。簀巻きにされた後で目を覚ましたンファイレアと話を再開する。

「た、大変失礼しました。申し訳ありませんでした。」

「落ち着いてくれたのならいいけどね。それでポーシオンの作り方だっけ？」

「そうです。まったく未知のポーシオンを見て興奮して取り乱してしまいました。それで……あのポーシオンの材料や調査方法が気になってしまいました……」

それならちょうどいい。情報交換という事でお互いの知っている作成方法を話し合おう。

「このポーシオンはゾリエ溶液がグワツに、リUNKXスストーンをズバツとして、ヴィーヴルの竜石をギユインギユインで、黄金の秘薬をポポポーンで、《ライト・ヒーリング／軽傷治癒》でテーレツテレー♪なだけだよ。」

「???……聞いた事の無い材料と調査手順ですね。ぼ、私の祖母であれば何か分かるかも
しれませんが……」

これはさっちゃんがテキトーな説明をした訳ではない。彼女自身はポーシオン作成に

必要な材料だけをゲームでの知識で知っているだけ。実際の調査はスキルで無意識に行っているにすぎない。それこそ「息をする」「歩く」というレベルでだ。それを言葉で説明すると、この世界の言語では先程の様に翻訳されて聞こえるのだ。

この世界にある謎の翻訳機能は、かなり微妙な性能のようで「プレイヤー」が「ぷれいやー」は、まだいいとして「ルービックキューブ」が「ルビクキュー」とか「傾城傾国」が「ケイ・セケ・コウク」になっていたりする。

そういつた理由でさつちん流ポーション作成術は、ンファイレアにとって「未知の材料を使用した非常に高度な調査を求められる超希少ポーション」という認識となるのだった。

「それじゃあンファイレアが作るポーションについて教えてよー！」

「わかりました。まずは僕達が作成するポーションには3種類ありまして——」

さつちんにとってンファイレアの説明はとても詳細で分かり易かった。それはリイジー・バレアレから秘伝として伝授されている事柄にまで及んでいたが、彼としては「さつちん流ポーション作成術」に対する対価として当然どころか、不足だと考えている。

リイジー・バレアレ秘伝の調査レシピの暴露など、本人が知れば如何に孫に甘い彼女でも激怒するに違いないが、「神の血」の衝撃で冷静さを失っているンファイレアはそこ

まで考え付かなかった。

自分より遥かに優れているだろう職人（さっちゃんをそう思っている）に、少しでも認めて欲しくて、自分が知っている限りの事をひたすら語り続ける。

こうしてインフィーレアに説明されたこの世界のポジション、主に薬草を材料にしたポーション作成は彼女にとっても興味深く、エ・ランテル帰還後に改めて彼の祖母も交えて話し合う事が決定された。



「なあ…あれって野営用なんだよな？」

「そう言っていましたね。用があれば呼び鈴を鳴らして欲しいと…」

街道から少し外れた場所に20メートル四方の地面がむき出しになっている一角がある。多くの冒険者や行商人が野営地として使用するスペースで、漆黒の剣とインフィーレアもこの場所を今夜の野営地に使っていた。そして彼らの野営用テントのすぐそばに2階建てのコテージが建っている。さっちゃん一行が寝泊まりするための建物である。

彼らがこの場所に着いたのは、日没にはまだ早い時間だったが、野営に適した場所がここにしかない為、早めの準備に取り掛かった。出発前に依頼主から渡された「はずれ

カプセル」なるマジックアイテムに収納していた野営具を取り出して、慣れた手付きで野営の準備を進めていると、突然目の前に立派な建物が出現した。

依頼主のお嬢様曰く「第八位階魔法の《クリエイト・コテージ／宿泊施設創造》で創ったという事だが、続けて「お兄ちゃんの《クリエイト・フォートレス／要塞創造》ならお城が出せるけどね」という言葉が聞こえた時点で考えるのを放棄した。

「昼に食べた串焼きも美味かったが、ご馳走になった晩飯、めちゃくちゃ美味かったな。エ・ランテルで最高級の宿だっていう「黄金の輝き亭」の飯って、ああいうのが出るんだらうな。」

「アハハハ、いつか私たちもあの宿に泊まれる様な冒険者チームになりたいですね。」

「黄金の輝き亭では何度か食事をした事がありますけど、あそこと比べても今晚の夕食のほうがずっと美味しかったですね。ドラゴンステーキなんて初めて食べましたよ！」

一瞬で現れたコテージをしり目に、彼ら（ンファイレアはコテージに部屋を用意されたが固辞した）が寝る為のテントやモンスターの警戒用トラップの準備を済ませて、夕食の準備に取り掛かろうという時に、依頼主のメイドであるユリ・アルファよりお誘いがあった。

「お嬢様が夕食をご一緒にどうか？とのことです。そちらの準備は未だのようですよ、ぜひおいで下さい。」

建物に入ってみれば、屋内は貴族の屋敷もかくやという造りだった。噂の最高級宿、黄金の輝き亭はこんな感じなのか？とペテル達が驚いていると、ンフイーレアが「いや、こっちの方がずっと豪華ですよ」と教えてくれた。これだからブルジョワは…と少しだけペテルが思っていると、部屋の奥からナーベラル・ガンマがやってきた。

「ようこそいらつしやいました。入浴の準備が整っておりますので、まずは食事の前に汗を流されてはいかがでしょうか？」

誰だコイツは？というのが全員の感想だった。昼間の毒舌は完全に為りを潜め、王城のメイドにも引けを取らないだろうと思える完璧な所作のメイドがそこに居た。

そして案内された浴室（男女別）も素晴しかった。今まで使った事の無い高級な石鹸やシャンプーとその効能に驚く。身体の汚れがみるみる洗い流されていき、肌や髪の毛は見違えるようになった。設備もゆったりとした浴槽に豪華な内装で、王族専用と言われても信じられるものだった。

リ・エステイーズ王国に限らず、大陸にある人間種の国では入浴の習慣は一般的ではない。貴族でも無ければ家に浴室など無く、平民は週に1回ほど公衆浴場に行くだけだ。普段は寝る前に身体や髪を拭く位だし、農村では入浴の設備自体が無い。川で水浴びする程度だ。

冒険者が野外行動をする間などは、水の節約もあるので身体を拭くことすらしない事

が多い。漆黒の剣も当然そうだった。ニヤなどは《ウォツシュ／洗浄》の魔法のスクロールを購入する為に、こつそり貯金していたりする。

さらに入浴を終えてみれば、魔法を使ったのか入浴している間に、下着や衣服だけではなく、鎧等の装備品まで完全に洗浄された状態で整えられていた。

そうしてピカピカになった漆黒の剣とンファイレアが食堂へ着くと、昼間の活動的（それでも高価と分かる服装）な服装とはうって変わった、まさに「ザ・お嬢様」というドレスに身を包んださっちゃんが待っていた。

さらに彼らを驚かせたのが、用意された席は6人分。つまりさっちゃんと漆黒の剣4人、ンファイレアだけの席という事だ。執事のセバス、護衛のエヌスリー、そしてプレアデス6人は彼女の後ろで控えている。

依頼主からの「今の君達はお客様扱いだからね。ようこそ私の晚餐の席へ」という言葉で始まった食事は彼らが体験した事のない豪華で美味なものだった。各自にメイドが付いて食事の世話をされるなど、ンファイレアはともかく漆黒の剣にとっては生れて初めての体験だった。

夢のような夕食を終えた後で、現実と言う名のボロテントに戻った一行は、あまりにも濃厚な一日を振り返りつつも、明日に備えて休むことにした。もちろん野営なので交代で見張りに着くのだが、最初の当番であるペテルとダインが周辺に待機する巨大な

ゴーレムに気付き、コテージに問い合わせると――

「警備用のスターシルバーゴーレムで御座います。彼らの強さはレベル7：オホン、難度200以上ですので安心してお休み下さい。」

と言われて「アーツウデスカ、ソレハドーモ」とテントへ戻る事になった。

ンファイーレアの告白

日の出とともにニニヤがコテージに挨拶に来た。これから朝食の準備を始めるからだ。昨晚の御礼?ということで、朝食は彼らからご馳走して貰う事になっていたのだ。「お嬢様のお口に合うようなものでは……」と言われたが、リアル世界では粗食には慣れていたし、冒険者の食事や、スキルがないはずの彼らの調理過程を見てみたかったからだ。漆黒の剣の4人は慣れた様子で朝食の準備を進めている。昨日の夕食にする予定だった食材を使っているの、朝食としては豪華な内容になるそう。調理スキルを持つプレアデスの目から見ても、料理の手順として問題はないと言っていた。

私が興味深そうに見ているのを察したのか、ニニヤが「冒険者ならこれ位は必須技能ですから」と笑っていた。うーん……スキルに無い事が出来るって不思議——いや現実世界なら知識さえあれば当たり前の事なのかな?もし私がリアルで料理経験があつた場合はどうだったんだろうか?

もちろんリアルの世界でも私は料理なんてした事はなかった。なにせリアルの世界では「料理人」はかなりのエリート職種だった。食材自体が高級品だったからだ。ほとんどの人間は合成食材が原料のチューブ入り流動食や、サプリメントで食事を済ませる

しかなかったのだから、専用アークロジで養殖された食材は超高級品だった。

「なかなか美味しいよコレ！ごろつとしたイモが入っていてイイね！パンも固いけど、スープに浸せば美味しくなるし。」

「アハハ、安心しました。お嬢様が普段食べているような料理とは比べものにならないので、お口に合わないのでは、と不安だったんですよ。」

スキルが無くて、これだけの料理が作れるとは……私もなんとか料理が出来ないものかと考える。そうすれば私の料理をお兄ちゃんにご馳走出来る。喜んでくれるに違いない。私の料理に感激するお兄ちゃん——感激したお兄ちゃんは私のおねだりを何でも聞いてくれる……あんな事やこんな事も！ウケケケケ……これは検討の必要がありそうだ。



ようやくカルネ村が見えてきた。もうしばらくすれば日没、思ったより時間がかかってしまったが、何とか日没前に到着できそうだ。本当はもう少し早く到着出来るはずだったのだが、私がシエスタ（昼寝）したせいでこんな時間になってしまった。昨日と含めて早起きが続いたから仕方ない。

村の周囲に広がる麦畑。村人達が水を撒いたり、草を抜いたり畑の手入れをしているのだが——村人に混じって数体のゴブリンが作業している!?

「な、なあ? あれってゴブリンだよな……」

「ンファイレアさん、このカルネ村はゴブリンと共生しているのですか?」

「いえそんな! この村には何度も訪れていますが、こんなのは僕も初めて見ました!」

「普通に村人に溶け込んでいるのである。」

「ホブゴブリンなどの上位種は知能も高く、一部は人間と関わりをもつ場合もあるとは聞いた事がありますが……」

うーん……このゴブリン達は、間違い無くエンリに渡した「小鬼將軍の角笛」で召喚されたんだと思うけど。こいつら何で農作業なんてしてるの?

「おやンファイレア君ではないか。またトブの大森林への薬草採取で立ち寄ったのかい?」

「村長さん! お久しぶりです。このゴブリン達はいつたい——それよりエンリ、いやカルネ村は大丈夫だったんですね!」

「帝国騎士が集落を襲っていた件だね。幸いカルネ村は、偶然にもこの村に居合わせたアインズ・ウール・ゴウン様のおかげで死者はおるか、1人の怪我人もなかったよ! もちろんエンリも無事だったさ。」

「村長さん久しぶり〜♪」

村長さんなら詳しい事情をしっているはずだ。

「おおっ！さっちゃんお嬢様ではございませんか。あの時は危険に備えて先に避難したと聞いておりましたが、お元気そうで何より。今日はゴウン様はご一緒ではないのですか？」

「お兄ちゃんはお家で待っています。もうすぐ子供が生まれるんです。」

「なんと！それはおめでたい事で！お子様がお生まれになった際は、些少ではあります。がカルネ村からお祝いをさせて頂きますぞ。」

「ありがとうございます。ところでエンリちゃんとネムちゃんは元気ですか？それとこのゴブリンは？」

村長さんの話によると、ゴブリン達はやはりエンリが小鬼將軍の角笛で召喚したものだ。最初はゴブリンに驚いた村人も、私から渡されたアイテムという事で安心してくれたそうだ。

ゴブリン達には村の警備に就いてもらうつもりだったが、幸いカルネ村は平和だった。なので半分は森に入って狩りをする、残りは村人と農作業をしながら万が一に備える事にしたらしい。私としては普通にエンリ達を守ってくれればいいと思つて渡したのに、すごい便利な運用をするものだ。

お兄ちゃんのデスナイトもそうだったけど、召喚モンスターについてもユグドラシルとの違いがあるみたいだ。かなりの自由度がある。「將軍の角笛シリーズ」で召喚されたモンスターは制限時間が無くて、倒されるまで消えないけどレベルアップも装備変更も出来ないし、死んでも復活出来ない。その代り召喚者の能力に因んだ職業レベルがランダムで1だけ付与される。今回は農民のクラスが付与されたのだろう。それにしてもゴブリンに農作業……その発想は無かった！

ちなみに「將軍の角笛シリーズ」には多彩なラインナップがある。ゴブリンの他にも「大鬼將軍の角笛」や「不死者將軍の角笛」、侍と忍者を召喚する「征夷大將軍の角笛」なんて物もあった。超レアアイテムの「竜將軍の角笛」はカイザードラゴンと配下の八竜を同時に召喚する、しかもカイザードラゴンは97レベルという壊れ性能だ。

私もウルベルトさんから貰った「悪魔將軍の角笛」を持っている。ウルベルトさんの説明では「七人の悪魔戦士」と「悪魔六騎士」が召喚出来るといって凄くアイテムだ。

「というわけでして、エンリの呼んだゴブリンには大助かりです。狩りで肉を獲ってくれたり、こうして農作業まで手伝ってくれるんです。そうですねジューゲムさん。」

「いえ、俺はゴコウです。村長の旦那。」

「あれ？そうだったかね……それじゃエンリとネムを呼んで来てくれるかいカイジャリさん。」

「そうなんです！ジユゲムさん達にはとても助けられています。両親や村の皆もとでも喜んでいきます。」

「ジユゲム達は大活躍なんだよ。今日もお肉をいっぱい獲ってきてくれたんだよ！」

「ありがとうございますネムさん。エンリの姐さんの為でしたら、この位はどうって事ありません。」

「本当にジユゲムさん達にはお世話になっています。これからも宜しくお願いしますね。」

「そうなんだ…すごいね、アハハハ…」

すいぶんとゴブリンへの好感度が上がっているぞ。がんばれンファイレア！

「でもさっちゃん様とンファイレアが一緒だなんて驚いちゃいました。」

「ああ…それはね（今だンファイレア！君の事が心配だったと伝えるんだ）」

「そつ、それはその——そう！村を襲った帝国の騎士が残っているかもしれないからつ、だからエ・ランテルでは都市の外へ出るのが禁止になって！それで…どうしても急いで入手したい薬草があつて…それでさっちゃん様にお願ひして同行させて貰っただけで特に深い意味は——」

コイツは何を言っているんだ？事情を察している漆黒の剣も呆れている。

「ふーん。ンファイレアにも事情はあるんだろうけど、そういうルール違反をしても大

丈夫なの？まして貴族であるさっちゃん様にご迷惑をお掛けするなんて！さっちゃん様の知り合いがご迷惑をお掛けして申し訳ありません。」

「あれ？いや…その…ゴメンナサイ（知り合い…ただの知り合い…ハハハハ）」

「私に謝ってどうするのよ？」

駄目だこのヘタレ。ルクルツトは額に手をあてて、アチャーとなつてゐるし、ダインも深々と溜息を吐いている。ペテルとニニヤも苦笑いだ。ネムちゃんも「まただよ」という表情だ。ゴブリン達さえ薄々と状況を察した様だ。

《もしもーし、ルクルツトさーん》

《あれ!もしかしてお嬢様ですか?》

《そうだよ、メッセージの魔法を使ったの。考えた事がそのまま伝わるから》

《なるほど!便利な魔法ですね。それで何でしょうか?》

《ンフィーレアだよ!何とかならない?》

《ンフィーレア君ですか?気の毒というか若いというか…俺にどうしろと?》

《もう見てて気の毒で…ちよつと助けてあげようよ》

《こういう事は自分の器量で何とかするが男つてもんなんですけどね》

《私、女の子だからわからないよ》

《俺だって何度もフられて、それでも気合いと根性で頑張っているんですよ。ン

フィーレア君にはガッツが足りませんね!」

《そのガッツを分けてあげようとは思わないの?》

《思いませぬ。他人の不幸は蜜の味——おっと、これもンフィーレア君にはいい経験になるでしょう。まあ次回に期待という事で…》

《ナーベラルとデート券》

《?!?!》

《エ・ランテルに帰ってからナーベラルちゃんに頼んで、一日デート出来るようにしてあげる》

《お任せ下さいお嬢様!このルクルットがンフィーレア君の恋を、見事成就させて見せましょう!》

こうしてンフィーレア君に強力な?援軍を送ったけど……何とか挽回出来るのかな?

「まあまあ聞いて下さいエンリさん。」

「はい、何でしょうか?」

「おっと、自己紹介がまだでしたね。私は銀級冒険者チーム漆黒の剣のルクルット・ポルブです。今回はさっちゃんお嬢様の案内として雇われている者です。」

「はい。私はエンリ・エモットです。何か私に御用ですか?」

「実はですね、エンリさんが大変な誤解をしていらっしやる様なので、老婆心ながらその誤解を解かなければと思います、こうしてお話をさせて頂いています。」

よくもまあ、こうもペラペラと口がまわるものだ。ンフィーレアにも見習って欲しい。

「誤解…ですか？」

「ええ、とても悲しい誤解です。あれは昨日のお昼頃の事です。我々漆黒の剣は、この国に不案内なさつちんお嬢様より護衛と案内の指名依頼を受けまして、その打合せを冒険者組合で行っていたのです。」

「そうなんですか、私はカルネ村からもほとんど出た事が無いので良く判りませんが。」

「それで打合せを終えた我々が組合から帰ろうとしたところですね…」

「帰ろうとしたところ？」

ん？昨日のお昼ってどういう事？

「受付でンフィーレア君に会ったのです！彼はそれはもう必死でした！「カルネ村には僕の愛する女性がいるんです。彼女の無事を確かめる為にも、僕はカルネ村に行かなければならないんです！」と、受付に訴えていました。それはもう凄いい気迫でした。」

「ええーっ！ンフィーレアってこの村にそんな人が居たの？」

「…」まで言ってもまだエンリは気付かないとか…これ無理っぽくない？

「彼はこうも言っていましたよ。「依頼を受けてくれるのなら、僕の全財産を払います！」と、彼が提示した金額は大変な額で金貨——おっと、お金の話は無粋でしたね。とにかく！彼の熱い思いにうたれたお嬢様が、エ・ランテルの都市長に掛け合って下さった事で、こうしてカルネ村へとやって来たのです。」

「そ、そうだったんですか。でも昨日のお昼にエ・ランテルでって、そんなに早く来れるんですか？ンファイレアはもつと時間がかかると言っていましたけど。」

「そうなんです！ンファイレア君のたつての願いで、すぐにエ・ランテルを出発して睡眠や食事もほとんど摂らずに全速力で駆けつけたのです。」

昨日はお昼にバーベキュー、夜はフルコースディナーだったろ！お風呂まで入ったじゃん。今日の昼もカレーおかわりしただろ！私もシエスタしたし。ルクルットって「詐欺師」のクラスでも取ってるんじゃないだろうか？

「そうだったんだ……ごめんなさいンファイレア。私そんな事とは知らなくて……でもそれなら何で薬草の採取だなんて？」

「え？いや？ルクルットさん？」

「それはですね、今回の不幸な事件で被害に遭った方達や王国戦士団に、バレアレ薬品店が治療の為のポーシオンを無償で提供してくれたのですが、それで在庫が不足してしまつたので、こうしてンファイレア君が来る事になったんです。そしてポーシオン代金

の半分はさっちゃんお嬢様が寄付して下さったんです。ですから都市長や冒険者組合長も許可を出してくれたんですよ。ルール違反だなんてとんでもない!」

「まあ!素晴らしいことですね、さっちゃん様にンフィーレアも!」

「うん。ま、まあね。アハハハ。」

「い、いや、それほどでも…」

とにかく話の流れに乗るしかない。ちなみにペテル達やネム、ゴブリンは完全に置いてけぼり。私の護衛に就いてるセバス、サンちゃん、プレアデスは我関せずだが、ぷーにやんを抱っこしているルプスレギナが必死に笑いを堪えていて、ナーベラルはゴミを見る様な眼でルクルツトを見ている。

「でもよかったねンフィーレア。その人が無事で。」

「ああっ…まだ分からないのですかエンリさん!ンフィーレア君が愛している女性というのは貴女のことですよ!」

「え?え?ええええーっ!?!」

「ちよっ…ルクルツトさーんっ!?!」

おおっ!遂に言ったぞ!そしてンフィーレアはいい加減に覚悟を決める!

「ンフィーレア君!俺と約束したじゃないか?(していない)カルネ村に着いたら彼女にプロポーズするって!」「エンリの為なら死ぬる」って言っていたじゃないか?(言っ

いない)」

この後もルクルットは立て板に水を流すように、ペラペラと話し続けた。思いがけない事実に驚いていたエンリも、ネムちゃんの「知ってたよ。村のみんなが。ンフィーレアがお姉ちゃんを好きだつてことぐらい」という一言でようやく理解した様だ。ンフィーレアはルクルットの腹話術人形と化していた。

そしてエンリは鈍感だけど、一度そういった感情に気が付けば「チョロイ」女の子だった。うん、何とかお幸せに。あの状況から奇跡の逆転ホームランを決めたルクルットにーポイント、大炎上のンフィーレアはマイナスーポイントだ。そしてその夜……「そういつた訳で、ナーベラルちゃんはエ・ランテルに帰ったら、ルクルットとデートしてあげて♪」

「なっ?! ななな……何とおっしゃいましたかさっちゃん様?」

「まあ一緒にご飯でも食べて、適当にブラブラする位でいいから。ちゃんとボーナスもだすから。」

「あ、あの下等生物ルクルットとデート……いや、さっちゃん様の命令とあらば……ぐぬぬぬ」

「式式炎雷さんが作ってくれた「くのいちコスプレ一式」があるから、それをあげちゃようよー」

「お任せ下さいさっちゃん様! このナーベラル・ガンマ、身命をとして、その大役を果たし

て見せます！」
ここにもチヨロイ女がいた。

森の賢王

「外れだ……完全に外れだ。」

トブの大森林南部の奥地で、アインズは遣る瀬無い気持ちで、己の目の前でひっくり返り無防備に腹を曝け出している魔獣を眺めていた。その魔獣こそトブの大森林南部を縄張りとする「森の賢王」と呼ばれる伝説の大魔獣であった。

アインズは妹が興味を持った森の賢王という伝説の大魔獣を、アウラに命じて探させていた。程なくして森の賢王らしき魔獣が発見され、妹がトブの大森林へ散策に出かける前に、自分の目で確認をしに来たのだった。

万が一にも妹に危害を加える危険な存在であれば、容赦なく殺すつもりだったが、アウラの見立てではレベル30強程度。魔獣系モンスターの特殊能力を加味してもデスナイトクラスだ。ただユグドラシルには存在しなかったモンスターという事で若干の期待と興味を持っていた。

そうして出会った森の賢王は、その規格外の大きさと長過ぎる尻尾を除けば完全にハムスターである。口調は変わっているが流暢な言葉を話し「仲間に会いたい」「子孫を残さねば生物失格」などと、大いに共感できる事を語って多少はアインズを感心させるが、

アインズに対して「命のやり取りをするでござるよ」とのたまったあげく、絶望のオーライを浴びただけでこのザマである。

こんなのが伝説の大魔獣だと知った妹が、ガツカリする様子を思い浮かべたアインズに、アウラが「よい皮が取れそうです（ニッコリ）」と語り、自らの運命を嘆き悲嘆にくれる森の賢王を、「うーむ、どうしたものか?」と考え込むアインズだったが、そういえば…と呼び起される記憶があった。

「餠ころもつちもちさん…今日もログインしていなかったね。もう1週間だよ。」

「ペットのハムスターが死んでしまったという事だが…早く元気になって欲しいな。」

ギルドメンバーの餠ころもつちもちは動物好きで知られていた。ハムスターの他にも犬を飼っており「うれしよんが大変で困る」とギルドメン達に言っていた事もあった。このご時世で生きた動物をペットとして飼育しているなら、ある程度の富裕層のはずだが、それを意識させない人柄で兄妹とも仲が良かった。

「餠ころもつちもちさんの飼っていたハムスターの写真や動画を見せてもらっただけど、とっても可愛かったんだよ!ネコが好きだけどハムスターもいいなあ。」

ハムスターとはいえ自然が完全に破壊された世界では、生きた動物自体が希少な存在で、貧困層に属する兄妹にとっては高嶺の花だ。とてもペットを飼う余裕などは無い。

「すまないな…お兄ちゃんがもつと給料の良い仕事をしていれば…」

「ごめんなさい！そんなつもりで言ったんじゃないよ。気にしないで、お兄ちゃん。」
 そんなやり取りを思い出したアインズは――

（そうだ！さっちゃんのペットにぴったりじやないか♪ネコのぷーにやんも居るけど、これだけ大きければ背中に乗る事も出来る。巨大ハムスターに跨る可愛いさっちゃんは絵になりそう♪こいつは拾い物かもしれないな）

アインズはさっちゃんが喜ぶ姿（お兄ちゃん大好き♥）を思い浮かべ、森の賢王への評価を上方修正する。言うなればポイント1、いや3ポイントくらいの高評価である。

「私の名はアインズ・ウール・ゴウンという。森の賢王よ、私が示す条件（妹が気にいる）を充たすなら、汝の生を許そう。」

「あ、ありがとうでござるよ！命の為ならどんな条件にも耐えてみせるでござるよ！それがしの全力をお見せするでござる！」



カルネ村で一泊した翌日、漆黒の剣に護衛されたンファイアはトブの大森林で薬草採取に勤しんでいた。さっちゃん一行は「森の奥に用事がある」という事で別行動だ。本来であれば依頼主が危険な場所へ赴くの見送るなど、冒険者に有るまじき事だが、あ

の一行に対しては漆黒の剣もンファイレアも全く心配していなかった。

間違い無く冒険者最高峰のアダマントタイト級にすら収まらない力を持っていると確信できる。そんな相手に自分達が心配する事などある訳が無い。しいて言えば、あのとびきり美味な食事に同伴出来ない事が残念だが、彼らの——特にンファイレアの足どりは軽かった。

「よかったですねンファイレアさん。エンリさんに想いを伝えられて、そして受け入れて貰えて。」

「いやあ……ありがとうございます。これもルクルット先生が助けしてくれた御かげです。先生には本当に感謝しています。先程も言った通り、今後は漆黒の剣の皆さんには特別価格でポーシオンを提供させて頂きますから。」

「期待してるぜ。ンファイレア君。」

ンファイレアにとってルクルットは、絶体絶命の窮地に陥っていた自分を、颯爽と現れて助け出してくれたスーパーヒーローだ。今までどんなに自分がアプローチしても（※「今日はいい天気だね」「カルネ村の近くで採れる薬草は最高なんだ」位しか言っていないかった模様）全く反応がなかったエンリ（※彼女はテレパスの魔法を使えません）に對して、彼の助言に従い告白したら（※ンファイレアが発した言葉は、ほぼ「はい」「そうです」だけ）見事に彼女が受け入れてくれたのだ。それを思えば多少の便宜（※原価

割れでポーション販売)を図るのも当然だ。

「それにしてもルクルットを見直したのである。多少の誇張はあったが見事なアドバイスだったのである。」

「あれは多少じゃないでしょう。お嬢様方が黙っていてくれたからいいものを……」

「ありやお嬢様から頼まれたんだぜ！ニニヤも気付いてなかったのか？メッセージの魔法で「ンファイレーア君を助けられないか？」って言われたんだ。それで俺も一肌脱いだって訳だ。」

ルクルット自身は、生温かい目で見守るつもりだったが、特大の賄賂で買収されただけだ。

「そんな事をしていたのですか？」

「まいったなあ……僕なんかの為に。お嬢様にはちゃんと御礼を言わないと。」

「おかげで俺にもビッグチャンスが巡ってきたからな！まったくお嬢様には感謝感激だぜ♪」

「そんな事だろうと思いました。でも相手は身分も力もある方達なんですから、くれぐれも失礼が無い様に頼みますよ。」

呆れた様子でペテルが釘をさす。ナーベラルへの態度もあり、常識人でチームリーダーの彼としては、一言いっておかなければと思うのは当然だ。

「分かっているって。それに身分も力もあるお嬢様が、わざわざ俺みたいな冒険者に「報酬を用意してまでお願い」したんだぞ。決して命令なんかじゃない。それだけの器量を持つてる御方だ。失礼何かする訳ないだろ。」

「それだけの器量…身分も力も…この国の腐った貴族どもなんかと違う本当の…力を借りる事が出来れば…」

ニニヤの暗い呟きに気が付いた者は聞かなかつたふりをした。



「お久しぶりですきっちゃん様♪」

「アウラちゃん♪森の賢王を見つけたんだって!?すごい♪」

トブの大森林に来たのは森の賢王を見る為だ。伝説の大魔獣の話聞いてとても興味が湧いたのだ。アウラちゃんが従えている魔獣軍団も凄いけど、森の賢王はどうなんだろう？

「ねえアウラちゃん、森の賢王ってどんな魔獣なの？強そう？カッコいい？」

「いやあく…それは見てのお楽しみという事で。あつ！でもアインズ様もきつと気に入るだろうと仰っていました。」

「ええく!?何それずるーい。私に内緒でえく?」

なんか仲間外れにされたみたいだぞ。

「さっちゃん様を心配しての事でしよう。」

「アインズ様の優しい心遣いですわ。」

「あつ!そろそろ到着です。この先があいつの罠です。おーい、さっさと出ておいでえー。」

アウラの声に従って、洞穴の奥から巨大な影が現れる。

「お待ちしていたでござる。それがしの威容を御覧にいれるのでござるー!」

魔獣は立ちあがると両腕を上へ伸ばす…そして両手を開いて手首を曲げる。さらに右足を曲げて上げる格好——「荒ぶる魔獣のポーズ」を取る。

「見るでござるっ(クワツ)命を助けられた恩!(バツ)絶対の忠誠でっ(サツ)お返しするでっ(シュタツ)ござる!!(ビシツ)」

そして様々な荒ぶるポーズを取りながら自身の威容と忠誠を誇示する。

「こ、これが…森の…賢王!?!」

伝説の魔獣に抱いていた幻想をぶち殺されたさっちゃんは、それ以上の言葉が出てこなかった。それを失望と感じたNPC達は…

「まったく無礼な獣ですね。」

「その通りです！」

「やっぱり皮を剥いだほうが…」

「愚劣な生き物ね。」

「ニヤンニヤンニヤン！（てめえ喰うぞコラア）」

「美味しそうかもお〜」

我にかえつたさつちんが両手をいっぱい広げて満面の笑みで叫ぶ。

「うわああ！ハムスターだあ!!可愛い〜♥何コレおつき〜い!?凄く凄く♪」

さつちんはその場でピョンピョンと飛び跳ねて、喜びいっぱいという感じだ。

「とても素晴らしい魔獣ですね。」

「さつちん様の仰る通りです！」

「皮を剥ぐなんてとんでもない！」

「力を感じさせる瞳ですね。」

「にや、にやくん!?（お、俺という者がありながら）」

「残念〜」

究極の妹君の言葉は全てに優先する。見事な掌返しである。

「ねえ、あなたのお名前はなんていうの?私はさつちんだよ!」

「それがしはずっと一人生きて来たので、名前は無いでござる。いつの頃からか森の

賢王と呼ばれ出したので、そのまま名乗っていたのでござるよ。」

「そうなんだ…じゃあ私が名前を付けてあげようか？」

NPC達は驚愕する。ナザリック最高権力者より名前を授かるなど破格の待遇である。これは直接創造されたNPC達に準ずる地位という事だ。

「ぜひともお願いするのでござる！主人である姫に名を頂けるとは感激でござる！」

「姫って私のこと？」

「姫は殿の妹君なのでござろう。だから姫でござるよ。」

「殿？それお兄ちゃんのこと？…ウヒヤヒヤヒヤヒヤwwお前おもしろいね。」

「それでは姫、それがしの名はどういったものになるのでござるか？」

「そうだねえ…ハムスターで「ござる」「殿（プツ）」だから——ハムスケ！おまえの名

前はハムスケだよ！」

とても喜ばしいことに、兄妹のセンスは似通っているようだ。

「おお！このハムスケ、素晴らしい名を戴いた恩に報いるためにも、姫に絶対の忠誠を誓う
びんぎるよー！」

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤww誓われるでござるよ。」

「姫え、ひどいでござる。それがしの誓いを笑わないで欲しいでござるよ。」

「ゴメンネ〜ハムスケ♪」

トブの大森林での出来事を報告するアウラにアインズが満足していると、ドアをノックする音が聞こえる。

「失礼いたしますアインズ様。デミウルゴス様が定例報告に参りました。御通ししても宜しいでしょうか？」

「もうそんな時間か？構わない、通してくれ。」

アインズも支配者として振る舞う事に慣れて来たようだ。家族を背負っている男の貫禄とも言うべきか。

「ご歓談中のところへ失礼しますアインズ様。そしてアウラもだね。」

「良く来たなデミウルゴス。まずは掛けるがよい。」

「デミウルゴスお疲れー。」

現在ナザリックで進めている計画は、どれも順調に進んでおり、さらにアインズの子供の誕生を控えている事もあり、転移直後の臨戦態勢がウソのような明るいムードだ。NPC同士も協力して事に当たっており、互いを尊重し合う関係が保たれている。創造主同士の仲の悪さが影響していたデミウルゴスとセバスさえ、報告の際に（多少の棘はあるが）軽口を言い合うほどである。

「アウラから報告があつたのだが、さっちゃんに新しいペットが出来てな。いずれナザリックに連れ帰るだろうから、ナザリックの者達との顔合わせをしないと。フォス

よ、デミウルゴスに飲み物を用意してくれ。」

「かしこまりましたアインズ様。デミウルゴス様はいかがなさいますか?」

「それは宜しゅうございました。フオスには紅茶をお願いしようか。ストレートで頼むよ。」

「デミウルゴスは紅茶党だったな。私はコーヒーに凝っていてな、副料理長に色々なブレンドを試させているんだ。今日のブレンドもなかなかだぞ。」

「それはそれは。次の機会には是非ともアインズ様のおすすめてをご馳走になるとしましょう。」

「私は苦いのは苦手かな。温かい飲み物ならココアが一番です!」

アインズは妹にとっても感謝していた。最初は戸惑っていた部下達とのコミュニケーションが、こうして飲食を供にすることでスムーズに進められるからだ。そしてアインズと同席しての飲食はNPC達にとっても至福の時間であり、それをもたらしたさっちゃんへの感謝の念を、全てのNPCが抱いているのだった。

「それでは報告を聞くとしよう。なにか変化はあったか?」

「はい。エ・ランテルに配置したシャドウデーモンからの報告で、以前より墓地に潜伏していた集団に、35レベルという現地では最高クラスの女戦士が合流したとの事です。」
「ほう! 周辺国家最強と言われるガゼフ・ストロノーフを上回るレベルか。その女は何

者だ？」

「例の集団——ズーラーノーンの高弟との事で、名はクレマンティーン。それ以上はまだ不明です。ただ、この女が加わったとしても、プレアデス2名で十分に殲滅可能でしょう。」

デミウルゴスはエ・ランテルにおいて大規模な諜報体制を敷いており、クレマンティーンがエ・ランテルに到着したのも今日の出来事である。そして墓地に潜伏中のズーラーノーンについても把握していたが、特に見るべきものは無いと不干渉で、監視するに留めていた。

「ズーラーノーン……墓地に隠れているネクロマンサーの男、カジットとかいったか。何かの儀式を企んでいるとの事だったか……」

「あまりにも絶望的な努力をしております……使えるようでしたら、声をかけてやっても良かったのですが、あの程度ではさすがに……」

「5年も準備して召喚するのがスケリトル・ドラゴンではな……一体何がしたいんだ？もう少し見所があれば、実験体としてエルダー・リッチにでも転生させてみても良かったのだが。」

「やっぱ人間は弱すぎますよねー。」

アインズのスキルである下位アンデッド創造なら、スケリトル・ドラゴンを1日20

体までノーコストで召喚可能だが、それと比べるのはカジツトが気の毒だろう。スキルで召喚したモンスターには制限時間があるが、死体を触媒とする事で制限時間が無くなる事が実験で確認されている。

ナザリツクの戦力強化に丁度良いので、大量の死体が入手可能であれば定期的に作成したいところだが、その為だけに虐殺を行うほどの状況ではない。

ちなみにスケリトル・ドラゴンは、第六位階以下の魔法を無効化する特殊能力を持ち、現地のマジックキャスターにとつて天敵とも言える存在だ。冒険者ならミスリル級以上が適正難度のかなり強いモンスターという認識だ。こんなのがいきなり都市内に出現すれば大惨事なのだが、アインズにとつては「ミスリル級で倒せるなら問題はないな」である。

「さっちゃんにはデミウルゴスから伝えてくれ。そのまま放置でもかまわないし、鬱陶しいようなら殲滅しても問題ないが、死体を確保してくれると良い実験材料になるとな。」
純真無垢な妹が人助けをしたり、ペットとふれ合ったりしている裏で、狡猾い兄は様々な悪だくみをしているのだった。



「これが伝説の大魔獣、森の賢王!!なんて立派な姿なんだ!」

「さすがは伝説に謳われた魔獣!強大な力と英知を感じるのである。」

「こんな凄え魔獣を乗りこなすとは、さすがはお嬢様だ!」

「これほどの魔獣と戦えば、私達では皆殺しにされてしまいますね。」

ハムスケに跨って森から出て来たさつちんを見た漆黒の剣の感想だ。ハムスケに勧められたさつちんは大喜びでその背中に乗った。さらにさつちんの背中にはぶーにゃんが乗っている。大中小と揃った親子ガメといったところだ。巨大なハムスターに楽しそうにしがみつく美少女というのは、とても微笑ましい光景で見る物の心を温めるはずなのだが、彼らの印象は異なる様だ。

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤww大魔獣だってwwハムスケ凄じやん!!」

「フッフッフツ…それがしの威容に瞠目しているでござるな。その方らは見所があるでござる。」

「ニヤニヤン! (あまり調子に乗んなよ)」

「しやべった!?!賢王と呼ばれるだけあって知能も高いなんて!」

「この世界の住人のセンスと重大な差異がある事にさつちんは気付いていない。」

「可愛いでしよ〜♪ハムスケって名前を付けてあげてペットにしたんだよ。ハムスケも皆に挨拶しなさいい。」

「そなた達も姫にお仕えする人間でござるか！それがしは姫にハムスケという名を頂戴し、忠誠をつくす事を誓ったハムスケでござる。今日より姫に仕え、共に道を歩む所存。よろしくでござるよ。」

「ニヤーンニヤニヤーン！（お前は俺の舎弟なんだからな。分を弁えろよ）」

「ひええ、わかつたでござるよ。ぷーにやん殿。いや兄者！」

「うふふ、ぷーにやんともすつかり仲良しさんだね♪」

「わ、私達は漆黒の剣と言う冒険者チームでして——」

漆黒の剣達はかなり驚いているみたいだ。これだけ大きいハムスターだもんね。それにしても強大？英知？なんでハムスケを見た感想がそうなるのかな？何か重大な勘違いをしているような……ん？ンファイレアの様子が？

「ハムスケさん！いままで貴方の縄張りに近い事で守られていたカルネ村はどうなるのでしょうか？モンスターに襲われたりしないでしょうか？」

「そうか？森の賢王の縄張りがあったから、カルネ村ではモンスターによる被害がなかったんだ！」

ん？どういう事だろう？

「さあ？それがしは縄張りの外、それも人間の村などには関知してはござらん。その縄張りも放棄済みでござる。しばらくはそれがしの気配が残っているので、他のモンス

ターは近寄らぬでござろうが、いずれは然るべき者が縄張りを受け継ぐ事になるでござる。自然の掟でござるよ。」

「そんなつ！何とかならないんですか？」

「それがしの知った事ではないでござる。」

うーん…思わぬ問題が発生したけど、これって…

「魔獣に人間の都合は関係ないのである。自然の掟といわれればその通りである。」

「ハムスケさんに責任があるわけじゃねーからな。それこそカルネ村の連中が考える事だ。まあ、こういう時こそ男の出番じゃないのか？ンファイア君。」

「ルクルット先生!?僕がですか？僕なんかに出来る事は…」

先生って何だ？でもヘタレのンファイア君にはもつと頑張つて欲しいと思つていた。まあカルネ村にはゴブリンもいるから大丈夫じゃないかな？何だつたらもう一本くらい小鬼將軍の角笛をプレゼントしてもいいし。

「惚れた女の為に身体を張るのが男の役目だ。ンファイア君の力で出来る事が必ずある。」

「僕の力で出来る事…」

《《いい事言うじゃんルクルット》》

《《お嬢様ですか！なーに弟子のヘタレ振りを心配しての事です》》

《いつから弟子になったの？それよりンフィーレアに出来る事って？》

《さあ？それを考えるのが今日の課題と言う事で…》

《それは無責任じゃないかな？》

《そんな事言われなくても…お嬢様のほうで何とかありません？こう…いつもの不思議な力で？》

《何で私が？それに不思議な力って何？》

《またまた、あるんでしょ？スゴイのが》

《君って本当にイイ性格してるよね》

しばらくメッセージによる密談が続いた。この男は絶対に詐欺師のタレント持ちに違いない。

《それじゃこういう感じで——》

《——それなら何とでもなるでしょう。後はお任せ下さい》

「僕は本当に進みたい道が解りました！お嬢様、先生！これからも力を貸して下さい！」
目の前にぶら下がった人参に飛びつくように、ンフィーレアはこちらの思惑通りに動いてくれた。彼はこのままで大丈夫なのだろうか？このままだと何か大変な目に遭いそうなんだけど…

決定した事は私のほうがゴブリン用のアイテムや装備の提供、保険として小鬼將軍の

角笛をもう一本。ンフィーレアは私専属のポジション職人として色々なポジションの開発に従事する。もちろん祖母のレイジー・バレアレ氏にも協力を要請する。詳しくはエ・ランテルに帰ってからレイジー・バレアレ氏を交えて相談だ。

《お嬢様、例の件はくれぐれも頼みましたよ》

《ルクルット、君もワルだね〜ウケケケケケ》

《いやいや…お嬢様ほどでは》

部下との交流に余念がない、理想的上司の兄の裏で、狡賢い妹は詐欺師と悪だくみをしているのだった。

純白の英雄譚（上）

エ・ランテルに帰って来た私は、今後の予定について考えていた。実はかなり用事がたまっているのだ。明日はバレアレ薬品店でリイジー・バレアレとの話し合いがあるし、ハムスケの魔獣登録とかで冒険者組合から係員が訪ねてくる。都市への入場時に門番から「未登録の魔獣はちよつと……」とか言われていたけど、セバスが「全て都市長に任せてあります」の一言で押し通した。

他の問い合わせや面会希望も全部それで済ませているので、都市長は大忙しで大変らしい。でも太つちよでプヒプヒ言っていたのが、みるみる痩せてきているからOKだろう。デミウルゴスからも好きな様に使って大丈夫と言われているし、王国の貴族は庶民を虐める悪人ばかりと聞いている。悪徳都市長は今までの怠惰のツケを払うがよい！

それにナザリックへ案内した冒険者達も帰ってくる頃だ。お兄ちゃんからは「彼ら全員の今後の活躍を心配いたします」という連絡があった。まあ残念賞を御土産に持ち帰るみたいだから、少しは宣伝になるだろう。漆黒の剣については、もう少し様子を見てからナザリックで鍛えてもいいかもしれない。

後は報告のあつた変なハゲ集団だ。墓地で暮しながら「微笑ましい活動」をしていると聞いた時は笑いが止まらなかつた。5年もかけてエネルギーを集めているのに、召喚されるのがスケリトル・ドラゴンとか意味が分からない。

しかも「彼らの努力が実るのに、今しばらくの時間が必要な様です(笑)」という話だ。新メンバーが加入したそうなので頑張つて頂きたい。よかつたら腕のいいネクロマンサー(一日でスケリトル・ドラゴン20体。より強力なアンデッドもお気軽に)ご相談を！)を紹介してあげようか？

後はソリュシヤンとお風呂に入つてから晩御飯を食べて寝るだけだ。最近では酸耐性を付けてのソリュシヤン風呂が私のお気に入りだ。お兄ちゃんのスライム風呂を聞いて、ソリュシヤンにお願いしたら快くOKしてくれた。私はポワくっとしてるだけで全身を隅々まで洗つてくれるし、プルプルのソリュシヤンはヒンヤリしてとても気持ちいいのだ。

そんな事を考えているとセバスが部屋に入つて来た。

「お嬢様たつた今、シャドウデーモンより報告が入りました。バレアレ薬品店が何者かに襲撃を受けております。現在は漆黒の剣の4人が襲撃者と戦闘中です。如何なさいますか？」



《テレポーターション／転移》で現場に到着した時には、あらかた状況は終了していた。連れ去られたンファイレア、瀕死のレイジー・バレアレ、全滅した漆黒の剣——しかも《クリエイト・アンデッド／不死者創造》でゾンビにされていた。

シャドウデーモン達に監視以外の行動を禁止していたのは失敗だった。彼らが加勢していれば、もう少しマシな状況だったかもしれないのに…

「ぐ…あ…ンファイレアは…」

「ルプスレギナちゃん、お婆さんを治療して上げて。」

「かしこまりました。《ヒール／大治療》」

まずは直接、事情を聞かないとね。ここを襲撃したのは、あのハゲ達らしいけど、何の目的でンファイレアを連れ去ったんだろう？

「はっ…痛みが？…それにおぬし達は？」

「レイジーさん具合はどう？わたしはさっちゃん。ンファイレア君と一緒にカルネ村へいった者だけど、何があったか聞かせてくれる？」

「おぬし達が孫と…事情は聞いておる。色々世話になってたみたいだね。奴らは「ンファイレアのタレント」があれば「儀式」が一気に進められると言っておった。何を

させるつもりか分からないが、碌な事じゃないだろう。」

——忘れてた!! フィーリアには「あらゆるマジックアイテムを使用可能」という能力があった! それが目的だったんだ!

「こうしちゃおれん。とにかく孫を助けないと! まずは衛兵、そして冒険者組合にも!」
「私達が何とかするから落ち着いて!」

「おぬし達が? この町で色々としておったようじゃが…」

「お嬢様、捕らえた漆黒の剣(ゾンビ)はどうしましよう?」

「わしが生きているのも彼らの御陰じゃよ。必死にあの女と戦って: わしは《フォックス・スリープ/偽死》と隠し持っていたポーシヨンで何とかなつたけど: ゾンビにまでされちまって: こうなつては安らかに眠らせてやるしかないわい。」

ゾンビ化は少しやかいだ。通常の蘇生魔法では復活する事が出来ない。お兄ちゃん《リーンカーネイト/転生》ならアンデッドになつた者を人間へ転生させられるけど、能力や記憶がどうなるか解らない: 彼らがどれだけ一生懸命戦つたかは、リイジーとこの惨状を見れば判る——生き残る為、守る為の必死に頑張つたんだろう。

彼らとは数日間を共に過ごしたのだが、とても面白い: いい人だつた。これからして欲しい事もあつたし、大事な約束もしていた。計画の邪魔をされたとかじゃなく、彼らが害された事がかなり: かなり不快だ。

「漆黒の剣についてはお兄ちゃんに相談——」

「さっちゃん様、私のスキル「エインヘリヤル・ハイアル」を使つてはいかががでしょうか？」
「サンちゃんのススキル——エインヘリヤル・ハイアル？」

「エインヘリヤル・ハイアルは死者を私の使徒「戦死した勇士」として復活させ、使役するスキルです。レベル50以下の人間種にしか使用できませんが、「戦死した勇士」は高い能力値を持つ種族ですので、彼らも優秀な戦士となるでしょう。さらに種族レベルが15になれば、その功績を認められて「戦死した勇士」を職業レベルに置き換えた状態で、人間として復活出来るので彼らにとつても問題はないでしょう。」

何それすごい。そんな設定……というかスキルがあつたんだ。ユグドラシルでだつたら微妙かもしれないけど、この世界でならとんでもないスキルだ！



「——そういう事だから、君達にはンフィーレアの救出、そして首謀者のハゲを倒してこの事態を解決してもらう。もちろん例の女戦士も……判つた？」

サンちゃんのススキルで無事？に復活した漆黒の剣の4人だが、使徒になつた影響なのか、髪の毛が真っ白になつてしまつたぞ！漆黒の剣なのに真っ白とか……

「さっちゃん様とエヌスリー様には、多大な御恩と身に余る力を戴きました。必ずンフィーレアさんを助けて見せます。」

「あのハゲとキチ女にはたつぷりと借りがあるからな。しっかりと返させてもらうぜ。それに持って行かれた冒険者プレートも取り返さないといけないからな。」

「二度失った命を救って戴いたのである。ゆえにその恩を返すだけの成果をみせるのである。」

「僕はまだ終わっていない。また戦える…っ！（姉さんだつて）助けられる…っ！」

為すすべも無く無惨に殺されて、復活したばかりの彼らだが、やる気は充分だ。もちろん彼らへのバックアップも忘れていない。

「敵は墓地の奥にある霊廟にいる。ンフィーレアもそこだね。そして墓地からは千体以上のアンデッドが出現して、このままでは都市内になだれ込んでくる。」

「千体以上のアンデッドですか…」

「マジかよ…でもヤルしかねえな。」

「今の僕たちならやれます！」

「全力を尽くすのである。」

なぜ低位とはいえ、あれだけのアンデッドが召喚されたのかは解らない。ハゲの事を見くびっていた。勿論ンフィーレアのタレントが関係しているのだろうが、本当に迂闊

だった。おのれハゲェ…

「低位アンデッドばかりだから、数以外は君達にとって脅威じゃない。それに強力な助っ人もいるから安心して——ハムスケッ！」

「おまかせでござる！漆黒の剣の皆の弔い合戦でござるよ。それがしの力を姫にお見せするでござる！」

「いや…私達は一応は生き返った？のですけれど…」

ハムスケが是非とも！と言うので同行させる事にした。これでも森の賢王と云われた大魔獣（笑）で、例の女戦士とも互角に戦える強さだ。

「森の賢王が一緒なら心強いな！それにすんげえ装備も用意してもらったんだ！絶対に負けねーぜ。」

「凄まじい装備品ですよ。これさえあれば負けません！」

「この身体の特特殊能力も驚きである！私も攻撃に専念出来るのである。」

「油断は禁物ですよ。まあ絶対に勝ってみせますけどね！」

漆黒の剣に与えた装備は全て遺産級だ。彼らのレベルと能力値で装備可能な物でも最上クラスだ。但し対アンデッド戦を考慮して神聖属性中心で揃えたので、殆どが「白い」装備で、ますます漆黒じゃなくなっちゃった。

そして「戦死した勇士」の特特殊能力であるHP自動回復（小）は長期戦には有利に働

エ・ランテルの外周部にある共同墓地は、毎年の戦争で発生した戦死者を弔う必要性からかなりの規模を誇る。万が一の事態に備えて、都市の城壁に匹敵する壁に囲まれているが、現在その「万が一の事態」が起こっていた。

突如大量発生したアンデッドは千体以上。巡回中だった衛兵が血相を変えて門まで逃げて来た時、その場に居た衛兵達は絶望した。大急ぎで門を閉じた事で何とか食い止めているが、門が破られるのは時間の問題で、このままではアンデッドの特性から、さらに強大なアンデッドが出現するという最悪の事態も考えられる。

衛兵達がエ・ランテルの滅亡すら予感した時に、彼らは現れた——純白の装備を纏った4人と強大な魔獣……4人は装備だけでなく髪の毛も真っ白だ。高名な冒険者に違いないと思ったが、冒険者の証であるプレートが見受けられず、ワーカー？と思うが、この事態の助けになるならワーカーだろうと関係ない。

「私達は「漆黒の剣」！主人からこの事態を解決するよう命を受けてやってきました。」
「事情があつてプレートは無いが、れつきとした銀級冒険者だ。ここは俺達に任せてくれ。」

「奥の霊廟に首謀者がいるのである。これより我らが向かうのである。」
「冒険者ギルドに都市長や各ギルド長、神殿長が集まって対策中です。事態を報告に

いって下さい！」

「それがしはハムスケ！かつては森の賢王と呼ばれていたでござる。それがしと漆黒の剣に任せておくでござる。」

「ゴロニヤーン」

衛兵達は力強く断言する彼らに困惑する。

「ぎ、銀級冒険者で大丈夫なのか？」

「無理だ！あれだけのアンデッドの大群だぞ！」

「伝説の大魔獣…森の賢王…！（あの頭の上のネコは何だ？）」

「漆黒の剣？…漆黒？（白いじゃないか？）」

4人と魔獣は門の脇にある階段を駆け上ると、壁の上からアンデッドの大群がひしめく墓地へと躊躇なく飛び降りた。呆気にとられた彼らが茫然としていると、門の向こうから激しい戦闘音が聞こえる。どれ位経ったのだろうか、我に返った彼らが壁の上に登ると……

「うそだろ？…あの戦士達は、あれだけのアンデッドを倒して…そしてまだ戦っているのか！」

「あれが銀級だなんて嘘だろ。あれこそ冒険者の最高峰…アダマンタイト級じゃないのかよ？」

「凄いな…凄い人達だな…あのチームは何ていったけ？」

「漆黒の剣とっていたが…（白いけど）」

壁の上からは大量のアンデッドの残骸が確認できた。そして墓地の奥では、いまだ大量にひしめくアンデッドを相手に、一步も引かずに戦い続ける彼らの姿があった。

ペテルは長剣でゾンビ達を次々と切り伏せ、ダインのメイスがスケルトンを粉々に砕いていく。ニニヤの魔法が炸裂し巨大なネクロスウオーム・ジャイアントを焼き尽くす。ルクルットは素早い連射で相手を近寄せせない。ハムスケは爪と尻尾を振りまわして、巻き込まれたアンデッドはバラバラになっていく。

「俺達は…伝説を目の当たりにしているんだ。純白の戦士…いや純白の英雄だ!!」



「これで最後でござるよっ！」

ハムスケの尻尾が数体のアンデッドを串刺しにし、そのまま勢いを付けて地面に叩きつける。アンデッドはバラバラに破壊され、これで辺りに動いているアンデッドはいなくなつた。

「お見事である！」

「ようやく片付きましたね。それにしても——」

「お嬢様の言っていたとおりだな！ 凄え力が湧いてくるぜ！」

「これが「レベルアップ」という物ですか：確かにさつきまでよりも強くなっていますね。」

「それがしも強くなった気がするでござるよ！」

彼らは課金アイテムによる効果で短時間でのレベルアップを果たしていた。漆黒の剣4人は平均で5レベル、ハムスケも1レベルだが上がっていた。今の漆黒の剣は全員がミスリル級、それもオリハルコン級に近い強さを得ていた。これに装備の力とバフ効果加われば、アダマンタイト級に匹敵するだろう。

「全員戦闘に支障はないな？ 傷を負ったり、装備に問題がある者はいるか？」

この後の戦いに備えて、リーダーであるペテルが確認する。待っているのは自分達を圧倒的な力で惨殺した強敵だ。新たな力を得たとはいえ、まだまだ相手の方が格上なのは変わらない。

「私は問題ないのである。怪我をしていればすぐに魔法を掛けるので言っただけなのである。」

「僕も大丈夫です。魔力も半分以上残っています。」

「俺も大丈夫だ。装備も傷一つ出来てねえ。マジでとんでもない武具だなこりゃ！」

「それがしも平気でござる。傷はさつきダイソ殿の魔法で治してもらったでござる。」

「よし！それじゃあ行くぞ。絶対にソフィーレアさんを助け出すんだ！」

「おうっ！」「はいっ！」「ウム！」「ござるっ！」「にゃー」

ペテルが全員に檄を飛ばす。例えば傷は治せても、千体を超えるアンデッドを倒した事で溜まった疲労は残っている。それを吹き飛ばすように全員が気合いを入れる。

「それと皆に相談がある。私達漆黒の剣の……いや、私個人の問題といつてもいいかもしれません……」



「課金アイテムの効果も確認できた。これなら何とかかなりそうかな？それにしても……あれだけ倒してもこの程度って事は、やっぱり経験値効率が悪いみたいだね。」

漆黒の剣とハムスケ達の戦いは、十分な対策を施した監視魔法によって一部始終を監視されていた。

「それでも短時間でのレベルアップが果たせたのですから、作戦は順調でしょう。」

「この度は私の報告体制に不備があり、さっちゃん様の計画に多大な支障をきたしました事を、あらためて御詫び申し上げます。如何様な罰でもお申し付け下さい。」

「気にしないでデミウルゴスさん。私も大事な事を忘れていたり、ハゲ達を甘く見ていたから。」

「私達のフォローも不足しておりました。誠に申し訳ございません。」

思わぬアクシデントの発生に、ナザリツクよりNPCの中でも最高峰の知略の持ち主であるデミウルゴスが馳せ参じていた。彼は事態を把握すると即座に様々な対処案を献策した。このままいけば都市への被害は最小限に抑えられるだろう。

ブレアデス達はエ・ランテルの各所でアンデッドの発生に備えている。現在は都市の居住区内でアンデッドの発生には至っていないが、万が一にそなえての措置である。これには都市長のパソナレイも感涙であった。

「さっちゃん様の寛容さに心から感謝いたします。今後はこの様な事が起こらぬ様に、さらなる情報収集に努めます。それでこの後の事ですが、彼らの作戦ではかなり問題もあるかと愚考しますが？」

「ああ〜アレね。まあ：彼らにも意地があるってことでしょ。」

彼らが戦いの前に相談していた事は知っている。私としては頑張つてとしか言いようが無い。どうなるうと結果は決まっているからだ。出来ればうまくいつて欲しいけどね。

「その意地で大局を見失つては身も蓋も無いと思えますが？」

「私もそう思うよセバス。君と意見が合うなんて奇遇だね。」

「そうですね、デミウルゴス。」

「まあ、彼らには頑張って貰うとして…あいつらの処置は任せちゃってOKなんだよね？」

「全ての手筈は整っておりますのでご安心を。さっちゃん様は彼らの雄姿をごゆっくりお楽しみ下さい。」

デミウルゴスがいれば安心だ。言われた通り漆黒の剣（白いのに）を応援しよう。頑張れー!!



「カジット様…来ました。かなり高位の冒険者かワーカーと思われる。それとあの魔獣も!?!」

霊廟の前では邪教集団ズーラーノーンの幹部カジット・デイル・バダンテールと直弟子6人が儀式を続けていた。カジットこそが漆黒の剣を魔法によりゾンビへと変えたハゲである。彼らが召喚したアンデッドが殲滅されたのは、召喚主とのリンクで判っていたらしく、かなり警戒している。

「私達の目的は判っているでしょう。ンフィーレアさんを返していただきます。」

「貴様らは!! バカな! 確かに殺して——ゾンビになったはずでは? ありえんっ!! それにその姿は?」

やってきたのが殺してゾンビになったはずの漆黒の剣と知り、カジットが驚愕する。その変わり果てた(白い)姿にも。

「さっきぶりだなハゲ。弟子を取り返しに来たぜ。それとあのキチ女はどこだ? アイツには大事なモンを預けたままになっていてな。」

「言ってくれるじゃねえか三下あ、この英雄の領域に達しているクレマンティーン様に向かつてよお……それでお前らどうなってやがる? 復活魔法……? それにその格好は……」

霊廟の奥から現れたのは、漆黒の剣全員を、たった一人で惨たらしく殺害した女戦士クレマンティーン。ズーラーノーンの幹部であり、現在は国を裏切り出奔したが、かつてはスレイン法国最強の特務部隊、漆黒聖典第九席次「疾風走破」と呼ばれた人類最高峰の戦士である。短めの金髪で速度を重視した軽装だ。

その鎧には彼女が今まで、文字通り狩ってきた冒険者達のプレートが貼り付けられている。中にはミスリル——オリハルコンプレートすらある。

驚愕するだけのカジットとは違って、激昂しているように見えても、心中では事態を

把握しようとして冷静に思考しており、微塵の油断も無い。

「あれえ、クサ○ンテイーヌさんじゃないですかあ？こそこそと隠れていたみたいですよ、逃げなくてもよかったですかあ？」

「あ、あ、ああん？このクソアマア……手前エドんな目に遭わされたのかももう忘れたのかよオ？また××されてえのかよ？」

「忘れるわけが無いでしょう。それに今度はこつちが貴女のクサレ○○○にこの杖を××してやりますよ。」

「二ニヤ……女子が口にしてはいけない言葉なのである。」

惨殺された漆黒の剣の中でも、特に執拗に甚振られた二ニヤの怒りは凄まじいが、これは相手の冷静さを奪う作戦だ……と思う。

「カ、カジツト様……如何なさいますか？」

「馬鹿な……まさか……ありえん……これは儂が長年追い求めて来た……」

ザシュツ——ドスツ——ドサドサ

動揺しているカジツトの隙について、ペテルとルクルツトがそれぞれ弟子を攻撃する。

「げえっ!!」

「今の動きっ!!カジツちゃん、こいつらは何かおかしい！さつきまでと別人だ。お前ら

どうなつてやがる？」

「もの凄え力を持ったお嬢様に、もの凄え力を戴いたんだよっ!!」

「まずは周りの奴らを片付けますよ!」

ペテルに伝えて全員が動き出す。ステイレットを抜き放ったクレマンティーヌは二ニヤがマジックアローを放つ。放たれた光の矢は4つ、クレマンティーヌ程の戦士には大したダメージにならないが、一瞬でも動きを止めるのには充分だ。そのままダイスが怒涛の如くメイスを振るい続ける。何発かクレマンティーヌの身体を掠めるが有効打はない。

「うおおつ、武技《剛撃》」

「遅いんだよっ! 《流水加速》そして《無足衝突》!!」

ダインの一撃を余裕で交わし、そのまま続けて発動した武技が炸裂する。

「ぐわあああーッ!」

「ダ、ダイーンツ!!」

直撃を受けたダインは身体から噴水のように血を噴き出す。クレマンティーヌから見ても致命傷で、まずは一殺、そして予定通りと舌舐めずりする。回復役を最初に潰すのが彼女のセオリーだ。次はマジックキャスターをスツと云ってドスツといきたいが、あのガキは最後まで残した後、たつぷりと時間をかけて徹底的に廻り殺すと決めてい

る。

適当に甚振って戦闘不能にした後はカジットへの加勢だ。漆黒の剣は強くなっているとはいえ自分の敵ではないと確認した。だがあの魔獣は別格だ。あいつは自分と互角に戦える強さだ。決して油断できない。

「ちよつとはマシになったみたいだけど……クレマンティーヌ様に舐めた口をきいた事を後悔させてアゲル♪」

純白の英雄譚（下）

「フンッ！そうれっ！」

ハムスケが尻尾を振るうと一瞬で2人の弟子が身体に風穴を開けて絶命する。

「クソッ……だがこれなら！」

我に返ったカジットが懐を手を入れるが、残りの弟子もペテルの剣とルクルットの弓で倒される。これで戦えるのはカジットだけとなるはずだった。

「儂の計画を邪魔する愚か者めがっ！既に十分なエネルギーは集まっているのだ！死の宝珠の力を見るがいい！」

カジットが取りだしたのは、ただの石ころにも見える無骨な球だ。カジットがそれを掲げると死の宝珠から負のオーラが拡がってゆき、倒されたはずの弟子達が起き上がる

——ゾンビだ！

「いまさらゾンビが増えても倒すだけ！」

ゾンビ達はすぐに首を撥ねられ、今度こそその動きを止める。

「ふはははは……それでいいのだ。十分な負のエネルギーの吸収だ！」

カジットの持つ死の宝珠が、先程以上に負のオーラを放つ。そしてズシューンツという

地響きとともに現れたのはスケリトル・ドラゴン——5年の歳月を掛けた努力の結晶だ。

「ここまで言われたとおりだと笑っちゃまうな。ニニヤっ交代だ！いくぜペテル！」

「次は私達が相手ですっ！」

ペテルとルクルットは、カジットとスケリトル・ドラゴンを残したままクレマンティーンへと突撃する。ニニヤはしっかりと頷くと、純白のローブに手を入れ何かを取りだす。

「ぐわははははは！本当に愚か者だ。スケリトル・ドラゴンが魔法へ対しての絶対耐性を持つている事を知らんとは。そのマジックキヤスターのガキでは手も足も出ないだろうよ！」

カジットは相手の無知に勝利を確信して嘲笑する。全員を殺す事は無い。何よりこいつらにはどうしても確認しなければならぬ事がある。それはカジットが長年渴望して止まなかった事への道標となる可能性がある。次々と事態が好転していく事にカジットは歓喜に包まれる。

「それがしの事を忘れているのではござらぬか？」

その場に残ったハムスケがスケリトル・ドラゴンと対峙する。体躯はスケリトル・ドラゴンが遥かに大きい、ハムスケは全くパワーで劣っていないどころか、怒涛の攻撃

「つぎかしいんだよコラあ！《超回避》！そして攻撃つてのはこうやるんだよっ！《疾風走破》《変幻自在》」

「ぐわっ」「クツ」

ペテルとルクルツトを相手に互角以上に戦いを進めるクレマンティーン。2人の連携攻撃をもつてしても、未だに一撃の有効打も与えられていない。そしてペテルとルクルツトは致命傷こそ無いが、多くの攻撃を喰らっている。

「舐めるなよ！ザゴが2人がかりで来ようが、クレマンティーン様に勝てると思っただか？」

「さすがに私達2人では厳しいでしょうね。」

「舐めてる訳ねえだろ！テメエの強さはよく解つてるさ。だけだよお——」

「3人でなら分らないのである！武技《剛撃》!!」

戦闘開始直後に即行で戦線離脱したはずのダイスが、クレマンティーンヌの背後から会心の一撃を喰らわせた!!

「ぐっ…が…ぎ…何で？確かに3発、間違い無くブチ込んでやったはず…なのに？」

さしものクレマンティーンヌも無防備な背後への一撃は相当堪えたようだ。格下とはいえ油断ならない2人に集中していたのが仇になった。速度を重視した彼女独自の防具（ビキニアーマー）もダメージが増える要因になった。口から血が零れてくる。背骨

は何とか無事だったが内臓をやられたようだ。まだ戦闘に支障はないが回復の当てが無い。

国を出奔した際に持っていたポーションは、追手の「風花聖典」との戦いで使い果たしていたが、この国で自分とまともに戦える戦士は5人……この都市には1人も居ないはずだった。だから回復アイテムなど用意していなかった。

先日まで周辺国家最強と云われる王国戦士長ガゼフ・ストロノーフがエ・ランテルに滞在していたと聞いた時は、機会があればその思いあがりを修正してやるつもりでいたのにと、軽く失望していた位だ。

「いったいどうやって? それに他の2人もあつたはずの怪我が無くなつて……何時の間に回復を?——まさか! その装備は神の使つていたマジックアイテムかあ?!」

クレマンティーヌがいたスレイン法国には、嘗て「ぶれいやー」と呼ばれた神々が使用したと伝えられる、凄まじい秘宝の数々が遺されている。その中には身に着けているだけで治療の加護が得られる装備もあつた。漆黑聖典時代のクレマンティーヌも幾つかの秘宝を貸与されていて、それらの有用性は十分に承知していた。

そしてその様な秘宝は大変希少で、間違つてもそこらの冒険者風情が手に入れられる代物ではないという事も。それこそ王国中から掻き集めても片手の指で収まるような希少品だ。

「我らには戦乙女の加護がついているのである。」

「言つただろ！もの凄え力を持ったお嬢様に、もの凄え力を戴いたんだつて！」

クレマンティーヌは怒りを押し込めて冷静に思考する。このままではまさかの事態もあり得る。それならばいつそ逃亡する事も考えるが……

一方の漆黒の剣3人も攻めあぐねていた。ダインの復帰で初撃を与えはしたが致命傷ではない。自分達の特技で仕留めるのは困難だ。不意を打つ事が出来なければ、あの疾風のような女に攻撃が当たらない。やはり漆黒の剣の最大火力であるニニャ——「ザ・スperlキヤスター」の力が必要だ。

互いが迂闊に動けずに膠着事態に陥るが、もう一方の戦線で事態が動く。

「見よ！死の宝珠の力を！」

カジットの掛け声とともに、二体目のスケリトル・ドラゴンが呼び出される！これでカジット側は一気に形勢逆転だろう。あの魔獣といえども2体同時なら梃子摺るはずだ。ムカつくマジックキヤスターの女はスケリトル・ドラゴンには全くの無力。まずはカジットに合流してこの1対複数という不利を挽回すれば何とかなる！

あんなハゲでも自分と並ぶズーラー・ノー・幹部だ。相性もあるが、自分が戦つても3割くらいの確率で負ける可能性があるハゲだ。

「残一念でした♪誰か助けに行つてあげないと、あつちはマズインじゃなあい？」

「何を言っている、狂ったのか貴様？ スケリトル・ドラゴンが魔法へ対しての絶対耐性を持っていると教えてやったのを忘れたのか？」

「こちらからも教えてあげましょう。スケリトル・ドラゴンが持つ魔法耐性は第六位階以下の魔法を無効化するというもの。だからこれから発動する魔法は無効化出来ません。」

あまりにも淡々と語るニニヤの言葉が、かえってカジットに確信させる——決してハツタリやブラフではないと。

「僕を救ってくれた、偉大な御方に与えられた力を今からお見せします！ 第七位階魔法《ホーリー・スマイト／善なる極撃》」

ニニヤが持っていたスクロールを拵げると、巨大な力を感じさせる魔法陣が展開される。その力の奔流はカジットに絶対の死を感じさせる。

「何故だ？ 儂が5年の歳月をかけた努力の結晶が！ 全てがこの僅かな時間で崩れ去るというのかあ？」

極太の光線がスケリトル・ドラゴンを風払う。魔法への絶対耐性を持つはずの巨体が溶ける様に消滅していく。

「貴様らなんぞに儂の5年間の努力！ いや30年以上も忘れえぬ想いを無に帰す資格があるものか！ それもつ…それも何も知らずに、よりにもよって儂の前で奇跡を享受して

いる貴様ら何ぞにいいー!!」

スケリトル・ドラゴンを跡形も無く消滅させた光線がカジットを飲み込んでいく。「貴方の想いに興味はありません。ですが安らかに眠って下さい。」

ホーリー・スマイトはカルマ値が悪に傾いている程ダメージが増大する神聖属性魔法だ。当然アンデッドであるスケリトル・ドラゴンは塵一つ残さずに消滅した。しかし邪悪なネクロマンサーとして多くの死を振りまいてきたはずのカジットが、所々が消失し全身が爛れているものの、辛うじて死体の原型を留めていた。彼にも一片の善なる心が残っていたのだろうか？

「奪われる辛さはよく知っていますよ。貴方は他の人もそうかもしれないと考えが及ばなかったのですか……」



カジットが斃れ、この場で孤立無援となったクレマンティーヌは、それでも闘志を新たにしていた。

「フフフ…第七位階魔法？あの魔封じの水晶と同等の魔法…おもしれえじゃねえか。」

スレイン法国の暗部に属していた彼女は、一般的には第六位階が最高とされる魔法

に、人類が単体では到達不可能な、さらに上の位階がある事を知っていた。法国に伝わる最秘宝と同様のアイテムを複数所持している可能性は低いが、だからといって警戒を怠るのは愚者のする事だ。

「もう油断も遊びも無し。最速で最短でまっすぐに……一直線に!!——あの女を殺す!」
《疾風走破》《超回避》《能力向上》《能力超向上》

四つの武技を同時発動させ、ニニヤへ向けて突撃する。残りの3人の事は無視する。奴らの攻撃は致命傷にならない。もつとも危険な女を確実に潰す!その次に脅威になる魔獣が、何故か一歩引いた場所で戦いを眺めている今が勝機だ。

「死つねえええつ!!」

その場の誰も追いつけない速度でニニヤへと迫るクレマンティヌ。3人の妨害をものともしない速度だ。ニニヤは必死に避けようとしているが、たとえ急所を外されても問題ない。ステイレットがニニヤの左肩に突き刺さる。

「まだ終わりじゃないんだよ!」

ここでクレマンティヌは魔獣へ止めを差す為に温存していた切り札を切った。彼女が持つ4本のステイレットに込められた魔法の1つ《ファイアーボール／火球》を開放する。ステイレットに込められた魔法は1度しか使えない。補充が簡単ではない為に、そう簡単には使えないが勝負所で使わない選択は無い。

「ぎやあああ〜!!」

ニニヤの左肩から炎が噴きあがる。あまりの激痛にニニヤは地面を転げ回る。だがその隙に背後からペテル達3人が同時に襲いかかる。

「《衝突剣》」「《痛打》」「《連射》」

「そうくると読んでいたっ! 《不落要塞》」

背後から加えられたペテル達3人の同時攻撃を見こしていた彼女は、もう一つの切り札である武技《不落要塞》によつて、ペテル達の攻撃を完全に無効化する。一部の天才しか使用できない防御系武技の最高峰だ。

「今度はこつちの番だ! 覚悟しやがれ!」

《不落要塞》での消耗と先程のダメージを感じさせない猛攻で、ペテル達を攻め立てるクレマンティーヌだが、彼らの想像以上のしぶとさに決定打に欠けていた。さらにダインと同様に、あれほどの致命傷を与えたはずのニニヤまで戦線に復帰しようとしている。

「ハアハア…:てめえら…:人間じゃねえな? 何者だ…:ヴァンパイアには見えねえし…:ハアハア…:それに、アタシにやり返したくて…:魔獣に手出しさせなかったのかよ?」

あまりの疲労に、時間稼ぎと停戦交渉すら視野に入れたクレマンティーヌが問いかける。ここまでくれば漆黒の剣達の実力を認めざるを得ない。

「その通りです。そしてそんな私達を圧倒している貴方は凄まじいですね。」

「キチ女って言ったのは取消すぜ。アンタは凄え戦士だ。」

「それ程の力を持ちながら道を踏み外すとは…人類の損失なのである。」

「本当に残念です。貴方の様な方がその力を正しく使ってくれれば…」

漆黒の剣もクレマンティーヌへの復讐心はだいぶ消えていた。その実力を称賛すらしていた…上には上がいる事を解つたうえで。

「ありがとー、これでもかつては人類の守護者なんて言われてたんだけどね。」

「それなら降伏…いえ停戦していただけませんか？ンフィーレアさんが無事なら我々としては、それ以上は望みません。」

「それもいいかもねー。でも人外相手に引いたなんて事になると…」

クレマンティーヌが思ったのは、人外の存在に屈せないという、捨てたはずの漆黒聖典としての意識——これがもつと強大な、それこそ神の様な圧倒的な実力を示されていれば違っていたのだらうが…

——ギヤリギヤリギヤリッ!!

何が起こったのか理解できない一瞬で、クレマンティーヌはボロ雑巾の様になっていた。顔面から上半身がズタズタに引き裂かれ、ネコを思わせる端正な顔立ちや、肉感的な肢体は見る影もない。かろうじて生きているのが、口があつたはずの場所から漏れる

コヒューコヒューという呼吸音から確認出来る。

クレマンティーヌの傍で佇んでいるのは、今までハムスケの頭上で何もせずにはいたぶーにやんだった。

「ニヤンニヤニヤニヤン！（ハムスケ、こいつらに言っとけ！まったく…主人の計画に無い事しやがって。コイツの行先は決まってるんだぞ。）」

「ヒイイ、わかったでござるよ兄者。漆黒の剣の皆、姫より時間切れとの御達しでござる。ンフィーレア殿を連れて帰ってこいとこの事でござるよ」

あまりの結末に彼らが茫然としていると、その場に浮かび上がる様に現れる姿があった。彼らを使徒として生まれ変わらせたエヌスリーである。

「よくやったなお前達。残念ながら時間切れになってしまったが、中々の健闘だったぞ。さっちゃん様も御喜びだ。」

「エ、エヌスリー様…もしかして最初からずつと?」

「戦乙女の加護と言っていたな?分かっていないか。私が見守っている限り、お前達には私の加護が与えられているんだ。これがなければ危なかったところだぞ。」

突然の打切り宣言とダメ出しの通告に漆黒の剣は呆然とするしかなかった。



靈廟の地下に隠された祭壇で、ンファイレアを発見した彼らはドン引きしていた……
「おいおい……やっぱあのクレマンティーヌって女はイカれてるな。それともハゲの方の趣味か？」

「これはひどい……」

「ゴクリッ……」

「ニニヤの顔が真つ赤なのである。」

囚われのンファイレアはスケスケの薄布で作られたあぶないローブを纏い、色々なところが丸見えになっている。そして頭を覆うようにして蜘蛛の巣の様な金色のサークレットを付けていた。さらに彼の前髪に隠れた両目は横一文字に切り裂かれていて、両目から流れる血は涙の様だった。意識はあるらしいが、かゆ……うま……と意味不明な事を呟いている。

「と、とにかくンファイレアさんを治療しないと！ダインはポジションの用意を！」

「俺の弟子にこんな格好させやがって……おいニニヤ！あんまりジロジロ見てんなよ！何か羽織る物はないか？」

「ななな……何を言っているんですか？」

「ふむ……治療の邪魔なので、サークレットを外すのである。」

ダインはンファイレーアを治療する為にサークレットを外すと、さっちんから受け取っていた赤いポーシオンを頭から振りかける。ンファイレーアの全身が緑色に輝き、みるみる両目の傷が塞がっていくが…

「アーツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤwwww」

突然ンファイレーアが奇声をあげる。おもむろに立ち上がると不思議な踊りを始める。

「タリラリラ〜ン♪アヘアヘアへ〜♪」

ジヨバツ…プリヨリヨリヨリヨリヨ (※以下自主規制)

「酷え事しやがる…ちくしょう…」

「傷は治っているのでポーシオンに問題はないのである。しかし心の傷は治せなかったのである。」

「きつと凄まじい拷問を受けて、心が壊れてしまったのでしよう。御気の毒に…」

「あいつら許せない…こんなに酷い事を…」

冒険者用のマントに包まれ、動けないように縛りあげられたンファイレーアを見て漆黒の剣は考える。だがそれほど深刻に思っている訳ではない。ンファイレーア救出と言う最優先の目標は果たしている。あとは偉大な主人なら不思議な力で何とかしてくれるに違いない……。

「とりあえず帰るとしようぜ。よっこらせと…」

叡者の額冠は着用した者の自我を奪う事で、着用者をたかだか第七く第八位階魔法程度しか使えない不良マジックアイテムにしてしまう呪いのアイテムだ。こんなものぶつとんだ性能が多いユグドラシルでも無かったというか、制作する事も考慮されないだろうゴミアイテムだ。

しかも一度装備してしまつたら、装備を解除すると同時に発狂とか、とんでもない悪質なトラップアイテム、しかも装備可能な条件を満たすのが100万人に1人とか需要なんて全く無いゴミ以下のアイテム。これを作った奴は頭がおかしいと断言できる。

こんなになつてしまつたインフィーレアを見たリイジーはとても悲しんだ。勿論そのままにはしておけない。ここまで壊れた精神を治せるのは、ナザリックでも治癒魔法に特化したペストーニヤかギルメンの能力を使えるパンドラだけ。当然リイジーに治療を申し出て、くれぐれも頼むと念を押された。そうしてナザリックにインフィーレアを連れて帰ろうとしていると、私に悪魔が囁いた。

「さつちん様、これは非常に都合のいい機会です…ゴニヨゴニヨ」

「ええ〜っ?! そんな事してイイの?」

「何を仰います (ニヤリ) …ゴニヨゴニヨ」

「あれあれ? これって…インフィーレアにとつてもイイ? 事…」

「その通りでございます! これを公表すれば…ゴニヨゴニヨ」

「う、うん…：そうだよね！彼にとってもその方がいいよね！」

「もちろんで御座います（ニッコリ）さらに…：ゴニヨゴニヨ」

「そっかくそうだよね♪ウケケケケケケ…」

デミウルゴスの提言はこうだ

①・流れ星の指輪を使ってンフィーレアのタレントをボツシユート&ついでに治療
 ②・何てことだ！治療の副作用でンフィーレアのタレントが失われてしまった！でも不可抗力だし私は悪くないよ！

③・今回の原因になった危険な能力が無くなってンフィーレアはハッピー♪治療も出来てさらにハッピー♪

④・私は凄いタレントをゲットしてラッキョ♪治療費としては格安だし？他に治せる人は居ないぞ！

⑤・大変な目に遭ったンフィーレアはカルネ村で静養（永久に）だ！エンリと一緒に超ハッピー♪

⑥・優しい私はンフィーレアに別荘（隔離ポーション研究所）を用意するぞ！何て慈悲深いんだ！

⑦・安全にも配慮するよ！優秀な警備員（シモベ）が24時間ンフィーレアを警護（監視）しちゃう！

⑧・孫を心配するお婆ちゃんにも優しい配慮（研究者2号確保）
誰も損をしない素晴らしいアイデアだ。ウケケケケケ：

こうしてンフィーレア君は自然溢れるカルネ村へ移り住む事になった。事件の影響は大きかった様で、一部の記憶が欠落したり、タレントが失われてしまうという後遺症もあったが、可愛いエンリに看病されたりしてとても幸せそうだ。これからは新たなポーション作りに御婆さんと一緒に勤しんで貰おう。

周辺国家の動向

リ・エステイーゼ王国は内外に多くの憂患を抱えている。国内に於いては六大貴族の権勢による王の影響力、支配基盤の脆弱化。貴族の腐敗による国力低下、「八本指」と云われる闇組織による治安の悪化、それら全ての影響で貧困に苦しむ平民層。

国外ではバハルス帝国との間で繰り返される戦争、これは農作物の収穫期を狙うという悪辣さで、徴兵される平民の戦死や生活への影響で、国力への悪影響が取り返しのつかない域に達している。そしてその帝国に表立って同調こそしていないものの、明らかに黙認や後押しをしているスレイン法国。唯一静観の構えであるアーグランド評議国は竜王が治める亜人達の国家であり、交流もほとんどない。

国王ランポツサ3世は、帝国兵による王国辺境村落への襲撃に端を発した一連の騒動に頭を痛めていた。襲撃事件は自らの信頼する王国戦士長ガゼフ・ストロノーフによって解決されたが、帝国兵を撃退した謎の人物アインズ・ウール・ゴウン、帝国兵の正体は偽装したスレイン法国の兵であった事と、主力部隊は国外へ逃亡済み——問題は多く残っている。さらに……

「それでは先の詰問に対する、エ・ランテル都市長。パナソレイ・グルーゼ・デイ・レット

ンマイアからの返答は来ていないのだな？」

「その…再三に渡り使者を遣わせているのですが…「アインズ・ウール・ゴウン様の都合は全てに優先する」の一点張りです。さらに王都へ搬送予定だった物品の荷留の解除はおろか、納税の無期延期などという事まで言われる始末でありまして…これはもう——」

「それでは謀反も同然ではないか！税については王の直轄領の問題であり、我らが口を挟む事ではない。しかし荷留についてはそうはいかん！私が懇意にしている商会からも嘆願されているし、何よりエ・ランテルは帝国や法国からの物資が集積される交易の要！これを放置しては王都、いや国内の物流に重大な支障が生じる。」

「その通りだ！エ・ランテルは王家直轄領であるのですから、これによって発生した損害は王家に弁済して頂かねばなりませんぞ！」

「当然でしょう。」「然り！」「全くですな。」

王に敵対する貴族派閥からパソナレイの謀反を糾弾する声と、王への批判声がある。彼らが問題にしているのが、自身の利益についてばかりだという事が、この国の現状を顕わしている。

国王ランポッサ3世が信頼する数少ない忠臣で、中でも特に優秀であつた事もあり、王家直轄領の要でもある交易都市エ・ランテルの都市長に任じたパソナレイによる謀反

とも言える言動が、ランポツサ3世を悩ませていた。特にエ・ランテルからの税収は王家の収入の3割強を占める財源だ。このままでは王家の弱体化がますます進む事になってしまう。

「ストロノーフ戦士長は何かご存じではないのですか？先日まで事件の対処でエ・ランテルに滞在していたのですから？」

そうガゼフへ訪ねたのはエリアス・ブラント・デイル・レエブン侯。王国六大貴族の1人で、王派閥と貴族派閥の間をコウモリのように行き来する人物として忌み嫌われているが、実際は両派閥のバランスーとして均衡を取っている王派閥影のトップで、王が最も信頼する貴族でもある。

「エ・ランテル滞在中にパナソレイ殿との面会は出来ませんでした。都市に滞在中のアインズ・ウール・ゴウン殿の応対で時間が取れないとの事で……但し、物資の提供や宿泊場所の手配などの便宜は問題無く図って頂きました。」

「何だそれは？」「どういう事だ？」「戦士長もグルではないのか？」

貴族派閥から声上がる。王派閥の者からも擁護する声は無い。パナソレイの言動が異常なのはあきらかだからだ。

「皆様には落ち着いて頂きたい。それでストロノーフ戦士長？アインズ・ウール・ゴウン殿はどういった人物のですか？カルネ村で対応したのは戦士長だったという話です

が？」

「彼の御方自身は非常に仁徳ある御仁とお見受けしました。危険を顧みず、さらに何の見返りも求めずに無辜の民を救って下さったのですから。」

「たいした事ではない!」「何か裏があるに決まっています。」「だいたい戦士団が不甲斐無
いから帝国兵に好き勝手されるのだ!」

ガゼフの言葉の裏に隠された意を感じた貴族が、口々に罵りの言葉を吐く。

「それで他には?あれだけの兵力を撃退したという事は、かなりの兵を連れていたとい
う事ですか?」

「我が国で勝手にその様な!」「これは重大な問題ですぞ!」

「アインズ・ウール・ゴウン殿の他には執事の男性とメイドが数名でした。他に妹君が同
行していた様ですが、危険を避けるために避難していたとの事です。法国兵を倒したの
はゴウン殿が魔法で召喚したモンスターという話です。」

「マジックキャスターだと?ますます怪しい。」「他国の貴族という話も怪しいな。」

王国に於いてマジックキャスターの地位は低い。これは国内に優秀なマジックキャ
スターが殆ど居ないので、その重要性を理解出来ないのだ。多少は便利な存在という認
識だ。これにより優秀な者はどんどん他国へ流出し続け、国力低下に拍車がかかってい
る。

「私自身もそのモンスターを見ていないので解りかねます。ただゴウン殿の装いはこの場にいる皆様と比べても遜色がないどころか、それ以上の豪勢な物でしたので、一介の者だとは思えません。それにエ・ランテルでお会いした妹君も非常に豪勢な出で立ちでした。」

「ふざけるな!」「我らを愚弄するか?」

「とにかく落ち着いて頂きたい!それで戦士長はそのゴウン殿から詳しい話を聞かなかつたのですか?」

貴族達の怒りの沸点の低さに呆れつつも、レエブン侯はガゼフに話の続きを促す。

「聞こうとしたのですが、差し出された書状——パソナレイ殿が発した物ですが、「ゴウン殿に関しては自分が責任を持つので詮索は無用」との事でしたので不問としました。私は貴族間の事情には疎いものですから。」

「それは無責任ではないか?」「そんな世迷言を鵜呑みにするとは?」

貴族派閥から批判の声があがるが、ガゼフが政治的な事に口を挟むのを拒んできたのは貴族達だ。王派閥の者でさえ、平民出身のガゼフを低く見ているので、あくまでも王の武力の象徴としての役割しか求めていない。ガゼフ自身もそれでよいと考えているのだが。

「もうよい。戦士長の行いに問題は無い。パソナレイについては改めて使者を遣わせ

「火の巫女姫を殺害し、叡者の額冠を奪い出奔した「疾風走破」の行方も不明だ。追手の風花聖典も全滅。漆黒聖典の第九席次は伊達ではないか。」

「そして何と言っても——」

スレイン法国で起こった一連の騒動、その発端はリ・エステイーゼ王国弱体化政策の一環として極秘裏に実行された王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ暗殺計画。様々な工作をしたうえで特務部隊である陽光聖典を派遣した。必勝の切り札さえ携えさせて。

しかし陽光聖典の動向を魔法により定期的に監視していた土の神殿で事故が起こった。大儀式による第八位階魔法《プレイナーズ・アイ／次元の目》を行使していた儀式の間に、突然響き渡る声があった。

「真に遺憾である」

非常に機械的な、淡々とした声で告げられた言葉の意味を考えようとした瞬間に、発動中のプレイナーズ・アイは中断され、その場にいた全員が意識を失った。事態が判明したのは数時間後だ。神官長達が戻らない事を不審に思った神殿の者が儀式の間へ入ると、その場に倒れている神官長や巫女姫達の姿があった。

全員が命に別条は無かったものの、生命力や身体能力の著しい弱体化、さらには魔法や武技などの能力を失ったり、中には小さな子供並みに弱体化した者までいた。

この事が報告されて、各神殿や行政機関が混乱した隙を付いたのか、火の神殿へ警護

の為に派遣されていた漆黒聖典第九席次、警護を任されていた本人による火の巫女姫殺害、神器の強奪という一大事に混乱はますます拍車がかかる。

さらにその三日後には、動向が不明だった陽光聖典の帰還だ。事件の対応中だった神官長達へ齎された報告は「任務の失敗」と「ぶれいやーとの遭遇」というものだった。

法国にとつて「ぶれいやー」は特別な存在だ。この国の建国の礎となつた「六大神」然り、その六大神を弑逆した「八欲王」然りだ。ぶれいやー達はユグドラシルという世界から来たと伝えられる超越者だ。その種族も能力も様々だが、ほぼ全てが人間を超越した能力と凄まじい力を秘めたアイテムを所有している。

またその目的もそれぞれ異なり、六大神のように人類を救う事に尽力した者もいれば、八欲王の様に己の意のままに力を振るい、周辺に凄まじい惨禍を撒き散らした存在も居る。大陸中央部の異形種の国にもぶれいやーらしき伝承が遺されている。二百年前に活躍した「十三英雄」にもぶれいやーが含まれていた。

そんなぶれいやー達にも境遇の違いがある。六大神はそれぞれが固い絆で結ばれた仲間同士であつたし、八欲王は互いの利害によつて集まつたギルドという集団、大陸中央のミノタウロス国に暮らしていた「口だけの賢者」と呼ばれるぶれいやーは単身でこの世界へやつて来た。

特に八欲王達は、現在も大陸南部の砂漠上空に聳える「空中都市」と呼ばれる拠点に

多くの従属神——えぬぴーしーと呼ばれる、強大な存在を従えてこの世界へやって来た。空中都市には今も「魔神」という存在になり果てた、嘗ての従属神が都市を守る為に存在している。

今回王国の辺境に現れたぷれいやーは「アインズ・ウール・ゴウン」。「ナザリック地下大墳墓」という拠点と共にこの世界へ出現したという事は、間違い無く複数のぷれいやーと多数のえぬぴーしーが居るはずだ。そしてアインズ・ウール・ゴウンは六大神の1人であるスルシャーナと瓜二つの姿だという！本人ではないのは、スルシャーナ様の従者で、法国に今も残るあの御方が何も言わない事から何う事が出来る。

「拠点を持つているという事は八欲王に匹敵する存在か…」

「虐殺を不快と言うからには、善性のぷれいやーなのではないか？ニグン達、陽光聖典を生かしたまま帰したのだし。」

「ニグンの話では、異形種が殆どであったという話ではないか？」

「墳墓で陽光聖典と戦ったのはアンデッドばかりだったと聞く。そして墳墓の主人もアンデッド…」

「口が過ぎるぞ！スルシャーナ様もアンデッドなのだぞ。異形種全てが人類の敵ではない——国民にはとても言えないがな。」

どこかの王国とは違って理知的な雰囲気では会議が行われている。参加している者も、

それぞれの主義主張の違いはあっても、あくまで国、そして人類という種の存続を第一に考えている。

「とにかく！こちらからは絶対に敵対出来ない。なんとか友好的な関係、可能であればその庇護下に……は難しいな。」

「とても国民が納得出来ない。先人を批判したくは無いが……」

「六大神を失った人類は団結する必要があった。その為には敵が必要だったのだ。」

「評議国とは最低限のパイプは保っている。その辺りの事情をお話しすれば何とかなるのでは？」

「あの白金の竜王はぶれいやーを忌避しているぞ。例外もあるが……」
ブラチナム・ドラゴンロード

どこかの王国とは違って建設的な意見が活発に飛び交っている。

「やはり直接に謁見して、あちらの真意を伺うしかないな。そしてこちらの事情を伝えて助力を乞う——最低でも不干渉……は無理だな。」

「あまりにも近過ぎるからな。法国の目と鼻の先ではないか。」

「そう！王国の愚か者達だ！あの愚か者が余計な事をしでかして、その怒りを買ってみろ！こちらにも飛び火するぞ。」

「その墳墓の近くの都市……エ・ランテルで、どこぞの貴族が冒険者を雇って調査させているという情報もある。未確認だがな。」

「王国には徹底的に圧力を掛ける。それと帝国の皇帝だ。あの者は優秀だが覇気が強すぎる。野心が過ぎれば国ごと滅ぼされるぞ。」

「皇帝は野心家だが、分を弁えている。法国との関係も良好だ。彼我の戦力差を理解しているし、可愛いものではないのか？」

スレイン法国とバハルス帝国の間には密約がある。帝国がリ・エステイーズ王国を滅ぼす事を黙認・協力する代わりに、帝国が王国北部を、法国が王国南部を併合する事が決定している。その比率は大雑把にだが8：2で帝国がかなり有利だ。理由は国是的にもアングランド評議国と国境を接する訳にはいかない事ともう一つの理由からだ。

王国滅亡後はローブル聖王国と協力して、アベリオン丘陵の亜人達を殲滅する事で人類の生存圏を確保する。当然だが帝国にも兵力・物資の協力を取り付けてある。その為の王国関連での譲歩である。この計画に聖王国のカルカ・ベサーレス聖王女は否定的だが、聖王国南部の貴族達は非常に協力的である。

いずれはトブの大森林やアゼルリシア山脈、あのカツツエ平野さえ制覇して3ヶ国に跨る人類同盟を成立させる！というのがスレイン法国の国家百年の計である。

「まずはそのナザリック地下大墳墓へ赴くしかあるまい。それも早急にだ！」

「無論賛成だが、派遣する人員は？ 面識のある陽光聖典のニグンは、当然だが同行させるぞ。」

「我らの力を示す意味でも漆黒聖典の何人かは加えるべきだ。」

「神器「ケイ・セケ・コウク」をカイレに持たせるというのは？」

「ばかな！ 仮にぶれいやーを支配出来たとしても他のぶれいやーや従属神が黙ってはいまい！」

神器「ケイ・セケ・コウク」は、あらゆる存在を一体だけ意のままに操れるという法国の最秘宝。そんなシロモノを究極の妹君に使おうとしていた等と誤解される事になつたら……

「そうではない。我らの力を示す為だ！ 六大神も言っていたというではないか？」「これだけのアイテム（ワールドアイテム）を持つ存在はぶれいやーでもごく一握り、これの所持者に敵対する者はまずいない」とな。」

「むうう……確かに。ケイ・セケ・コウクがあつたからこそ、八欲王もスレイン法国には迂闊に手出しが出来なかつたという話しだからな。」

「ケイ・セケ・コウクと同等の神器は、八欲王すら一つしか所持していなかつたと聞く。」「無銘なる呪文書と云われるアレか。かの空中都市にあるというが……あらゆる魔法の詳細が記されているそうだが、ケイ・セケ・コウクに比べて脅威は低いだろう。」

「いかにぶれいやーと云えども、かの神器に匹敵する物など持つてはいまい。万が一にも所持していたとしても、ケイ・セケ・コウクを持つ我らを敵に回す事はないだろう。」

ワールドアイテムを複数、それも10個以上も所有しているギルドがあつたなんて、いかにスレイン法国の神官長達でも想像の埒外だ。

「よし！ ケイ・セケ・コウクをカイレに持たせて同行させる。但し絶対に使用は禁止だ。あくまで我らの力を誇示する為だ。本人にも徹底させる。」

「漆黒聖典は隊長である第一席次は確定として、他はどうする？ 全員はさすがに無理だ。国防や万一の事態に備える為もある。」

「逃走中の元第九席次の事も忘れるな？ 観者の額冠だけは何としても奪還しなければならぬ。それには漆黒聖典の者で当らなければ無理だ。他の聖典では犠牲が増えるだけだ。」

「交渉を担う代表者はどうする？ やはりこの中の誰かが行かねば国としての面子が立つまい。」

「それは私が…私であれば万一の事があつても影響は然程ないでしょう…」

答えたのは土の神官長レイモン・ザーク・ローランサンである。かつては漆黒聖典に所属し、現在は特務部隊である六色聖典を束ねる法国重鎮中の重鎮である。先の事件で大幅に力を失つたとはいえ、その見識は健在である。彼であれば個性的な面子の多い漆黒聖典所属の者達も抵抗なく従うだろう。

「ばかな？ レイモン殿が失われたら法国にとってどれだけの影響が？」

「私に行かせてください。土の神殿の事は恐らくぶれいやーの怒りに触れたからでしょう。第八位階魔法へ対抗出来る存在は他に考えられません。それなら私自身が禊となる事で、僅かでも先方の怒りを鎮められれば……」

自らの犠牲をも厭わない彼の決意に、その場の全員が深い尊敬の念を抱く。

「レイモン殿の決意に深く感謝する。勿論だが無事に帰還する事を願っている。まずは同行者として漆黒聖典隊長、第五席次、第八席次、第十一次席次だな。」

「番外席次の彼女は？あれこそ法国最高戦力ではないですか？彼の御方も「既に私を超えている」と仰っていましたし……」

「危険すぎる。万一にも白金の竜王に彼女の存在が知られれば全面戦争だぞ！」

「漆黒聖典隊長の派遣でさえ、かなりの危険を冒しているのだ！」

「アーグランド評議国の白金の竜王は「ある理由」からぶれいやーには否定的立ち場を取っている。その竜王がぶれいやーの血を引き、さらにその力を完全に覚醒させた彼女の存在を知れば、只では済まないだろう。」

「番外席次の派遣はありえない。彼女には法国に遺された神器の守護という大任がある。残りはカイレ、陽光聖典のニグンだな。迅速かつ秘密裏な行動が求められる。他に余計な者は邪魔となる。」

「元第九席次の件が無ければ、風花聖典から何人か付けられたのだが……」

「あの男はどうだ？ 陽光聖典のニグンの弟……スタメンと言ったか？ 兄を超える逸材と聞いているが？」

「彼には元第九席次追跡と、叡者の額冠を奪還する任務を命じる。その功績をもって漆黒聖典の欠番に迎え入れる。」

「では早急に人員を招集して準備を進めましょう。完了次第、出立という事で。王国への釘差しも——」

こうしてナザリツク地下大墳墓に鴨（そこそこ高レベルキャラ）が葱（ワールドアイテム）を背負ってやって来る事が決定された。



バハルス帝国は周辺国家の中でも、現在もつとも勢いのある国である。さすがにスレイン法国には及ばないものの、国力の観点ではリ・エステイーズ王国を遥かに上回っている。治安も良く経済でも順調で、さらに法国と水面下で密約を結び、王国の分割・併合を目論んでいる。

その帝国の若き皇帝こそジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルニクスである。とある事情で童貞だが、別の意味での童貞はとつくに捨てており「鮮血帝」の異名を持つ

が、臣民からは歴代最高の皇帝と敬われている。大部分の貴族からも畏怖されているが、無能として肅清された元貴族関係者や苦汁を舐めさせられている王国貴族からは蛇蝎の如く罵られている。

そのジルクニフだが、帝国の発展に関する事に余念がない。いまは風下に甘んじているが、いずれはスレイン法国すら超えんとする野望を抱いており、その為に必要な「強者」についての情報収集に多くの労力・資金を費やしている。

帝国に最も不足しているのが国家に所属する強者である。この世界では個人の實力差が激しい。文字通り一軍に匹敵する戦力を持つ者というのが存在する。現に帝国の主席魔術師フルーダ・パラダインは単騎で帝国全軍に匹敵する。しかし帝国にはそのフルーダ以外に際立った強者が居ないのも事実だ。

帝国軍最強の四騎士と呼ばれる存在も、周辺国家最強と云われる王国戦士長ガゼフ・ストロノーフには全員で掛かっても勝てない。帝国にある闘技場にはガゼフに匹敵する「武王」というウオートロールがいるが、彼は国家に属しているとは言えない。

帝国で活動している冒険者も、最高峰のアダマンタイト級である「漣八連」「銀糸鳥」の2チームは純粋な實力では、他国のアダマンタイト級に劣ると云われている。帝国では軍人の專業が進んでおり、王国とは比べられないほど治安が良い。軍による定期的なモンスター討伐が実施されているので、冒険者組合も規模が小さい。

代わりに「ワーカー」という冒険者組合に属さず、非合法的な依頼も辞さない存在が幅を利かせているが、実力者とされるワーカーでも、冒険者というミスリルくオリハルコン級がせいぜいである。

「それでは報告にあつた「漆黒の剣（白いけど）」はミスリル級に昇格したが、実際の力はオリハルコン、もしくはアダマント級の可能性もあるのだな？」

「二部の冒険者からの申し立てでミスリル級に留まつたのであつて、組合としては実質オリハルコン級という扱いです。さらにトブの大森林に君臨していた伝説の大魔獣、森の賢王を従えています。」

「実際の功績も驚くべき内容です。ズーラーノーンによる大規模なアンデッド召喚——千体以上のアンデッドを殲滅、さらに首謀者である幹部2名の撃破です。これはアダマント級ですら困難な内容です。」

「メンバーのマジックキャスターであるニヤ氏はザ・スペルキャスターの二つ名で呼ばれ、魔法習得速度が常人の2倍というタレントを所持し、十代半ばでありながら既に第四位階魔法を使いこなすそうです。」

帝国ではメッセージの魔法を活用した通信体制が敷かれている。一般的に信頼度に欠けるという認識の魔法だが、帝国では伝える内容を簡潔な文章に限定して、それを一切の予断を交えず伝える事で情報の精度を保っている。これによりかなりの速度と正

確な情報伝達を実現させている。

「それは素晴らしい！その若さで第四位階に達するとは！魔法について遅れている王国でよくぞそこまで！もし帝国魔導学院の門を叩いていれば、今頃どれほどの領域に至った事か?!いや今からでも遅くは無い——」

「落ち着け、じい。報告の続きがあるのだろうか?」

ニニヤへ熱い視線を送った老人こそ、帝国の誇る首席魔術師フルーダ・パラダインその人である。人類の限界とされる第六位階魔法に達した、英雄すら超える「逸脱者」である。

「はい。まず漆黒の剣（白いけど）には有力な後見人が付いております。彼らへかなり高性能のマジックアイテムを与え、さらに森の賢王も、実際に使役しているのは後見人の少女という話です。」

「確かエ・ランテルに滞在中という他国の貴族——アインズ・ウール・ゴウンだったか? 帝国や法国でも聞いた事が無いが何者だ?」

「エ・ランテルではかなり派手に動いている様です。都市長。パソナレイは完全に取りこまれており、国王の命令すら無視してアインズ・ウール・ゴウンに便宜を図っていると事です。」

「例の法国による工作にも関わったという話しだったな。パソナレイは王の忠臣だった

はずだが……それに法国に提供した武具が無駄になったな。」

「カルネ村という開拓村で、帝国騎士に偽装した法国兵を撃退しています。それ以来、本人の動向は不明で、エ・ランテルでは妹のさっちゃんという少女が主に動いています。エ・ランテル近郊に発見された遺跡へ大量の冒険者を調査に派遣して、かなりの財宝を持ち帰ったそうです。」

王国上層部はおろか、法国ですら把握していない事まで入手している事が、帝国の情報収集能力の高さを物語っている。エ・ランテルに関する事は法国の情報網に殆どかかっていない。もし知っていれば法国の対応も変わっていただろう。

「その様な遺跡については聞いた事が無い。じいは何か知っているか?」

「私も存じておりません。現在、文献を調べさせております。」

「かなりの財宝が期待出来るかもしれないな……ドワーフとの交易も上手くいっていない事だし……王国領となるとワーカーを使ってみるか?」

「ただちに有力なワーカーチームを選別します。ダミーとなる依頼主の貴族も。」

皇帝陛下の部下は非常に優秀だ。この男、ロウネ・ヴァミリネンという皇帝が一目置く能吏である。

「そのまま話しを進めてくれ。但し絶対に足がつかない様に、細心の注意を払え。」

「他には何かあるか？未確認の情報でもかまわん。」

「これは物証が無く、あくまで漆黒の剣（白いけど）の証言なのですが…」

「構わない。話してみろ。」

「はっ。事件の首謀者であるズーラーノーン幹部はスケリトル・ドラゴン2体を召喚。そのスケリトル・ドラゴンを魔法によって倒したと——」

「ばかなっ!?スケリトル・ドラゴンは魔法に対する絶対耐性を持つのだ！有り得ん！それに…スケリトル・ドラゴン2体を同時になど私にも不可能だ。さすがはズーラーノーンといったところか。」

魔法の深淵を覗く事に全てを注ぎ、周辺国家でも随一の魔法知識を持つフルーダにとっては驚愕すべき情報だ。

「落ち着けと言ったぞ、じい。続きを言え。」

「スケリトル・ドラゴンを倒したという魔法は、後見人の少女が漆黒の剣（白いけど）のマジックキャスターへ与えたスクロールで発動させたとの事です。その魔法は第七位階魔法《ホーリー・スマイト／善なる極撃》というそうです。」

「ばかな…まさか…法国には人間には行使不可能な高位魔法を封じたアイテムが存在するというのが…」

「それは聞き捨て出来ない情報だな。徹底的に裏を取らせろ。予算・人員に糸目はつけ

ん。フルーダには魔法面での情報収集を頼む。それにしても…漆黒の剣（白いけど）と後見人のアインズ・ウール・ゴウンか…何としても帝国へ迎え入れたいものだ。金・物品・異性・地位…どんな物を与えてでもだ。」

こうして若き皇帝の目に留まった漆黒の剣（白いけど）と後見人のアインズ・ウール・ゴウン。以上が周辺の3ヶ国の動きだが…



「——以上が3ヶ国の動向になります。」

「フム…王国はどうしようもないな。放置でかまわん。邪魔な様なら…放っておいても消えるか？帝国はなかなか見所がある。皇帝も優秀だというし、国自体も好ましい。身の程知らずではあるがな…可愛いものじゃないか。そして何と言っても——」

「法国でございますね……」

「素晴らしいじゃないか♪わざわざナザリックまでやって来るんだ。たっぷりと…全力で歓迎してやろうじゃないか！さっちゃん達も呼び戻さないと♪」

その後のエ・ランネル

ンファイレア誘拐事件も無事に解決した事だし、一旦ナザリックへと帰還する事にした。お兄ちゃんからも「すぐく美味しい奴らが来るぞ」と言われたので丁度いいタイミングだ。漆黒の剣（白）は頑張ったご褒美にしばらくお休みだ。ルクルットはさっそくナーベラルとデートしにいくみたいだ。

人間を止めた？影響か、彼女の好感度も（僅かに）アップしてみたいで、ちゃんと名前を覚えたみたいだ。それまではペテルの名前をペテン（それはルクルットの事だ）とか、ニニヤの名前をニヤ（トロールの勇者ですね）と呼んでいたりした。なぜかダインの事は間違えなかったので、不思議に思っただけなら、「ダイン・ウツホワンダー」という微妙な間違い方をしていた。

よく調教されたファンであるルクルットは自分から「俺の名前が呼びにくいのが悪いからです。わかりました！そのまま下等生物と呼んで下さい」と言っていた。これはンファイレアにも見習って欲しいと思う。ンが最初だとちよつとね…

ついでにミスリル級昇格（本当はオリハルコン級もいけたけど一部からケチがついた）のお祝いに、装備をもう少し上のランクにしてあげようとしたら、「このままで（白

いまま)大丈夫です」と言われた。激戦を潜り抜けた装備なので愛着が湧いてしまったみたいだけど本当にいいの？

今日は新しく目覚めた力(笑)を試してみる予定だ。これから冒険者ギルドの訓練場を借りて、サンチャンと剣の練習だ。ンフィーレアから(本人に無断で)貰ったタレントは凄いい!あらゆる武器・防具が自由に装備出来るようになったのだ。代わりに私が持っていた「水属性ダメージ5%上昇」という微妙なギフトが失われてしまったが、全然OKだ。さらにこの能力を使えば、系統に関係なく魔法のスクロールが使用可能という便利さだ。

「お早うでござるよ姫。さあ、それがしの背に乗って欲しいでござる!シズ殿とエントマ殿が手入れしてくれたおかげでフワフワでモコモコになったでござる♪」
「どれどれ?わあっ!もこもこのふわふわだね♪」

ハムスケの体毛は見かけと裏腹に頑丈で、人間が武器で攻撃してもはじき返しちゃう強さだ。だからムギユウってするとチクチクしてしまうのだ。それを聞いたプレアデスが全身シャンプー&トリートメントでお手入れしてくれたのだ。

このシャンプーは鎧が装備出来ない動物系キャラの為のアイテムで、使うと体毛の物理防御力と魔法防御力がアップする効果があるので、ぷーにやんにも使っていたものだけど、こんなフワフワ効果まであったとは驚きだ!

こうしてハムスケに乗って冒険者組合に向かったけど、周りからの注目が物凄い！

「あれが伝説の森の賢王か!? 凄い迫力だな。」

「噂の「純白の英雄」達と一緒に、アンデッドの大群を倒して都市を救った正義の魔獣だ！」

「その背に乗っている美しく可愛らしいお嬢様は誰だ？」

「お前知らないのか？ さる偉大にして至高な御方の妹君だという話だ。」

「伝説の大魔獣もお嬢様の美しさに平伏して、自ら騎獣になる事を誓ったんだ！」

おおっ！ さすがハムスケだ。そして私もけっこう注目されているぞ。

「その御方とは、この近隣を荒らし回っていた帝国兵からカルネ村を救ったというアイ
ンズ・ウール・ゴウン様か？」

「アインズ・ウール・ゴウン様は王国の惨状に義憤を覚えて、都市長のパソナレイに人の
道を説いたそうだ。」

「悔い改めたパソナレイはアインズ・ウール・ゴウン様に忠誠を誓ったんだ。おかげで税
は今までの半分！ 治安も良くなった。」

「悪の王国に反旗を翻して、周辺の農村を加えて都市国家エ・ランテルとして独立する計
画が進んでいるらしいぞ！」

「それは素晴らしい！ こんなクソつたれな王国からはさっさとおさらばしたいもんだ！」

あれ??何かおかしな方向に話しが進んでいる様な?これもお兄ちゃんの計画何だろうか。

「アインズ・ウール・ゴウン様万歳!」「アインズ・ウール・ゴウン様万歳!」

「お嬢様かわいい!」「お嬢様かわいい!」「お嬢様かわいい!」

何だこれは!!どうしてこうなった?



エ・ランテルにある安酒場……そのカウンターで1人の男が酔いつぶれていた。商売とは言え、男の見苦しいくだに店主も辟易しており、表情にこそ出さないもの、さつさと帰れよコノヤローと思っっている。

「ちくしよおく……何であんなやつらが……俺だつて、本当ならこのおれが……」

男の名はイグヴァアルジ。少し前まではエ・ランテルに3つしかないミスリル級冒険者チーム「クラルグラ」のリーダーとして一目置かれていたが、現在はとある理由から白金級へ降格された上に、冒険者組合での依頼受諾を禁止され、多額の賠償金まで課せられるという憂目にあっていた。事は昨日の昼過ぎに遡る……

「いつたいたいという事だそれは!」

イグヴァルジ率いるクラルグラ達が依頼の報告に冒険者組合を訪れると、組合内は2つの話題で持ちきりだった。当然だが彼らにとつては初耳——彼らが依頼の為にエ・ラントルを離れていた数日の間で起きた事だった。イグヴァルジは冒険者組合が、帝国兵による襲撃事件の影響で都市外での依頼を凍結するらしいという情報入手してすぐに、組合長であるアインザックへ強引な売り込みをかけて「エ・ラントル近郊の森に潜む盗賊団の調査」という依頼を受けた。事実、依頼を受けた直後に都市外での依頼を凍結するという発表がされ、彼はほくそ笑んだのだった。

本来なら鉄く銀級で十分な依頼を、フォレストストーカーである自分の能力をアピールし、さらに不測の事態に対応するには銀級では不安という理論を展開して、既に依頼先が決まっていた案件に割り込んだのだ。ちなみにそのとき割を喰ったのが、当時は白くなかった漆黒の剣だった。

彼がここまで露骨な行為をしたのは、当然だが自分達の利益の為である。国の事とは無関係なはずの冒険者である自分達が、なぜ国の都合で制限を受けなければならないのか？という考えから、合法的に都市の外へ出る名分を得るための行為だ。

そして依頼事態は、ミスリル級としての実力はあつたクラルグラは1日と経たずに達成していた。出発した日の夜には、森の奥にある盗賊の罠を発見している。このあたりは優秀なフォレストストーカーであるイグヴァルジの功績だろう。

しかしイグヴァルジは、依頼事項を達成した後も2日間ほど森に滞在して、わざと帰還を遅らせてまで小金稼ぎに勤しんだ。帰還後の食いぶちを少しでも稼ごうという、ミスリル級にあるまじきセコさだ。

そうして他の冒険者を出し抜いた事に気分を良くして帰還した彼を待っていたのは「エ・ランテルで初のオリハルコン級チーム誕生?」「新発見の遺跡より超高品質武器を持ち帰ったライバルチーム」という、彼をあざ笑うかのような事実だった。

「どういう事なんですかね組合長?新発見の遺跡なんて話は、この俺には全く知らされていなかったんですが?エ・ランテルで最高位のミスリル級チームである俺達を除け者にしたという事ですか!」

まずイグヴァルジは、組合長であるアインザックに喰ってかかった。

「君が自ら志願してまで引き受けた依頼で、エ・ランテルを離れている間に情報が入ったからだか? (冒険者の情報収集は自己責任だろうが)」

「くっ…ですが、余りにも急な話しじやありませんか?未発見の遺跡ならじっくり時間を掛けた調査してものが必要でしょう?それに都市外での依頼は凍結されていたんじゃないですか?あいつらだけ特別扱いというのは不公平だと思えますがね?」

「早急に優秀な冒険者を複数派遣して欲しいという、遺跡の情報を提供して下さった御方の依頼ですね。(銀級冒険者の依頼に割り込んだ貴様がそれをいうか?)」

「その御方とやらはそんなに偉いんですか？強引すぎやしませんかね？」

「とても身分も力もある御方だ。都市長からも絶対に無礼が無い様に言われている。可能な限り便宜を図る様にもね！（挨拶代わりとして戴いた、オリハルコン製の短剣は素晴しかった！しかも魔法まで付与されている！）」

イグヴァルジが食い下がるが、アインザックは右の耳から左の耳へだ。そしてさつちんの賄賂は効果覷面だった様だ。ちなみに魔術師組合長も同様である。

「冒険者組合が貴族の横暴に屈するというのは、ちよいと……いや、かなりマズイんじゃないですか？こんな事が冒険者に知られれば……」

「都市長の斡旋を無碍に出来る訳ないだろう！それに君だって……随分と色んな貴族へ売り込みを掛けていたらしいじゃないか？（知っているぞ！お前がパトロン欲しさに貴族へ声をかけていたのを。もつとも相手にされなかつたらしいがな！ププっ）」

イグヴァルジの下卑た問いかけにも、アインザックは動じる事はないどころか、彼の素行を皮肉る余裕さえある。

「そ、そいつは誤解つてヤツですよ！あくまでいい依頼がないかという営業活動の一環です。」

「まあ、そういう事にしておこう。話しはそれでお終いかね？（帰れよ）」

凶星を突かれたイグヴァルジは慌てて誤魔化すが、アインザックはさつさと話しを打

ち切る気マンマンだ。

「そ、それでしたら俺達クラルグラも、その貴族様へ紹介して下さいよ！俺達はその遺跡に行けば、あいつらより凄いいお宝を持ち帰って見せますぜ。」

「ああ…その遺跡なら特に許可は必要ないぞ。お嬢様も「初回限定だよ」と仰っていたので行くのは自由だ。それにしても寛容で太っ腹な——おっと女性に対しての褒め言葉としては不適切だったな。オホン、お嬢様は準備金に金貨100枚（エ・ランテル予算）を各チームへ払ったうえに、遺跡から持ち帰られた武器についても全て冒険者の物にして良いと言って下さったんだ！（わかったら帰れよ）」

「なっつ!!（チクシヨ—！そんな美味しい依頼だったとは）」

イグヴァアルジは逃した魚の大きさに地団駄を踏む。ちなみにクラルグラが今回の依頼で得た報酬は、討伐したモンスターとの報奨金を合わせても金貨6枚ちよつとだ。話しを聞いただけの金・銀級チームでさえ金貨10枚の報酬があった事を考えると、彼の企みは大失敗だったようだ。

「彼らも感激していたよ。まあ…何人かはその武器を売却して「田舎へ帰る」と言って引退してしまっただが…優秀な冒険者がもつたいない——おお！感激といえば、重症を負った（負わされた）女冒険者に無償で治癒魔法を（メイドが）施したなんて事もあってね。まったく素晴らしいお嬢様だよ。（だから帰れよ）」

「そりやルール違反でしょうが？ 神殿が黙ってないはずだ!？」

「神殿からも献身的で慈愛溢れる行為だとコメントがあつたが？（帰れ）」

「ここにも賄賂が炸裂していた。神官のギグナル・エルシャイもニッコリだった。

「ま、まだだつ！ 漆黒の剣だつ！ あいつらがオリハルコン級とか何の冗談ですか？ いったいなぜ？」

「墓地で起きた事件を聞いていないのかね？ 千体以上のアンデッドを殲滅、あのズーラーノーン幹部2名の撃破、さらに拉致されたリイジー・バレアレ氏の孫の救出。十分にオリハルコン級と認められる偉業だよ。」

現在は彼らの功績を組合で協議中だが、オリハルコン級で問題なしという意見だ。この後で正式発表してから、後日プレート交換になる。

「そ、それ位の事は俺達だつて……」

「まず不可能だろう。首謀者の一人であるネクロマンサーのハゲはスケリトル・ドラゴンを2体同時に召喚したそうだし、もう一人の女戦士はその所持品から、多数の冒険者を殺害した事が確認された。殺害された者にはミスリル級はおろかオリハルコン級も含まれている。」

「それこそ銀級ごときには不可能はずだ！ あいつらは出鱈目を言つてやがるんだ！」
「衛兵にも目撃者が大勢いるんだがね。それに漆黒の剣（白）は、例のお嬢様が後見をさ

れているチームだ。それを疑うなんてとんでもない！口を慎みたまえ！」

「何だそりや!?何であいつら如きが?」

あまりにも見苦しいイグヴァルジに、いよいよアインザックも困り果てて来た。

「お嬢様が遺跡探索とは別にエ・ランテルでの案内を探していてね。品行方正と言う事で紹介したんだ。君に依頼を融通した件の詫びもあつてね。しかしさすがはお嬢様だ！きつと彼らの将来性を見抜いていたに違いない。そして私の目に狂いは無かった。彼らならいつかやつてくれると信じていたよ。」

「ぐぐぐぐ…だがやはり、いきなりオリハルコンはつ……」

「わかつたわかつた。そういつた意見もあるという事をこの後の会議でいっておくよ。シツシツ（それでは忙しいので失礼するよ）」

イグヴァルジの執拗な意見に組合長が譲歩したのか、漆黒の剣（白）はミスリル級に留まる事になった。これには他の冒険者からも多少は同意の声があつた。理由はあまりにも事件が迅速に解決した為に、エ・ランテルの被害が驚くほど少なかったので、冒険者達にも実感がなかつたからだろう。

こうして多少の溜飲を下げる事に成功したイグヴァルジだったが、翌日に怒りを再燃させる出来事があつた。彼が街中を歩いていると、非常に端正な顔立ちと流れる様な美しい黒髪の女性、同じく端正な顔立ちで太陽の様な笑顔と魅力的な褐色の肌、燃えるよ

うな赤髪の女性を見かけた。彼女達はメイドのようで、彼がだらしなく鼻の下を伸ばしている、女性と親しそうに話す白い男がいた。

「あいつはっ！間違いいねえ…漆黒の剣のメンバーだ！（白くなってるけど）」

イグヴァルジの目前では自分よりはるかに格下だったはずの男が、不当な評価で自分と同格扱いされているうえに、美女を2人も侍らせているという許しがたい行為の真っ最中だった。

「ささっ、どうぞナーベラル様！このフルーツにシロップをかけたヤツは絶品なんですよ！女性にも大人気！ルプスレギナ様もどうぞ！さあ遠慮なさらずに。」

「どうも…ルクルツトさん。」

「いやー悪いっすね♪オマケの私にまで。ナーちゃんもファンにはもつと愛想よくしないとダメっすよー！」

「どうしてルプーが着いて来ているのかしら？」

「それはナーちゃんがルクルツトと間違いを起こさないかと心配しての事っす。あれれ？もしかしてオジヤマだったっすか？」

「なっ?!?そんな訳ないでしょう?！」

「ご安心を！確かにプレアデスの皆さまは魅力的ですが、このルクルツトの推しメンはナーベラル様唯一人！浮気などするものですか！」

「ウシヤシヤシヤ！いやーコイツ最高（のオモチャ）ツす♪」

100人中99人が振り返る美女2人と親しげに話すルクルツトを見れば、男だったら嫉妬の1つもするだろう。しかもルクルツトを一方的に逆恨みしていたイグヴァルジにしてみれば「憎しみで人が殺せたら……!!」となるのは必然だった。

「おやあ？何かオツサンがこつちを睨んできてるっすけど、ルクルツトの知り合いっすか？私こわいっす♪（トラブルの臭いっす♪）」

「あんな下等生物カマセイヌと関わりがあるとは……ルクルツトさんにはお嬢様の僕として自覚が不足しているのでは？」

ルプスレギナは楽しそうなトラブルの臭いを嗅ぎつけてわざと言っているが、ナーベラルは素で言っている。彼女にとっては人間⇨下等生物というのは不変の公式だ。

「とんでもない！あんなチンピラとは全く面識はありません！」

「誰がチンピラだっ？この前まで銀級だった分際であんまり調子に乗ってるんじゃねえぞー！」

売言葉に買い言葉。こうなればイグヴァルジも引けなくなった。

「きやー痴漢っすよー!!襲われるー助けてーっす♪」

「全く……（命令で仕方なくしている）デートの途中だというのに……」

「ご心配なく！皆様に不埒な真似を働こうと目論む悪漢は、姫の忠実な下僕であるルク

ルットが成敗して御覧にいきます！」

彼らの言い合いに、周囲の人も何事かと興味をもちだす。

「痴漢だど？」「卑劣な！」「犯罪だ！」「痴漢を見逃すな!!」

「なっ…違う！俺はただ…」

あつという間に痴漢にされてしまったイグヴァルジ、このままでは彼の名誉は地の底まで落ちる事は確実だ。どうしてこんな事になってしまったのか？あまりにも危機的な状況に彼がとつた行動は……

「ウワアアアアアアオオオオオオオオオオオオツ!!」

子供の様に泣きじゃくりながら両腕をグルグルと振りまわしてルクルットへ突進するしか出来なかつた。もちろんそんな技術も考えない出鱈目な攻撃が通じる筈も無く、レベルアップしたルクルットに返り討ちにされたイグヴァルジは「メイドに狼藉を働こうとしてボコられた変態野郎」とされ、未遂だった為に衛兵に捕まる事こそなかつたものの、激怒した組合長から「白金級へ降格」「組合で依頼受諾禁止」「制裁金500金貨」という処分を受けた。

こうして飲んだくれるしかなかったイグヴァルジだが、彼には固い絆で結ばれた仲間達がいいた。

「こんな所にいたのかイグヴァルジ。元氣出せよ。」

「ウグヴァアルジか？こんな俺を見捨てずに……」

「俺もいるぜ。お前だけにいいカツコさせるかよ。」

「エグヴァアルジ……お前もか。」

「クラルグラは、お前だけじゃないんだぜ。」

「オグヴァアルジまで……みんな、ありがとう！」

こうして立ち直ったイグヴァアルジは汚名返上の為に、仲間達と「謎の墳墓」へ旅立った。そこで財宝を見つけ出してクラルグラの名声を取り戻す事を夢見て……



「あつ、あの、アインズ様、侵入者はこれで全部です……ここ、これでよかったですか？」

上目づかいで尋ねてくるマールにアインズは満足そうに微笑む。

「完璧だ。少し汚い死体だが問題は無い。残りはどうした？」

「え、えつと……死体はその木の後ろに置いてあります。」

冒険者組合の資料では、森林での活動に定評のあるチームとあったので、第六階層のジャングルへ転移させたが見るべき物はなかった。しかしミスリル級冒険者という事でそこそこの強者には違いない。丁度良い使い道があったとアインズは満足する。

「ご苦労だったなマール。さてと……こいつらはアンデッド作成の媒介にするか。上位冒険者が素材なら通常より優れたアンデッドになるのか？ スキル《中位アンデッド作成》——死者の大魔法使い」

頭部がカチ割られた死体を黒い霧が包み込み、その霧を纏ったままゆらりと死体だったものが立ちあがる。霧がはれると、骨と皮からなる肢体を豪華だが古びたローブに包み、振じくれた杖を持った死者の大魔法使いになる。

「ふむ……特に違いは見られないな。やはりアイツが特別だったのか？ まあいい……お前の名は——」

ハゲとキチのその後

「こいつらが首謀者のハゲと女か。女の方はまだ生きているな？」

「大丈夫です。《フォックス・スリープ／偽死》を施したうえで、最低限の回復とスキルでの束縛をかけておきました。」

事件の首謀者の遺体としてエ・ランテルの衛兵に引き渡された2人は、官憲による調査が一段落した時点でシャドウデーモンによってナザリックの氷結牢獄へと連行された。

「まずは女を回復させるか。ニューロニスト回復してやれ。」

「了解したかしらん」

回復したクレマンティヌだが、スキルによる束縛は続いている。辛うじてだが動かせる頭をあげると、目に入ったのは豪華なローブを纏った骸骨、南方の衣服であるスーツ姿で、銀色の尻尾の生えた男、タコのような青白い怪物だ。

「……おまえらは……」

「さて、拷問する手間が面倒だな。さっさと情報を吐かせるか。ニューロニスト、頼む。」

「残念ですわあん《ドミネート／支配》。さっ、洗いざらい話してもらおうわよん♪」

クレマンティーヌの口から語られるのは自らの事に始まり、事件の詳細、スレイン法
国に隠された歴史、数々の秘匿事項。自分の意志とは関係無しに、あらゆる事を答えて
いく自分の口に、彼女は心の底から恐怖して、プライドも何もかも完全に押し折られた。
「あ、あたしはどうなるのですか？」

「フム…有益な情報を得られた事だし命は取らん。そうだな…妹の尻拭いは兄の役割
だろう。お前の処遇は兄に任せるとしよう。（仲の悪い兄妹の橋渡しをしてやるか）」

「は？兄貴!?何で…いや、兄を知っているのですか？」

「会った事は無い。だがお前の兄は漆黒聖典のクアイエツセという男だろう？その男な
らあと数日もすれば、このナザリックへとやって来る事になっている。他にも土の神官
長や漆黒聖典の隊長、あとはこの前のニグンとかいう男もいたな。他にも——」

まったく意味が分からない。このナザリックと言う場所が何処なのかは不明だし、法
国から何の目的で彼らがやって来るのかも判らない。隊長や神官長という面子を考え
れば只事でないというのは判る。そして自分が仕出かした事を考えれば、この骸骨の言
う通り法国、それも兄に引き渡されれば最悪の運命が待っているだろう。

「待って、待って下さい！何でもします！これでも戦闘には自信があります。貴方様
の配下…：奴隷でもかまいませんから！だから兄へ引き渡すのだけは許して下さい！
あいつは絶対に私の事を許さなですつ。」

「ハツハツハツ心配するな。お前が考えているよりも、家族の絆というのはずっと固いものなのだ。（兄が妹を見捨てるなどありえないだろ）」

普通に考えれば国の重要人物を殺害したあげく、国宝を盗み出した犯罪者を家族だろうと庇いだてするはずがない。

（なに言ってるやがるんだこの骸骨。このままじゃアタシは破滅だ!!）

「とりあえずは捕虜と言う事にさせてもらうが心配するな。牢には入ってもらわうが拷問などはしない。食事もしっかり出してやるから、安心して兄を待っているがいい。（妹を救う為に戦う兄…燃えるシチュエーションだ。クアイエッセには特別な試練を与えてやろう。）」

（心配しかねーよ！何とか逃げ出して……は無理だろうな。ちくしょうが……）

「次はハゲか……普通に復活させるも面白みが無いな。大体の事情はクレマンティーンから聞いているが……死の宝珠？そんなアイテムがあつたとは聞いていないが？（ホーリースマイトで消滅しました）とりあえずアンデッドの媒介にしてみるか？たしかエルダーリッチになるのが夢だったらしいな？」

「おお！このようなハゲにも慈悲をお掛けになるとは！」

（ハゲハゲって…ハゲだけど。そういえばあいつ等もハゲとしか呼んでなかったつけ）

「まあ、エルダーリッチなら一日で12体まで作れるからな。スキル《中位アンデッド作

成》——死者の大魔法使い」

（は？エルダーリッチ12体!?!どうなってるのよ？ヘタすればアタシもそうなったのか？）

カジットの死体が黒い霧に包まれ、そしてエルダーリッチとして生まれ変わったが……

「……こ、これは!!遂にやったのか！これで長年追い求めた事がっ!!」

（オイオイどうなってんのよ……こんなにあっさり。コイツは本物の化け物だー）

「ほほう。これは珍しいな。アンデッド化した場合は、生前の記憶は失われるはずだったが……」

アインズのスキルによってアンデッドになった者は生前の記憶を失っているはずだった。しかしカジットの死ぬ瞬間まで想い続けていた妄執ともいうべき物が奇跡を起こしたのだろうか？

「ああっ……儂は何と言う事をつ！そうだ……そうだったのだ。お母さん……ごめんなさい……」

まるで懺悔をするかのようなカジットの様子に、クレマンティーヌは「きれいなカジットちゃん」という言葉を思い浮かべる。

「むむっ!?ああ〜ハゲ……だったか？何やら事情があるようだが、詳しく話してみるがよ

い。」

カジットの言葉に思うところがあつたのか、アインズも態度を軟化させる。

「おおつ！貴方様こそ偉大にして至高なる死の支配者にして我が創造主アインズ・ウル・ゴウン様！私はカジット・デイル・バダンテールという：いや、だつた者でございます。私の事は只のカジットとお呼び下さい。」

「ハ…カジットよ。お前に起こつた事はとても興味深いが、まずは事情を聞かせてくれ。」

「ははつ。まずは事の起りですが——」

こうして語られたのはカジット・デイル・バダンテールの人生、そして母への忘れえぬ思い出だつた。少年時代に母を亡くした彼は、その多感な年齢もあつて母の死に強い責任を感じてしまった。それから彼の人生は一変した。そして只一つの目的の為に捧げられる事になった。

それは「母を蘇らせる」と言う事。この世界に存在する復活魔法では、一般人だつた母では復活時の消耗に耐えられない。それなら自分が全く新しい魔法を生み出すしかない——その為に寿命の無いアンデッドになるといふ、狂気じみた結論。だがそれはどんなに時間がかかろうともやり遂げるといふ、強い決意の表れでもあつた。

「愚かな……（だがその想いは尊敬するかもな）」

アインズ：鈴木悟も幼くして母を、そして父を亡くしている。当然深く悲しんだし、その死を理不尽だと嘆いた。だがここまで：30年以上も思い続けられたらどうか？妹との暮らして精一杯で、両親を悼む気持ちが年を経るごとに薄れていった。リアルの世界には魔法など存在しなかったので「蘇らせる」など思いもしなかったが、もしも両親が生き返ってくれたら：：と思つた事はある。

「はい：：私は愚かでした。死の意味も理解出来ずに罪を重ねて：：」

骸骨とハゲがしみじみとしているのを見てクレマンティーヌは：：

（キモツ!!アンデッドになつても果たす事があるとか言つてたけど：：：ハゲでマザコンで、しかも今じゃアンデッド！アンデッドになつてもマザコンとかキモすぎ！）

「アンデッドと成る事で死を理解し、そして受け入れたという事か。」

「貴方様にはどれだけ感謝してもしたりません。」

カジットの不幸は母の死んだ時期が悪かつたのだろう。良い時期というのも無いのだが。人には誰でも少年や少女の時代がある。この干からびたハゲにも瑞々しい果実のような少年時代があつたのだ。そんな時に最愛の母を失つたカジットに、その死は受け入れがたい事だつた。

これがもう少し年長であれば、育つた身体と心で受け入れる事が出来た。年少で物心もつかない幼子であれば影響も小さかつただろう。人生でもっとも多感な瞬間に母を

亡くした事が最大の悲劇だった。カジットはアンデッドと成った事で死から解き放たれ、そして死を理解する事で初めて母の死を受け入れたのだ。

「お前の人生に……かける言葉も無いが、これ位はしてやるとしよう——《ワードオブデッド／死者の言葉》」

ユグドラシルにあつたイベントで必要だった魔法で、効果はそのまま死者の声を家族に届けるという者だ。そのイベント以外では使い道のなかつた魔法だが、こういったニツチな魔法まで取得しているところは、さすが死霊系魔法のスペシャリストたる所だろう。

カジットの前に半透明の人影が浮かび上がる。忘れもしない、あの日の母の姿だった。

「お、おとおお!?お母さん……」

「カジット（ハゲたわね）……ありがとう——」

2人は幾つかの言葉を交わすが、周りの誰も口を挟んだりはしない。

（試しに使ってみたが、上手くいったな）

（こんな事まで出来るのかよ！いったい何者だこいつら……）

（これでハゲは文字通り身も心もアインズ様に捧げる事になる。それにユグドラシルにない珍しい症例……そこまで見越していたとは流石はアインズ様！）

「ありがとうございます！ありがとうございます！この身の全て——魂の一片までもアインズ様の為に、磨り潰すまでお使い下さいっ。」

「う、うむ。お前の忠誠を受け取ろう。（やけに忠誠心が高いが…アンデッドの癖に感情も豊かで……レアというやつか？）」



「お兄ちゃんただいま〜！色々あったけど面白かったよ♪」

「よくぞ帰った！さっちゃんよ。冒険者のスカウト、ナザリックへの誘導、さらに優秀なポーション職人の囲い込み、現地の強者の捕獲、強力なタレントの習得、様々な情報、それに可愛いペットも捕まえたみたいだな！数々の功績、兄として誇らしいぞ！」

「ええ〜！そうかなあ？ナザリックの役にたてた？」

大戦果を挙げて帰還した妹にアインズはご満悦だ。玉座の間にはアインズや守護者一同、さっちゃんと同行したNPCが集まっている。

「勿論だとも！そうだなデミウルゴス？」

「はいアインズ様。さっちゃん様の為された数々の成果に感服しております。それに何と言っても……スレイン法国の件も、元を辿ればさっちゃん様の発案があつてこそ。まさに

端倪すべからずという言葉が相応しいと。」

「そんなに褒められると照れちゃうなく♪でも皆が手伝ってくれたからだよ。」

「その通りだな。さっちゃんに同行した者達には改めて感謝を——??ナーベラル・ガンマよ、その姿はいったい?」

さっちゃんの後ろで跪いているプレアデスの中に1人だけ仲間外れ?の格好をしたナーベラル・ガンマがいた。

「ハッ!これは我が創造主で在らせられる式式炎雷様が御造りになられた「くのいちセット」を、恐れ多くもさっちゃん様より下賜されました、こうして「くのいちメイド」として任務に就いております。」

ナーベラルの姿はザ・くのいちという言葉が似合っただが、忍者系のクラスを取得していないので、刀や手裏剣といった武器は装備出来なかったのだろう。愛用しているスタッフを背中に担いでいるのが何とも言えない、コレジャナイ感を醸し出している。何故かコキュートスが「オオツ!コレガクノイチ!」と感嘆の声をあげている。

「特別任務を達成したご褒美にプレゼントしたんだよ!似合ってるよね♪」

「ハッ!非常に困難な任務でしたが、これほどの褒美を戴き、姫様には大変感謝しております!式式炎雷様の名に恥じぬ様、忍びの道を邁進いたします!」

(何でメイドが忍びの道なんだ?式式炎雷さん……ナーベラルってこんなにポンコツ

だったんですか?)

「う、そうだな…: 今後も精進するがよい?…: それとハムスケだったか? 新しいペットを紹介してくれないか。」

「うん! ハムスケーこつちおいで。」

「はわわ…: 姫え大丈夫なのでござるか? どなたも恐ろしく強大な力を感じるでござるよ。」

怯えた様子のハムスケが、のそのそと前へ出てくる。かつては己の縄張り内で最強を誇っていた自分が、いかに井の中の蛙だったかをペットになって以来、痛感している。

「大丈夫だよ。みんな凄くいい人ばかりだから! ほらっ挨拶しなさい♪」

「うう…: それがしはハムスケでござる。姫の忠臣として今後も精進するでござる。殿も他の皆さま方も宜しくお願いするでござる。」

(姫…: 忠臣…: 殿? ナーベラルはコイツに影響されたのか? 話し方が気に入ったので真似している?)

「うむ。今後もしつちに尽くすのだぞ。それでは詳しい報告は円卓の間で聞かせて貰おう。お茶とお菓子を準備させているから、それらを楽しみながら話してくれ。」

「わかったよお兄ちゃん。ぷーにゃんはハムスケを連れて第六階層で遊んでいいからね!」

「ニヤーン！（わかったぜ。おいハムスケ行くぞー）」

「わかったでござるよ。兄者は案内をお願いするでござる。それがしに乗るでござるよ！」



ナザリック地下大墳墓第九階層にある円卓の間。かつては42人のギルドメンバーが揃って様々な話し合いが行われていた場所だ。この神聖な場所に足を踏み入れ、あまつさえ至高の方々が座していた椅子を使うなど恐れ多いと畏縮していたNPC達も、アインズの「彼らが帰って来るその日まで、お前達は彼らの分身、名代でもあるのだ」という言葉に感激、恐縮しつつ、今は誇らしげに其々が円卓に座している。

円卓なので上座がない為、アインズとさっちゃんが並んでいる場所を中心に、そこを挟むように階層守護者、パンドラ、セバス、プレアデス、その他の順番でアインズ達から離れていく。壁際にはメイド長であるペストーニヤを筆頭に複数のメイド達が給仕として控えている。

「まずはナザリック外での行動についてセバスから詳しい報告を聞かせて貰おう。その後はデミウルゴスから近日中にナザリックを訪れる者たちについて説明して貰う。で

はセバスから頼む。」

「まずは冒険者についてですが、エ・ランテルでも上位の6チームを依頼という形でナザリックへと派遣しました。その者達はこちらの想定通りに帰還後、他の冒険者達にナザリックの事を喧伝しております。」

「後から来たミスリル級だというチームが全滅した影響か、その後はナザリックへ挑戦する者が激減したが、今後の法国と帝国の事を考えれば丁度良かったな。」

ミスリル級チーム「クラルグラ」の全滅はエ・ランテルの冒険者にとって衝撃だった様で、それ以来ナザリックへやって来る冒険者は途絶えている。

「今後は、ある程度は見逃す事も視野に入れる事を検討する必要がありますね。挑んで来る者が居なくては本末転倒という事になります。多少の飴も必要という事でしょう。」

「人間は弱つちいからね。ホント使えないな。」

「お、お姉ちゃん……」

「脆弱ナ者二ナザリック二挑ム資格ハ無イ。間引キモ必要ト思ウガ？」

「その辺りは今後の課題だな。」

鶏を全て食べてしまえば、卵を産むものがいなくなる。バランスを取らなければならぬ。

「次にナザリックのアンダーカバーとして活動させる冒険者ですが、漆黒の剣という4人の銀級冒険者チームを確保しました。当初は実力が不足しておりましたが、さっちゃん様の御力とエヌスリー殿のスキルで現在のレベルは20程度。ミスリル級に昇格済みです。さらにメンバーの一人であるマジックキャスターの少女は、魔法習得に関するタレントを所持しており、現在のレベルでは習得不能なはずの第四位階魔法を行使可能です。」

「さすがニニヤ！最初は変な人かと思っただけだね。」

「それは非常に興味深い。近いうちにナザリックへ招聘して調べる事としよう。」

ニニヤは生れ持った才能とタレントがしっかりと噛み合った、とても恵まれたケースだ。もともと長じれば帝国の逸脱者に匹敵するポテンシャルさえ秘めていた。それをナザリックの力で促進させてやれば近い将来、近隣に名を轟かせるマジックキャスターになるだろう。

「それとエヌスリーのスキル「エインヘリヤル・ハイアル」は非常に有用だ。今後也使徒を増やす事は可能か？」

「我が能力で使徒として使役可能なのは6人までです。今後也使徒を増やすのであれば、姉達の協力が必要です。」

「身体の一部の外見が著しく変化しますので……あまりそういった者が増えますと、目

立ってしまふ恐れが……」

あんなのが彼方此方に現れたら怪しすぎるだろう。

「まずはその漆黒の剣（白）に注力するべきだと思ふね。許可が戴けるのであればナザリックからアイテムを融通してもいいかもしれない。そして必要であれば——」

「J u f f u ……」こちらで適当な脅威をでつち上げ、B r a v e s はそれを打ち破るといふ偉業を達成する……まーさに、ナザリック随一のK l u g e r M a n n であるデミウルゴス殿の知某つ！わたーくし、A u f r e g u n g いたしました！」

「オホンオホンツ……2人の言う通りだな。その漆黒の剣（白）には最高位というアダマントタイト級くらいにはに成つて貰わないとな。せつかく投資をしたのだからたつぷりと働いてもらおうとしよう。」

漆黒の剣（白）に理不尽な試練が立ちはだかる事が決定した。

「次はエ・ランテル最高のポーション職人であるバレアレ一家についてです。既にカルネ村に建設された秘密研究所（仮称）に移住済みです。資材や設備についてはアインズ様に腹案があるという事で手付かずになつております。こちらについては担当であるパンドラズ・アクター様をお願いします。」

「ドイツ語は禁止だ！」

「ウヒヤヒヤww」

「……えー、彼らにつきましては、当初のこの世界の材料と調合法による、ユグドラシル産ポーシヨンの再現という計画は破棄とします。」

「それはどうしてでありんすかえ？」

「そうだよね？何でだろ？」

「必要性が低い為です。ポーシヨンの材料はナザリックで自然発生する資源で自給可能であり、ポーシヨンの生産に問題は無いと生産部門から報告が来ております。それでしたらこの世界特有——ユグドラシルに存在しないポーシヨン作成を研究させるべきと考えました。」

わざわざ木を使って鉄の剣を作る事に労力を割く必要は無い。材料の鉄はたっぷりあるのだ。それに鉄を使えば簡単・確実に作れるのは自明の理だ。

「この世界特有のポーシヨン……なんだろうね？お姉ちゃん。」

「うーん、全然判んない。」

「この世界特有というよりは、ユグドラシルで再現不可能というべきでしょうか。既にさっちゃん様が入手した「叡者の額冠」という実例がございます！まあ叡者の額冠は効果に対して凄まじいデメリットがある不良品でしたが……この事からもユグドラシルで存在しなかったアイテムの作成が、可能と実証されたのです！」

「おおく凄いやい！」

「まっこと凄いであります（何がすごいのかは解っていない）」

ポーシオンといってもHPを回復する為だけの物ではない。攻撃に使うポーシオン、他にもバフ・デバフ効果のあるポーシオンだつてある。そして多くのプレイヤーが必要を感じながらも、最後まで実装されなかったものがある。

「よつてバレーアレ一家にはユグドラシルに存在しなかった「MP回復ポーシオン」の開発に挑んでもらいませう！可能な限りの設備・資材を用意して開発に専念してもらいませう。まああはずは——」

「そういつた訳でバレーアレ一家、そして研究所のあるカルネ村は非常に重要な扱ひとなつた。さつちんから言われていたゴブリン達へのアイテム供与の他に、私が作成したデスナイトを警備兵として派遣する。村人に配慮して外装を偽装してだがな。そして警備責任者として先日、シモベとして転生させたハゲ……ではなくカジツトを任命する。現地採用者だから適任だろう。」

「……………」

もしMP回復が可能なポーシオンの開発に成功すれば、その恩恵は計り知れない。充分に投資する価値がある案件だ。

「さつちんが入手したタレントはどうだ？色々と試してみたのだろうか？特に悪い影響はなかつたと聞いているが？」

「もうバツチリ！クソギフトが消えちゃったけど、多分上書きされたんじゃないのかな？やっぱリタレントとギフトは同じ能力だと思うよ！」

「そうであるなら……人間以外にもタレントが発現している可能性が高いな。タレント能力の調査には今以上に注力せよ。」

「かしこまりました。」

「了解しました！」

ちなみに伝説の大魔獣と云われたハムスケはタレントを持っていない。

「サンチャンに剣の使い方を教えてもらったけど、スキルはちっとも使えなかったの。だから武器が得意なコキユートスさんに弟子入りしようかなって！お願いしてもイイ？」

「ハハッ！身二余ル光栄デアリマス！只、剣ノ道ハ厳シイデスゾ姫様。コノ爺ノ修行ニ耐エラレマスカナ？」

「うん！頑張るからよろしくね！」

（爺？こいつもちよつとおかしくないか？）

（彼は良き友人なのですが、少し妄想癖があるんですよね…）

「それでは一休みしてからデミウルゴスの説明を聞こう。ペストーニヤよ、全員に例のナザリックブレンドを頼む。フッフ、副料理長の渾身の一杯だぞ。皆もぜひ味わってく

れ。」

「かしこまりましたワン。」



「ところでアルベドさんの具合はどう？もうすぐ生れるんでしょ？この後で挨拶にいきたいんだけど。」

「……あー、アルベドの事なんだが、その…ペストーニヤ？」

「アルベド様はご出産を間近に控えて、とてもナーバスになっているのですワン。ですので無事に出産を終えるまでは、そつとしておいて欲しいとの事ですワン。もちろん警備や準備は万全ですワン（あの姿を見られるのは同じ女性としても気の毒ですからね）」

今後の対応

「——以上が周辺3ヶ国の動向になりますので、まずはナザリックが転移したり・エステイゼ王国につきましては、周辺国とも隣接しており、王国の要の都市であるエ・ラントルを王国より独立させます。」

「エ・ラントルの住民も噂してたね。私が出歩いている時も「アインズ・ウール・ゴウン様万歳!」とか言われてビックリしちゃった。」

「ハア!?!」

アインズにとっては寝耳に水だ。当初は都市の支配層を洗脳したり、財産を収奪したりとやりたい放題だったが、さすがに不味いと思い、あまりやりすぎるなど釘を刺したはずだ。

「人間の都市を独立なんてさせて如何するの? さつさと滅ぼしちゃえばいいのに?」

「エ・ラントルは3ヶ国の人・物・情報が集まる都市だからね。ここを押さえおくと都合がいいんだ。アインズ様の世界征服にとってね。」

「おおうさすがでありんす!」

(世界征服? どういう事だ? 俺は何もきいていないぞ!?)

「イヨイヨ、我ラナザリックガ、世界へト打ツテ出ル時ガ来タ！アインズ様、先陣ハ此ノコキユートスニオ任せヲ！」

「あれ？まだそんな事してたの？」

さつちんは「そういえばそんな話もあつたよね」と思い出す。あれは兄の持病から出た言葉のあやだつたはずだ。

「——!!それはどういった意味でしょうか？既に御二方はさらに優れた計画を御進めになられているのでしょうか？」

「さつちん様！私にも教えて欲しいであります！」

（俺にも教えてくれ！）

NPC達の視線がさつちんに集中する。自分達が仕える兄妹の為に、少しでも役立つとする気持ちの表れだ。

「いや、デミウルゴスさんが言っているのはアレでしょ？3人で散歩に行つた時の……」
「その通りでございます。あの時アインズ様が仰られた——」

（あの時のことか——っ!!!）

思わず立ちあがつたアインズに全員の注目が集まる。さつちんだけがアインズをジト目で見つめている。

「如何なさいましたか？アインズ様。」

「お姉ちゃん、アインズ様どうしちゃったんだろう?」

「馬鹿ねマーレ。至高の御方であるアインズ様が無意味な事をする訳ないでしょう! きつと私達には理解も出来ない深遠な理由があるのよ!」

「お兄ちゃん……(またやつちやつたんだね)」

ようやく思い当ったアインズだが、既に冗談でしたでは済まない雰囲気になっているし、その冗談を現実にする為に計画が進んでいる。このまま流れにまかせても碌な事にならないだろう。

「あ……その件についてだが、その……一旦保留する事にしたのだ。」

「それはどういった理由からでしょうか?」

支配者として口にした言葉を理由も無く翻しては、部下達の忠誠心にも影響するだろう。ここはひとまず保留という形で計画を中止、後は軟着陸の為の落とし所を探っていくしかないだろう。未来の自分に丸投げだ。そしてオーバードの英知をフル稼働させて適当な理由をでっち上げる。

「アルベドだ。」

「アルベド?」「アルベドですか?」

「そう……アルベドだ。アルベドは我が子を身籠っており、間もなく我が子が誕生する事は知っているな?」

「是非トモ！是非トモ若君ノ爺ハ此ノコキュートスニオ任セヲ！」

「我が創造主であるアインズ様の御子であれば、私にとつても弟や妹も同然！誠にめでたく、そして喜ばしい事かと。」

「うむ。お前達の気持ちは嬉しく思うぞ。そして私も子供の誕生を心待ちにしている。だからこそ世界征服などという細事にかまけている訳にもいかないのだ。なにせ初めての子供という事で舞い上がってしまったな。それでお前達に伝えるのを失念していたのだよ。ハハハハ……」

これはアインズの本音だ。子供の誕生という一大事を控えているのに、そして生れた後も色々大変なのに世界征服なんて勘弁して欲しいと心から思っている。

「とんでもございませぬ！まさにアインズ様の仰る通り。私の方こそ失念しておりました。ナザリックの支配者であるアインズ様とNPC統括のアルベドの間に御子様が生ずるというのに、確かに世界征服など後回しになって当然です。」

「まったくでありんすえ。」

「そんなの当然だよね」

「そうだよね、お姉ちゃん。」

「よし！これで納得したか？後は世界征服についてもこのまま……」

「という事はアインズ様、御子様が生された後で、それを祝して世界征服の為の行動

を開始するのですね?」

「いや、子供の事で忙しくなるしな……それに、色々この世界の事態を知った後では、余り魅力を感じなくなつてな。私としては家族やナザリックの者達の為に力を使いたいのだ。」

これも本音だ。仮に世界征服をしたら、当然その後は世界を統治していかなければならない。ナザリックの運営だけでも手一杯で、さらに子育てだつて加わるのだ。絶対に世界征服なんてごめんだ。

「オオ! アインズ様ノ慈悲深サニ感服イタシマス。」

「さすがはアインズ様でございます。」

「ククク…アインズ様の御心がそれだけだと思つているのかい?」

「えっ?」「どういう事?」「他にも何かありませんか?」

纏まりかけた話しが、思わぬ方向に向かい始めてアインズは困惑する。

「Ohく言われてみれば! 確かにアインズ様の真意は他にもあります。」

「アインズ様! 私にも教えて下さい。」

「アインズ様の真意を汲み取れない愚かな私に、どうかその真意をお聞かせ願えないでしょうか?」

「うむ……デミウルゴスよ。お前が理解した事を他の者に説明してあげなさい。」

「かしこまりました。では説明させていただきます。いいかい皆？我らはアインズ様とさつちん様によつて身も心も支配していただいて、そしてありがたくも側に侍り奉仕する事を許されているが、これがどれだけ素晴しく、そして幸福であるかは言うまでも無いね？」

企業に搾取されていた貧困層出身の兄妹には「支配される喜び」なんて理解出来ないし、酷使されていた身としては「奉仕を許される喜び」なんて以ての外だ。そこまで社畜になつてはいない。

「勿論でありんす。」

「身二余ル光栄ダ。」

「全くだね。そしてアインズ様はこう仰っているんだよ「そんな幸せを有象無象の者達に与えてやる必要があるのか？」…とね。」

「そんな必要ありません！御二方は僕達だけの支配者なんですから！」

「然り！ナザリックの支配下に置かれるとしても最低限度の資格というものが必要でしょう。」

これにはアインズもおおつ！となる。その通りだ。何で俺がよそ様の事まで面倒見ないといけないんだよ！と同意する。そしてある事を思い出し「さてよ？」と考える。

「それならば、邪魔な人間なんて滅ぼしちやえはいんじやない？アインズ様とさつち

ん様の素晴らしさが理解出来ない奴らなんて存在する価値もないよね。」

「そうだね！お姉ちゃん。」

意外と過激な姉弟である。他の者達からも「滅ぼす」「皆殺し」といった物騒な単語が飛び交う。

「それは早計ではないですか？アインズ様とさっちゃん様の偉大さを理解出来ないのではなく、未だ知る機会に恵まれていない者も多いはずです。そしてナザリックに従順で無害な者には慈悲を与えるべきと考えますが。」

「私もセバスの意見に賛成だね。只、そこに有用という言葉も加えて欲しい所だ。」
「お前達、その辺にしておけ。」

アインズの言葉に全員が話しを止めて姿勢を正す。NPC達があれこれと話して時間が取れたので、何とか考えを纏める事が出来たのだ。多少強引だが、このまま押し通すしかない。

「まず虐殺等は極力控えるべきだ。不必要に敵を作る事になるし、例のバレアレ一家の様な有用な存在が巻き込まれる可能性もあるからな。勿論ナザリックに害を為す存在には遠慮も容赦もいらぬがな。」

これにはNPC達全員が理解を示す。カルマ値が悪に傾いている者が多いが、それをナザリックの利益に優先させる愚か者は居ない。

「そして世界征服についてだが……私はナザリツクを支配する者として、ナザリツクに住まう者達の幸福と安寧を第一に考えている。それが支配者の責務だからだ。仮に私が世界をこの手に収めれば、私は世界中の者に対して責任が生じてしまう。さすがの私でもそれは面倒だ。まあ……かつての仲間達が居てくれれば造作も無い事だろうがな。」

アインズは「世界の1つくらいは征服してやろう」と語っていた仲間の姿を思い浮かべる。彼がこの場に居ればどう思ったのだろうか？

NPC達はアインズの慈悲深さに感動し、同時に不甲斐無さを感じる。やはり至高の方々の足許にも及ばない……と己を戒める。

「しかしナザリツク地下大墳墓がこの地へとやって来た以上は、この地でもかつての様な名声を得る必要がある。やはりアインズ・ウール・ゴウンは不変の伝説でなければならぬ。力を示してその存在を世界に知らしめなければならぬ。もしかしたらこの世界の何処かにいるかもしれない仲間達に、我らの存在を知って貰う為にもだ！その為にも改めて皆の協力を頼みたい。」

おお！とNPC達は感嘆する。自らの創造主の帰還を望んでいない者など只の1人として居ない。我らの存在をあらゆる所へ知らしめていけば、何時の日か、創造主達の耳に入るかもしれないのだ。

さっちゃんは風呂敷を畳もうとして、何故か再び広げはじめた兄を見ながら「自分は言

「そういえばユグドラシルには迷宮都市なんてのもあったな。エ・ランテルにはそういった役割を期待してもいいかもしれないな。」

「成程……ナザリックに挑む挑戦者の為の施設を整えて、強者を集め易くする——そして彼らの情報も集め易くなる。」

「それに気が付くとは……さすがはデミウルゴス。」

「恐縮でございます。」

こうして王家の生命線ともいえる都市の独立が決定した。王家の弱体化は留まる事を知らない。

「そしてバハルス帝国だが、皇帝には周辺国家の平定をお願いするでしょう。彼は非常に野心家……いや勤勉家らしいからな。鬱陶しい王国や、異形種に排他的な法国は彼に管理を任せてしまおうじゃないか。皇帝も本望だろう、帝国を強くする事が望みなのだから。」

「ねえねえ、皇帝ってどんな人なの？」

「デミウルゴス、皇帝の資料をさっちゃんに渡してやれ。」

渡された資料には皇帝の外見、性格を分析したデータや、これまでの業績、彼についての他人の評価などが細かく記載されている。

「おお、イケメンだ！皇帝でお金持ち！さらに優秀とは！でも渾名が「鮮血帝」って酷

くない？」

「ハハハハ、さっちゃんも気に入ってくれた様だな？ 私としてはこの皇帝を応援してやるつもりだ。」

アインズとしては帝国を後押ししてやって、自分は皇帝と仲良くして安全確保、そして大きくなった帝国から情報収集や人材のスカウトをしてやろうと考えていた。経済的に豊かな帝国なら交易でも儲けられそう。強大な国の協力者という事ならアインズ・ウール・ゴウンの名声も高まるだろう。

3ヶ国の中でアインズが最も好感を覚えたのが帝国だった。仮に自分が人間として妹と暮らすのなら帝国が一番だ。法国のような宗教国家は、あの世界で生きて来た彼の感性に合わない。王国は何があらうと全力でお断りだ。他の国も興味はあるが情報が不足している。

「そして帝国……皇帝はアインズ様の傀儡として馬車馬の如く働くという事です。それも自らの意思で！」

「それは誤解だぞパンドラ……あくまでも善意の協力者というやつだ。」

アインズは優秀だという皇帝を、新米支配者である自分の参考になりたいと思っっている。やはり生まれながらの支配者というのは自分とは比べものにならないだろう。もし友誼を深める事が出来れば友となってもいいという位は評価している。家族や部

下に恵まれているが「ぼっち」は寂しいのだ。

「そういつた訳で、帝国から来るワーカーには我々の力をしつかりと理解して貰って、それを皇帝に報告して貰う。全員を無事に帰してやる必要はないがな。その後は皇帝をナザリックへ招待してやろう。たつぷりと持て成してやるぞ。それに色々と相談しないといけないしな。」

こうして若く優秀で将来も有望な皇帝は、ブラックな支配者からドラフト指名を受ける事が決定した。

「スレイン法国はどうされますか？何も知らない国民はともかくとして、上層部は分を弁えているようです。法国の戦力も侮れませんし、さらに隠された戦力もある様ですが？」

「あの国は非常に重要だ。戦力・情報が他の2国とは比較にならない。プレイヤーの血を引く「神人」や、プレイヤーの「遺産」は非常に危険だが魅力的だ。よって敵対は考えていないが、こちらの力を見せつけて自分達の立場を理解させる必要がある。」

「それでしたらわれらにご命令しておくなまし。「ナザリックが威を示せ！」と。」

最強の守護者であるシャルティアの言葉にNPC達が頷く。例え普段の言動が残念でも、今までNPC達の一番槍として最も多くのプレイヤーを屠ってきた彼女への信頼は厚い。

「もちろんお前達には期待しているし、シャルティアの役割も功績も理解している。だが今回はコキユートスを迎撃の主戦力とする。この前の詫びを兼ねてな。」

「ゴメンネ。期待はずれだったんでしょ?」

「オオツ!オ任せ下サイ。必ズヤ侵入者ニナザリックノ威ヲ思イ知ラセテ御覧ニイレマス!」

「コキユートスには完全武装を許す。ナザリック随一の武器の遣い手である、お前の武を期待している。」

コキユートスは武器を使つた戦闘ではNPCの中で最も優れている。創造主が与えた多くの武装を使いこなし、全力の戦闘では4本の手にそれぞれ武器を持つて戦うが、コキユートスがそこまでする相手は滅多にいない。

「ハツ。武人建御雷様ヨリ拝領シタ武装ニ恥ジナイ働キヲシテ見セマス!」

「今回の目的はナザリックの武だけではなく、財についても示す必要がある。そこで…この後、パンドラと共に宝物殿まで同行せよ。宝物殿に保管された武具の使用を許す。パンドラと相談して、お前が最も相応しい物を選ぶのだ!」

「オオオオツ!ナ、何トイウ…」

「どの程度の武具まで許可をいただけるのでしょうか?ワールドアイテムは別格として、さすがにアヴァターラの武装を持ち出すのは……」

「む…それはさすがに仲間達に——いやコキュートスの晴れ舞台だ。建御雷さんの愛刀「建御雷八式」の使用を許す。彼もコキュートスが使うのであれば喜んでくれるだろう。残りは宝物殿の武器庫から選んでくれ。他のアヴァターラの武器は許可しない。」

「ウオオオオッ！アリガタキ幸セツ!!」

コキュートスはその身を震わせて感涙する。彼が敬愛する創造主が鍛え上げた最強の武器を振るう事を許されたのだ。そして他のNPC達も驚愕してコキュートスを羨む。

ナザリックの財が保管されているという宝物殿に立入るのを許されたNPCは、宝物殿の領域守護者であるバンドラズ・アクターのみである。武器愛好家であるコキュートスならずとも、許されるのであれば、その数々の秘宝を目にしたいと願っている者は多い。

「何せやって来る者にはワールドアイテムを身に着けた者さえいるのだ。こちらも相應の装いで迎えてやらねば失礼だろうからな。」

「それならこつちもワールドアイテムで対抗しないとね！」

「当然だな。直接相対する守護者にはワールドアイテムを持たせるが、私の許可なく発動させる事は禁止する。法国は自分達のワールドアイテムに大層な自信があるらしいが、もう一つの重要な効果には気付いていない様だな。」

ワールドアイテムの効果はワールドアイテムで無効化可能。これはプレイヤーにとつては常識だが、その対策に人数分のワールドアイテムを用意出来るのはアインズ・ウール・ゴウンだけだ。

ちなみにアインズは法国の連中の装備を、ワールドアイテムを含めて根こそぎかつぱぐつもりでいる。なにせユグドラシルと違って、相手の装備・アイテムの「全取り」が可能なのだ。遠慮するつもりは全くない。当然だが万一の事態に備えた準備も抜きなくするつもりだ。

「いいなあコキュートス。アインズ様っ！私にも何か出来る事はありませんか？」

「ぼ、僕も頑張りますっ！」

「アウラ達は闘技場の準備を頼む。それにお前達にはトブの大森林にある湖に生息するリザードマンの件で活躍して貰うからな。期待しているぞ。」

「わかりましたあ！それじゃあコキュートスの戦いをばっちり盛り上げてみせますね！」

「わ、分かりました。頑張ります！」

アウラとマールは闘技場のマスコットとして、ユグドラシル時代にプレイヤー達からの人気が高かった。

「そういつた訳で、法国から来る連中は最大限に持て成してやる事にする。例のクレマ

ンテイーヌにも協力してもらってな。但し今後の関係も考慮して、命までは取らない事とする。多少の無礼があつても見逃すように。」

「えっ？あの女の人裏切つちやつたの？ナザリックで雇つてあげる事にしたんだ。」

「それは違うぞさつちん。ちよつとしたお節介というやつだ♪」

ボロクソに叩きのめされて、身包み剥がされた後で関係もクソもないのだが……そのうえアインズは、法国の強者——特にプレイヤーの血を引く神人にも触手を伸ばそうとしている。

情報を盗られ、物を取られ、さらに人まで獲られようとしているスレイン法国の前途は多難だ。



「お兄ちゃんさあ……その場の勢いで、おかしな事ばかり言つてると、そのうち大変な事になつちやうよ？みんな本気だったよ？」

「す、すまなかつた……以後は気をつけます。」

スタメン抜擢

二日前にスレイイン法国の神都を出発した一団は、エ・ランテル近郊の森を突き進んでいた。極秘裏の任務である為に途中の町で休息・補給を行えない強行軍であった。森を抜け次第、一行は二手に分かれる予定である。

ナザリック地下大墳墓へ向かう土の神官長レイモン・ザーグ・ローランサン率いる一行と、法国の若きホープであるスタメン・グリッド・ルーイン率いる元漆黒聖典第九席次搜索&叡者の額冠奪還部隊である。スタメンは風花聖典の人員と共に、交易都市エ・ランテルで情報収集だ。

「それでは我らはエ・ランテルで情報収集に努め、元第九席次の足取りを追跡します。法国の至宝である叡者の額冠は必ずや奪還してみせます。皆様もどうか：どうか生きて御帰還を。」

「任せたぞスタメン君。ニグン隊長からも声を掛けてやれ。重要な任務へ赴く弟に先達としてアドバイスしてあげなさい。」

「お心遣いに感謝します。スタメンよ、元第九席次のクレマンティーヌは疾風走破の名を与えられていた戦士だ。凄まじいスピードの持ち主で刺突武器を使いこなし、煽情的

な装いを好む露出狂のうえ、残虐で性格破綻者の殺人狂——つと失礼、クアイエツセ殿の前で言うべき事ではありませんでしたな。」

「構いませんよルーイン殿。あの売国奴で裏切り者の恥晒しを家族とは思っていません。叶うなら私がこの手で引導を渡してやりたかった。」

忌々しそうに語るクアイエツセ。大墳墓の兄妹とは違って、こちらの兄妹の仲は険悪な様だ。

「兄上もくれぐれもお気をつけて。ナザリツク地下大墳墓で待ち受けるのは想像を絶する力の持ち主と聞いております……いや、直接に相對した兄上が誰よりもご存じのはずでしたね。神都での再会を心から待ち望んでおります。神都に帰ったら2人で、父（カントック）と母（コーチイ）に会いに行きましよう。」

「そうだな両親にも久しく会っていない。姉夫婦（姉：マネージャ、夫：スケット）の所へも顔を出すか。甥っ子（エフエー）にはお土産を持つて行つてあげないと。それでは弟よ……どうか無事でな。任務達成を信じているぞ。」

ルーイン家は非常に敬虔な事で知られる、スレイン法国でも有数の名門一族だ。ニグン達の祖父であるイチグンは先代の陽光聖典隊長を務めていたし、叔父であるキャプテインも軍の將軍という地位に就いている。

両親は神殿の高位関係者で巫女として仕えている長女も、他国出身ながら優秀な神官

と結婚している。※スレイン法国では優秀な血統維持の為に神殿関係者の婚姻を奨励（半ば強制）しており、優秀であれば他国出身者（但し人間に限る）の血も積極的に受け入れている。兄弟も優秀で兄は陽光聖典の隊長、弟も将来を有望視され漆黒聖典入りが確実視されている逸材だ。

がっしりと抱き合い互いの無事を祈る兄弟に水を差す者はいない。今回の任務が非常に危険で重要である事はこの場に居る全員が覚悟している。こうしてスタメン達はクレマンティーンと叡者の額冠の手掛かりを求めてエ・ランテルへ向かい、レイモン一行はニグンの先導でナザリック地下大墳墓へと向かった。



エ・ランテルへ到着したスタメン達は、中級冒険者向けの宿に拠点を構えた。本来であれば国外での情報収集やサポートを担当する風花聖典の拠点があるのだが、エ・ランテルに潜伏していたクレマンティーンによって壊滅状態に陥っている。

神殿勢力に影響を持つ法国の事を前面に出せば、各神殿に便宜を図らせる事も可能だが、今回の任務の性質上望ましくは無い。秘密裏に慎重に事を進める必要がある。スタメンは長期戦も視野に入れて、焦らずじっくりと行動する方針を固めた。

まずは同行した風花聖典が都市の各所で簡単な情報収集にあたったが、思いの他あつけなく「クレマンティヌ」と「叡者の額冠」についての情報、さらに法国が最も重要視する「アインズ・ウール・ゴウン」の情報さえ入手したのだった。

「それでは、この都市でアンデッドを大量に召喚した事件を起こした主犯の1人が、元第九席次のクレマンティヌの可能性が高いと?」

「もう一人の男は邪教集団ズーラーノーン幹部との事です。元第九席次は外見が判別不能なほど死体が損傷していたようですが、クレマンティヌという名前から間違いないと思われまます。残念な事に両名の死体は紛失…恐らくは情報漏洩を防ぐ為にズーラーノーンが持ち去ったかと。」

「だろうな…:…そしてアンデッドを大量に召喚という事は、間違い無く叡者の額冠の力だが…:あれの力を引き出せるのは100万人に1人と聞く。どうやって遣い手を確保したのだ?」

「エ・ランテルにはインフィーレア・バレアレという「あらゆるマジックアイテムが使用可能」というタレントを持った少年が居ました。その少年を拉致して叡者の額冠を使わせました模様です。」

流石は情報収集に特化した風花聖典…:と言いたいが、現在のエ・ランテルで話題の中心となっている「漆黒の剣(白)」の名を知らしめた英雄譚に係る事だ。少し酒場や

市場で話しを聞けばいくらでも聞く事が出来る。現に彼らは宿を出てから1時間程で戻って来た。あまりに大量の情報が簡単に入手出来た事に戸惑いながら。

「その様な人材が市井に埋もれているとは……やはり王国は許しがたい——いや、今は関係ない事だな。それにしてもンフィーレアと言う少年、叡者の額冠の力を使ったという事は只では済まなかつたはずだが？」

「現在は祖母と共にカルネ村という農村で静養中という噂です。祖母が営んでいたバレアレ薬品店も営業を取り止めています。」

「バレアレ薬品店という事は、リイジー・バレアレか？この国最高のポジション職人と云われる！」

「そのリイジー・バレアレです。ただちに影響はないと思われませんが、彼女のポジションは周辺国家でも高い評価を得ておりまして、各国にも影響が及ぶ恐れがあります。」

リイジー・バレアレは優秀なポジション職人だ。周辺国家でも高い評価を得ていた。それを蔑ろにしていたとは言わないまでも、彼女や孫の存在に殆ど気を留めなかつた王国の無能さが異常なのだ。

「元第九席次の仕出かした事の影響は大きいな。それでは事件を解決した漆黒の剣（白）という冒険者チームについて報告をしてくれ。」

「漆黒の剣（白）はエ・ランテルで稼働していた銀級チームでした。メンバーはリーダー

のペテル・モーク（戦士）、ルクルット・ボルブ（レンジャー）、ダイン・ウッドワンダー（ドルイド）、ニニヤ（マジックキャスター）の4人です。」

「銀級だと！バカな!？」

「事件解決の功績で、現在はミスリル級となっております。」

「それでも評価が低すぎる。事件の規模と首謀者達の戦力を考えればアダマンタイト級でもおかしくはない。」

事件が齎したかもしれない被害と、彼らの実力を理解出来るスタメンの考えは、あのバハルス帝国の皇帝と同じものだった。いかにイグヴァルジの考えが嫉妬と偏見に塗れたものだったのかを物語っている。

「組合はオリハルコン級に認定するはずでしたが、一部の冒険者から不満の声があった様です。また事件の被害が軽微だったので、エ・ランテル全体の危機感も少ない事が影響した様です。」

「まったくこの国の者達は……と言っても詮無いか。しかし王国をこのままにはしておけん。帝国との計画は絶対に成功させねばならん。任務を果たせなかつた兄上の無念を晴らしたいものだ。」

リ・エステイゼ王国は異形種の脅威から守られた肥沃な土地に建国された。それは平和な地で健やかに育つた国民から優秀な者が輩出され、人類の戦力となる事を願って

のことだった。しかし現在では国の支配層は腐敗に塗れ、国民は貧困にあえぐという救いようのない国に為り果て、周辺国家にまで麻薬等の害悪を及ぼしている。王国の人間が忘れてしまった理念を知る法国としては許しがたい存在だ。

「話しの腰を折ってしまったな。漆黒の剣（白）について続けてくれ。」

「メンバーの中でも、マジックキャスターのニニヤという少年は第四位階魔法の使い手で、魔法習得に有利なタレントを保有しているそうです。さらにメンバー全員がかなり高位のマジックアイテムを所持しております。」

「素晴らしいな。成長すれば漆黒聖典に迎え入れてもおかしくない逸材だ。それに高位のマジックアイテムか…その様な貴重なアイテムをどうやって入手したのだ？」

漆黒の剣（白）は法国からも高い評価を受けたようだ。もっとも当人達にしてみれば「全てお嬢様のおかげです」という事になるのだが。

「漆黒聖典入りが確実視されているスタメン殿がそこまで評価するとは…アイテムの入手経路ですが、非常に有力な後見人が付いています。そして漆黒の剣（白）はインフィーレア少年救出の際に入手した叡者の額冠と思われるアイテムを後見人へ渡した模様です。」

「私としては陽光聖典で兄の補佐をしたかったのだがな。しかし叡者の額冠の所在が確認できればかなり前進だ。それで後見人とは何処かの貴族か？エ・ランテルには例のナ

ザリック地下大墳墓に興味を持ってゐる貴族が居るという情報もあつたが。」

「それが……後見人と言うのはエ・ランテルに滞在中のアインズ・ウール・ゴウン様の子であるさつちん様という少女なのです。さらにナザリック地下大墳墓……組合では「新たに発見された遺跡」という事になっていますが、その調査を冒険者組合に依頼したのも彼女です。」

「何だどつ!!それはどういう事だ?」

驚愕すべき情報だ。アインズ・ウール・ゴウンは兄達が向かつたナザリック地下大墳墓に居るのではないのか?さらに妹の存在、そして妹が自らの拠点へ冒険者を向かわせた?——何かとんでもない陰謀が進んでいるのを感じたスタメンは全身に冷や汗を感じる。

「ではアインズ・ウール・ゴウン様はエ・ランテルに居られるのか?」

「それが……直接その姿を見た住民は居ない模様です。都市長のパソナレイの館に滞在中という噂です。但し妹のほうは冒険者組合を始めとした各所に顔を出していた模様です。さらにトブの大森林に生息していた森の賢王を騎獣にしていたという話も……あつ、森の賢王は漆黒の剣(白)と協力してズーラーノーンと戦つたそうで、住民へも受け入れられ、恐れられたりはしておりません。そして妹もここ数日は姿を見せていないそうです。」

「都市長については興味深い話があります。彼はアインズ・ウール・ゴウン様に忠誠を誓い、彼の御方が後ろ盾となり王国からの独立を目論んでいると……王都からの使者を無視したあげく納税を拒否し、王国の他の都市へ搬出される物資も荷留、というより横領しているという事です。」

「エ・ランテルの住民も殆どが好意的な様です。税の軽減や帝国兵……に襲撃された村の復興にかなりの予算を投入する事も発表され、商人達もそれを見越した動きをしています。王国の貴族と関わりのある商人も貴族から距離を置いています。」

わずかな期間で激変している情勢にスタメンは驚愕する。エ・ランテルはいずれ王国を滅ぼした際に、どちらが併合するかで法国と帝国が協議している重要な都市だ。ここを第三者に押さえられれば、2カ国の政策に重大な影響が出るのは間違いない。

「この情報の精査をして確認が取れ次第、本国へ報告する必要がある。そして……出来れば兄上、いやレイモン様にこの事を伝えたいが時間的に難しいな。」

「今から全力で向かつても厳しいでしょうね。」

「無理だろうな。向こうは今頃ナザリック地下大墳墓に到着していてもおかしくない。レイモン様達を信じるしかない。私達はさらなる情報収集を——件の漆黒の剣（白）との面会は可能か？」

「漆黒の剣（白）は黄金の輝き亭という宿に逗留中です。まずは探りを入れてみますか

「？」

「いや、ぶれいやー様に連なる可能性が高い人物だ。礼節を持って交渉、いや話しを伺うのだ。私が直接赴こう。1人だけ供に付けてくれ。残りは情報の確認を進めろ！」

出来る男スタメンは想定外の事態にもうろたえずに、そして迅速に事を進める。しかしそんな彼でもどうしても腑に落ちない事があった。

「それにしても「漆黒の剣（白）」の（白）というのはどういう意味なんだ？ 黒なのか？ 白なのか？ どっちなんだ？」



エ・ランテルで最高級の宿である「黄金の輝き亭」、そこでも最上級の部屋に漆黒の剣（白）は滞在していた。各自に個室が宛がわれ、設備も文句なしで食事だって豪勢……なのだが、数日でも「お嬢様」と過ごした彼らにとっては、これ位ではいちいち驚くほどの事でも無かった。

「それで……大切な話しがしたいとの事ですが？ ニニヤの事情についてですね。」

「はい……今まで話せずにいたのですが、ようやく決心が付きました。チームの皆には関係のない事です、それでも聞いてくれますか？」

「私達は仲間。それも文字通り一蓮托生なのである。」

「前にも言っただろ。話しなら幾らでも聞いてやるさ。仲間なんだからな。」

「ありがとうございます。私には姉が居ました。ツアレニーニヤと行ってとても気立てが良くて優しい姉でした——」

二ニヤから語られた事情。姉を貴族に奪われた少女の悲劇。そしていつか力を手に入れて姉を救いたいという強い決意。とても悲しい同情すべき話だが、そんな話しは王国では珍しくもない。それほどこの国は腐っているのだ。

「私は都市の出身でしたから、そういった話しがあるという事くらいは聞いていましたが、本当に許せない話しです。それに都市の貴族も変わりません。私の実家は小さな雑貨店でしたが、貴族の息のかかった商人に目をつけられて立ちゆかなくなり、両親は過労で病になりそのまま亡くなってしまうました。これでも商人として成功するという夢があつたんですけどね。」

ペテルの意外な告白に皆が驚く。たしかに彼は冒険者としては珍しいくらい礼儀もあり、読み書きや計算も得意でメンバーも頼りにしていた。だからこそリーダーとして認められていた。

「私も農村の出身で、同じ村の女性が貴族の使用人として雇われたのを聞いた事があるのである。しかしその女性は帰郷はおろか手紙の一通も村に送って来る事もなかった

のであるが、おそらくニニヤの姉上と同じ様な事情だったのだろう。残された家族はとも悲嘆にくれていたのである。」

ダインも似たような事情が身近にあったので、ニニヤの辛さがよく理解出来た。なにせ彼女は彼にとって初恋の人だったのだから。そしてこの少女と姉の為に命を使うのも悪くは無いと、心の中で決心した。

「俺も似たようなもんだ。俺には兄貴が2人いたんだけどよ……どっちも戦争に連れていかれて帰って来なかった。一緒に戦争に行った村の連中が、せめてこれ位はって遺髪を持ち帰ってくれたが、領主の野郎からは何もなかったぜ。それで両親は「こんな村にいても幸せになれない」と言って、路銀を用意して俺を送り出してくれたんだ。」

ルクルツトにも悲しい過去があった。漆黒の剣（白）の全員が貴族によつて人生を狂わされているのだ。

「皆にもそんな事情があつたなんて……自分だけが不幸なんじゃないかと思つていたのが恥かしいです。それで——」

「勿論、協力は惜しまないのである。」

「俺も協力するぜ。それにニニヤにはまだ可能性が残つてるんだ。姉貴はきつと生きてるや。」

「私も賛成ですが、リーダーとしては確認しなければなりません。既に私達

む。彼ら全員がすぐに武器を手に出来る様になっているのが分かる。かなり警戒されている。

これはクレマンティーヌの奇襲によつて惨殺された彼らの苦い経験からくる物だ。例え宿の中でも、直ぐに戦闘に移れる様に心がけている。ちなみに面会しているのは黄金の輝き亭に併設された食堂の個室だ。高級宿では商談が行われる事も多いのでこういった設備がある。当然、それ相応の料金が発生する。

「私はある任務の為にスレイン法国から来たスタメン・グリッド・ルーインと申します。まずは面会に依じて戴き感謝します。」

漆黒の剣（白）に対して深々と頭をさげるスタメン。従者も同様だ。その非常に礼儀正しい態度に彼らも若干だが警戒を緩める。だが決して油断は出来ない。なにせ法国は帝国兵に偽装してエ・ランテル周辺の村を襲っていたのだ。愛国心などない彼らでも、村人を惨殺した法国には思う所がある。

「これはゴ丁寧に……私達が漆黒の剣（白）です。私はリーダーのペテル・モークです。」
続いて残りの3人も簡単な挨拶を済ませる。いくら目的不明で気にくわれない相手でも「礼には礼を」これ位は彼らも弁えている。

「それでスレイン法国のお偉い様が、俺達に何の用があつて尋ねて来たんだい？ 任務つてやつも気になるけどな。それにしても俺達も大人気だ。帝国に続いて法国からもお

客が来るとはなあ。」

「おいルクルット！」

ルクルットの厳しめの物言いをペテルが窘める。これは彼らなりの交渉のセオリーだった。

「かまいません。皆様には包み隠さずお話しいたします。私の目的はスレイン法国で火の巫女姫を殺害して、法国の至宝である叡者の額冠を奪って逃走した女と、奪われた叡者の額冠の行方を追っていました。その女は法国の特殊部隊に所属していたクレマンティーヌという者で、エ・ランテルで発生した事件の主犯の1人で、皆様が捕らえた女です。それと差し支えなければ帝国からの客人の用件をお聞きしても？」

「帝国の商人から、帝都アーウィンターまでの護衛を依頼されただけですよ。」

「かなりの高条件でしたけどね。僕達はある御方に仕えているのでお断りさせて貰いましたけど。」

既に帝国も動いていたか……スタメンは危機感を覚える。

「それにしてもあの女……只者じゃないとは思ったが、法国の特殊部隊？」

「そんな存在は聞いた事ありません。」

「そうでしょうね。法国には六つの特務聖典がありますが、その中でも最強で特に存在を秘匿された漆黒聖典。クレマンティーヌはその第九席次でした。」

「おいおい……あんな化け物が9番目かよ。」

「そういえば、あの女は自分の事を「以前は人類の守護者だった」と言っていたのである。」

「漆黒聖典は席次Ⅱ強さという訳ではありませんが、第一席次の隊長は別格ですね。神の血を引いた神人という話ですから。そして漆黒聖典は文字通り人類の守護者として、人知れず強大な異形種・モンスターから人類を守る役割を担っています。全員が冒険者で言うアダマンタイト級を凌駕する実力を備えています。」

「法国の機密を隠し立てせず話すスタメンに漆黒の剣（白）はおろか従者の男も驚愕する。もつともスタメンも法国の最高機密である彼女についてまではさすがに知らなかったようだ。そして彼がここまで話すのは自分達、つまりは法国の力を示す為である。」

「俺達みたいな冒険者如きに、そんな話しをして大丈夫なのかよ？」

「かまいませんとも。貴方達には是非とも知って頂きたい事ですから。」

「買いかぶり過ぎでは？ 私達はたかだかミスリル級の冒険者チームですよ？」

「正確には皆さんの後見人に対して、ですがね。それに皆さんもかなりの実力者でしょう。法国に冒険者組合はありませんので詳しくはありますが、皆さんの実力は最低でもオリハルコン級という話しだそうですね。」

実際スタメンは漆黒の剣（白）をかなり評価している。自分には及ばない事を解つたうえで、彼らを中の上くらいと分析している。仮に戦うとすれば、負けないまでもかなり苦戦するだろう。そして彼らだけではクレマンティーヌ達には勝てない、森の賢王の助力以外にも何かあつたのでは？と推測する。

「それは恐縮ですね。それではそろそろ本題の方に入つて頂けますか？」

「分かりました。我々の目的は皆さんの後見人である「さつちん様」と兄である「アインズ・ウール・ゴウン様」です。法国は彼らと絶対に敵対する訳にはいかないのです。不幸な行き違いで怒りを買ってしまったので、関係を修復したいのです。」

「罪のない村人達を殺して不幸な行き違いですか？ 貴方達がこの国でした事をどう思っているのですか？」

「それについて王国には弁明しません。ですが皆さんは知つているのですか——」

スタメンが語つたのは、王国民が知らない人類の危機的な現状。いかに王国が許しがたい存在で、法国がどれだけ憤つているかという事。さらに帝国との密約でさえ彼らに語つて聞かせた。彼にしてみれば虐げられる事を嘆くだけで、現状に対して行動しない王国民へも憤りを感じている。仮に王国民が貴族達に反旗を翻す為に行動していれば、法国は喜んで支援していただろう。

「確かにこの国は腐つています。でも……」

「帝国と法国の間でそこまで話しが進んでいるとは！」

「確かに王国の民に罪が無いとは言えないのである。だが虐げられている者にさらに犠牲を強いるというのはいかがなものなのか？」

「我々も考えを改める必要があります。それに神の力添えがあれば、より良い方策が採られるでしょう。」

「神の力添えですか？ いったい何を……」

「まだお分かりにならないのですか？ アインズ・ウール・ゴウン様とさっちゃん様です。御一方は間違いなく「ぶれいやー」と云われる存在です。人類を救った「六大神」や、凄まじい惨禍を齎した「八欲王」もぶれいやーでした。」

スタメンはぶれいやーについても自分が知る事を丁寧に説明する。歴史に隠されていた真実に漆黒の剣（白）も驚きを禁じ得ない。

「今、私の兄を含む法国でも重要な方々が、アインズ・ウール・ゴウン様へ謁見する為にナザリック地下大墳墓へ赴いています。既に法国は彼の御方の怒りに触れて少なくとも被害を被っています。おそらく兄達も無事では済まないでしょう。命の危険も覚悟しています。」

「そちらの事情は理解しましたが、私達にどうしろと言うのですか？」

「皆さんからアインズ・ウール・ゴウン様へ取り成しをお願いできませんか？」

「我らもアインズ・ウール・ゴウン様とは面識が無いのである。あくまでも妹であるさっちゃん様に仕えているだけなのである。」

「では皆さんの主人さっちゃん様への取り成しをお願いします。その御方の意見ならアインズ・ウール・ゴウン様も無碍にはしないでしょう?」

間違い無く聞く。余程の事でも聞く。さっちゃんの意見はナザリックの最優先事項だ。

「それを聞いて俺達にメリットは?それにお嬢様はエ・ランテルには居ないぜ。そういえば「お客さんが来る」と言っていたな。何かあれば連絡するから大人しく遊んでいろつて言われてる。仕え甲斐のあるお嬢様で、俺達も忠誠を誓っている。でっけえ恩義もある。迷惑はかけられねえ。」

「主人がその兄の勘気に触れるかもしれない事を私達がするとでも?」

ペテルの言葉にスタメンは鋭く反応する。

「まずはさっちゃん様へ連絡を取って頂けないでしょうか?その方法があるのでしよう?それとメリットについてですが…国としては何も確約できません。しかし私個人は皆さんに大きな恩義を感じますし、可能な限りの代価を払う用意があります。今はこれ位しか出来ませんが…兄を想う愚かな弟に免じて……」

そう言うスタメンはその場で跪いて床に額を擦りつけて懇願した。スレイン法国に伝わる最大限の礼の作法「どげぎ」である。



「もしもし、どうしたの？今いいところだから忙しいんだけど。何かあった？」

「え？スタメン？誰それ？おっ！さすがコキュートス！ウヒヤヒヤヒヤ！圧倒的だねナザリックは！」

「ニグンの弟？だからニグンって誰？お兄ちゃんに用？そんなの私に言われてもねえ。」

大墳墓への挑戦者（1）

「やつと到着したでありんすかえ。ここが偉大にして至高なるアインズ・ウール・ゴウン様と、その究極の妹君であらせられるさつちん様が支配するナザリック地下大墳墓でありんす。念のために聞いておきんすが、スレイン法国からの来客ということで間違いないせんね？」

ナザリック地下大墳墓に到着したレイモン一行を出迎えたのは、非常に整った外見をした可憐な銀髪の少女だった。周りに大勢控えているのも美しい女性ばかりだが、彼女達は全員がヴァンパイアと呼ばれる異形種の特徴を持っている。つまりこの可憐な少女も人間ではないという事だ。

「はっ。私はスレイン法国土の神官長レイモン・ザーグ・ローランサンと申します。まずは態々お出迎えをして戴けた事に感謝いたします。」

そう言つてレイモンは目の前の、外見だけはそれこそ祖父と孫ほど異なる少女に対して深々と頭を下げ、他の者達もそれに追隨する。

かつて漆黒聖典として異形種との戦いに明け暮れ、現在も法国の重鎮である彼が、異業種を相手に謙った態度をとっている姿は、法国の一般国民が見れば卒倒する様な光景

だろう。しかし一人だけ他とは異なる反応を見せた者がいた。

「あわわわ……そ、そ、その少女……れ、れべる……ひやく、ご？あ、あ、ありえない……」

そう言い残して大きなとんがり帽子を被り、赤い一抱えもある球を携えたマジックキヤスターらしき女性は卒倒した。股間からは臭いとともに液体が溢れ出ていた。彼女こそ「探知能力に特化し、相手の強さを正確に見抜く」というタレントを持つ漆黒聖典第十一次席である。

彼女は「レベル」という絶対値で相手の強さを判断出来る。レベルとは六大神をはじめとしたぶれいやーが強さを表すのに使った表現で、法国でも殆ど知られていない秘匿事項だ。法国でも彼女にしか判断できない基準で、一般的には冒険者組合で使われる「難度」という基準が使われている。伝承ではレベルは最高で「100」というのが不文律で、法国の秘匿された神人で95。今も法国に現存するとされる六大神スルシャーナの従属神が80で、漆黒聖典隊長で70だ。

ちなみにシャルティアのレベルを105と判断したのは、ナザリックのバフ効果の影響である。ここが表層部ではなく彼女の守護階層である第一から第三階層であればレベルはさらに上がっていた。

「た、大変失礼いたしました。これはこの者が貴女様の強大すぎる力に慄いた為で、こちらから無礼を働く意図はないと信じて戴きたい。」

「それなら不問にしんしよう……おもしろい能力でありんすね。妾はシャルティア・ブラッドフォールン。このナザリック地下大墳墓の第一から第三階層の守護者でありんす。おんしらがナザリックを訪れた理由は何でありんしよう？」

「はつ。アインズ・ウール・ゴウン様に拝謁を願ひ、先日の不幸な行き違いについての釈明と、今後についてのお話しをさせて戴きたく足を運んだ次第です。決してこの場をお騒がせするつもりはございません！」

「そう（少し残念）……でも偉大にして至高なるアインズ様はその玉体を軽々しくお見せする事はありません。それを望むのであれば相応の物を示してもうらう必要がありません。」

シャルティアはスレイン法国の者達への応対について、アインズから指示を受けていた。相手が無礼な態度を取る様であればそのまま殲滅——周囲には不可視化した80レベル以上のシモベ達が大量に配置されていた。

そして相応の態度で礼を示すのであれば、そのまま第六階層の闘技場へ案内する様に命じられた。彼女としては前者の態度を取ってくれたほうが好ましかったのだが、アインズの命令は絶対だ。ちなみに判断基準や応対はデミウルゴスが指示している。脳筋ぎみの彼女に繊細な判断や対応を求めるのは事故の元だ。

「それは何かの対価……金銭や物品という事でしようか？それとも何かの条件があるの

でしようか？」

「おんしらは「礼」を示しんした。あと必要なのは「勇氣」と「武」でありんす。これから案内する場所で、それを示してもらいんすが、覚悟はよろしいでありんすかえ？」

なるほど…とレイモンは唸る。御伽話や伝承でも遺跡やダンジョンの主が、試練を突破した勇者を讃えて力を与えたりするのはよくある話だ。他の者達も同じ事を考えたのか怖気づいた者は無い。中には握り拳を固めている者もいた。頼もしい奴らだ…そう思いレイモンは返答しようとしたが――

「但し…1名にだけ特別な試練を、アインズ様が御自らご用意して下さっているでありんす。クアイエッセ・ハゼイア・クインティアという者は名乗り出るでありんす。」

「はっ…私がクアイエッセ・ハゼイア・クインティアです。我が名をご存じだったとは…」

いったい何故？とクアイエッセは心の中で自問する。自分の名を知っている事も驚きだ。他の者達も同様で跪きながらもクアイエッセを伺う。

「おんしには特別な試練が準備されているでありんす。これを拒む事は許されないのでありんす。そして見事に試練を突破すれば物凄い「ごほうび」が用意されているでありますよ。《ゲート／転移門》」

クアイエッセの眼前に現れたのは、奈落へと通じていそうな暗い穴…この先にいつ

たい何が？と思う間もなく声が掛けられる。

「早く行きなんし！アインズ様がお待ちしているであります！」

意を決してゲートを潜ったクアイエッセを確認すると、シャルティアが残されたレイモン達に告げる。

「次はおんしらの番であります。ちやつちやと済ませて、妾は観客席でのんびりと見学させてもらうであります♪」



レイモン達がゲートを潜った先はしつかりとした作りの通路の途中だった。魔法の力で灯りが確保されているので視界に不自由は無い。前方に開けた空間が確認出来るので、そこが目的地という事だろう。

「ここは一体？建物の通路ようだが…かなり高度な転移魔法といい恐るべき力だ。」

「クアイエッセの坊やは無事だといいのじゃが。」

「あいつは階層守護者と言っていた。他にもあんな化け物がいるのかよ…」

「この雰囲気は…それに向こうに見えるのは競技場？帝国にある闘技場の様な施設でしようか？あそこでは確か…」

「成程：我々は挑戦者という事か。この先で待ち構えている者と闘い、それをぶれいやー様達が御覧になられる。では精々、興行主を失望させない様にしようじゃないか。」
「望むところです。我らの勇氣と武の力を示して見せましょう！」

レイモンの言葉で彼らも覚悟を決めたのか、うろたえる様な素振りはない。あんな事になつた第十一次席も魔法の力によつて回復している。彼女は帝国の強者を調べる為に闘技場へ赴いた事があつたので、似た雰囲気を感じ取つたのだろう。

「挑戦者入つてまいりましたああ！」

通路を抜けた彼らを闇妖精の少年の一声が迎え入れる。観客席には無数の異形の者達が奔めいていた……アンデッド、悪魔、騎士の様な昆虫、精霊らしき存在だ。様々な異形種に詳しい彼らでも知らない様なモンスター、中には伝説に謳われるアンデッドさえいた。人類最高峰の戦士である、漆黑聖典の隊員でさえ勝てるかどうかを覚悟する様な者も多い。

そして観客席の半分以上を埋め尽くすゴーレム。法国や帝国で見られるウッドゴーレムやクレイゴーレムではない。最低でもストーンゴーレム、さらに強力なアイアンゴーレムだ。中には未知の金属製ゴーレムも含まれる。この施設の支配者の戦力と財力をまざまざと思ひ知らされる。

「いっ、いっ、これは……！」

「ばかな…ありえない。」

「挑戦者はナザリック地下大墳墓へ果敢に挑む、覚悟完了の勇者達6人！そして、それを迎え撃つのはナザリック随一の武人！第五階層守護者、凍河の支配者コキュートスだああ！」

反対側の通路から現れたのは、蟻螂と蟻を掛け合わせた様なライトブルーの巨大な二足歩行の蟲人。四本の手にはそれぞれ「巨大な刀×2」「斧槍」「メイス」を持っている。どれもが凄まじい威力を秘めているのが一目で解る。法国に遺された神の武器に匹敵、いや凌駕しているだろう。

「コキュートスが手にしているのは「建御雷八式」「斬神刀皇」「魔槍グングニール」「全力全壊」全てが神器級の業物だぞおお!!」

「ヨクゾ来々。勇敢ナ戦士達ヨ。我が名ハコキュートス。ナザリック第五階層守護者デアアル。才前達ノ名ヲ聞コウ。」

非常に聞き取りにくい硬質な声だったが、その言葉、佇まいは堂々たるもので正に武人というのに相応しい。レイモン達もそれぞれが臆することなく名乗りをあげる。

「本来ナラ全テノ手ニ武器ヲ持ツノハ我が認メタ強者ノミ…ダガ才前達ノ輝キニ敬意ヲ表シテ、最高ノ武器デ相手ヲシヨウ。ソシテ才前達モ全テノ力ヲ出シ惜シミ等セヌ事ダ。如何ナル事ヲシヨウトモ、コノ身デ全テ受け止メル。」

そう言つてコキユートスは、派手な龍の刺繍が施された「チャイナ服」と呼ばれる衣服を身に着けた老婆（カイレ）へ手に持った刀を突き付ける。レイモン達の視線がカイレに集中する。そしてカイレに向かつてレイモンが頷くと、カイレも覚悟を決めて頷き返す。

カイレの纏うドレスから白い稲妻のような光がコキユートスへ向かつて放たれる。その光景を固唾を呑んで見つめる周りの者達――

「むうう……」

「……何……だと……」

「ありえねえ……」

「やはり……か……」

「うそ……ケイ・セケ・コウクが効かないなんて!？」

「支配の繋がりは感じられん。よもや神器すら通じぬ存在が居ようとは。」

彼らの反応を見届けたコキユートスが一瞬で距離を詰めて4本の武器を振るう。レイモンとニグンは切り伏せられ、カイレを庇った第八席次は揃つて串刺しにされる。メイスで強打された第十一次席はそのまま吹き飛ばされ、観客席の壁に激突する事で漸く止まる事が出来た。全員が辛うじて生きているが戦闘不能なのは明らかだ。

唯一無傷の第一席次が突きだした槍がコキユートスの身体に突き刺さったかに見える

たが、強固な外骨格に阻まれて僅かな傷を残しただけに留まった。

「見事ダ。我が外皮ヲ傷ツケルトハ。才前モソノ槍モ。」

コキュートスが建御雷八式と斬神刀皇を振るうと、第一席次の両手が付け根から切り落とされる。それでも彼は両手を失ったままでコキュートスへ突進する。第一席次の突進を受け止めたコキュートスは僅かに一歩だけ身体を後退させる。

「本当二見事ダ。才前達ノ輝キハ魅セテ貫ツタ。アインズ様モ満足サレルダロウ。」

「まだだ……まだ終われない。」

両手を失い、地面に突つ伏しながらも第一席次は諦めていない。その命が尽きるまで足掻くつもりだ。諦めたらそこで終わりなのだから。これは隊長としての意地だ。仲間はまだ戦えないだろう。生きているかも知見当が付かない。分かり切ってはいた事だ。今回の任務は生還の期待出来ない任務だったのだから。

彼を始めとする漆黒聖典が任務にあたる時に、いつも最初に言われる事は「人類の為の礎となれ」の一言だ。彼にはそれで十分だった。そう言われるのは「人類存亡の時のみ」であり、それを受けるのは人類の守護者である自分にとつて当然の義務だと考えていた。そうやって死地に赴き還ってこなかった先達、一度死んだ後に蘇生され、文字通りその身を削って戦い続けた者さえいた。

それに今回の任務だけは死ぬ事は許されても失敗する事だけは許されない、自分達の

「さっちゃん様、間もなく第六階層での催しが始まる様です。」

「ん〜どれどれ?」

そういつて《クリスタル・モニター／水晶の画面》に注目するさっちゃんだが、膝の上
にペット筆頭のぷーにやんを乗せ、左手に持ったグラスからオレンジジュースをチュー
チューと吸いながら、右手でポップコーンを摘まんでは口に運んでいる。完全に観戦
モードだ。

第六階層での催しについては、コキュートスの圧勝に終わるだろうというのがさっち
んの予想だ。あの装備はガチだ。自分が戦つても3分持てば善戦したほうだろう。や
がて侵入者が競技場へと入場したが、あの御婆さんは無い。有り得ない。思わずジュ
ースを噴き出して側にいたメイドにぶっかけてしまった。なぜかニコニコしていたが…
コキュートスも会場入りして、さっちゃんも「コキュートスいけー」と歓声を送つてい
るとメッセージが届いた。

〈へもしもーし、どうしたの?今いいところだから忙しいんだけど。何かあった?〉

メッセージの相手はニニヤだった。漆黒の剣（白）には小遣いをたっぷりと与えて、
エ・ランテル最高級の宿までとつてやったはずだ。まさかもう使い果たしておかわり?
と思つていると。

〈へお忙しいところ申し訳ありません。いつもお世話になっております。漆黒の剣（白）

のニヤでございます。実はお嬢様のお耳に入りたい事がございましてメツセージを入れさせて頂きました。それでスレイン法国からスタメン氏という方が——

画面の向こうではワールドアイテム傾城傾国を無効化したコキュートスが一瞬で5人を戦闘不能に追いやっているところだ。

へえ？スタメン？誰それ？おっ！さすがコキュートス！ウヒヤヒヤヒヤ！圧倒的だねナザリックは！

へそのスタメン氏は、以前もそちらのナザリックで大変お世話になり、今回のお客様にも同行しているニグン氏という男性の弟だそうで、そのニグン氏の処遇についてお嬢様のお兄様にご相談があるそうなのですが——

へニグンの弟？だからニグンって誰？お兄ちゃんに用？そんなの私に言われてもねえ。

へまあ私としてもスタメン氏に懇願されて、しかたなくこうしてご連絡を差し上げています。お嬢様を煩わせてしまうのは本意ではなく大変心苦しいのです。このニヤの忠誠心はお嬢様第一だという事はくれぐれも誤解のない様お願いいたします！それで話しは変わりますが、私個人の事情で大変恐縮なのですが、美しく可憐で慈悲深く正義の心をもった偉大なお嬢様のお力添えを頂きたい案件がございまして、エ・ラントルへお戻りの際に少々お時間を頂けないかと思ひまして……もちろんお嬢様には多

大な御恩を受けている身で汗顔の至りだという事は重々承知しております。しかし今後も漆黒の剣（白）一同は粉骨砕身でお嬢様へお仕えする事を改めてお約束いたします！ですので第四階マジックキャスターのニヤ！タレント持ちで将来有望のニヤを何卒お引き立てのほどお願い申し上げます！それではお忙しいところお時間を頂きましてありがとうございます。〳〵

何か途中から話が変わってない？と訝しむさっちゃん。画面の向こうではコキュートスが第一席次の両腕をチョンパした所だ。

〳〵あゝもしもし？メッセージ変わりました。ルクルットです。ちよつとよろしいですか？〳〵

〳〵別にいいけど。何かニニヤの様子が変わったけど…どうしたの？〳〵

〳〵まあ、あいつにも色々とありまして…それは後日という事で…〳〵

〳〵それで、どうしたのかな？お兄ちゃんに用事があるみたいだけど…〳〵

〳〵実はですね、そちらのナザリックを訪ねている連中についてなんです…ちなみにまだ生きてます？〳〵

〳〵ん？何で知ってるの？一人は別行動だけど他は全員戦闘不能だね。まあ死んではいけないけど…〳〵

〳〵あちやく…でも死んでなければいい…のか？その中でニグンって野郎が居たはずな

んですが?」

「ニニヤも言つてたけど誰それ?」

「以前そちらのナザリツクにお邪魔した法国の男なんです。がご存じないですか?」

「ああ、アレ!居た居た。それでニグンがどうしたの?」

「ニグンの弟だつて言うスタメンつて野郎が訪ねて来てるんですよ。兄貴を助けられ

ないかつて。それでニグンの事ですが何とかありません?他はどうでもいいんで」

「ああ、そういう事。大丈夫だと思うよ。ニグンになつてるけど」

「何ですか?そのニグンつて」

「身体が1/3くらいところでスツパリと」

「本当に大丈夫なんでしょうね?」

「大丈夫!お兄ちゃんも命までは取らないつて言つてたから!全員生きて帰れるよ!

…多分」

「それなら問題ないか?それで物は相談なんですがね——」

画面の向こうでは、両手を失いながらも必死に立ち上がろうとしている第一席次の姿があつた。



「——という訳でアンタの兄貴を含めて全員無事に（身ぐるみ剥がれて）帰って来れるとよ。お嬢様の必死のお願いでそうなったんだから感謝しろよ。もちろん俺達にもな！」

「漆黒の剣（白）の皆さんには大変お世話になりました。特にルクルツト師父には感謝してもしきれません！このスタメン・グリッド・ルーイン、今回の御恩は決して忘れませぬぞ！本国に戻り次第、金貨1000枚を送金させて頂きます。それ以外でも私で力になれる事がありましたら遠慮なくお申し付け下さい。」

スタメンは漆黒の剣（白）全員の手を取りながら、涙を流して感謝した。そして何度も何度も頭を下げるとスレイン法国へと帰って行った。

大墳墓への挑戦者（2）

「はーはー…はあ…あ、危なかった。これで残りは…あと2階か…」

クアイエツセは息を切らせながら床にへたりこむ。だらしなく脚を拡げ両腕も垂れさがって、顎で息をしなければならぬほど疲弊していた。大きなダメージは負っていないし魔力も半分以上残っている。

だがあまりにも体力を失ってしまった。最後の1本のポジションは万一に備えて使わずに、今は少しだけ…もう少しだけ休むか…と、そのまま床に背中をつけると、今までの戦いを思い起こしていた。

彼がゲートを潜った先に在ったのは、そびえ立つ漆黒の塔だった。窓の位置から推測される階層は4階だが、1階あたりの高さがかなりある。これなら自分が召喚するギガント・バジリスクを戦わせるのにも不自由はないかと考えていると、上空から聞こえた謎の声――

「よく来たなクアイエツセよ！私は最上階でお前の大切な存在と共に待っている。但しあまり時間がかかる様では、私の気が変わるかもしれないから急いだ方がよいぞ！但し各フロアーには階段を守る番人が居る。それらを倒して最上階まで登って来るがいい！

それがお前に与えられた試練だ。フハハハハハハ。」

全く心当たりは無いが、神に等しいふれいやー様が自らに課した試練だ。何と云つても自分は神に試練に挑むのに相応しい勇者として選ばれたのだ！それにあの可憐な少女（実は超好みのタイプだった。胸が慎ましやかなら完璧だ！）も「ごほうび」があると言つていた。もしかしたらクリアのご褒美にほつぺにチューでもしてくれるんじゃないかとお目出度い事を考えていた。

人間以外を排斥している（エルフやドワーフすら奴隷階級）スレイン法国——それも実際に異形種や亜人種と戦う事が任務であるはずの漆黒聖典第五席次の彼が、明らかに人外であるシャルティア・ブラッドフォールンに好意を持つているのは何故なのか？《魅了の魔眼》の影響？否、シャルティアは彼にスキルを使つてはいない。

クアイエッセ・ハゼイア・クインティアには漆黒聖典第五席次という表向き立場の他にもう一つの「顔」がある。スレイン法国最大の禁忌ともされる秘密組織の会員としての顔が…

国是に忠実に従う国民からは都市伝説として一笑に付されているが、法国には数百年の歴史——六大神喪失まで遡る——を持つ組織が存在する。漆黒聖典以上にその存在が秘匿されてきたというその組織は「ダブルピース」という。

彼らの目的は「人類主導による他種族との共存共栄」という法国の国是に中指を突き

立てる物だ。他種族との共存共栄こそが法国のあるべき姿と信じ、自分達を「真に人類の未来を憂う者」と考えている。ダブルピースに所属する者は一般の国民以外にも軍や行政機関、さらに神殿関係者まで様々な場所に潜んでいる。

なにせダブルピースの「会長」と呼ばれる男は、かつて法国最強の特殊部隊に所属し現在は〇〇の神官長の地位にあるし、唯一の女性神官長も幹部の一人なのである。さらに会長以上に長く組織に席を置く重鎮の女性顧問は、法国の最秘宝と云われる神器の遣い手という噂である。

ダブルピースには様々な派閥がある。最も多いのが「エルフ派」で、そこから枝分かれした「ダークエルフ派」、他にも「獣人派」や「ドワーフ派」があり、更には「リザードマン派」や「異形種派」などという業の深い者も少数派ではあるが存在する。

時折、互いの好みから思想闘争が起きる事もあるが、組織の団結は強く長い間、秘密を保ちながら賛同する人員を増やし続けている。ぶつちやけて言えば特殊性癖の「H E N T A I」の集まりであるが、彼らの存在があるからこそアングランド評議国とも最低限の交流が保たれているのである。永久評議員の白金の竜王も「これが人間の可能性か……」というコメントを発し、組織についても消極的擁護という姿勢を取っている。

クアイエッセ自身は最大派閥のエルフ派、その中でも未成熟なエルフを愛でる会派の中心人物として知られている。彼は幼い外見（実年齢は50歳超え）のエルフ姉妹を奴

隷として所有しているが、奴隷とは名ばかりで地下室ではあるが広く清潔な部屋に住まわせ、華美な衣服や下着類を着せて、栄養にも配慮した食事をたっぷりと与えている。当然だが無理矢理労働をさせて酷使（週に2回ほど夜間労働）する様な事も無い。

さらに彼はダブルピースに所属する高位神官に極秘裏に依頼して、姉妹の切り落とされた耳（法国では奴隷の証としてエルフの耳を半分切除する処理を施す。ちなみにドワーフは髭を剃らせる）も治療させている。

これには姉妹も大喜びで、クアイエッセも「エルフの魅力である耳を切り落とすとは！これだから真の美が理解出来ぬ愚物は度し難いのだ」と姉妹への非道な仕打ちに激怒していた。

そんなクアイエッセは浮かれながらホイホイと塔の中へ入っていった。最初のフロアーで待ち構えていたのは全身をマジックアイテムで固めた屈強なスケルトン10体。いわゆるナザリック・オールドガードである。それぞれがオリハルコン級冒険者くらいの戦闘力を持っている。

しかし「1人師団」と呼ばれる彼にとって、集団戦は望むところだ。「行け！ギガント・バジリスク」の掛け声とともに魔獣を召喚して突撃させ、自身も武器を取って戦いながら、魔獣の的確に指示を出して殲滅する事に成功した。

「ふむ、中々手ごわい相手でしたね。さすがは神の与える試練という事ですか…。とり

あえず上の階へ進むとしましょう。」

次のフロアーで待ち受けていた相手を見てクアイエツセは戦慄した。2階の番人として配置されていたのは「デスナイト」と「ソウルイーター」の2体だ。デスナイトは鉄壁の防御を誇り、自らの剣で殺した者をアンデッドにする能力を持つ、1体で都市を滅ぼすとされる伝説のアンデッド。ソウルイーターはその名の通り魂喰らいという即死スキルを持ち、かつてたつた3体で十万人のビーストマンの都市を滅ぼしたという伝承があるアンデッドだ。

多数の魔獣を召喚して波状攻撃をしかけるが、魔獣達は次々に討取られる。またにも戦えているのはギガント・バジリスクのみだが、この魔獣の最大の武器である石化の視線と毒攻撃は、このアンデッド達には効果が無い様で、肉体スペックで劣るギガント・バジリスクは劣勢だ。2体ばかりでソウルイーターを押しさえさせるが倒されるのも時間の問題だ。

クアイエツセはデスナイトを相手にするが、純粋な戦士職ではない彼には防御に徹して、殺されない様にするのが精一杯だった。何より防御に優れたデスナイトの守りを突破できる火力が無い。何とか致命傷を避けながら持ち堪えているがこのままでは打つ手がない。それでも諦めずにクアイエツセは戦い続けた。

戦いが始まって10分も持たずにギガント・バジリスクは倒されたが、ソウルイ

ターは戦いに加わらず、1階への階段の前でクアイエッセが逃げられない様に陣取っている。そしてデスナイトは何度も隙があったにもかかわらず、トドメを刺さずに戦いを終わらせない様にしていた。

「クツ…罠り殺しにするつもりか？それに、逃がすつもりも無いという事か…これは神の試練ではなく、悪魔の罠だったというのか？」

そう呟いていると、まるで掻き消えるようにデスナイトとソウルイーターが消滅していく。

「これは!?そういう事か…神が私の力を認めて下さったという訳だな！」

非常に都合のいい解釈をしたクアイエッセだったが、流石に消耗が激しかったのか尻もちをつくとその場にへたり込んでしまった。



「ハァー…このままじゃ絶対ヤバイよね。かと言って逃げ出せる可能性は無し。アタシもお終いか…あ、このマカロン美味しい♪変な色だけど…」

ナザリツクに囚われの身となったクレマンティーヌは、洗い浚い情報を吐かされた後は、牢内に監禁されているものの、清潔な衣服と美味しい食事とオヤツまで与えられて

まったりと過ごしていた。一時は取り乱したりしたが、美味しい飯を食べて、ぐっすり眠って落ち着きを取り戻した今は、残りの人生について考えていた。

「1日ぶりだなクレマンティヌ。気分はどうだ？」

「げえええ…ア、アインズ・ウール・ゴウン様！は、はい…おかげさまで。エへ…あ、このマカロンとても美味しいです！変わった色ですけど。」

「ん？変わった色？」

「お兄ちゃん知らないかー。この世界の食事って美味しいんだけど色が凄いの！青いソースとかピンクの玉子焼とかあるんだよ！味はちゃんとしてるんだけどね。エ・ラントルで食べたマカロンは緑だったよ。」

「何だそれは？まあ、世界が変わればそういう事もあるか。」

「この世界…まさかぶれいやー？」

ここまで聞けばクレマンティヌもアインズの正体は見当が付く。正体不明の化け物は正真正銘の化け物だったという訳だ。元漆黒聖典としての知識から、ようやく答えに辿りついた彼女はますます畏縮する事になる。

それに「兄」という単語からアインズに付きそう悪魔らしき少女もぶれいやーと推測される。こんな奴らが存在するなら漆黒聖典がやって来るのも理解出来る。そしていかに隊長や兄貴でもこいつらには勝てるはずがないとも考える。

何せ自分は悪魔の少女の腕で眠そうにしているネコ？に一撃でズタボロにされたのだ。漆黒の剣（白）やハムスケには見えなかったが、彼女だけには僅かながらもネコの凄まじいスピードの攻撃が見えていたし、それでさえも手加減されていたのは理解出来た。

つまり絶対に勝てないし逆らうなんて以ての外だ。恐らく漆黒の剣（白）の奴らも自分に殺されたのをぶれいやーの力で復活して、あの装備や能力を手に入れたはず。白くなるのは我慢できるが、マザコンハゲみたいにアンデッドへ転職は勘弁して欲しい。だが、何とか取り入る事が出来れば法国から逃げ回る必要も無くなるし、あのクソ兄貴にだつて勝てる！

そして頭の固い法国の奴らはアンデッドと悪魔という理由から、絶対に敵対する道を選ぶだろう。仮に法国に引き渡されて奇跡的に命が助かっても絶対に碌な事にはならない。

「何だ気付いていなかったのか？法国の出身だからプレイヤーには詳しいはずだろう。」
「し、知らなかったとは言えすみませんでした。そちらの妹さんの関係者にも酷い事をして…」

「もういいよ。丸く収まったんだし。そつちも酷い目に遭つてたしね。プーにやんもやり過ぎだったんじゃない？」

「にゃくん♪（ちゃんと生きてたじゃないっすか）」

「そうだよね！よしよし（さっちゃんはネコ語を話せないので適当に言っています）」

あれだけの事をされて「にゃくん♪」で済ませられたクレマンティーヌは堪ったものではないが、相手は圧倒的強者である。とにかく下手に出るしかない。

「あのっ…前にも言いましたが、アタシもカジツちゃんみたいにアインズ・ウール・ゴウン様の配下にして欲しいんです。その、できれば白いほうで…さすがに骸骨はまだ早いかなーと思うので。」

「え？まだ生きてるでしょ。わざわざ死にたいとか変わってるね？」

「大丈夫です！一度だけ任務で死んだ事がありましたけど、蘇生魔法で復活しました。死ぬのは慣れてます。」

「法国には蘇生魔法があつたな。それにしても死んでも復活させるとは…アフターケアと言えいいのか、死んでも扱き使うと言えいいのか？」

「どこも大変なんだね。」

実際はそんなに簡単な話ではない。法国といえども蘇生魔法を使えるのはごく僅か、さらに触媒として多額の黄金が必要になる。漆黑聖典という英雄級の存在だったからこそ、多くの費用をかけて復活させたのだ。

ちなみにユグドラシルではプレイヤーが蘇生魔法を使用する場合はMP消費だけで

済んでいた。この様にこの世界とユグドラシルでは一部の魔法に若干の差異がある事がパンドラズ・アクターの調査で判明している。いずれ詳しく調査しようとアインズは考えていた。

「クレマンティーヌよ「死んで花実が咲くものか」という言葉を知っているか？どんな状況でも生きてさえいれば良い事もある。しかし死んでしまつては良い事も起らない。国へ帰るんだな。おまえにも兄がいるだろう…」

「ウヒヤヒヤヒヤwwお兄ちゃんがそれを言う？アンデッドなのに？」

「おっと！私とした事が、これは一本取られてしまつたな♪」

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤww」「フハハハハww」

笑えねーよ！こつちの身にもなつてみる！とクレマンティーヌは憤慨する。そして楽しそうに笑いあう兄妹を見て思う。自分達にもこんな風に笑いあつていた頃があつたと――

昔は――クレマンティーヌが目の前少女よりも幼かつた頃、兄とはとても仲の良い兄妹だつた。兄は優しく頼りになり、何くれとなく彼女の面倒を見て可愛がつてくれた。しかし彼女が成長すると…何か切つ掛けがあつたのか他に原因があつたのかは分からないが、兄はだんだんと彼女に構わなくなり、やがて無視する様になつていった。

それ以上にショックだつたのが、兄が奴隷としてエルフの姉妹を家に連れて来た事

だった。兄はエルフを地下室に監禁し夜な夜な拷問している様だった。一度だけ人目を避ける様に神官を連れて来たが、高位の回復魔法が必要なほどにやり過ぎてしまったのだろう。それ以後は自重して…加減が分かって来たのだろう。神官が必要になる事態は起きていない様だった。

結局は自分も兄と同じ様な趣味（拷問や殺人）に目覚めた。自分もあいつと同じ血を引いていたのだと自虐したが、気にくわれない事に兄はそれをおくびにも出さず、外面だけは取り繕っていた。社交的で友人も多く、あの時の神官も仲の良い友人らしい。才能に恵まれて両親の覚えも良かった兄に比べて、自分は「クインティアの片割れ」と揶揄された。

自分も兄には及ばないまでも才能に恵まれて、漆黑聖典の第九席次を与えられたが、そこでも第五席次の兄と事あるごとに比べられた。そうしてどんどんと歪んでいき、邪教集団ブローラーノーンとも関わる様になり、遂には大事件を起こして出奔した。

「まあ、そういう訳で兄妹喧嘩も程々にするんだ。悪い事をした時は「ごめんなさい」と謝れば許してくれるものだ。」

絶対に許して貰える訳が無い。強盗殺人に国外逃亡、職場放棄のおまけ付きだ。さらに追手を殺害したあげく国外で誘拐事件と大規模テロを起こし、その過程でも傷害、殺人を重ねている。

「いえ、だからですわね、兄貴もですけど国だって許してくれるはずは無いですからー」

「む？国…警察の様なものか。まあその辺りは私が口添えしてやろうじゃないか。」

「え？そんな事が…」

アインズにとつて国というなじみの無いものよりも、兄妹の絆のほうが重要だ。それが他人の事であつても。自分が住んでいた世界では国自体が形骸化して、個人にとつては国なんて何もしてくれない名前だけの存在だ。罪を犯したというなら償わせればいいだろう。多少の力添えくらいはしてやるつもりだ。

クレマンティーヌにとつても一考する価値がある話しだった。ぶれいやーの後ろ盾があれば法国だつて迂闊な真似は出来ない。この後やつてくる兄達はこの兄妹や従属神には勝てないだろうから、ますます法国の立場は弱くなる。さすがにお咎め無しは無理かもしれないが、生きて法国に戻る事さえ出来ればチャンスはある。周辺国家は危険なので帝国の向こうにある都市連合あたりまで逃げてしまえば、さすがにぶれいやーの目も届かないだろう。

「それなら私はどうすればいいのでしょうか？兄貴と仲直りと言われてもどうすればいいのかさっぱりで…」

「お前は性格や言動に多少の難があるみたいだからな…さつちんよ、同じ妹としてこいつにアドバイスしてあげるんだ。」

「ええつ、私があ〜？」



五分ほど休んだことで、戦闘に支障がない程度に体力を回復したクアイエツセは、3階へと続く階段を登りはじめた。魔力も半分以上は残っているし、いざとなればぶれいやー様が何とかしてくれるんですよね？という楽観的な考えでいるので足取りも軽い。「ようやく来たわね下等生物。私はナーベ。ア——ダークウォーリアー様より新たな力を授かったくのいちメイド。」

「それがしはハム…ではなくソーセージでござる！姫…ではなく、殿の命によりそなたと戦うでござるよ！」

3階で待っていたのは怪しい身なりの女と、クアイエツセも見た事のない強大な魔獣。女の方は帝国を中心に活動する「イジャンニヤ」という暗殺集団に似た雰囲気だ。南方で稀に見られるという刀を手にしていて、顔は頭巾で覆われていて眼の部分だけしか出ていない。魔獣は白銀の体毛にかなり長い尾を生やしており、こちらも奇妙なデザインの覆面をしている。

クアイエツセはギガント・バジリスクを召喚して魔獣へ喚ける。魔獣は先程のソウル

イーターよりは脅威でないと判断する。そうして自分は怪しい女の相手をする事にしたが、こちらもデスナイトに比べれば戦い易かった。

女は身体能力も技術も脅威ではなかった。そこそこの戦士のようで使い手の珍しい刀にも警戒したが、武技を使って来る訳でもないので十分に対処出来ている。

「大した事ありませんね！これなら先程のデスナイトがはるかに強かった。」

「ナーベ殿！こちらが片付いたら助太刀に向かうのもう少し頑張るでござるよー！」

「くっ…何という屈辱。こうなれば…《フライ／飛行》——そして《チェイン・ドラゴン・ライトニング／連鎖する龍雷》」

突如ナーベが上空へと飛び立ち、そのまま両手を打ち合わせると極太の雷撃がクアイエツセへと襲いかかる。

「えっ？何それ意味わかんない…（たすけて、ぶれいやーさま…）」

クアイエツセは全身黒焦げになるが、かろうじて生きていた。運良く装備していた電気属性防御効果のある装備のおかげだ。

「やり過ぎでござるよナーベ殿。殿からも適当にあしらっておけと言われていたでござるぬか？」

「ぐぬぬ…私とした事が我を忘れて…」



「おい…お前の兄なんだが、弱すぎないか?」

漆黒の全身鎧の男が、囚われの金髪の女に問いかける。

「ニヒヒヒ…いやあく、皆さんが強すぎるんだと思います。クソ兄貴にもいい経験になったと思います♪ザマーミロ♪」

金髪の女は非常に気分が良さそうだ。

「お前なあ、仮にも自分を救う為に戦っている兄に対して…仲直りしたいんじゃないのか?」

全身鎧の男は女の態度に不満が在る様だ。

「ヤバツ…いやあくお兄ちゃんがあくく（棒読み）」

女の悲鳴もセリフもかなり白々しい。

「まあ…死んでしまった訳でもないから別にいいが（さっちゃんがこうなったら俺は泣くぞー!）」

大墳墓への挑戦者（3）

「ハッ…私はいったい!? それにここは…」

「目が覚めたか? ここは最上階だ。クアイエッセよ! よくぞここまで登って来たな。」

目の前には豪華な全身鎧を纏い、両手にそれぞれグレートソードを手にした漆黒の戦士がいた。

「たしか白い稲妻を浴びて…いや、あれは夢だったに違いない! 何故か体力や魔力が回復しているが、これこそ神の恩恵!——という事は…貴方が最後の試練ですか? 望むところですよ!」

「…（こいつ相当イイ性格してるな…あの女の兄だけあつて）」

ナーベの魔法で黒焦げにされた事を夢だと思いきみ、いつの間にか回復している事も神の恩恵と断じるクアイエッセ。

「オホン、その前に最上階まで登って来た（登らせてやった）事の褒美として、お前が求めていた存在に会わせてやろう! ナーベ、あの女を連れてきてやれ。」

漆黒の戦士がそう言うと、部屋奥から何処かで見たとような気がする怪しい格好の女が、両手を後ろ手で縛られた女を連れてやって来た。縛られた女はクアイエッセも良く

知っている女だ。何せ自分の妹、それも今まで様々なトラブルを引き起こし、最後に特大の事を仕出かして出奔したクレマンティーヌだ。しかし……

「ありがとうお兄ちゃん！私を助けに来てくれたんだね（キラッ☆）」

自分が知る妹のイメージを粉々に破壊する仕草に、クアイエッセの心の中の何かが変わった。決定的な何かが……そう思った直後、クアイエッセの心が塗り潰されていく。思考の一部が変わっていく感覚。それが何か理解して、何が起こったかを悟ったとき、クアイエッセは大いに驚愕し、ロリコンにもかかわらず歓喜する。

「このクレマンティーヌは偽物だ。ありえないよ。（俺の妹がこんなに可愛いわけがない）」

「……（少しあざと過ぎないか？俺はこういうのも嫌いじゃないが……）」

「……（すべった？言われた通りにやったのに!?!）」

「……（しかし何というかあの仕草、こう……グツとくるものがあるな。悪くないかもしれない。見た目があの妹というのがちよつといただけない——いや、こういうのをギャップ萌えというんだったか？そこまで計算しての事とは、さすがは神という事か!）」

「へおいクレマンティーヌ、偽物とか言われてるぞ!」

「へそんなこと言われても！アタシは教えられたとおりに……こういうのはアタシの芸風じゃないんです!」

「あのー、そちらの事情は存じ上げませんが、その偽クレマンティーヌが「ごほうび」という事でよろしいのでしょうか？」

「そ、そういう事になるが…偽クレマンティーヌ？」

「はい。私には分かりませんが…あの妹は加虐性欲者で殺人狂の人格破綻者です。そちらのセクシーでキュートなご婦人^{パバ}のような「萌え」など欠片も持ち合わせてありません。まったく…幼いころはあんなにも可愛らしく控えめだったというのに。やはり女というのは——」

「テメーに言われたくねえよクソ兄貴！そっちだって奴隷のエルフ姉妹を監禁して楽しんでんだろうが？神官の治癒魔法が必要なほど痛めつけたのも知ってたんだぞ！」

「何をバカな！あの姉妹は奴隷などではない。「幼さ」を失った妹に代わって私を癒してくれる天使ちゃんだ！神官を呼んだのだって、姉妹の損傷した耳を治す為にコネと金を使って呼んだんだっ——何故それを知っている！？ま、まさか本当にクレマンティーヌなのか？」

「ま、まさかテメー…ロリコンだったのかよ？それで…ハ、ハハハハ。だから私が大きくなってからは…（優しくカツコ良かった兄が最低のロリペド野郎だったなんて…）」

「フツ、エルフは人間に比べて成長に時間がかかる。あの姉妹も10年以上たつても外見は殆ど成長していない。あれなら私はあと30年は戦える！だがさっきの「キラッ

☆」は良かったぞ。お前にもあんな魅力があったとはな。私は新しい扉を開いたかもしれない。本当に残念だ……もつと早くそれに気が付いていければ。」

兄妹の誤解が解けかけていた頃、第六階層では両腕を失いながらも、コキユートスへ必死に喰い下がっている漆黒聖典隊長の雄姿があった。

「それにしても妹萌え十ババア萌え、さらにギャップ萌えというのか。こういうのも悪くないな……クレマンティーヌよ、お前が心を入れ替えたというのなら兄として妹の滅刑を嘆願してやろうじゃないか。さすがに無罪放免とはいかないが……兄妹で力を合わせて罪を償うという事なら神官長も寛大な措置を取ってくれるだろう。会長達には強いコネがあるしな。どうだ？お兄ちゃんとやり直さないか？」

「誰がババアだ？ふざけんじゃねーよ変態クソ兄貴！何がお兄ちゃんだ！」

「これは「ツンデレ」とうやつか？聞いた事はあったが新鮮な感覚だ！あの姉妹の庇護欲をそそられる態度もいいが、こういった物もあつたのか！まさに「ごほうび」というやつだな。さすがは神の与えた試練だ！」

アインズの存在も忘れて兄妹喧嘩？を続ける2人。兄の方は歩み寄りを見せ始めたが、裏切られた妹の心の傷は深い様だ。蟠りを解く為にも、ここは第三者の仲介が必要だろう。

「ナーベラルよ、これは仲直りという事でいいのか？」

「私には下等生物バカの生態は理解出来かねますが、当初の予定通り兄の方の下等生物ロリコンが譲歩しているのですから問題は無いと考えます。さすがはアインズ様。」

「ふむ、私はさっちゃんと喧嘩などした事は無いからな。兄妹喧嘩というのはいまいち理解に苦しむ。お前達はどこののだ？ プレアデス同士で仲は良いと思っているが？」

「私達も姉妹同士でちよつとした意見の違いもあります、喧嘩などという愚かな行為は致しません。アインズ様とさっちゃん様という至高にして究極のご兄妹の仲睦まじい様子を、目の当たりにしているのですから。」

「フハハハハハ！ そうだろう、そうだろう。そうやって仲良くしないとな。」

しばらく兄妹の言い争いを眺めていたアインズは、そろそろ頃合いか？ と声をかける。

「2人ともその辺にしておけ。そうやっていがみ合っているもしようがないだろう。お互いの誤解？ も解けたのなら、蟠りを捨てて兄妹仲良くするのが一番だぞ。」

「その通りです！ 私が間違っていました。もつと早くに妹の魅力に気付いてやる事が出来ていれば……貴方が何方かは存じ上げませんが、このような機会を設けて頂き感謝に堪えません。妹よ、お前から御礼を言いなさい。」

「そうだな。家族……兄妹の絆というのは素晴らしいものだ。」

「ちよつ……これはそんな問題じゃ……」

己の過ちを悔いる様なクアイエッセにアインズも満足そうだ。しかしクレマンティーヌは納得いかない。確かにこれまで感じていた兄へのコンプレックスや、どろどろした憎しみの情念は綺麗さっぱり無くなった。しかしあまりのバカバカしさと兄への軽蔑の念に、これまでの人生は何だったのかと思ってしまう。

〈クレマンティーヌ、兄がこうして歩み寄ってくれているのだから、お前も我儘を言わずにだな…〉

〈ハア? こんなロリコンと仲良くなんて!〉

〈男にはそういった趣味もあるんだ。それにこれからは悔い改めると言っているだろ?〉

大親友だったペロロンチーノの事もあり、アインズとしては特殊な性癖にも比較的寛容だ。ペロロンチーノの趣味に賛同する訳ではないが、彼だつて実際に犯罪行為に手を出したりはしていなかった。同じ男としてもそういった事を理由に友人を軽蔑したりはしない。妹には内緒だが。

〈えっ…アインズ様もロリコン!?ウソ…最悪〉

〈何を言っている! 私は断じてロリコンではない! アルベドの様なグラマーでおっぱいが大きいほうが好みだ! それに妹だつているし、もうすぐ子供が生まれるんだぞ〉

〈子供!? 骨なのはどうやって?? ちゃんと付いてるの?〉

「へ今はそういった話しをしているのではない。お前達兄妹についてだ！」

さすがにロリコン呼ばわりされては黙ってはいられない。もし妹にそんな誤解をされたら生きていけない。アインズの怒りの波動がメツセージを通して伝わって来る。

「へヒツ：申し訳ありません。物理的な疑問というか……」

「へとにかくだ！多少の事には目を瞑ってやれ。それで仲直りだ」

「へわ、分かりました！もうどうでもいいです。お任せします」

こうしてアインズの尽力の甲斐もあって、長くすれ違っていた兄妹の和解が成立した。兄は過ちを認めて、妹は誤解を解いた。



「見事であったぞコキュートス。お前の戦いは記録された映像で改めて確認させて貰うが、さっちゃんからも圧倒的だったと聞いている。褒美として貸し与えた武器はそのまま所持する事を許すでしょう。」

「ハハッ、有り難キ幸セ！」

仲直りした兄妹を連れて第六階層へ転移して来たアインズは、コキュートスの戦いぶりを称賛していた。ちなみに『パーフェクト・ウォリアー／完璧なる戦士』は解除して、

いつもの姿に戻っている。

アインズとしては最後の試練としてクアイエッセに立ち塞がるつもりでいたのだが、必要がなくなってしまうたので解除したのだ。出来れば戦士として戦ってみたかったという気持ちもあつたので残念だったが、和解した兄妹を見て思いとどまったのだ。クアイエッセが予想以上に情けなかつたというのもあつたが……※デスナイトにさえ勝てないのは想定外だった。ボロクソにやられたクアイエッセを見て、慌ててソウルイーターとデスナイトを帰還させたくらいだ。

「さて……闘技場のフィールド効果でHPの状態で生きているとはいえ、これ以上苦しめるのは本意ではない。プレアデスよ、奴らの装備を剥ぎ取れ。その後でルプスレギナが回復してやれ。」

「かしこまりました。アインズ様。」

第六階層の闘技場では様々なシチュエーションに対応する為の機能がある。正々堂々と戦う為にナザリツクのバフ効果を無効化したり、今回の様に致命傷を受けてもHPで死亡しない様にする効果だ。この効果はギルメン同士のPVPで使われていた。

あちこちで倒れている面々の装備を容赦なく剥ぎ取っていく。プレアデス。瀕死の彼らは「ぎゃつ」とか「ううつ」と呻き声をあげるが、彼女達に気にするそぶりは無い。全員の装備を剥ぎ終えた後、ルプスレギナが全員を回復していく。さすがに見苦しいので

代わりの衣服を着せてやっていたが。

「さてと……お前達はナザリックに対して礼を示し、さらに武と勇をも示した。褒美としてお前達の話しを聞いてやろう。《グレーター・クリエイト・アイテム／上位道具作成》」
そう言うときアインズは魔法で玉座を作って腰掛ける。法国の者達は慌ててアインズの前に平伏する。守護者達もアインズの後方で控えているが、何かをすれば即座に鎮圧出来る様に警戒している。

「フム……礼儀のほうは問題無い様ですね。では代表の者、発言を許可します。」

「ははっ。私はスレイン法国、土の神官長レイモン・ザーグ・ローランサンと申します。まずは無力な我らに拝謁の機会を戴けた事に感謝いたします。」

「我が名はアインズ・ウール・ゴウン。このナザリック地下大墳墓の支配者だ。そしてこの子が我が妹のさっちゃんだ。知っているとは思いますが、我ら兄妹はお前達が言うプレイヤーと呼ばれる存在だ。」

想定していたとはいえ、はつきりと肯定された事で法国の面々は改めて驚愕する。十三英雄以来、二百年振りに確認されたぶれいやー。法国にとつては六大神を喪つてより五百年振りに庇護を得られるかもしれないのだ。レイモンは一瞬たりとも気を抜けないと集中する。

〈へお兄ちゃん、ちよつといいかな？〉

〈〈どうしたんだ？〉〉

〈〈ちよつとお願いがああるの……ごによごによ〉〉

〈〈成程、それ位はかまわないぞ。そういった感じで話しをしておこう〉〉

〈〈よろしく〜♪〉〉

さつちんがお願いしたのは漆黒の剣（白）の事だ。スレイン法国に寛大な措置をとるのは彼らがさつちんに要請し、それをさつちんがアインズへ頼んだという事にするのだ。これで漆黒の剣（白）、さらにさつちんの重要度が大きくなる。漆黒の剣（白）の小遣い稼ぎは如何でもいいが、妹の重要度に影響するならアインズにも否は無い。

「まずは最初に言っておく。お前達が無事なのは妹から嘆願があったからだ。それが無ければお前達の何人かは命を失っていただろう。詳しい事は国へ帰ってからスタメンという男に聞くがよい。」

「スタメン!?!なぜ我が弟の名が……」

当然、兄であるニグンは困惑する。弟は任務の為にエ・ランテルへ向かったはずだ。

「お前の弟らしいな。弟に感謝しておくがいい。スタメンがさつちんの配下に必死に懇願したそうだ。だから配下も感ずるものがあり、妹に伺いをたてたのだ。そして妹の言葉は私にとつて非常に重要視すべき事だ。」

「お、弟が私の為に！な、何という……」

弟のとつた行動にニグンは感激する。そして何人かはこう考える——アインズ・ウル・ゴウン様は苛烈な御方だが、妹君の事は無碍にしない。そして妹やその配下は「人に優しい御方♥」だと。つまり何か交渉をするなら、妹君は難しいとしても、その配下であれば多少は接触もし易いはずだ。

「家族への愛と、友への友情——これが私の最も重要視する事だ。今はもう一つ……二つ増えたがな。だからその兄妹にも力を貸したのだ。」

そう言つてクアイエッセとクレマンティヌを見やり、兄妹の事情と和解（笑）について説明する。

「何と……その様な事情があつたとは!?!」

「……（第五席次つて最低のクズね）」

「ありえん……」

「事情は承知しました。アインズ・ウル・ゴウン様のお口添えがあるというなら、無罪……とは確約出来ませんが、最大限に配慮させていただきます。」

「!!（よっしやあー♪）」

ガッツポーズをとるクレマンティヌ。法国に戻つたら希望の未来に Ready

Go!だ。

「他にも何某かのお力添えを頂けるとの事ですが?」

「例の叡者の額冠は妹が正当な報酬として入手した物だ。よって代替品となる遠隔視の鏡と、蘇生魔法を込めたスクロールを用意した。持ち帰るがいい。」

「そ、それ程の物を頂けるとは感謝いたします。（やはり叡者の額冠は神にとっても重要な品だったか）」

法国でも、いや世界に4つしか存在しない希少品だが、それでぶれいやーの関心を買えるなら許容範囲だ。特にスクロールについては魅力的だ。それに遠隔視の鏡というのも説明を聞けば、かなりのアイテムという事が理解出来た。

「あの叡者の額冠は酷過ぎるぞ。メリットとデメリットが全く釣り合っていない。たかが第八位階魔法を使う為に、人ひとりを廃人にするとは犠牲が大き過ぎる。何を考えてあの様な欠陥品を使っているのだ？」

「インズもさっちゃんと同意見だ。叡者の額冠はゴミである。しかしナザリック随一のアイテムフェチは欠陥品をそのままにはしていないかった！」

「け、欠陥品でございませうか？」

「先程も言ったが、メリットとデメリットが全く釣り合っていない。それに装備制限が100万人に1人とかお無理があるだろう？パンドラズ・アクター、例の物を見せてやれ！」

「ハッ!!」

ドイツ語は出なかったが、ピシツとした敬礼で答えたパンドラズ・アクターは叡者の額冠に良く似たアイテムを取りだすと饒舌な口調で説明する。

「これが「叡者の額冠Ⅱ」^{ツヴァイ}でございます！装着者はかなりの生命力を消耗しますが、精神や他への副作用は一切ございません！さらに第二位階以上の魔法が使用出来る女性であれば誰でも装備可能！勿論ですが着脱も自由です。消費する生命力に応じて第八位階までの魔法を行使出来ます。現在は生命力の消費軽減と男性でも装備可能な様に改良中でございます！」

「短期間ではそんなものか。ご苦労だったなパンドラズ・アクター。」

「我が神の御望みとあらば。」

「なっつ!?（クレマンティーンが出走して1ヶ月も経っていないぞ。その短期間で…）」
 法国にとつては驚くべき事実だった。当時の法国で最高の技術者達が総力を結集して作り上げ、あまりの技術的難易度と素材の希少さから同じ物を造る事は不可能とまで言われた秘宝をこうも容易く再現、いや上回ったのだ！

「は、払える限りの代価をお支払いますっ！何卒その叡者の額冠Ⅱを我が国へっ！」

「その辺りは条件次第だ——パンドラズ・アクター？」

「この様な未完成品を世に出すなど、制作者としては承服いたしかねます。アインズ様はどうしても仰るなら話しは別ですが…」

「という事だ。それにパンドラズ・アクターは他にも仕事を抱えているからな。（たつぷり吹っ掛けてやるのもいいかもしれんな♪いいカモだ）次の話しに移ってくれ。」

「いよいよ本題か…と気を引き締めるレイモン。元々クレマンティーヌと叡者の額冠については別件だったのだ。」

「それで我が国としましては、ぜひともアインズ・ウール・ゴウン様やさつちん様を始めとした皆様と友好的な関係を築きたいと考えておりました、人類のおかれた現状も考慮して頂ければと懇願する次第であります。」

「ふむ…デミウルゴスはどう思う？」

「はい。私としましては人間との関わりに方には様々な腹案がございますので、即座に敵対という考えは持つておりません。しかしスレイン法国には「人間以外を排斥」という、非常に身勝手な高ぶった考えがありますので、友好関係を持つというのはいさか無理があるのではないかと愚考いたします。」

「デミウルゴスの言葉を聞いた守護者やNPC達が一斉に威圧するような気配を放つ。人間如きが身の程知らずな…という思いがはつきり出ている。」

「お、お待ち下さい！スレイン法国の全てがそうでは在りません。他種族との共存共栄を目指して、陰ながら活動している者達も少なくない数が存在しているのです！実を言おうと私はその組織を束ねている者なのです！」

必死の思いでレイモンが訴えかける。何人かは深く頷き、他の何人かは驚愕の声を上げる。

「あの「組織」の噂は本当だったのか？しかしレイモン神官長が…」

「遂に我らが表舞台に立つ時が来たという事かレイモン（獣人派^{ケモナー}）よ——ビーストマンの妾は健在か？」

「息子も独り立ちして今はのんびりとしている。カイレ（エルフ派^{エルフ}）こそエルフの小僧とは仲良くやっておるのか？」

「カツカツカ…儂らはラブラブ♥じゃよ。それに小僧などと言つては失礼じゃ。お前さんどころか儂よりも年上のナイスガイじゃぞ♪娘はアーンランド評議国で旦那と元気にしとるよ。」

「あり、ありえない……」

次々と明かされる法国を大混乱に陥れるだろう爆弾級のスクヤンダルに、約1名は信じられないといった様子だ。

「私のところの姉妹も元気にしております。いずれは（何十年後の話しだ!）姉妹との間に子をもうけたいと考えています。」

「テメーはどこまで堕ちれば気が済むんだ！」

「クツクツクツ…これは興味深い（建設予定の「牧場」にとってよい参考になる）」

デミウルゴスにとっては非常に有意義な情報だった。彼が計画している牧場の成否にも関わってくる事実だ。

「成程…：法国にもそういつた考えの者がいるのは素晴らしい。私としても応援してやりた
いものだ。（人間原理主義ばかりかと思つたが…：まあクアイエツセみたいのも居たし
な）」

「おお！ 貴方様のお力添えがあれば恐れる物などありませんね！」

「うむ。 神都へ戻つたらさつそく行動開始じゃ！」

「遂に！ 遂に我々ダブルピースが決起する時が来たのですね！」

「あ、あ、ありえるかあああ！ 漆黒聖典の皆様っ！ これは人類の為に戦い続けてきた皆様を裏切る大罪です！ こんな事は許されませんぞっ！」

生の神殿の敬虔な信徒で過激な人外排斥主義のうえ、 亜人の村落の殲滅などを基本任務としてきた陽光聖典隊長のニグンにとって信じられない、そして許しがたい事実であつた。そしてニグンと同様に人外の者と戦い続けてきたはずの漆黒聖典の者達は
……

「お、俺も実はドワーフに興味が…：あの髭が…：筋肉が…：「（「（o））」

第八席次「巨盾万壁」ドワーフ派に加えて同性愛をカミングアウト！

「私も以前の任務でローパー系モンスターに×されてからずっと…」

×

第十一次席次「占星千里」まさかの異形種派宣言!!

「そんなはずはない！ありえない！隊長殿は違いますよね？」

「私が想いを寄せる彼女（番外席次）はエルフの血を引いている。さすがに同性やローパーというのは理解しかねるがな。」

漆黒聖典隊長、堂々のエルフ派宣言である。さるげなく部下をデイスるのも忘れな
い。

「おお！隊長殿が私と志しを同じくしていたとは！」

「いや！ありえん！ありえん！ありえん！こんな事はあつちやいけないんだ……」

もはやニグンに感情を抑える事は出来なかつた。法国の先頭に立つて人外と戦い続けていた彼らがどうして？と慟哭するが、別におかしな事ではないのかもしれない。数多くの人外と戦ってきたという事は、それだけ多く人外と接する機会があつたという事だ。

つまりそういった機会が多ければ多いほど、彼らは亜人達や異業種を理解する機会に恵まれていたとも言えるだろう。ならば今までの固定観念を変えてしまう者だつて一定数は存在するのが道理である。そしてニグンもまた、己の鋼の如き信仰心に罅が入つていくのを感じずには居られなかつた。



「メッセージー一本で金貨1, 000枚とはな！大儲けだぜ♪」

ルクルットは非常にご機嫌だ。何せお嬢様に雇われてからは今までの人生がウソの様にツキまくり——金はガツポリ、不思議な力もゲットして、女にもモテモテ♪なのでから笑いが止まらない。

「お嬢様次第になります、スレイン法国とのパイプも大きいですね！今回の報酬は私達が全て頂けるといいう有り難いお話ですがどうしますか？」

さらにスレイン法国の要人とパイプまで出来たのだ。お嬢様との関係もあるが、先程の話しぶりから法国と敵対する様子は感じなかったので大丈夫だろう。

「常識的に考えれば、装備の新調や道具の補充ですけど…お嬢様から下賜された装備以上の物なんてエ・ランテルじゃ手に入りませんよね。」

彼らが身に着けている純白の装備はアダマンタイト級でも十分通用する物だ。色の事は気にしてはいけない。

「冒険者組合長からの相談はどうするのであるか？例の近郊の森に罠があるという…」「俺達漆黒の剣（白）はお嬢様の専属チームだ。勝手な行動は慎むべきじゃないか？」「そうですね。まずはお嬢様からの連絡を待ちましょう。」

後日、討伐依頼を受けた複数の冒険者チームが出撃したが盗賊団に返り討ちにあった。生き残りの銅級冒険者の女性は、それを機に冒険者を廃業して近隣の開拓村へ移住したという。そして村の狩人と結ばれて幸せに暮らしましたとき。めでたし…めでたし…

大墳墓への挑戦者（4）

その後もアインズの主導で話しが進められていく。さすがは元営業マンだけあって手慣れたものだが、もつともこれだけ有利な条件が揃っているのが当然だろう。

その反面、法国サイドは完全にペースを握られてしまった。さらにアインズがこちらの状況をかなり把握している事に驚愕する。まさかバハルス帝国との密約の情報まで知られている事に驚く。レイモンはクレマンティーヌの事が頭を過ぎったが、彼女と云えどもそこまでの情報に触れる立ち場ではない。漆黑聖典といっても、隊長も含めて所詮は実戦部隊である。

何故ここまで！という疑問は土の神殿の件が思いあたった——第八位階魔法の《ブレインーズ・アイ／次元の目》を防いだ上で、あれだけの惨状を起こした事を考えれば法国の機密は筒抜けという事だ。

「以前ニグンを対象にした監視魔法が妨害された件なのですが…」

「あの事か？お前達は情報系魔法に付いての認識が無さ過ぎる。なんの対策も施さずによくもまあ、あんなバカな真似をしたものだ。」

「お、お恥ずかしい話ですな。私も現場で立ちあっておりましたがエライ目に遭って

しまいました。」

そういつてレイモンは苦笑する。神の居城を盗み視した事については、そこまでお怒りではない様だ：しかし絶対に二度とするまいと固く決心する。そこまでの被害だったのだ。

「ほう！お前は「真に遺憾である」を喰らったのか!?それは災難だったな。あれの効果は
8レベルドレインという中々の威力だからな！」

「えっ！8レベルドレインって……そんな、なんて恐ろしい……」

法国でもつともレベルについて詳しい占屋千里は、その凄まじい内容に戦慄する。8レベルというのは普通の人間なら一生で上がるレベルに等しい。比較的レベルが上がり易い冒険者でも10年がかりだ。自分達の様な英雄クラスであっても年単位だ。それにレベルというのは上がればその分、次のレベルアップが遅くなる。それを一瞬で奪い去るというのだから、いかに恐ろしいのかが理解出来る。

いったいこのアインズ・ウール・ゴウン様とナザリック地下大墳墓はどこまでの力を持つているのか——六大神や八欲王すら凌ぐのでは？との思いが拭えない。これは白金の竜王が黙ってはいまいと、彼と面識のあるレイモンやカイレは考える。

「先程の件に付いてだが、法国全体の考えとして我々と友好関係というのは早いだろう。それまでは一部の交流に留めておくべきだと考えるがどうだ？」

「ははっ。確かに仰る通りでございませぬ。ですので私が代表を務める組織ダブルピースが窓口になるという事で如何でしょうか？」

「お前の組織か……民間交流というやつになるのか？まあ、いいだろう。こちらはデミウルゴスを担当としよう。任せても問題は無いか？」

「お任せ下さいアインズ様（ニッコリ）。レイモン殿には色々聞きたい事もありますので、こちらとしても助かります。」

とてもイイ笑顔でデミウルゴスが答える。頭の中では「人間とピーストマンで交配可能なら、オークはどうだ？異形種でも大丈夫という勇者がいるなら、もっと醜悪なモンスターでもいけるか？フフフ……夢が広がるな。これだから人間というのは素晴らしい（道具だ）！」と、よからぬ事を考えている。

そしてレイモンも心の中で喝采をあげる。ふれいやーとの窓口になれば、頭の固い法天上層部も譲歩せざるを得ない。あとは全力で一般国民や神殿関係者の意識を改革していけば、いずれ我らの理想が実現する！

「それと……このナザリック地下大墳墓がある土地を領土としているリ・エステイーゼ王国についてですが……」

「我がナザリックを領土にだど？そんな不快な事を言っている愚か者がいるのか？」

「そ、そういった意味で申し上げたわけではありません。あくまでナザリック地下大墳墓

が転移したのが王国の土地であったという意味でして……」

「この地の周囲には町も無いし、人だつて住んではいないぞ。特に開発されている様子も見られ無いが、それを領土と主張するのはおかしい話ではないか？」

「正にアインズ様の仰るとおりでございます。」

アインズとしてはナザリックがリ・エステイーズ王国などという国家の下に置かれる事を許すわけにはいかない。調べた限り近隣でも最低の国だ。断じて否だ。近所という事で多少のお付き合いは考えていたが、知れば知るほど、それさえも考え直したくなる。

もしこれが他の大国であったとしても同様だ。自分達が攻略して以来、ナザリックは只の1度たりとも敗北を許していない。これは自分達アインズ・ウール・ゴウンの誇りだ。それを自ら踏みにじる事など出来る筈が無い。同時に何時の日か強大な敵が現れて敗北する事があれば、いさぎよく受け入れる覚悟もある。何があろうと家族だけは守り通して見せるが……

「まあよい。何か言つて来る様なら私が話しをつけてやる事としよう。」

「その様な細事にアインズ様の手を煩わせるまでもありません。わらわに命じて戴ければ王国など即座に滅ぼして御覧にいれるであります。」

「それなら私の魔獣達に命じて王国の都市を襲わせます。人間達はエサにしてやればい

いんです！」

「そ、それなら僕の魔法で王国を更地にするのはどうでしょう？す、少し大変ですが1ヶ月もあれば終わると思います。」

「お、お、お待ち下さいいいっー!!」

アインズとしては組織のトップとして交渉に当たるのは義務だと考えている。シャルティア達の様な過激な方法を取るつもりはないが、軍事的なオプションは当然、選択肢に入っている。

一方の法国としてはそんな事になっては堪らない。帝国との計画もあるが、アインズやその配下達がいたずらに力を振るえばどうなるかなどあきらかだ。周辺国家にもどんなとぼつちりがくるか分からない。

「王国については我が国とバハルス帝国が責任を持って対処いたします！やはり人間の問題は人間の手で解決するのが一番です！ですので、どうかっ、今しばらくのお時間を頂けないでしょうか？」

「そういえば帝国も関係していたのだったな…：そういう事なら任せるとしよう。ただしエ・ランテルと周辺の村に付いては、多少だが私と関係があるので考慮するように。」

「エ・ランテルでございますか？（既にエ・ランテルに手を出していたというのか？どこまで動きが早いというのだ！）」

「それに付いてはデミウルゴスに任せてあるので、後から話しあつてくれ。では最後に提案がある。法国にとつてもメリットのある話した。」

「法国にとつてもメリットのある話してごさいますか？」

「アインズの話にレイモン達は俄然興味を持つ。これまでの内容は想定範囲内とはいえ、法国にとつてかなりの痛手である。」

「このナザリック地下大墳墓は、ユグドラシルにおいても難攻不落のダンジョンとして名を馳せていた。我が友人達と共に知恵と力と財を投じて築き上げてきたのだ。」

「はい、我々はその一部しか拝見しておりませんが、それでもナザリック地下大墳墓は仰る通りの所であるというのは理解できます。」

「そこでだ——我がナザリックは「挑戦者」を求めている。お前達のように武と勇を持った勇者達をな……但し、ナザリックは我らの神聖な居城でもあるので礼の無い者には相応の対処をさせて貰う事になるが。」

定期的なボコられに來いというのか？いじめカッコ悪い——それがレイモン達が思つた事だ。

「当然だが勇者達には褒美が用意されている。パンドラズ・アクターよ例の物を用意してくれ。」

「畏まりました。アインズ様！」

パンドラズ・アクターが持ち出したのは様々なアイテム——全てがユグドラシル産のアイテム——法国に遺されたアイテムに匹敵する物だ。

「ナザリックに配置された宝箱にはこういったアイテムが入っている（事もある）。より深い階層ならこれ以上のレア物が入手出来る可能性だつてある（かもしれない）ぞ。」

「へ、これはつ……ゴクリ。」

示された宝物を前にして、思わず唾を呑むレイモン達。確かにこれだけの逸品を入手出来る可能性があれば、幾らでも命知らずの勇者が集まるだろう。法国だつて例外ではない。自分達がかっぱがれた装備の代替えにもなる。

「さらにサプライズだ！お前達を案内した彼女——シャルティア・ブラッドフォールンは第一から第三階層の守護者。いわゆる最初のボスというやつだ。もしシャルティアに勝利出来たのなら、先程の「叡者の額冠Ⅱ」を褒美として与えよう！」

「ま、真でございますかっ？」

レイモンは法国最強の彼女の事を思い浮かべる。シャルティアの力（レベル）は占星千里の判断では彼女より上……しかしレベルだけが絶対ではないとも聞く。それに加えて漆黒聖典隊長と同時でなら？と頭の中でシミュレートする。彼女を出撃させるには様々な問題があるが、挑戦する価値は充分にある。それに「最初のボス」という事は最も弱い（いいえ階層守護者最強です）はずだ。可能性はゼロではない。

漆黒聖典隊長も同じ事を考える。自分達が手も足も出なかったコキュートスは第五階層守護者と言っていた。つまり第一から第三階層の守護者というシャルティアは、彼に比べて強さが劣っているはずだ。こういったダンジョンでは奥へ行くほど敵が強くなっていくのがお約束というものだ。それに憧れの彼女と力を併せて強大な敵に挑むというのは、男であれば燃えたいはずはないシチュエーションだ！

ちなみに憧れの彼女に完膚無きまでにボロクソに敗れた彼女にとつて「普通は憧れの彼女を守るものなんじゃないの？」という突っ込みは通用しない。

当然だが、これはアインズの悪質なミスリードである。わざわざシャルティアの「第一から第三階層の守護者」「最初のボス」という点を強調（ウソは言っていない）して、彼らの意識を誘導したのだ。そして戦う場所は彼女のフィールドである第三階層にする。あそこで戦うシャルティアはバフ効果でレベル120という強さになる。これで万が一にもシャルティアが後れをとる事は無い。

ここまでするのは法国の最高戦力を徹底的に分析する為だ。そのうえで装備を頂いて、さらに勧誘まで考えているという悪辣さである。ちなみに最初に提示した宝箱についても課金ガチャ並みの輩出率を設定する予定でいる。さらに半分はトラップになっているという極悪さだ。

「それとスレイン法国とナザリックで交易をしても良いと考えている。代価によつては

先程の様なアイテムを販売する事も可能だ。」

「そ、それは大変に魅力的ですな。こちらとしては大歓迎です。」

「但し高品質なアイテムの取引は「ユグドラシル金貨」による支払でしか認めない。」

アインズの心に「スレイン銀行」という言葉が思い浮かぶ。アインズはスレイン法国に溜めこまれているであろうユグドラシル金貨をポツタクリの取引で根こそぎ巻き上げるつもりでいる。聖遺物級までのダブついた在庫品をエクステンジ・ボックスの査定額の3倍〜5倍くらいの値を付けて売りつける予定だ。かなり阿漕だと自覚しているが、こちらにとつては微妙なアイテムでも、この世界では独占販売のプレミア品というのも事実だ。

ナザリックにあるユグドラシル金貨の残高は天文学的数字ではあるが、あり過ぎて困るという事は無い。この世界で入手方法が限られているユグドラシル金貨にはNPCの復活や召喚、ナザリックの維持費といった使途が幾らでもあるのだ。

さらに現地通貨獲得の為に制作部門に発破をかけて、オリハルコンやアダマンタイトといった現地では超希少金属扱いでも、ナザリックでなら一山いくらの金属で武器を生産させて、エ・ランテルで販売する計画を進めている。冒険者達の反応で、その程度のアイテムでもかなりの金額になる事が証明されたからだ。

「ユグドラシル金貨でございませうか……？我々の一存では決められませんので本国で検

アイテム、魔法などでパラメータを確認すると「レベル35/37」と表示されて、そのモンスターのレベル上限が確認出来る。

この方法で現地の生物を1万體以上に渡って調査した結果、現地の生物の約80%はレベル30が上限であり、残りの20%がレベル50が上限、約1%の確率でレベル70という存在もいた。今回ナザリックにやってきた漆黒聖典の隊長以外のメンバーはクレマンティーンを含めてレベル50が上限である。例外である隊長のレベル上限が75というのは驚異的な数値である。

これらはあくまでもレベル上限なので、実際に限界までレベルを上げる、いわゆるカンストさせるのは非常に困難であるの言うまでも無い。人間ならほとんどがレベル10以下で生涯を終えているし、法国最強の漆黒聖典の人間でさえ、神人といわれる番外席次と隊長を除いてレベル40を超える物はいないのだ。

ちなみにバハルス帝国主席魔導師のフルーダー・パラダインが調査対象の中で唯一レベル42という高さであった。「逸脱者」の異名は伊達ではないといった所でインズも感心していたが、とある理由から「こいつ馬鹿だ…」というコメントを発していた。

この事から極一部を除いて、現地で脅威に成り得る存在は皆無と判断したアインズは一気に攻め立てる事にしたのだ。勿論ある程度の情報を開示しなければナザリックの営業が立ちゆかなくなるし、レベルキャップの存在で自分達以上の強者が出現する脅威

も無くなった。そしてナザリックにはレベルキャップを開放させる手段さえ存在する。

漆黒の剣（白）に施されたエインヘリヤル・ハイアルの効果で彼らは元々のレベル上限30に15レベル分が加算されている。仮に限界まで成長させれば漆黒聖典クラスさえ凌駕する存在に成り得るのだ。他にもカジツトの様に異形種に転生させる事でレベル上限を上げる事が可能であると判明している。

「さて……：法国からの客人は満足して帰ってくれた様だが、会談の内容に不備は無かったか？それと彼らはこの後にどういった行動をとると思う？」

アインズは会談の終了後に、パンドラズ・アクターとデミウルゴスを執務室へ呼び出して問いかけた。

「こちらが未確認であった情報も確認出来ましたし、何と言ってもワールドアイテムである傾城傾国を始めとしたレアアイテムを入手しました。今回は大成功といっても良いでしょう！そして彼らはアインズ様の持つアイテムを欲してナザリックへと挑み、溜めこんでいる財を費やすだろう事は確実と思われれます。叡者の額冠などという欠陥品を改良せよとの命を受けた時は何故？と混乱しましたが、このような結果を予想されていたとはさすが我が創造主であるアインズ様！」

「私としてはスレイン法国の「組織」にとっても興味を持ちました。彼らをうまく使えば法国もこちらに余計な真似をする余裕は無くなるでしょう。バハルス帝国と併せて

利用すれば、ナザリツクの周辺は尽くアインズ様に平伏して、ナザリツクに利益を齎す事になるでしょう！世界征服などせずとも現地の事は現地の者達に働かせてこちらはその上前だけをはねる……正に端倪すべからずというべき知某かと。例の第五席次の男だけを直々にお相手なさると聞いた時には、愚昧なる我が身ではアインズ様の真の意図を察する事は出来ませんでした。さすがは我が主であるアインズ様！」

予想以上の高評価にアインズは戸惑う。叡者の額冠についてはちよつとした思いつきで言ってみただけだったし、クワイエツセについては同じ兄というよしみでお節介をやいてやっただけだ。上前をはねるといふのは外聞が良くないので「顧問料」か「協力費」と言つて欲しいところだ。ただ実際に集られる相手にしてみれば好意的にいつても「友達料」といったところだが……

「そこまで褒められると照れてしまうな。まあこれでスレイン法国については一段落だ。次はバハルス帝国だが、ワーカーという奴らを送り込んで来るつもりらしいので精々歓迎してやる事にしよう。」

ちなみに如何に周辺国家でも屈指の情報収集能力を誇るバハルス帝国の皇帝陛下でも、大国であるスレイン法国の方針が「土下座外交」である事は知る由も無かった。



帝都アーウィンタールでは執務の合間に、皇帝ジルクニフが側近達とティータイムと洒落こんでいた。

「そういえばロウネよ、例の遺跡へワーカーを送り込んだ件はどうなった？」

「はい、フェメール伯爵を誘導して複数のワーカーチームを派遣させました。エ・ランテルの上位冒険者に引けを取らない実力者ですので、かなりの成果が見込めるかと思われ
ます。」

既にワーカーチームが帝都を出立して二日が経過している。今頃は例の遺跡に到着しているはずだ。

「ほうーどの様なチームを派遣したのだ？」

ジルクニフにとって本命は漆黒の剣（白）と、そのバツクにいるアインズ・ウール・ゴウンである。遺跡についてはそこまで興味を持っていなかったので、ワーカーチームについては秘書官のロウネに一任していた。

「派遣したのは「竜狩り」「ヘビーマツシャー」「フォーサイト」「天武」の4チームです。実力は冒険者で言うミスリル・オリハルコン級です。エ・ランテルの最高位冒険者がミスリル級でしたので、彼ら以上の成果が期待できるでしょう。」

「そいつは期待できそうだ！ ねえ陛下、もしよさそうな武具が入手出来た場合は、こつちにも回しちゃ頂けませんかねえ？」

帝国最強の四騎士の1人である「雷光」バジウツド・ペシユメルがジルクニフに問かける。非常に気さく…というか不敬ともとられない話し方だが、そんな態度を許されるだけの実力を有しており、それを認める度量を持つのがジルクニフである。

「まあ無事に彼らが帰還してからの話だな。それでは書類の決裁を再開するとしよう。」

大墳墓への侵入者

帝都アーウィンタールの郊外にあるフェメール伯爵の屋敷。その庭園には早朝にも係わらず多くの人間が集まっていた。多くが戦士やレンジャー、神官に魔法使いといった出で立ちをしている。普通に考えれば冒険者という事になるが、彼らは全員がワーカーと呼ばれる冒険者組合には属さない者達で、金銭の為なら非合法的な依頼も辞さない存在である。

帝都を中心に活動するワーカーチーム「フォーサイト」の4人も、今回の伯爵からの依頼を受けたチームである。最後に到着したフォーサイトは他のチームへと挨拶に向かう。組合の様な後ろ盾がないワーカーにとつては同業者との関係が重要視される。今回の様に合同で依頼にあたるなら尚更だ。もつとも同業者＝ライバルでもあるので馴れ合う様な関係ではないが。

「グリーンガムのところの「ヘビーマツシャー」に老公が率いる「竜狩り」そして、あの「天武」かよ……」

「うげえ〜!?ヘビーマツシャーが参加するのは聞いていたけど、あそこも一緒なの?サイツー……じゃあ、あのエルフ達が例の……」

チームのレンジャー役であるイミーナが、リーダー兼恋人であるヘツケランに愚痴を零す。どうやらイミーナは天武のリーダーの男に思うところがある様だ。ちなみにヘツケランも似たような反応だ。

「イミーナさん…その様な露骨な態度は…」

「私も女性として、あのチームには好感を持ってない。」

神官のロバーデイクが彼女を諫めるが、フォーサイト最年少ながら第三位階魔法すら使いこなす、マジックキャスターのアルシエはイミーナと同意見だった。

「俺達で最後までいたいだな。待たせてしまったか？」

「ヘツケランではないか。遅かったな。お前のチーム以外は揃っておるぞー！」

「これで全員か揃ったかの。ては道中の役割分担を決めるとするかの。」

フォーサイトとは比較的友好関係にあるヘビーマッシュャーのグリーンガムと、80歳という高齢でありながら現役最年長ワーカーとして知られるパルパトラがヘツケランに応える。

「そちらさんとは初めてだったよな？天武のエルヤー・ウズルス——噂は色々聞いてるぜ。俺はフォーサイトのヘツケランだ。」

「(こちらこそ)フォーサイトの噂は聞いていますよ。」

そう答えたのは天武のリーダーである剣士エルヤー・ウズルス。剣の腕だけならアダ

マントイト級に匹敵するという噂で、刀という珍しい武器を愛用する事で知られている。実力はあるのだが性格と、彼の率いるチームである天武のメンバーの事で、同業者であるワーカーはおろか冒険者からの評判も良くない。ヘツケランとしてもイミーナの事があり、彼とはあまり関わりたくないと思っていた。

「あちらがフォーサイトのメンバーですね？おやおやあゝ」

イミーナを目にしたエルヤーの目に不穏なものが宿る。

「おいおい、俺の女に手をだすなよ？」

「勿論ですとも。今回は同じ仕事をする仲間ですからね。幸い女性には不自由していませんので。(フフン)それで先程の話なのですが、道中の指揮権については遠慮させて頂きます。よほどの事でなければ指揮権を任された方に従いますし、戦闘であればお任せ下さい。私の刀で全て切り伏せてみせますので。」

そう言ってエルヤーは自分のチームメンバーが待機している場所へ歩いて行く。非常に高慢な態度であり、周囲の者もあきれた様子だ。そして彼のチーム天武はリーダーであるエルヤー以外が、全員エルフの女性——それも元奴隷で構成されている。彼女達の格好を見ればどういった扱いなのかは一目瞭然である。

エルヤーと女性を見るイミーナの目は汚物を見ているかの様だ。険悪になった空気を払拭するかのようにヘツケランが声を上げる。

「ご無沙汰してきます老公。相変らずお元気そうで！」

「主も元気そうて何よりしゃ。それにしてもアレはちと危険よのお……」

「そうですよねえ。向こうが自滅するだけならまだしも、こつちまで共倒れというのは避けたいですね。」

いままでの実績や長いキャリアから、ワーカーたちから一目置かれていたパルパトラにとつてもエルヤーの言動は目に余つた様で、ヘッケランもそれに追隨する。

「彼奴が強者であるのは事実であるが、あの言動はいただけないな。油断は命取りに繋がりがかねんし、巻き込まれては適わん。」

「実際のところエルヤーの実力はどうなんだ？俺は奴が戦っているのを見た事はないんだ。闘技場にも最近は顔を出して無いしな。」

「かの帝国四騎士に匹敵するという話だが……老公は何かご存知ですか？」

「何かの大罪を犯してスレイン法国を追放されたという噂は聞いた事がある。その事とあの言動が無ければ皇帝陛下も放っておかんしやろうともな……」

「そこまでの実力が!?!信じられない……あの様な男が。」

「まあ、実力と人間性が比例していれば良かったのだが——」

彼らがエルヤーについての話しをしていると、女性達の黄色い悲鳴が上がる。悲鳴の発生源であるエルヤーと女性達に周りのワーカーたちの視線が集中する。

「エルヤー、あんな髭もじやのドワーフもどきの言っている事なんて気にしちゃダメよ！あのカプト虫みたいな鎧、格好いいとでも思ってるのかしら？だっさー……」

「そうよ！あんな爺さんの話しなんて関係ないわ！入歯くらい買えばいいのに。あのチャラ男だつて貴方に嫉妬しているだけなんだから。あの貧乳だつて大した事ないじゃない。ププツ。」

「大丈夫？おっぱい揉む？（あのハーフェルフには無理でしょうね）」

「ハハハ僕なら大丈夫さハニー達♪（モミモミ）」

エルヤーに陰口を言っていた3人とハーフェルフ1名を公然とデイスる天武のエルフ達。これはちよつとヤバいんじゃないのか？と感じた何名かは戦闘態勢に入っている。

エルフ達は奴隷として売られていたのをエルヤーに買い取られ、どんな扱いをされるか戦々恐々としていたのを、美味しい食事や清潔な衣服を与えられ、さらには切断された耳まで治療された事ですっかりエルヤーの信奉者となっていた。

彼もまたスレイン法国では異端者だったが、組織の事を知る前にエルフ擁護の発言を咎められて故郷を出奔したのだ。その後は帝国の闘技場で日銭を稼いでいたのだが、さすがのジルクニフでも法国から逃亡して来た政治犯を仕官させる訳にもいかず、帝国でワーカーとして活動していたのだ。

ちなみにエルヤーはワーカーとしての収入の殆どを彼女達に貢いでおり、彼の装備は法国から持ってきた愛刀を除けば銅級冒険者程度のものだが、それでアダマンタイト級に匹敵といわれる実績を残しているのだから凄いものである。

一方のエルフ達は貴族とはいかないまでも裕福な商家の娘のような服装だ。間違ってもワーカーの仕事に就く者の格好では無い。唯一の装備が「ポンポン」と呼ばれるカラフルな玉房飾りである。これを使ってエルヤーを応援するらしい。そんな天武の評判はあまりよろしくないが、中には「男のロマン」「エルヤーさんパネエっす」といった意見もある。

「…ドワーフもどき…カブト虫…」

「入歯…」

「チャラ男…それに貧乳って——マズイ！」

3人は何とか持ちこたえたが、自分が気にしている身体的特徴を揶揄されたイミーナは、全ての感情が抜け落ちた様な表情だ。後少しでも切っ掛けがあれば、即座に弓矢を全弾一斉掃射しかねない状況だろう。ヘッケランはロバーデイクとアルシエへ目配せして、イミーナをpushさせさせる。

「と、とにかく移動中の役割分担を決めてしましましょう。」

「そうであるな！全体を統括するのは天武を除いた3チームで持ち回りという事でどう

早朝というにはまだ早い時間、帝国のワーカー達がナザリックの地表部中央にある霊廟の前に集まって、自分達の戦果を報告しあっていた。昨夜の未明にナザリック地下墳墓へ到着し、手始めに敷地内の四隅にあった小型の霊廟をチーム毎に分かれて散策したところ、いきなり大量に発見された財宝に沸き立っていたのだった。財宝の半分は金貨、残りは宝飾品であった。

簡単に財宝が発見された事や、金貨の殆どがリ・エステイーズ王国で流通している交金貨だったり、宝飾品のデザインがリ・エステイーズ王国で好まれるデザインである事に気を留める者は殆どいない。そして王国内において貴族の邸宅を狙った大規模な窃盗事件が多発しているという噂を知る者はこの中に誰も居なかった。

「うひょー♪ たつまんねえな！ 見ろよこの金貨の山を!？」

「このブローチも素敵ね♪ 売れば金貨500枚はいくんじゃないかしら?！」

「依頼主の話ではオリハルコン製の武器が大量に発見されたとの事だったが…? 我らとしてはこれだけでも十分だと考えるが。」

「だが依頼は「遺跡に眠る武器の発見と回収」しやからの。このまま帰るのは少しまずいしやろ。」

「その通りだ。それにさっきの霊廟でこんだけのブツが見つかったんだ。この先の霊廟だって期待できるはずだ。(アルシエの為にモデカイ山を見逃せねえ)」

グリーンガムとパルパトラの意見に異を唱えたのはヘッケランだが、これは彼が強欲な守銭奴という訳ではない。彼はフォーサイトのあるメンバーの経済状況を考慮していたのだった。

「霊廟の中には地下への階段があると思われる。そこの調査を進言する。（これなら借金も一気に返せる！）」

「私としても不満ですね。なにせ私の剣技を披露する相手に出くわしてはいないのですから。」

エルヤーの意見は論外だが、グリーンガムとパルパトラの意見はどちらにも理がある。そしてヘッケランやアルシエの意見もワーカーとして正論なのは間違いない。彼らは喧々囂々と意見を飛ばしあい、途中で軽い食事さえ挟んで、何時の間にかすっかり日も登った頃に結論は出た。

「それじゃあ老公の竜狩りを除いた3チームで霊廟の奥を調査する。そして夜までには帰還する。竜狩りは地表部分を調査して、隠し通路を探しつつこの場を確保してもらう。俺達が霊廟で入手したブツの10%と、発見された場合は地下部分の優先調査権を報酬として提供。これで問題はないな？」

「我らへビーマッシャーに異論はない。」

「俺らはそれで構わんよ。主らも気をつけて行ってきてくれ。」

「勿論フォーサイトは賛成。(大丈夫…いける…)」

「全面的に賛成という訳ではないですが、こちらも構いませんよ。譲歩してあげましょう。」

こうして3つのワーカーチームが霊廟の奥へと足を踏み入れていった。



「よかったですか老公？かなりのアガリが期待できそうでしたけど…」

「お前らも甘いのだ。おかしいと思わなかったのか？こんな地表部で容易く財宝が見つかった事に？既に何組もの冒険者チームが調査済みなのにしやそ？」

「そ、それは確かに！」

パルパトラの鋭い指摘に他のメンバーが大きく頷く。

「それに見つかった財宝も怪しい…未発見の遺跡で見慣れた交金貨があるのも不思議と思わんか？それに宝飾品もそんなに古い物には見えんかな。」

彼の理に適った考察にメンバーは感嘆している。そして……

「中々鋭い者がいる様だな。亀の甲より年の功といったところか…」

不可知化能力を持ったシモベ達による密着取材によって、ワーカー達の言動は筒抜け

になっていた。さらに高性能カメラによる超高精度な映像とクリアな音声で臨場感
抜群である。

「そういった訳しやな。それしや儂はちよつと——」

「私も同行します、老公。」

「ん？聞き逃してしまったが何を言っていたのだ……まあいい、あの二人を追跡しろ。」

アインズの指令を受けたシモベは彼らのすぐ後ろからピツタリと纏わりついでいる。
彼らの鼻歌まで聞こえてくる程だが、彼らは全く気付いていない。

「カアアアアーツ、ペッツ!!」

「少し煙草を減らしたらどうですか、老公？」

「今さら無理しやよ。とれこの辺りて——」

ジヨロロロロロロロ——

「ふー……スツキリしたわい♪」

シモベが後方から撮影していたのが幸いして、アインズ達が見ているモニターに見苦
しいモノが映る事はなかったが、彼らが何をしていたのかは一目瞭然だ。2人の脚の間
から見えた一条の線……霊廟の壁にかかる水飛沫……スツキリした表情……

「し、神聖なナザリックにおいて……これほど不快なことがあるものか！」

「ま、まあオシッコくらいは仕方ないんじゃないのかな？ちよつとマナー違反だけどね

「アハハハハハ（キレてる！お兄ちゃんがキレてる！）」

「ア……インズ様……その、この不届き者への対処は……い、いかがなさいますか？（これほどの不快感を表すアインズ様は初めて見た！）」

あまりにもアインズの怒りと不快感が大きかったので、さっちんを始めとした周りの者は却って引いてしまった。しかしアインズの怒りは正当なものだろう。自宅の玄関前ともいえる場所、それも神聖な墓地で地面に痰を吐き捨て、あまつさえ立ち小便だ。いくら粗暴なワーカーといっても限度があるだろう。

「ユリ・アルファに命じる。ナザリック・オールドガーター50体を率いて奴らを引つ立てて来い。行先は第五階層の氷結牢獄だ。ニューロニストに命じて無礼な振舞いを矯正させろ。」



「スケルトンにゾンビ……雑魚アンデッドばかりだな。」

「数だけは多かったな。それと……気のせいかもしれないが、普通のスケルトンやゾンビより強くなかったか？」

「それでも所詮は雑魚アンデッドです。ですがより強いアンデッドに警戒するべきで

しよう。ここはアンデッドの巣窟の様ですね。」

霊廟の奥にあった地下への階段、その先にあったのは二本の通路が交差した十字路だった。右側の通路を選んだグリーンガム達へビーマッシャーの5人は、通路の両側に並ぶ扉を一つずつ開けて室内を調査して行った。それほど広くは無い部屋に待ち受けていたのは低級のアンデッドばかりで、へビーマッシャーの敵ではなかった。

「それじゃ次は反対側の扉だな。」

「我は少し野暮用があるので外で待っていてくれ。それほど時間はかからん。」

「あいよリーダー。油断はするなよ。」

そう言つてグリーンガム以外のメンバーは部屋を後にする。残ったグリーンガムは扉が閉まったのを確認すると、その場にしゃがみ込んで――

「――な、何だと？ち、中止だ！カメラを止める！早くしろっ！間に合わなくなつてもしらんぞーっ!!」

ブリブリッ…ブボツ…ブツブリブリブツブツブツ

「ブツブツブツブツ!!」

「(文字通り)糞！糞！糞！」

「ア、アインズ様、お怒りをお、御鎮め下さい…」

グリーンガムの行動に不審を抱いたシモベが後方、それもスキルを使用して床に潜り込

んでローアングルから撮影していたのが悲劇の元凶だった。そして手遅れだった。モニターいっぱい映し出されたグリーンガムの×は、×の穴の皺まで確認出来るほどの高精度だ。さらにそこからひり出される×はクリアな音声と合わさって、モニターから臭いが漂って来ると錯覚するほどのリアルさだった……

呑んでいたココアを盛大に吹きだしたさっちゃんのすぐ側に控えていたセバスは、直撃弾を浴びる事になったが微動だにしていない。さすがはナザリックが誇る鋼の執事である。

「ルプスレギナ・ベータに命じる。エルダー・リッチ50体を率いて奴らを引っ立てて来い。行先は同じく第五階層の氷結牢獄だ。ただしこのクソ野郎だけは特別に第二階層の黒棺に招待してやれ。恐怖公にもしっかりと伝えおけ。」



「せっかくですから私は真ん中の通路を選びましょう。」

そう言つて他のチームの了解も取らずに真ん中の通路を選んだエルヤー率いる天武であったが、彼の期待とは裏腹に低級アンデッドはおろかネズミ一匹現れない事に、エルヤーは不満と退屈を感じていたが、取巻きのエルフ達と他愛もない会話をしながら進

んでいった。

しばらく進んだ先はかなりの大きさの部屋だった。何十人が走り回っても問題が無いほどの広さで、室内には何も無い。自分達が入った入口の反対方向には奥へ続く通路が見える。

「丁度良いので昼食にしましょう。部屋の中央なら何者かがやって来ても直ぐに分かりますし、準備する時間も稼げます。」

「分かったわ、エルヤー。ちよつと待っててね♪」

「マジックバックにサンドウィッチがあるから皆で食べましょう。」

「私はお茶の準備をするわ。」

昼食の準備を進めるエルフ達を眺めながらエルヤーはこの墳墓について考える。あまりにも拍子抜けだ。見つかった財宝には満足しているが、彼のお楽しみである「自分を満足させる相手との戦闘」が起る気配が無い。普通なら危険を回避出来た事は喜ばしいのだが、肥大した自尊心を持った彼には当て嵌まらなかった。それに「もう一つのお楽しみ」を我慢しているのも彼にとってはストレスだった。

「それにしても広い部屋ですね。何も無いので余計にそう感じます。」

「そうですね。すつごい開放感を感じちゃいます。」

「ここって地下なのになー?」

「誰も居ないんでしょわか？」

食事を終えたエルヤー達はお茶を飲みながらまったりと過ごしていた。任務中のワーカーに有るまじき行動だが、天武にとってはこれが日常の風景だ。今回は合同依頼という事で他のチームに遠慮していたが、今は別行動で他のチームの目も無い。それ位はエルヤーでも弁えていたが、これまで我慢していたの反動で、少しだけタガが外れてしまった。

「開放感…地下…誰も居ない？これならば…ムフフ♥」

「あくつ、エルヤーったらエツチな事考えてるでしょ♪」

「うわー変態♪えろすけべー♥」

「今回は他のチームが一緒だったもんね。溜まっちゃった？」

「フフフフ…せっかくですから「おっぱいチャレンジ」といけますか♪ここなら誰も来ないでしょうし、もし誰かに見られてもモンスターなら大丈夫、最近の帝都は官憲の目も厳しいですからね。それでは3人揃っていつてみましょう♪」

アダマンタイト級のバカ野郎、いやワールド級の大バカ野郎がここに居た。当然だが一部始終をライブで見えていた墳墓の支配者は……

「クウ、クズがああああ妹の見てる前でえ！許せるものかあああ!!」
クでえ、さらにわああ妹の見てる前でえ！許せるものかあああ!!」

前の2チームの行為にも我を忘れるほどの怒りと不快感を感じたが、ここまでではなかった。アンデッドの精神鎮静作用によって落ち着いた後では「そうだよな。アンデッドの俺には関係なくなっただけ、ゲームじゃないんだから仕方ない事だよな。さすがに場を考えて欲しいが」と一定の理解を示して「ナザリックの各階層に来客用のトイレを設置する必要があるな」と対策を考えた上で、彼らへの教育的指導も終了させて牢内で拘束するだけに留めていた。

しかしエルヤー達の行為は酷過ぎる。ノリノリだったエルフにも情状酌量の余地はない。これがユグドラシルであれば速攻で強制終了のうえで、警告なしでアカウント剥奪は間違いない。あのペロロンチーノですらここまではやらなかつた。

ちなみにさっちゃんは目と耳をソリュシヤンによって塞がれているが、彼らの破廉恥な行為をしつかりと目撃してしまった。既にナーベラルがレベル80モンスターのハンゾウ10体に加えて《サモン・モンスター・10th／第10位階怪物召喚》で呼び出されたケルベロスまで引き連れて、彼らの現行犯逮捕へ向かっている。その時にアインズが告げたのは「悲鳴と呪詛以外、もはや聞きたくないぞ」の一言だけだった。裁判も弁護士も必要無い、そのまま黒棺へ直行だ。

「ワーカーという連中はこんなものばかりなのか？いくら何でも酷過ぎるだろう。これだから非正規雇用は……やはり冒険者組合に梃子入れして……」



「最後に残ったのはフォーサイトというチームか……。こいつらが多少はマシである事を願うとするか。最早何を見せられても驚かん。呆れるだけだ。」

ようやく落ち着いたアインズが見つめるモニターには、エルヤー達の犯行現場と同じ造りの部屋で野営をしているフォーサイトの姿が映っていた。すでにさっちゃんとセバス達は下がらせている。これ以上の視聴は妹の教育上の観点からも許せなかったのだ。

「申し訳ございませんアインズ様。ワーカー共があれほどまでに下劣で礼儀知らずとはこのデミウルゴスの目を以ってしても見抜けませんでした。」

「お前の責任ではない。これは私が発案した計画であり、奴らの品性の無さを想定していなかった私の落ち度だ。こちらにも不備があった事だしな。」

たしかに想定外だった。転移後にナザリックへやって来た者達は、今回のワーカー達のような粗相をする前に殲滅されたり、そんな暇もない程に戦いづくめだったりといった事情があり、今回の様な事態は発生しなかったのだ。現在は各階層に「来客者用トイレ」の建設が進められている。そしてさすがにエルヤーの様なバカは想像の斜め上を超える逸材だった。

「しかしこのチーム：いくら最弱のスケルトンやゾンビとしか遭遇していないとはいえ、こんな場所で野営をするとは度胸があるというか、欲深いというか……」

フォーサイトは侵入時に全チームが同意した「夜までに帰還」という取り決めに無視していた。既に結構な量の宝箱を発見しており、このまま帰還すれば大成功間違いなしだろう。これはフォーサイトの、それもアルシエの事情を考慮した行動であった。

彼らがここまでの成果を上げたのは、取り決めに無視して探索を続行した事もあるが、アインズがシモベによる監視を緩和させた事が影響している。他のワーカーの所業を見てきたアインズが、フォーサイトの女性メンバーに配慮したからだ。さすがにアインズも女子トイレを覗き見る様な恥知らずな支配者と誤解されたくは無い。

既に何かを悟っていたアインズは、リーダーの男と神官の男が鼻歌交じりに連れションをしていても動じなかったし、ハーフェルフの女性とマジックキャスターの少女が「お花摘みに行つてきます」と言えば、黙つてチャンネルを変えていた。

「今回の依頼は大成功だな。これでアルシエの借金もどうにかなるだろう？ それじゃ依頼の大成功の前祝いとして……乾ばーい！」

「乾杯！」

今日一日で入手した財宝を前に全員の表情は明るい。ヘッケランが乾杯の音頭を取り、それに全員が応える。そして夕食を終えて寛ぐフォーサイトの面々。

「申し訳ない。私のせいでこんな無理をさせてしまった。」

「いやいや、この娘っことは何を言ってるんですかいなって。」

「ですね。皆で決めて選んだ仕事です。貴女が気に病む必要はありません。」

「そーいうことよ。気にする必要なんかいいわ。そろそろ休みましよ！私とヘッケランは先に休ませて貰うわ。」

そう言うヘッケランとイミナーナは連れだってテントに入っていく、テントからそこそ離れた場所でロバーデイクとアルシエは、それぞれが反対の方向を向いて、出入り口の通路を見張っている。

「このフォーサイトというチームは他よりはだいぶマシだな。仲間の為に危険を省みないというのもポイントが高い。立派なチームじゃないか。」

「それは宜しゅうございました。」

これはフォーサイトにとっては幸運だったろう。救いようのない天武は別として、監視のタイミングが代わってれば、竜狩りやヘビーマツシヤアの所業にあそこまで激怒しなかったかもしれないし、逆にフォーサイトが彼らの様な目に遭ってもおかしくはなかった。だがしかし……

ヘッケランとイミナーナが休息を取っているテントは小刻みに揺れておりギシアン♥ギシアン♥といった音が漏れている。それに背を向けているロバーデイクは右手が規

「み、皆さんに死を宣言します。い、偉大なる御二方は皆さんを滅ぼす為に軍を動かします。でも偉大なる御二方は皆さんに無駄な抵抗をする時間を与えてくれました。き、今日から8日後に、この湖のリザードマン部族の中で、皆さんを2番目の生贄にします！」
少女の方のダークエルフの声が緑爪の集落に響き渡る。少年と違っておどおどとした話し方だ。

「必死の抵抗をして下さい。嘲笑を以て偉大なる御二方が御喜びになられる様に！」
「わ、忘れないで下さい。8日後です！」

そう言うときダークエルフの男女は竜の背に飛び乗る。それを見ていたリザードマン達、その中でも緑爪の族長であるシャースーリユー・シャシャと、その弟でリザードマンに伝わる「四至宝」の一つである「凍牙の苦痛」フロスト・ペインの所有者であるザリユース・シャシャはというとき……

「偉大なる御二方に忠誠を尽します」

「リザードマンに繁栄を」

全てのリザードマンが平伏している姿を見た2人は困惑する。

「お、お姉ちゃん……この村もさつきと同じだよ〜？」

「おかしいなあ？デミウルゴスに言われた通りにしたんだけど……」

クレーマー

「騒がしいぞ。いったい何事だ!？」

帝国の俊英が集まったの会議中に部屋の外から聞こえて来た、ジルクニフの言葉を遮った悲鳴への疑問は、窓から中庭を確認した衛兵によつて解決された。

「陛下！モンスターです！正体不明のモンスターが中庭に出現！数は10体以上!」

一瞬だけ呆気にとられるが、即座に全員が窓から中庭を確認する。

「何だあのモンスターは？なんと見苦しい!」

「見ているだけで気が滅入る。あれではまるで!」

「初めて見るモンスターですが、そうとうヤバそうな感じですね。フールーダ様は何かご存じですか!？」

ジルクニフを含む全員の視線がフールーダに集中する。だが当のフールーダの反応は……

「あ、ありえない……この巨大な力の奔流は……第七位階の証明だと……いうのか?」

その言葉の意味を理解出来ない者はこの場に居ない。帝国最高、否、人類最高とも云われるフールーダ・パラダインが使える最高の位階が第六位階魔法。つまりあのモンス

ターはフルルーダより格上だという事。帝国全軍に匹敵するフルルーダを超えるモンスターが100体以上——帝国終了のお知らせである。

「責任者出て来ーい！」

「金返せコラ！」

「客を舐めてんのか？」

「誠意を見せろ！誠意を！」

「テメーみたいな下っ端じゃ話にならねえんだよ！さっさと上に代われ！」

彼らの視線の先には揺らめく赤い霧のようなモンスターが存在した。霧の中に見苦しい無数の表情が浮かんで消える。浮かぶのは様々な年代の顔だが、一つだけ共通しているのはどの顔も理不尽な要求を訴えるような表情を浮かべている事だ。

このモンスターの正体は「モンスタークレーマー」といい、プレイヤーに対して理不尽なクレームを浴びせ掛けてくると、微妙な特殊能力で知られたユグドラシルのモンスターだ。そのレベルは50、法国最強の漆黑聖典でさえ討伐が困難な強さだ。

周囲の者達から回避や、帝城の放棄すら進言されたジルクニフは、それらを全て撥ね退ける。ここで尻尾を巻いて逃げだし、さらに自らの居城を棄てたとなれば自分の名声は地に墮ちる。かといって正面から戦っても敗北は必至、手詰まりというやつだ。

ジルクニフが対応を拱いていると、突如クレームが止んだ。モンスターが発していた

幾つもの声が混じって一つになる。それは先程までの理不尽なクレームとは違う、理路整然としたものだった。

「ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルⅡニクス陛下にアインズ・ウール・ゴウン様からの書状をお届けしました。こちらに受け取りのサインをお願いします。」

あまりにも予想外の内容に全員が硬直する。さしものジルクニフであっても、このこと出て行く度胸は持ち合わせてはいなかった。

「それではこの場にいる人間にお願いして、陛下へ伝えて貰うとしましょう。」

その言葉と同時にクレームの嵐が再開するが、今回はそれだけでは済まなかった。

ジヨバババーブリヨリヨリヨ……中庭に集まっていた騎士や兵士達、中には帝国四騎士の「不動」も含まれていた——（自主規制）これがモンスタークレーマーの特殊能力《驚愕のオーラ》である。ユグドラシルでは抵抗の無い相手に、凄まじい恐怖と驚きを与えるという設定——実際は重めの恐怖効果だったが、この世界では人間の尊厳さえ破壊する恐ろしい効果に代わっていた。

「次はこの城にいる人間にお願いします。それでも陛下に伝わらなければ帝都中の人間にお願いするとうしまししょう。」

「余が皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルⅡニクスである！直ぐに書状を受け取ろう。サインとやらは何処にすればよいのだ？」

ジルクニフは大慌てでバルコニーから呼びかける。中庭で「見せられないよ」になっている部下をこのままにはしておけないし、何よりこの惨状が帝城、まかり間違つても帝都中で引き起こされた場合の被害は想像を絶する。

使者？はジルクニフへ書状を渡し、差し出した紙片にジルクニフが署名をすると空の彼方へと飛び去つて行つた。受け取つた書状は非常に豪華な装飾が施されており、念の為にフルーダが魔法で調べてみても罨の類は仕掛けられていなかった。

本来であれば儀礼上の問題もあり、皇帝が自ら書状を受け取るなど有り得ないが、その事で皇帝を批判する者など一人も居ない。もし皇帝が即座に行動していなければ、あの惨事は自分達の身にも降りかかつていたのだから。全員がジルクニフの英断を讃えて感謝し、忠誠をあらたにしていた。

大惨事の現場となつた中庭では、被害に遭つた騎士や兵士が嗚咽を漏らしながら後始末をしていた。清掃など本来であればメイドの仕事であるが、もし命じれば明日から帝城で働くメイドは一人もいなくなるだろう。いかに鮮血帝の命令だろうとメイドだつて人間だもの。それに彼らの尊厳を守る為にも知っている者が少ない方がいいだろう。



「どうやって答えに辿りついたのだ。アインズ・ウール・ゴウン……いったい何者だ？」

書状には驚くべき事が記されていた。帝国貴族であるフェメール伯爵の依頼を受けたワーカーが、アインズ・ウール・ゴウンの居城であるナザリック地下大墳墓へ不法侵入。さらに窃盗行為を働き警備の従業員を殺害した。しかも墳墓内に於いて大変な侮辱的行為（性犯罪も含む）を働いた。

ついでには実行犯のワーカーを裁判にかけるので、重要参考人として依頼主のフェメール伯爵と皇帝であるジルクニフに出席を求め、とあった。文章の最後には「今回の事件は甚だ遺憾であり、バハルス帝国には断固として抗議する」とあり「誠意ある対応が無ければ、バハルス帝国には無慈悲な鉄槌が下されるだろう」と記されていた。」

「……まで言われて引きさがる事は出来ぬ。重要参考人という事は被疑者ではないという事だ。証言をお望みと言うならしてやろうじゃないかアインズ・ウール・ゴウン。お前の狙いは打ち砕いてみせるぞ！」

「フェメール伯爵についてはどういたしますか？本人はこちらの意図に気付いた様子は無い模様ですが。」

「死人に口無しだ。殺せ！どうせ向こうはお見通しだろうが、血迷って余計な事を話されては困る。裁判に出席するのは伯爵の首だけで十分だ。」

そうして矢継ぎ早に指示を出していくジルクニフ。ここからは時間との勝負だ。書

状には「参考人の到着を待つて裁判を開始する」と記されていた。こちらの対応を見て試すつもりなのだろう。到着が遅れた場合は「誠意が感じられない」とでも難癖をつける——とても分かり易い手法だ。だからその狙いを外してやるのだ。

あらゆる権限を行使して準備と対策を済ませたジルクニフは、臣下の中でも特に能力に優れて信頼できる者達を選びすぐって、3日後の昼過ぎには帝都を出立した。さらに移動中も休憩も殆ど取らず、食事は移動しながらで済ませる強行軍である。



「んん……どうやら少し眠っていた様だが、ここはどの辺りだ？」

「出発前も含めれば、かなりの無理を押し通した訳ですから。あと1時間もすれば目的地のナザリック地下大墳墓に到着いたします。既に先触れは到着済みとメッセージが入っております。」

そう答えたのは秘書官のロウネ・ヴァミリオン。優秀な官僚であり、今回の件ではジルクニフが最も期待して、頼りにしている男だ。これから相手をする事になるアイズ・ウール・ゴウンは信じられない様な力の持ち主である。

なにせ使者として遣わしたモンスターですら、第七位階魔法を使う化け物だ。これで

は帝国主席魔導師であるフルーダ・パラダインや、帝国四騎士最強の「雷光」バジウツド・ペシユメルの武力も当てには出来ない。勿論2人ともジルクニフが深く信頼する者には違いないので、今回も同行させているし、現在も皇帝が乗る馬車に同席させている。しかし今回の戦いは知恵を駆使した舌戦となる事が濃厚な為、帝国の主戦力は皇帝である自分と秘書官のロウネであることは言うまでも無いだろう。

「陛下、先日はお見苦しいところをお見せしましたな。たしかにあのモンスターの魔力のオーラは私を上回っていました。しかしそれだけで私が敗北すると決まった訳ではありませんぞ。魔法を使うモンスターというのは、その殆どが多くても10程度の魔法しか使えないのです。確かに強力な魔法を使つて来ると予想されますが、私は3系統100種以上の魔法を修めております。そう易々とは後れを取りませぬ。」

先日の狼狽が嘘の様に力強く語るフルーダ。彼は魔力・信仰・精神の3系統の魔法を修めた「三重魔法詠唱者」である。6代前200年以上も帝国に仕えた帝国の重鎮で英雄だ。その身から立ち上る英雄の覇気にジルクニフ達も安堵する。

「フルーダ様がそう言われるなら心配はありませんな。これで俺は陛下を守る事に専念出来そうだ。何かあつても命がけで時間を稼いでみせますぜ。」

そう言つて笑うバジウツド。彼は貧民街出身でありながら実力でのし上がった豪傑だ。砕けた態度であるが皇帝への忠誠心は随一の騎士である。

「それなら私は邪魔にならない様に小さくなっておりますので、私の事は気にせず捨て置いて下さい。」

「何を言っているのだロウネ。お前は今回の裁判とやらで私の右腕になってもらうのだからな。それに現在の帝国は人財不足が著しいので早期退職は認めていないのだよ。そして爺、やつといつもの爺に戻ったな。これなら安心だ。」

笑って答えるジルクニフだが、頭の中では何十通りもの展開を予想し、それにどう対応するかをシミュレートし続けている。既に眠気は吹き飛び、どの様な相手であろうと帝国を守ってみせるとの決意を新たにしていた。

「失礼します陛下。レイナースです。」

馬車の外から声をかけたのは「重爆」レイナース・ロックブルズだ。四騎士の紅一点でもっとも攻撃に長けている。元は地方貴族の令嬢であった彼女は、騎士としての才能に恵まれ領地のモンスター退治などで活躍していたが、モンスターから受けた呪いのせいで家族・婚約者を含む全てを失った過去を持つ。

呪いの解呪と復讐への助力を条件に四騎士となった彼女の忠誠心は四騎士中で最も低い。それをジルクニフに認めさせる実力の持ち主である。ちなみにジルクニフの協力で「ざまあ」は実行済みである。

レイナースを見捨てた家族や使用人は、全員が顔面を酸の魔法で焼かれた上で奴隷階

級に落とされた。彼女が生れた領地は「特別行政区」に指定され、周辺の倍以上の重税を課せられて、領地外への移動も禁止されている。

そして騎士であつた婚約者も実家は改易され、自身は奴隷剣闘士の身分にされて、闘技場でレイナース自身の手によつて徹底的に痛めつけられた。端正だつた顔を潰され、四肢を切断された彼はその場で死ぬことすら許されず、一年以上に渡りレイナースに飼われる事になった。

「レイナースか。中に入つて報告してくれ。」

「それではお邪魔させていただきますわ。先触れからの報告では、既にナザリック地下大墳墓へ到着して陛下の到着予定時間を伝えた後、メイドから歓待を受けているとの事です。非常に見目麗しいメイド達だとの報告です。」

レイナースの口調は「非常に見目麗しい」の部分だけが、少しだけつつかえていた。そしてギギギギ…という歯軋りも聞こえたが、全員が気づかない振りをした。



「あああゝ♪心が安らぐ…こんな美味しい飲み物は初めてだ。このお菓子も最高だ！少し色が変わっているが…もう、ゴールしてもいいよな…」

饗されたお菓子と飲み物の美味しさにすっかり魅了されたジルクニフ。ここまでリラックスしたのはいつ以来だったろうか？

「ジル：君は働き過ぎなんだよ。ゆつくりと休んで、そして至高の御方に全てを委ねればいいんだ。さあ、こつちへ来るんだ。ゴールは目前だ。」

頭上に光輪を浮かべ白い翼を生やしたジルクニフが両手を拡げて歓迎している。その後ろには豪華なローブを着た骸骨や眼鏡をかけた悪魔の幻影が見える様な気がする。

「ジル：諦めるなっ！お前にはまだやらなきゃいけない事があるじゃないか？それにお前はまだスタート地点に立ったばかりだろ！」

角と黒いコウモリの様な翼、そして尖った尻尾を生やしたジルクニフが拳を握りしめて叱咤激励してくる。その後ろには彼に忠誠を誓う臣下達、そして「あの人」の幻影が見える様な気がする。

「ハッ!?私はいったい何を…」

慌てて意識を覚醒させるジルクニフ。あまりにも美味な食事には幻惑の効果でもあるのか？と思いつつも常に身に着けている、精神攻撃を全て無効化するネックレスを握りしめて気持ちいを落ち着かせる。そして墳墓に到着してからの事を思い起こす…

この墳墓へ到着してからは驚愕の連続だった。余りに驚愕し過ぎて感覚が麻痺してしまっただけかもしれない。まずは一行を出迎えた2名のメイドの美しさに驚愕した。帝

国の誇る美姫達も彼女達の前では霞んでしまう。そしてメイド達に下男の如く使役されているアンデッド——魔法省の奥で封印されている、フルーダでさえ支配不能な伝説級アンデッド——デスナイト、それが5体である。デスナイトの姿を確認したフルーダの「げええっ?!?!」が全てを物語っていた。

その後も驚愕は終わらなかつた。続いて現れた4人のメイド達：彼女達も同様の美しさだったが、その中の黒髪のメイドの前で跪くフルーダの姿に驚愕し、さらにそのメイドの靴に接吻をしたフルーダを、バジウツドとレイナスが2人がかりで引き離して、皇帝である自分が平身低頭で謝罪する羽目になってしまった。形振りかまっていない場合ではなかつた。裁判に臨むというのに被告人を増やす事になつては目も当てられない。

そしてフルーダの語つた釈明という名の——あのメイドの女性は第九位階魔法を使える——驚愕の事実には、乾いた声しか出なかつた。

「陛下にお尋ねしたい事があるのですがよろしいでしょうか?」

リーダー格の眼鏡をかけたメイドが話しかけて来る。当然だがジルクニフは動揺を殺してニツコリと微笑みながら答える。

「無論かまわないとも。貴女のような美しい女性の願いを叶えられるのなら喜んで。遠慮なく聞いてくれ。」

ジルクニフのイケメンスマイルにも動じないメイドを見て、少し外したか？次はもつと気さくな雰囲気でいってみるか？等と考える。あくまで雰囲気の問題であつて自分の容姿には絶対の自信を持つているジルクニフである。

「ありがとうございます。我が主人であるアインズ様が陛下を歓迎する際の参考にお聞きしたいとの事なのですが、陛下は「洋式」と「和式」のどちらがお好みでしょうか？」
来客の嗜好くらい事前に把握しておくものではないか？こつちの情報をかなり調べていたくせに！と訝しむジルクニフだが、そんな事は億尾にも出さずに応える。

「それは気を使わせて申し訳ない。しかし「洋式」と「和式」という言葉には馴染みがないのだが、どういった意味なのかな？」

「これは申し訳ございません。洋式というのはバハルス帝国やスレイン法国でみられる雰囲気の事です。和式というのは南方にあるという都市から齎された「刀」という武器や「着物」という衣服に見られる雰囲気の事でございます。」

ああ成程！と納得するジルクニフ。歓迎の宴に出す料理の事か？だが今から準備して間に合うのかよ？この墳墓は大丈夫なのか？俺は料理にはうるさい方だぞ！と思いつつもそんな事は億尾にも出さずに応える。そして最も近場であるというか地元である王国をスルーしているユリ・アルファである。

「それでは「和式」でお願いするでしょう。珍しい異国の風味を味わってみたくなつてね

☆アインズ・ウール・ゴウン殿にはお気づかい感謝すると伝えてくれ☆」

「この食事は素晴らしいからな♪あらゆる美食を味わってきたつもりだったが…世界にはまだまだ美食があるという事か。和風の料理か…期待できそうだな♪」

「かしこまりました。主人に伝えさせていただきます。(風味? 味わう? 何を言っているのかしら?)」

「よろしくお願いするよ。とても期待していたと伝えておいてくれ☆」

「どうやらジルクニフは精神攻撃の影響下にある様だ。飲み物や菓子に魅了されて正常な判断力を失っているのだろう。それともジルクニフ(天使 ver)の誘惑に屈してしまったのだろうか? 貴方は参考人として招致されているんですよ? 賓客ではありませんよ! 現実逃避している場合にはありません陛下!」



「気が付けば…アルシエは荒野の只中…! 何処かわからぬ…荒野の果て…異形のアンデッドやモンスターが犇めく強制労働施設にいたっ…!」

「ここに連れて来られて3日目だが、当然アルシエは諦めていない。自分には帰りを待つ妹達がいるのだ。このまま自分が帰らなければ、妹達を待っているのは悲惨の一言だ」

ろう。だが希望はある。自分達は朝食（美味しい）を食べたら8：00～18：00まで鉱山で働かされているが昼食時（美味しい）は1時間、午前と午後1回ずつの休憩（オヤツ付）があるので、仕事はきつくない。

仕事が終われば入浴まで許可され夕食（美味しい）もたつぷりと用意されている。与えられた部屋も男女別の相部屋だが清潔で過ごし易かった。さらに週1日だが休みがあるらしい。そして仕事の後に渡される1枚の金貨（見た事が無い装飾）。これを集める事が今のアルシエの目的だ。

アルシエ達が受けた説明は簡潔でそして無慈悲だった。自分達は罪を犯したので労役に就く。その期間は後日開かれる裁判で決められる。そして労働に依じて僅かだが賃金が支払われるが、それを貯める事で様々な恩恵が得られるのだ。

アルシエが求めているのは「1日外出券」だ。金貨100枚で入手出来る外出券を使って妹を迎えに行く。もうあの毒親の事など関係無い。妹だけを連れてここに戻ってくればいいのだ。ワーカーとして裏社会とも関わる事があったのだから、あの両親のもとに居たら妹達がどんな事をさせられるのかくらいは想像がつく。

一緒に連れてこられた他のチームのワーカーの話では「ここは天国だぞ」との事だった。帝国や王国の鉱山では考えられない待遇という事だ。説明では「ブラック企業は許されない。ナザリツクはホワイトです！」と聞かされたが意味不明だった。

ここに居れば自由は制限されても、その他の事で心配する必要は無い。将来の事から分らないが、このまま自分が帰らなければ妹達に訪れる運命に比べてずっとマシだ。それに頼りになる仲間や理解者もいる。

「無理はいけないよ。適度に自分を許すのがコツなんだ。」

そう言つてビールを奢つてくれた「ハンチョウ」というモンスター。見た目からオークス系（エルフ達が怯えていた）と思われる彼は、アルシエに色々とアドバイスをしてくれた。妹の事を相談したら、ここに連れてくれば良いと言つたのもハンチョウだ。

「俺達のはアルシエが使い。皆もそれでいいな？」

ヘッケランの言葉に反対するメンバーは誰も居なかつた。皆の温かさに涙が止まらなかつた。そして：

「私では使い道があまり無いんですよ。彼女達が色々としてくれますから。」

そう言つてエルヤーは毎日金貨をアルシエに放り投げて来る。何故？と聞けば苦笑いしながら答えてくれた。

「私達は生きてここから出る事はないでしょうからね。」

彼らはどんな事をやらかしたのだろうか？気になつたが、恐らくは教えてくれないだろう。ただ竜狩りとヘビーマッシュャーはメンバー間で険悪な雰囲気になつていた。

「あのジジイに付いて来たのが間違いだつた。」

「あれほど禁煙しろと言ったのに！」

「グリーンガムのクソ野郎のせいでこうなった！何で我慢できなかった？」

「俺は悪くねえ！皆やってる事じゃないか！」

どんな理由があるのか分からないが早く仲直りして欲しいと思う。見ていて気分がいいものではないから。裁判は近日中に開かれるとハンチョウが教えてくれた。

今日もアルシエはツルハシを振るう。今日のノルマまであと少しだ。ノルマを達成すればおかずを増やして貰えるのだ。だからもう少しだけ頑張ろう。そしてアルシエはツルハシを振るう。

「あれ？見た事無い鉱石だわ？七色に光っていてとても綺麗……」



アルチエルは心の底から恐怖していた。そして必死に抵抗を試みる。このままでは自分はおろか、家族や一族の破滅が待っているのだから！どうして自分がこんな目に遭わなければならぬのか？自分は王国の貴族で選ばれた人間だったはずだ——

国王の勅使として3人の騎士を連れてエ・ランテルへ到着したアルチエルは憤慨していた。自分の様な貴族は検問など関係なく最優先で案内されなければならないという

のに、衛兵はまったく取り合わずに列の最後尾へ並ぶように命令して来た。

すぐに衛兵へ抗議して上役を呼び出せば、イグヴァと名乗るマジックキャスターが現れて問答無用で魔法を放って来た。命に別条は無いが全身が痺れて動けないアルチエル達は、罪人の様に扱われて謀反人のパソナレイに付きだされた。

アルチエルの抗議に一切耳を貸さずにパソナレイはせせら笑う。

「ゴミめが。」

「き、貴様あゝ、こんな事が許されるとでも——」

「貴様の様な汚物にかまってやる暇はない。先生お願いします！」

現れたのは恐ろしい姿をした悪魔だった。

「《ドミネート／支配》——お前に命じる。お前の主人の前で、このように言うがいい。「お前がパソナレイの足元に平伏して、慈悲を願わないのであれば、これがお前の運命だ」その後、このナイフでお前の主人を刺すのだ。そしてこれはサービスだ——」

そう言われた瞬間からアルチエル達の身体は自分の意思に関係なく、言われた事を実行するために動き続けている。悪魔がアルチエル達にかけた魔法の効果なのか、身体中から信じられない力が湧いてくる。エ・ランテルから飲まず食わずで、睡眠すら取らずに走り続けているのに、疲れて身体中が悲鳴をあげているのに止まらない。このまま主人の所へ行つて悪魔の命令を実行に移せばどうなるのか……

後日リ・エステイーゼ王国で大事件が起こる。ある騎士が国王に暴言を吐いた後、隠し持っていたナイフで国王に切りかかったのだ。幸いにも側に控えていた王国戦士長が一刀に切り伏せた事で未遂となったが、どうして騎士がこのような凶行に及んだのか原因は不明である。

そして同じ日に、六大貴族の一人ボウロロップ侯が、交流のあった貴族とその配下の騎士2名にナイフで刺されるといふ事件が起こった。犯人の貴族と騎士はその場で拘束・殺害されたが、ボウロロップ侯は数か所を刺された。

鍛えられた体躯のボウロロップ侯は命に別条は無かったが、ナイフには特殊な毒が仕込んであった模様で、定期的に激痛に苛まれる症状に苦しむ事になった。主治医や神殿関係者の治療も効果が無く、スレイン法国へ治療を要請中であるが返答は一切無いという事である。

逆転お白州

見目麗しいメイドに案内された場所は、ジルクニフ達にとつてあまり馴染みのない場所だった。白い砂利が敷き詰められた地面に、草で編まれた敷物。その上には件のワーカーと思われる者達が座っている。全員が真っ白なローブのような服を着ているが、丈が短く両足の部分は素肌のままで靴も履いていない。

ワーカー達は膝を揃えて畳んだ状態で座っているが、両腕を後ろで縛られている。それを見たジルクニフは「姿勢は良く見えるが、あれでは足が痺れるのでは？」と思う。さらに何人かは三角形の木の棒を並べた板の上に座らされ、膝の上には石板が置かれている。多い者で3枚、少ない者は1枚だ。

「あれは拷問か？ 石板が多い者は罪が大きい……主犯という事か？（あの3枚の男はエルヤー・ウズルスだな。あの男……いつか何かをやらかすと思っていたが……やはり仕官を断つて正解だ。何がおっぱいチャレンジだ！ 帝都の風紀を乱しおつて！」

ワーカー達の前には見慣れない様式の建物があるが、ちょうど正面が吹き抜けになっている。内部は壇上になっており最上段には玉座が二つ——そこに座っているのはアインズ・ウール・ゴウンと妹のさつちんだ。一段下がった場所にいるのは検事のデミウ

ルゴス、反対側に弁護人のロウネ・ヴァミリオンだ。さらにワーカー達を左右から挟むようにして壇があり、左側が帝国側の証人で右側がナザリックの証人だ。

「くっ…何が罪かを裁くのは自分という事か。それにナザリックの証人という奴らは誰だ？…（全員が人間のようだが…あの男、どこかで見覚えが？…それに一部の証人は未だ到着していないだど？）」

ジルクニフはここへ案内される前の事を思い出す。メイドから裁判の説明があると聞かされて「あつ！そういえば」と慌てて自分の立場を思い出した。そのまま案内された部屋（驚くほど豪勢であった）に待っていたアインズ・ウール・ゴウンと妹のさっちゃん、その配下達は人間ではなかった。

それについては驚きというよりは、当然だという気持ちが強かった。あれだけの力や財を持つ存在が人間であるはずが無い。部屋に入った瞬間にフルーダが卒倒したが、それにかまっている場合ではなかった。お互いに名乗った後で聞かされた裁判の説明。状況はかなり不利と言わざるを得なかった。

「———そういう訳で、皇帝陛下と臣下の皆さんは帝国側の証人席で傍聴して下さい。何か証言を求められた場合は真実だけを述べるようお願いします。弁護人のロウネ・ヴァミリオン氏は私と一緒に来て頂きます。」

そう言ってデミウルゴスという悪魔が恭しく礼をするが、全く敬意など籠っていない

差異があります。」

ロウネの反論を強引な解釈（詭弁）で封じようとするデミウルゴス。すかさず切り返すロウネだが、ナザリック一の知某を誇るデミウルゴスは全く動じていない。

「ふむ…（さすがに無理がないか？デミウルゴス…）」

「裁判長——ではなく御奉行。さきほど新しい参考人が到着したので、この件について証言を求めます。」

「許可しよう。参考人を連れてまいれ（皇帝が和式を選んだのでこうしているが…やりにくいな）」

ナザリックには裁判の為の「大法廷（アルベドに使われた）」と「お白州」があるのだが、いくら元日本人のアインズでも江戸時代の裁判については全く未知であり、それはデミウルゴスも同様であった。

「それでは参考人を紹介します。スレイン・フランスの土の神官長を務めるレイモン・ザーグ・ローランサン氏です。」

「ばっ、馬鹿な！ありえないっ!？」

まさかの人物にジルクニフも同様に隠せない。

「私の事は皇帝陛下もご存じの様ですので、自己紹介は省いて証言だけを簡潔にさせて頂きます。えー、アンデッドが生命を持つか否かという問題であります、我がスレイ

ン法国では「死の神」であるスルシャーナ様を信仰している関係からも、知性あるアンデッドであれば1個の人格を持った生命体という意見が主流となっております。（すまんな皇帝。アインズ様に恩を売れるなど滅多にないチャンスなのだ）」

「ありがとうございます。スレイン法国の高名な神官であるレイモン氏の証言からも、こちらが主張した「殺害」という表現は妥当と考えます。」

「ぐぎぎぎぎぎぎぎ……（なぜ法国の神官長がここにいる？それにアンデッドが生命体だと！法国の人間がそれを言うのか！）」

「あまりの詭弁と予想外の証人の登場と証言に、ジルクニフは齒噛みするしか出来なかつたが……」

「異議あり！スケルトンやゾンビに知性があるとは思えません。ですから先程の証言にあった「知性あるアンデッド」とは矛盾していますっ！」

「異議を認めよう。しかしワーカー達がスケルトンやゾンビを倒した事は間違いなく事実である。よって「器物破損」という事でどうだろうか？（自動でPOPするシモベだし、俺は気にしていないんだがな）」

「御奉行の裁定に異論はございません（スケルトンに偽装したエルダーリッチに証言させる予定でしたが、アインズ様の裁定ならこの辺にしておきましょう）」

「異議を認めていただき感謝します。」

「！（よくやったロウネ！帝都に帰ったらボーナスだ）」

見事に一矢を報いたロウネ。これにはジルクニフも心の中で拍手する。そして裁判は次の罪状説明に移る。

「——逮捕の際にワーカーが所持していたマジックバッグからは、大量の金貨、宝飾品、武具が発見されています。ワーカーもこれが盗品である事を認めていますので、彼らの罪に疑いの余地はありません。さらにワーカーの証言からバハルス帝国のフェメール伯爵の関与が濃厚ですので、この点についての真相解明を強く求めます。」

「窃盗行為について異議はありません。同じ帝国の臣民として遺憾に思います。フェメール伯爵についても同様ですが、つい先日、伯爵は不幸な事故で死亡しておりますので真相解明は困難と言わざるを得ません。私から申し上げられるのは、この件に関してバハルス帝国の国としての関与は一切ないという事です。こちらの謝罪の証として伯爵の首級を提出いたします。」

そう言つてロウネは壺に収められた伯爵の首級をデミウルゴスへ渡す。

「♪（伯爵を殺しておいて正解だったな。ザマーミロ）」

「御奉行、バハルス帝国の参考人に証言を求めます。」

「認めよう。」

「♪（誰に聞かれても答えは一緒だぞ。死人は喋れないからな）」

「そしてワーカーへ窃盗行為を依頼したフェメール伯爵を懲役5年に処するが、バハルス帝国伯爵という社会的地位を考慮して、刑の執行を3年の間猶予する。さらにフェメール伯爵には蘇生費用として帝国金貨10万枚を請求する。この費用については、バハルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクス陛下が連帯保証する事。以上だ。」

「ふざけるな！控訴だ！不服を申し立てる！」

何時の間にか首だけにされて、蘇生されて、有罪判決を受けて、莫大な請求をふっかけられたフェメール伯爵は断固として抗議する。

「この白州に控訴というシステムは存在しない。」

「全く問題は無い。早急に伯爵の財産を処分して、不足分は帝国が責任を持って弁済する。(まさか蘇生魔法とは！これほどの力を持つ相手だったか……)」

支配者達の無慈悲な宣告にフェメール伯爵は崩れ落ちる。

「これにて一件落着……と行きたいのだが、続けてナザリック地下大墳墓における迷惑行為についての詮議に移る。デミウルゴス、彼らの行状を全員が確認出来るようにしてやれ。」

「かしこまりました。それではワーカーが行った迷惑行為の証拠として、誰もが理解出来るように実際の「映像と音声」を魔法によって再生させて頂きませんが、一部に大変見

苦しい部分があり、その部分についてはある程度の修正が施されている事をご了承下さい。」

「異議あり！ある程度と言いますが、それはあくまでそちらの主観あり、修正された部分に重要な事実が含まれる可能性があります。それでは被告の利益に反するおそれがあります。その様な証拠では客観性と信頼性に重大な懸念があります。こちらは無修正を要求します！」

「ブッフオオーツ（何言ってるんだコイツ?!）」

この茶番劇を黙って見ていたさつちんも、ロウネの要求に思わずコーヒーを噴き出す。彼女としては、こんなどうでもいい事はさつさと終わらせてしまえと思っている。あくまで兄の顔を立てているのと、この後にする「おねだり」を成功させるためのゴマ擦りだ。あんなのをもう一度見せられるのは勘弁して欲しい。

「余も皇帝として臣民が犯した過ちから目を逸らす事はしたくない。アインズ・ウール・ゴウン殿、私からも無修正での公開をお願いする。（思い切りうるたえたな！反撃のチャンスだ！良くいったロウネ、帝都に戻ったらビッグボーンだ!）」

「あ、アインズ様？（皇帝の狙いは何だ？あんな汚物をアインズ様やさつちん様の目に触れさせられるものか!）」

「あー、デミウルゴスも言ったのだが、あまり見て気分のよい物ではないのだ。異議を却

下する。」

「異議ありです！あくまでも無修正を要求します。（証拠と言いながら、見せられない部分が存在する。ついに矛盾を見つけたぞ！）」

「余も同じ意見だ。（あの冷静沈着な悪魔が動揺している！これは決まりだ！覚悟しろアインズ・ウール・ゴウン！）」

アインズやデミウルゴスが初めて見せた動揺を、帝国側は全力で攻め立てる。これまで殆ど一方的に押されているのだから当然だ。それが悲劇の再現になるとは知らずに……

「……そこまで言うのなら異議を認めてやろう。やれ、デミウルゴス……（俺は止めたからな！）」

「か、かしこまりました。それでは皆様……モニターに注目して下さい。（ええい、ままよ！）」

「お兄ちゃん……私、帰ってもいいかな？（へソリュシャーン、いつものガードお願いい〜）」
ジルクニフとロウネは、これから流れる映像を一瞬たりとも見逃すまいと集中する。どんな些細な部分も見落とさない様にモニターを凝視する。

「映像……まさか!？」

「止めてくれー！これ以上俺の……俺の尊厳を傷つけないでくれー！」

「もうお終いしやな……」

「いやあああああーっ」

ワーカー達は教育（拷問&説教）のおかげで、自分達の行いを深く恥じていた。だからこれから流される映像を見られる事には耐えがたい苦痛と恥辱を伴う。アインズの温情を踏みにじった皇帝に憎しみが湧きあがる。

「あいつ等は何をしたっていうんだ？」

「分からない……エルヤーは何も言わなかった。」

「同室のエルフ達も教えてくれなかったわね。」

「竜狩りもヘビーマツシヤーもあの様子だったので、何も聞けませんでしたからね。」

ワーカーの中で唯一、教育的指導を受けなかったフォーサイトは全く心当たりがなかった。何度か情報交換を試みたりもしたが、彼らの口は固かったのだ。

「見苦しいぞ！己の罪が白日の下に晒されるのを拒むとは！それでも我が臣民かあつ！！（ここまで動揺するとは何をやらかしたんだ？）」

見苦しくうろたえる罪人を一喝するジルクニフ。多少は違和感を覚えていたが、ここでアインズが「じゃあやっぱり……」となつては堪らない。そして帝国の覇者が発する烈火の様な気迫にさらされたワーカー達は……

「アンタは何を言っているんだ！」

「あんなモン見て誰が得するんだ？」

「くたばれ皇帝！」

「私は帝国の臣民ではありません！だいたい仕官を断つたのはそつちじゃないですか？」

皇帝の気迫に押されるどころかますますヒートアップしていた。鮮血帝にここまで正面切つて言い放つた者は初めてだろう。

「騒々しいぞ！静かにせよ。」

絶対的支配者の一喝で辺りに静寂が戻る。さしものジルクニフでさえ黙らせられる一喝だった。

「此方からの質問以外で被告人には発言を認めない。そして……私は基本的に警告を二度以上しない。なぜならその者の選択を尊重するからだ。たとえ結果がその者にとつては不幸だとしてもだ。始めてくれ、デミウルゴス。」

アインズズ言葉に、自分は何かとんでもない勘違いをしていたのでは？と思いはじめたジルクニフとロウネ。しかし既に手遅れだった。



「そういつた訳しやな。それしや儂はちよつとそこら辺て小便をひっかけてくるとするわい♪」

※これ以降の描写は第25話「大墳墓への侵入者」を参照して下さい。

「この様に他人の住居の玄関とも言える場所、それも死者が眠る墓地（只のオブジェクト）で地面に痰を吐き捨て、霊廟の壁に粗相をする。彼らの見識を疑わざるを得ません！参考にして帝国の法に詳しい弁護士へお聞きしたいのですが、これと同じ行為を帝国、それも皇帝陛下の居城で行った場合は帝国ではどの様な罪に問われるのかお答え願いたい！」

「へ、陛下への不敬罪として当人はそ、その場で処刑。家族は臣民としての権利を剥奪…ど、奴隷となります。」

顔を蒼白にしたロウネが答える。たしかに酷過ぎる、そして予想外の行為だ。そして次の映像が映し出される。

「我は少し野暮用があるので外で待つていてくれ。それほど時間はかからん。」

※これ以降の描写は第25話「大墳墓への侵入者」を参照して下さい。

「大変に見苦しい内容でしたが、こちらの提案を拒絶したのはそちらだという事を、改めて明言させていただきます。ここで被告人のグリーンガム氏に聞きたいのですが、他人の住居で許可なく、それも室内でこの様な行為を行った理由について何か言う事はありま

すか？」

「くっ：ワーカーや冒険者が任務中に野外での、時にはダンジョンでウン：排泄する事は仕方ない事だと思えます。私はナザリック地下大墳墓が他人の住居であつた事を知りませんでしたので、その点については謝罪します。」

「知らなかつたから仕方ないというのは無責任ではありませんか？ 弁護人からは何かありますか？」

「被告のした事はそれほどまでに許されない事でしょうか？ 排泄というのは生物にとつては欠かせない行為です。便意に耐えかねてどうしようもなく：という事だつてあります。それに住居、それもこれほど広大な住居というのであれば、トイレの設置は持ち主の責任でされてしかるべき。また被告のワーカーという職業上の問題もあります。この2点をふまえて情状酌量をお願いしたい。（何で他人の野グソの弁護をしなきゃいけないんだ）」

「異議あり！ 職業上の問題といいますが本当でしょうか？ 参考人に証言を求めます。」
「許可しよう。参考人はこの件に付いて証言するように。（これは帝国にも理解して欲しいからな）」

発言を求められたのは、最初からナザリック側の席にいた初老の男だつた。

「私はエ・ランテルで冒険者組合長を務めるプルトン・アインザックと申します。被告人

は「ワーカーや冒険者」と言いましたが、これは大変な誤解です。少なくともエ・ランテルの冒険者は野外任務中に「エチケツト袋」を持参して、排泄物の扱いについては充分に配慮しております。これは組合に登録する際の注意事項に（3日前から）含まれている常識です。」

「なっ？そ、それは初耳ですが…い、異議あり。それらはエ・ランテル特有の事情ではないのですか？帝国の冒険者組合でその様な規則があるとは聞いた事ありません。被告のワーカーにも証言を求めます。（そんなの聞いた事ないぞ）」

「発言を認める。」

「10年以上もワーカーとして活動してきましたが、そんな事は聞いた事ありません。」

「当り前だろう。3日前に決まったばかりなのだから。」

「異議あり！エ・ランテル特有の事情というのは誤解です。弁護士や被告は帝国の遅れた法整備を誤魔化しているだけです。こちらも参考人に証言を求めます。」

「許可しよう。参考人はこの件に付いて証言するように。（この件は有耶無耶にせず徹底させないと困るからな）」

「アインザックの隣に座っていた男女が立ちあがる。顔立ちが似ているので兄妹だろうか？」

「私は竜王国のアダマンタイト級冒険者チーム「クインティア♥」のエッセと申します。」
「……同じくクインティアです。（何でアタシがウンコについて証言しなきゃいけないのよ！てゆるーかクインティア♥なんて勘弁してよ！）」

「ちよつと待て！ 思い出したぞ！ 男の方とは面識があるぞ！ お前はスレイン法国の者だろう。（法国との会合で警備としていた男だ！ なぜ気が付かなかった）」

「それは過去の話です。今は愛する妹と竜王国の為に戦う単なる一冒険者（人類最強クラスです）です！」

「ハイソノトウリデス。」

2人の正体は法国の仲よし兄妹だ。妹のやらかした行為の司法取引として、たった2人でビーストマンに攻められている竜王国へ出張中（任務外のボランティア）だったのを、アインズの要請で遙々やって来たのだ。勿論だがフォローもしつかりと行っている。

ナザリックでも広範囲殲滅を得意とするマーレを派遣して、数千体のビーストマンを殲滅させたうえで、その功績をクインティア♥に押しつけた事で、2人は竜王国で2番目のアダマンタイト級冒険者チームのなったのだ。これにはドラウディロン・オーリウクルス女王も大喜びだった。ちなみにクアイエッセはマーレに深い感銘を受けたように、「アリだな……」という発言で、妹からさらなる響感を買っていた。

「竜王国の冒険者として発言させて頂きますが、先程のプルトン・アインザック氏が証言した内容は竜王国でも（非）常識です。」

「兄貴の言う通りです。」

「我ら兄妹はこの「無限のエチケツト袋」というマジックアイテムを愛用しています。これには1ヶ月分のブツを収納可能です。（いくら俺でもここまでマニアックなプレイは御免だがな）」

「僭越ですがスレイン法国としても同様であると証言します。我が国に冒険者組合はありませんが、軍では全兵士にエチケツト袋を支給しておりますぞ。（ぶれいやー様の居城でこのような事をするとは…帝国との手切れも考える必要があるかもしれん）」

たかがウンコが帝国と法国の外交問題にまで発展しかかっている。

「この様に他国においても当たり前の常識と認識されているのはあきらかです。今回の件は帝国の未発達な法律に情状酌量の余地がありますが、帝国にはしつかりとした法整備を強く求めます。」

「ぜ、善処いたします。（国は冒険者組合には不干涉じゃないのか？ウンコ位好きにさせてやればいいじゃないか！）」

「これは私からも強く要請したい。ジルクニフ殿にもぜひ理解と協力を求めたい。」

「り、了解した。帰国次第、臣下と図って法整備に取り組みことを約束する。軍について

もだ。(何でウンコの事でここまで言われなきやいけないんだ！ロウネが余計な事をするからだ！ポーナスカットだ)」

これはアインズにとっても重要な事だった。それほど今回の事は「嫌な事件」だったのだ。わざわざエ・ランテルから呼び寄せたアインザック(初対面時は泣かれて命乞いされた)を巻き込んで、スレイン法国に貸しを作つてまで行つたのだ。

22世紀で生きて来たアインズとこの世界の住人の間で、衛生観念に大きな隔たりがあつたのも影響している。元人間として所かまわず粗相をするのは許せなかつたのだ。冒険者のトイレ事情を「どげんかせんといかん」と一念発起したのだ。

「おい…俺達もまずくないか？」

「しかし…今まで特にお咎めはありませんでしたよ？」

「まさか!?!見られてた!!ウソ!ウソ?！」

「あんなのを公開されたら…:死のう…:さよなら…:クーデ…:ウレイ…:」

さすがに事情を察したフォーサイトも、己の所業を思い出して戦々恐々だ。何せ裁判は終わっていないのだ。これまで気にも留めていなかった事が、こうして赤裸々にされてみると、どれだけ重大なことを実感していた。



「続いてワーカーチーム「天武」の行為についてです。モニターを御覧下さい。」

もう何を見せられても驚かん。そう考えていたジルクニフだったが……

「それでは3人揃っていつてみましょう♪」

※これ以降の描写は第25話「大墳墓への侵入者」を参照して下さい。

「——という訳です。帝国の方にお聞きしたいのですが、帝国にはこの様な破廉恥な風習があるのでしょいか?」

「そんな訳があるかああーっ!!」

思わず絶叫するジルクニフ。自らが治める国がとんでもない誤解をされては黙っている訳にはいかない。

「皇帝陛下に直答して頂けるとは光栄です。」

「少々興奮して取り乱したようだ。断言するが「おっぱいチャレンジ」なるものは、彼らだけの趣味趣向であって帝国にこの様な風習ないと我が名にかけて誓おう。当然だが情状酌量など考慮する必要はない。ロウネも弁護などする必要はないぞ。」

ジルクニフに言われるまでも無く、ロウネもこんなバカ野郎達の弁護は願ひ下げだ。すでにどん底まで落ちた帝国の権威が、さらに底を破って落とされたのだ。

「そんなっ!?!」

「死にたくないよー!」

「助けてえーっ。」

「……（私の崇高な趣味を理解出来る友とは遂に逢えなかつたか）」

「おやおや、彼らを弁護する者は誰もいないようですね。（さすがの私も馬鹿らしくなつてきました）」

「いるさつー!ここに一人な!!」

立ちあがったのは漆黒聖典第五席次一人師団にして、竜王国アダマンタイト級冒険者、そしてダブルピースのエルフ派幹部クアイエッセ・ハゼイア・クインティアだ!

「義を見てせざるは勇なきなり!」かつてエルフ迫害を批判し、それを咎められて出奔した悲劇の剣士がいたと聞いた事がある。彼の弁護はこのクアイエッセ・ハゼイア・クインティアに任せてもらおう!」

〈おいクレマンティヌ! 兄を止めろ〉

〈無理です! スイッチが入った馬鹿兄貴は止められません〉

その後は怒涛の超理論を展開したクアイエッセに、デミウルゴスですら譲歩せざるを得ず（アインズから「どうでもいい好きにさせておけ」とメッセージが届いた）まさかの大逆転という展開になった。

「それでは彼らの身元引受人はこのレイモン・ザーク・ローランサンが引き受けさせて頂

きます。(でかしたぞクワイエツセ！新たな同士を迎えただけでなく、アインズ様にさらに貸しを作れたとは♪)」

「……(アインズ・ウール・ゴウンと法国が繋がっていたとは？それにしてもこの裁判：どう考えても茶番だ。何が目的だ！全く読めん)」

「……(こんな事をする為に今までキャリアを積み重ねてきたというのか？秘書官なんて辞めて退職金で露天商でもするか？屋台を引くのもいいかもしれない)」

だんだんとこの茶番劇の内幕を察し出した帝国側。帝国のツートップであるジルクニフとロウネの間には凄まじい温度差があるのだが……

そしてアインズとしては冒険者のトイレ事情に一石を投じて、事態が改善の方向に向かってくれればそれでいいと思っている。最初は激昂したがそれも大分落ち着いてきた。何よりさっちゃんから「こんなバカな事より他にもする事があるじゃん？そんな事よりお兄ちゃんにお願いがあるんだけど♥」と言われた事の方が重要である。エルヤ^バの事^カもどうでもいい。

只でさえ忙しい上に、裁判で検事役に任命されてしまったデミウルゴスは「今回だけはアインズ様の真の狙いが全く分からない。このような体たらくではお二人の役に立てない！」と真剣に悩んでいた。

様々な思惑を抱えながらも佳境を迎えるお白州。そして最後の映像はお待ちかねの

に陥っても希望を捨てなかった少女が！どうしてこうなった？

真の狙い

「詮議の結果を申し渡す。被告人のワーカーを、それぞれの迷惑行為に応じて懲役半年〜1年に処する。これは先程の判決に加算される。詳しい内容はハンチョウより説明があるので、ワーカー達は確認しておくように。」

「そしてレイモン・ザーク・ローランサンが身元引受人となった天武の4名については、刑期の半分を務めた時点より服務態度を考慮したうえで仮釈放の対象となる。これにて一件落着とする。」

長かった裁判もようやく判決が確定した。関係者のほぼ全員が「やっと終わった」と心の底から思っていたが、2人だけ納得がいかない、というよりも「真の狙い」がなんなのかを量りかねている者がいた。

（アインズ様の目的は何だったのだ？当初の計画を大幅に変更…否、全く別物と云ってもいい内容にしてまで「お白州」なる茶番劇を演じられた。帝国にも大した事は要求をなされなかったし、さらに破廉恥な剣士とエロフ共を法国に引き渡すとは？そしてナザリックを汚したワーカー共へも懲役などという温情までおかけになる。解らない…）

（アインズ・ウール・ゴウン！いったい何が目的だ!?一国の皇帝を呼びつけて、わざわざ

茶番劇を見せつける。確かに強大な力を見せつけられた事で度肝を抜かれたのは確かだ。だがそれが狙いなら他にいくらでも遣り様がある……配下のクレーマーだけで都城にあれほどの惨劇を引き起こせるのだからな。他に狙いがあるはずなのだが全く読めん！あれほどの力を持つだけでなく、おそるべき鬼謀の持ち主とは！それにワーカーに与えられる罰も軽すぎる……あのクレームは何だったんだ!?!」

（これで冒険者達のトイレ問題に目処がついた。エ・ランテルや法国へも根回しは完了しているし、帝国についても皇帝に直接、言質を取ったのだから大丈夫だろう。ナザリックの各階層に休憩所を設置させているが、やはりこの世界の奴らは安心出来ないからな。リアル世界でも中世のヨーロッパなんて酷かったと、大学教授だった死獣天朱雀さんに聞いた事が有る。道端に平気で糞尿を捨てていたらしいし、貴族でさえ庭の茂みで用を足していたと言っていたからな。ナザリックで所かまわず粗相をされては適わんぞ。シモベにうんこ清掃なんてさせたくないからな。それにバカも法国が引き取ってくれるなら大助かりだ。ハンチョウから言われていた鉾山の人手不足も解決したし大成功だ♪）

「ジルクニフ殿、何か不明な点があるのなら、遠慮なく聞いてくれてかまわない。」

「それはありがたい。アインズ・ウール・ゴウン殿。色々とお聞きしたい事があるので。す。（いきなり名前呼びかよ!?!ルーン・ファアロード・エルニクスをつけるよ骸骨野郎

！」

これはアインズの対応が不適切かもしれない。法国があまりにも土下座外交に徹しているので、一国のトップ相手にも上位者として接する事に疑問を感じなくなっているのだ。上位者というのは間違っていないのだが、いきなり名前呼びというのはフレンドリー過ぎるのではないだろうか。

「ああ、ジルクニフ殿。私の事はアインズで構わないぞ。君ほどではないが、私の名前も結構長いからな。(さつちんはカルネ村の姉妹と仲良くなったと言っていたし、俺もこっちの世界で親しい人間を一人くらいは作らないとな。)」

アインズは妹のコミュ力に感心しつつも、若干の危機感を覚えていた。村娘と親しくなったり、雇っただけの冒険者達からも「お嬢様」と慕われている。シャルティアとも非常に仲が良いようで、さすがは「誰からも愛される妹」だな!と思つたが「それに比べて俺は?」という不安も拭えない。

NPC達はよく尽してくれるが、友達や家族というわけではない。さつちんがナザリックを空けている間は、アルベドともご無沙汰になっている事もあり、少し寂しく思っているのも事実だ。先日も……

「お早う今日もいい天気だ。(昨晩の当番はフォスだったな。また一晩中、座ったまま俺を見つめる仕事をしていたのか)」

「お早うございますアインズ様（ニコニコ）」

「朝食の用意を頼む（あの視線…プレッシャーだ）」

「かしこまりました。（ニコニコ）」

「パクパク…モグモグ…パクパク…モグモグ…（一人で食事というのも味気ないな。前に「一緒にどうだ?」といったら全力でお断りされたからな…※仕事中のメイドを食事に誘うのは主人としての自覚を欠いた行為です）」

「じいいゝ（ニコニコ）」

「パクパク…モグモグ…パクパク…モグモグ…（妙齢の女性相手に気のきいた会話なんて無理だしな。さっちゃんがいてくれれば、もつとアットホームでフレンドリーな感じだったんだが。）」

この様に、リア充な妹に対して、自分はぼつち気質なのでは?と悩み始めているアインズだった。守護者あたりを誘えばよいのかもしれないが、その場合もこちらが引くくらい恐縮してしまうので自重しているのだ。

「これからコーヒーでも飲みながら話そうじゃないか。美味しい菓子も用意させよう。ナザリックの菓子を随分と気に入ってくれた様だからな。（おかわりもいいぞ）」

「それは感激です♪ご馳走になります。（えっ!またお菓子食べていいのか!!）」



「——それではリ・エステイーズ王国についてはバハルス帝国が主導で併合を進める。我がスレイン法国はそれをバックアップしつつ王国へ圧力をかけるという事で。現在も王国の貴族から嘆願や問い合わせが来ている様ですが全て黙殺しております。皇帝陛下には心置きなく計画を進めて頂きたい。」

「了解した。旧王国領の分割についてだが、両国で問題になっていたエ・ランテルについてはどういった扱いになるのだろうか? (コーヒーとお菓子をご馳走したいと言ったくせに! 神官長も2国間の機密をペラペラと話してんじやねえよ!)」

ジルクニフの目論みはいきなり頓挫していた。アインズとの会話で少しでも情報を探ろうとしていたはずなのに、何故か法国の人間を交えて国際問題について討議させられていた。しかも善意の第三者の目前で国家機密を暴露するというおまけ付きだ。

「ジルクニフよ、エ・ランテルについては独立都市として運営する事になっている。」
「アインズ様の後押しがあれば何の心配もありませんな。(エ・ランテルがアインズ様との間で緩衝材になれば、国民の不安も減るからな)」

「はあ!?! (なに言ってるのお前ら!?! 何時の間にかそんな話しが!)」

さらに自分の知らない間に重要事項が決められていたりする。特にエ・ランテルを

掻つ攫われたのはかなりのシヨックだ。

「そ、それはアインズが統治するという事かな？（エ・ランテルを足掛かりに帝国へ魔の手を伸ばすと言うのか？王国みたいに！）」

「エ・ランテルはあくまでも（名目上は）独立した都市だよ。まあ都市長とは信仰（誤字にあらず）があるので、多少（どころではない）の便宜くらいは量って貰う事もあるかもしれないがね。（ウチでは間に合っているからな）」

ウソだ!!と心の中でジルクニフは叫ぶ。いったいアインズの魔の手はどこまで伸びているのだろうかと不安になる。ここへ来るまでは、アインズ相手に下手に出て、必要であれば軍門に下るか偽りの協力関係を持ちかけて、その後は周辺国家による同盟をもつて対抗するか？などと考えたりしたが、もつとも頼りにしていた法国が向こう側なのだ。

それなら王国という生贄を捧げて時間を稼ごうと考えれば、「ウチでは間に合っていますので結構」という答えだ。領土欲や支配欲はないのか？と思ったら、エ・ランテルという一番美味しい部分はしっかりとキープされている。尽く自分の思惑の上をいくアインズに戦慄を覚える。

「アインズはいずれ……いずれは国を興す予定などは無いのか？これだけの財力や兵力を持つているのだから、そんなアインズに相応しい立場というものがあるんじゃないか

と思うのだが？（いずれ大陸を手中に収め、その後は世界征服……と言われても驚かんとぞ）」

「興味は無いな。私にとつては家族とナザリツクに連なる者達が全てだ。私はジルクニフの様な働き者ではないのだよ（俺の仕事を増やすなよ）」

「私が働き者？……確かに忙しい身だと自覚はしているが……（そうだぞ、ここに来る為のスケジュール調整にどれだけ苦労したと思つている？ プンプン）」

「バハルス帝国の皇帝である君に聞きたいのだが……皇帝である君の目的は何だ？ そして国の統治者の責任についてどう考える？ 本音で答えて欲しい。（俺は元々しががないサラリーマンだからな。生れながらの支配者の考えを知りたいものだ）」

思つてもみなかった質問だ。しかしここまで真正面から問いかけられると清々しい気分だ。信じられないほどスムーズに、そして正直な答えが口から発せられる。

「無論、皇帝としては帝国をより強大にしていく事だ。その為には軍事や経済で力を蓄えて、国土を拡げる事が必要だが、それは手段であつて目的ではない。そうする事で帝国に暮らす臣民の生命と財産を守る為だ。これは統治者としての義務だと考えている。そして一人でも多くの臣民に平和な生活を送つて欲しいと考えている。（お前みたいな化け物がいるからこつちは大変なんだよ！）」

——パチパチパチパチパチパチ……

名いた。

「何という素晴らしい事をして下さるのだ：何という事を！こんな素晴らしい話は聞いた事が無い：これこそ私が200年以上も求め続けていた事だ。これに比べると帝国の魔法学院はカスだ。」

滂沱の涙を流すフルーダ。両目から止めどなく流れ続ける涙が彼の感動の大きさを物語っている。彼が握りしめた書類にはこう記されていた。

〈囚人への就労支援^人プログラム^実（魔法関連）〉

ナザリックでは出所者の再犯を防止する為に、囚人の適正にあったスキルアップをサポートしています。魔法関連では一流の魔法詠唱者（第十位階魔法が使える専門家で）による指導で、出所後の就職活動がスムーズに進められるよう取り組んでいます。

さらに魔法適正がない場合も転生などの処置を受ければ、魔法を使えるようになります！この処置（痛みが無い、自然な仕上がり）を受けて社会で活躍している人達も大勢いますので、貴方も第二の人生にチャレンジしてみませんか？

※皆さんからの感謝の声を紹介します※

「私は子供の頃からエルダーリッチになるのが夢でした。自分でも様々な方法を試みたり、怪しげな宗教団体に騙されたりしましたが、至高の御方のおかげで無事にエルダーリッチになる事が出来たのです。現在はナザリックの紹介でカルネ村という所で警備

関係の職に就いています。さらに職場の女性（ポーシヨン職人）とお付き合いさせて頂いており、公私ともに充実した生活を送っています。」

カジットチャン氏（カルネ村在住）

「とにかく感謝しています。以前はフォレストストーカーとして活動していましたが、才能に恵まれずに自暴自棄になり、遂には痴漢行為で罰を受けるほど落ちぶれてしまいました。しかし至高の御方のお勧めでエルダーリッチとして第二の人生をスタートする事が出来ました。冒険者という不安定な仕事で、自堕落な生活を送っていた私がエ・ランテルの公務員（門番）になれたのも至高の御方のおかげです。先日は割り込みをしようにとした犯罪者を捕らえた事で、都市長から表彰していただきました。これからも市民の皆様可愛されるように職務に邁進したいと思えます。」

イグヴァア氏（エ・ランテル在住）

「疎遠になっていた兄と和解できました。私は些細な誤解で家族と不仲になりグレてしまいました。就職後も問題行動を起こし続けて、遂には窃盗事件（強盗殺人）まで起こしたあげく職場をバックレてしまったのです。その後は犯罪組織に身を寄せ、ある事件で捕まってしまったのですが、至高の御方の尽力で、拘留中の私に兄が面会に来てくれて家族愛の素晴らしさを知りました。今は兄妹でボランティア活動をしながら罪を償う毎日です。」

クレマンティーヌ氏（竜王国在住）

「人生大逆転！奇跡体験続出！雇われただけで奇跡を起こす究極のお嬢様！銀級冒険者だった俺が勝ちまくり！モテまくり！お嬢様に雇われてからというもの——依頼は大成功の連続で、あつという間にミスリル級に昇格！さらにお嬢様の紹介で美人メイド（ツンデレ）の彼女をゲット♪この前もお嬢様とのコネのおかげで、金貨1000枚の臨時収入とウハウハ俺はこの勢いでアダマンタイト級冒険者を目指します！」

ルクルット氏（エ・ランテル在住）

「驚異のナザリックパワーで恋愛運が劇的に好転！会ったその日にリザードマン最強のイケメン勇者にプロポーズされちゃいました♥典型的引きこもりで負けリザードマンだった私が、まさかの玉の輿で大感激!!セレブ夫人となりバラ色の毎日です。今は1日も早く彼の卵を孕みたいです。」

クルシユ氏（トブの大森林在住）

※さあ、次はアナタの番です！今スグお申込みを！※

このようにナザリックのおかげでいかに幸せになれたかという事が切々と語られていた。一部に誇大表現があつたり、途中からは魔法とか関係無くなっているのは気にしてはいけない。レイナスが目を皿のようにして読んでいた書類にもこのような事が

書かれています。

「囚人の健康に関する取り組みについて」

ナザリックでは囚人が元気がいい働けるように取り組んでいます。定期的な健康診断を実施して疾病の早期発見に努めたり、慢性的疾患がある囚人には個別の相談や治療も行っています。

就業中の事故で怪我を負った場合も、高位の回復魔法による治療が無料で受けられますし、万一の事態で死亡する様な事があっても蘇生魔法があるので安心です。

「わ、私もナザリックで懲役を受けさせて下さいっ！それでこの就労支援プログラムを」

「私もナザリックでの懲役を希望します！それで慢性的疾患（呪い）について相談を」

「そうか…そういう事か…（裏切ったな。この俺を…帝国を裏切ったか）」

地獄の底から響く怨嗟の声だった。ジルクニフはようやく理解した。アインズの狙いは帝国の優秀な人材のヘッドハンティングだったのだ。あの茶番劇でワーカーの罪を正当な物と主張する事によって彼らの身柄を確保する。そうすれば帝国としても文句は言えなくなる。

さらにワーカーへの待遇で本命の人材を狙い撃ちする。フルーダの魔法に対する

渴望や、レイナースが呪いを解く事を切望しているのは有名な話だ。そうでなければ罪人にこんな高待遇を与える必要性など無い。ワーカーについてもミスリル級以上の人材は貴重だ。帝国への影響は少くない。エルヤー達については法国への報酬だったのだろう。

デミウルゴスも同様の結論に達し「成程！ナザリックにとつては取るに足らない者であつても、帝国にしてみれば大問題！国にとつて重要な人員を取込む事で帝国を弱体化させる。さすがはアインズ様!!」と驚愕していた。

「いや……これはあくまで罪を犯した者への罰であつて、罪の無い者を懲役に就かせる訳にはいかないのだが……」

当然だがアインズにそのような神算鬼謀はない。興味本位で試してみたい事があるのと、ハンチョウからの報告で現地人に意外な使途が発見された事による計画の一環である。

「罰!? 罪が必要と仰るのですね！そ、そういう事でしたら……ぐぬぬぬ——これじゃあああくつ!!」

ローブを捲り、腰巻を脱いで、その場に座り込むフルーダ。両コブシを握りしめ「ふんぬう〜」と気張りだす姿に周りの者が凍りつく。

「さ、さすがにそこまでは……いくら何でも……ハッ！これなら私でもっ！ええいつ、やるし

様も大変な御喜びようで、現在は鉱石を鑑定中との事ですが、改めて報奨があるというお話です。皆さんもアルシエ君に続いて頑張つて下さい。拍手つ……！」

——パチパチパチパチパチ……

後日、アルシエには報奨が与えられた。妹2人と最後まで姉妹の身を案じていた老執事は、彼女の希望通り鉱山で働ける事になった。執事はハンチョウのサポートとして、幼い妹達はお手伝いとして採用された。他の使用人達には十分な退職金が支払われたが、屋敷も調度品も差し押さえられた元フルト夫妻は奴隷として売却される事になった。

純白の冒険譚（1）

「フハハハハハ♪素晴らしい！素晴らしいぞ！まさか七色鉱の一つを採掘可能とは!?それなら睡眠・食事不要のリング・オブ・サステナンスを全員に装備させて——いやいやそれではブラック過ぎるな。やはり労働者には気持ちよく働いて貰わねばいかん。」

「ビックリだよねえ。料理の事があつたから、採掘スキルが無くてもある程度はいけるんじゃないかと思つてたけど……」

「まさに！かつてナザリックより失われたワールドアイテムを再び手にする大チャンス！」

「ここまで見越しての御考えだったとは!?さすがはアインズ様とさっちゃん様!!」

第八階層の鉱山から発見された正体不明の鉱石——その正体が七色鉱の一つである事が判明し、アインズ達は狂喜していた。第八階層の鉱山は設定上では「レベルに応じた確率であらゆる鉱石が採掘可能」となっていたが、高レベルの鉱石になるほど確率は下がっていく。

ナザリックのNPCで最も採掘スキルが高い「ヨンゴ」でさえレベル70までの鉱石しか採取出来ない。それも最高レベルの鉱石を採掘できるのは100回に1度有る

か無いかの確率だった。もちろん採掘スキルのないNPCやシモベでは、最低レベルの鉱石さえ採掘不能だ。

そしてさっちゃんの「現地人はスキルが無くても料理が可能」という報告を聞いたアイズズが、ワーカー達を鉱山で働かせてみる事にした。鉱山の担当者であるハンチヨウから人手不足を報告されていたからだ。初日の報告では「採掘効率は悪く、低レベル鉱石しか採掘出来なかった」という物だった。アイズズとしても想定通りの結果だったので、特に問題視する事も無かったのだが、3日目に報告された正体不明の鉱石で状況は一変した。

スキルや魔法を何度も使って鑑定を繰り返したが、何度やっても結果は同じだった。パンドラズ・アクターとハンチヨウも交えた調査で判明したのは、スキルの無い現地人は設定を無視してアクティブスキルを実行可能という事実。

ただし効率は悪いし特殊な効果も発生しない。料理なら失敗も多いし、同じ材料を使ってもバフ効果は発生しない。鉱石の採掘であれば、効率が悪いが理論上はどんなレベルの鉱石でも採掘出来る可能性があるという事実だった。

現地販売用アイテムの材料確保の関係や、鉱山の規模の問題があるので、これ以上の増員が難しいのがネックではあるが、それでも超希少金属が入手可能となった鉱山とワーカーの重要度は一気に上がった。何せギルメンでもっとも採掘スキルが高かった

うーん、デミウルゴスさんの説得だけでは弱そうだ。ササツ（ハンドサイン）

「アインズ様の♪ちよつとイイとこ見てみたい♪二十！二十！二十！二十！二十！」

「お兄ちゃんお願い♥（キュンキュン）」

「二十！二十！二十！二十！」

「ハイ！ハイ！ハイッ！ハイッ！」

デミウルゴスさんの進言、メイド達の二十！コール、そして私のお願♥、トドメのデミウルゴスさんのハイ！ハイ！ハイッ！ハイッ！で、ようやくお兄ちゃんも財布の紐を緩めたようだ。（ヨツシャー）でも、あのタンバリンやマラカスはどこから来たんだろっ？

「しょうがないなあくさっちは♪今回だけだぞー（バリバリ）」

お兄ちゃんから使用する権利を貰ったのはワールドアイテム「もしもケータイ（プリペイド）」だ。破格の性能を持つ二十の一つで、「もしもくくなら」という願いを叶えてくれる凄いいアイテムだ。使い方は願い事をメールで送信するだけで、願い事が受理されれば了解した旨の返信メールが届く。プリペイドなので願い事に応じた残高が消費されるが、どれ位消費されるかは使ってみないと分からないし、18禁行為に触れる内容や、あまりにも無茶な内容だと「メーラーダエモン」という悪魔が現れてプレイヤーをボコってしまうのだ。その場合は問答無用でアイテムは消滅する。

私が必要するのはもちろんスキルや装備についての仕様変更だ。料理や採集などのアクティブスキルを現実に即したものの：現地の人間の様にスキルが無くても「やる気と熱意？」さえあれば出来るようにして欲しいのだ。今のままでは焼肉もよそつて貰わないと食べられない！過程をすつ飛ばして肉が焦げたという結果だけが残るのはおかしいと思う。

お兄ちゃんだって《パーフェクト・ウォリアー／完璧なる戦士》を使わなくても戦士の格好が出来れば喜ぶはずだ。あの格好、けっこう気に入ったみたいだし。

改善要求メールを送ると直ぐに返答が来た！どうやら大丈夫だった様だ♪残高も半分近く残っているので大した要求じゃなかったみたいだ。返信にはナザリック関係者以外には影響が出ないとあったしね！これならあと1回は同じ様なお願いも可能だろう。でも返信してきたのは誰なんだろう？神様？運営？

「やったよ！大成功♪これで料理にもチャレンジ出来るし、お兄ちゃんも色んな装備を試せるんじゃない？」

「そうかそうか♪色々と検証してみないとな！それじゃあ早速——」

「焼肉！」

「しゃぶしゃぶ！」

「焼肉が宜しいかと。」

「焼肉ですね！」

「焼肉にしましょう！」

「焼肉の準備に取り掛かります。」

「……（お、俺ギルド長なのに……）」



漆黒の剣（白）は現在のエ・ランテルで最も有名な冒険者チームとなっていた。純白の英雄譚と謳われるアンデッド大量発生事件の解決で鮮烈なデビューを飾りミスリル級へ昇格、その後はエ・ランテル合同冒険者チームを壊滅させた盗賊団の討伐を成功させて見事にオリハルコン級へと昇格した。エ・ランテル史上初のオリハルコン級チームの誕生だった。

さらにオリハルコン級に昇格したタイミングで「謎の剣士（白）」が新メンバーとして加入した事で一気に戦闘力をアップさせた。加入当初は謎の剣士の実力を疑問視する声もあつたが、彼の正体がブレイン・アングラウスと判明すると、そんな声はあつという間に消えて行つた。彼が王国戦士長と戦つた、あの御前試合以降の経歴は一切不明で謎に包まれているが、本人は「山に籠つて修行していた。あまりに過酷な修行で……」（白

く）なった。」とだけ語っていた。

そしてブレインが加入した直後にギガント・バジリスクの討伐を達成した事で、漆黒の剣（白）のアダマンタイト級昇格も間近では？という噂が業界中に流れるのだった。

「トブの大森林の奥地にある伝説の薬草ですか？」

「ああ。なんでも王国のボロ何とかという貴族が、原因不明の症状で苦しんでいるらしくてな。神官の魔法も効果が無く、スレイン法国へ治療を要請したが門前払い。藁にも縋るといふ事で王都の組合から話が回ってきた。」

エ・ランテル冒険者組合の応接室で漆黒の剣（白）は、組合長のプルトン・アインザツクから、王都からの依頼について説明を受けていた。

「お断りします。（キツパリ）」

当然だが、王国貴族に深い憎しみを抱く彼らが、そんな依頼を受ける筈も無い。

「まあ話しは最後まで聞いてくれたまえ。そのボロボロププーという貴族はこう言ったらしい——「この依頼を成功させれば、エ・ランテルの反逆について王に取り成してやつても良い」と。」

「でもそれって僕達に関係ありませんよね？むしろお嬢様やアインズ様の邪魔になりませんが、そういう事でしたら……」

普段はこういっただ場ではあまり発言しないニニヤが、組合長へ詰問ともいえる口調で

反論する。彼女はメンバーの中でも特にさっちゃんやアインズへの忠誠心が高い。その理由は彼らがミスリル級に昇格してしばらく経った頃に遡る。



黄金の輝き亭で待機していた漆黒の剣（白）に、雇い主のお嬢様から連絡が入った。「お兄ちゃんが会って話を聞きたいそうだから準備して」。40後にゲートが開くから支度してね。」

常在戦場の彼らにとって、支度など40秒もあれば十分だ。そして彼らの前に転移のゲートが開かれて、彼の地において、雇い主の正体とバックにある存在を知ったのだ。既に悪魔に魂を売り渡していた4人は、不死者の王であるアインズを前にしても取り乱したりはしなかった。さっちゃんの他にアインズへも忠誠を誓い、ナザリツクの為にその身を捧げる事を迷い無く宣言したのだった。

「お前達はその代価に何を望む？金・力・地位……望む物を言ってみるがいい。」

ニニヤの他の3人の視線が集中する。ニニヤは3人に頷くとアインズに懇願した。金も地位も必要無い——只、姉を取り戻す力が欲しいのです……と。

「ニニヤと言ったな。少しお前の記憶を覗かせてもらう——《コントロール・アムネジア

／記憶操作﴿》

どれ位の時間が経ったのだろう、気が付くとニニヤはベッドの上に居た。周囲では3人が心配そうにニニヤを見守っていた。特に疲労はないが、心の中に何か居たような、あやふやな感覚がある。仲間に聞いても何があったのか分からないと言う。只、アインズが少し借りて行くぞ…と彼女がいつも肌身離さず持っていた小さな人形を持っていったと聞かされた。

「あれは姉さんが作ってくれた大切な人形…何故それを？」

「理由は判りませんが、何かに必要だという感じでしたね。それにアインズ様は非常にお疲れ…疲弊しているようでした。」

「魔法でニニヤの記憶を見ていた時、凄まじい怒気を見せていたのである。死ぬかと思っただのである。」

「記憶を覗く魔法…そんな魔法は聞いた事も無い。」

「お嬢様も、「お兄ちゃんに任せておけば安心だから」と言っていたから、心配はいらないと思うが——」

ドアをノックする音で、彼らの会話が中断される。入って来たのは彼らとも面識があるセバス・チャンであった。

「目を覚まされた様ですね。アインズ様がお呼びですので御同行願います。」

「セバス様……どういう事でしょうか？」

「ニニヤさんに会って頂きたい方がいるのです。まずはアインズ様の元へ。」

「僕に……ですか？ いったい誰……」

セバスに案内された部屋では、ベッドの上に横たわる女性が居た。女性の外見に外傷はないが、とても疲れた……あらゆる苦しみを味わったかのような苦悶の表情で斃されている。

「う……そ……姉……さん」

「お前の姉、ツアレニーニヤ・ベイロンに間違いないか？」

ベッドの側に立っていたアインズが問いかける。隣には造り物の犬の頭部をしたメイドが控えている。

「はいっ……はいっ……。間違いありませんっ……姉さん、僕の姉さんです。でも、どうして……っ？」

「お前の記憶とこの人形を頼りに魔法で位置を特定。その後は我が配下に命じてお前の姉を救出させた。」

ちよつとそこまで……という感じで答えるアインズだが、いったいどれ程の力があれば、このような奇跡ともいえる事を成し遂げる事が可能なだろう。

「はあ？ あれから1時間ちよつとしか経ってないぞ!？」

「おボギヤじよぎやくべびや」

「もがびやおしやコにゆばヴあ」

「うえつぷ……こ、これは？」

「ここはナザリック地下大墳墓五大最悪の一つ——拠点最悪。お前の姉を苦しめた者達は恐怖公の眷族によつて、生きながら貪り喰われるが……決して死ぬ事は許されない。少しは気が晴れたか？」

そう告げるアインズは、目の前で生き地獄ともいふべき状態の男達に一欠けらの憐憫も感じてはいない。そしてニニヤも……

「彼らはどうなるのですか？このまま永久に……（そうなれば素晴らしい事だ）」

「残念だが、彼らにはこの後に大事な役割がある。しかしお前も自らの手で復讐をしたいだろう？元凶である貴族の男と何名かは、お前が直接罰を与えてやれ。但し命までは取るな。」

「命を取るな!?!や、奴らを殺すなど言われるのですか？」

「お前は優しいのだな。このナザリックにおいて、死はそれ以上の苦痛を与えられないという意味で慈悲なのだ。それに五大最悪と言っただろう。まだ4つも残っているじゃないか。」

生きながら貪り喰われ、それでも意識を失う事も死ぬ事も許されない男達はアインズ

の言葉に絶望——今までもそうだったのだが、さらに深く深く絶望する。

ニニヤは非常に充たされていた。だがまだ足りない……もつともつと……次は何をしてやろうか？この「衰踊り」が終わったら「鉄の処女」を試してみようか？それとも……
「おススメはこの「ファラリスの雄牛」かしら♪」

ニューロニストさんは頼りになるな。そう思いながらニニヤは隣に立つ醜悪な見た目の怪物を見つめる。彼女？に対してニニヤは少しの嫌悪感も抱いていない。何せ手取り足取り、懇切丁寧に指導してくれるのだから……

「本当はもつと時間をかけてじっくりとたつぷりと御持て成ししてあげたいけれど、アインズ様から1日しか時間を頂けなかったのが残念だわあん。」

「まったくです。ですがアインズ様には感謝しかありませんよつと——」

「おぎやぎやぎや……たすけて……やめ……」

ニニヤは笑いながら目の前の男の眼球をくり抜く。この男は目の前で姉を連れ去った家臣の男だ。主人が愉しんだ後に、おこぼれで姉を辱めた事を聞いている。既に全ての爪は剥いでしまったので次は歯を抜いてやろう。前歯から抜くと舌を噛み切って自害するのを防げるとアドバイスされている。もつとも彼に死は許されていないので不可能な事なのだが。

「あばばひやくじやぎや」

元凶である貴族の男は煮えたる油の中で悶えている。取り付けられたマジックアイテムのおかげで死ぬ事はない。全身が焼け爛れながらも即座に回復し、終わる事の無い地獄を味わっている。この男は姉の事などすっかり忘れていた。なぜ自分がこんな目に遭うのかすら理解出来ない愚物であった。今も必死にもがきながら何かを訴えているが、聞いてやる気は全くない。

「こいつらは最後にはどうなるのですか？」

「ウフフ…最後に行き着くのは第六階層の蟲毒の大穴。外見最悪の餓食狐蟲王に苗床にされちゃうのよん♪」

「苗床…ですか？」

「生きながら蟲達の養分兼住処にされちゃうのん♪本来なら意識も感覚も無くしちゃうのだけれど、特別な計らいで意識も感覚も保たれたままで苗床にされちゃうのよん♪」

「へええ、それはどのくらいの期間ですか？」

「こいつらに相應しい末路だ。さすがアインズ様は話しが分かる！あとは少しでも長い間苦しめばいいのだ。」

「あのアイテムがある限り寿命以外で死ぬ事は無いから……死ぬまで一生としか言いようがないわあん♪」

「ぞんなあ ああ」

のでは無いだろうか？

「あくまで依頼は薬草の入手だ。その薬草がボロボロプルーに渡される必要は無い。報酬を支払えない相手に商品を渡す必要はないだろう？」

「六大貴族のトップが報酬を支払えない？さすがにそれは無いでしょう。」

アインザックがニヤリとしながら答えるが、ボウロロプ侯は貴族派閥のトップだ。いかに高額の報酬であろうと支払いに困るような事は無いはずだ。

「クッククック……知っているかね？貴族派閥を中心に、王国中の悪徳貴族が謎の盗難事件の被害に遭っている事を。」

「ああー、そんな噂もありましたねえ♪我々のような冒険者には縁のない話ですから失念していました♪そういえば「国境なき神官団」でしたっけ？貧困に喘ぐ王国民に対して炊き出しや治療といった援助をしている謎の集団は。とても素晴らしい話ですね。」

盗難被害に遭った貴族達の多くは、その損失を埋める為に領民への収奪を強化した。そんな虐げられた民を救っているのが「国境なき神官団」だ。彼らは領民に対して様々な援助をしていたが、そんな事を黙って見ていられない貴族達は、彼らへの妨害や物資の接収を目論んだが、その事如くを阻止・撃退されている。ある貴族の私兵は魔法で召喚された天使によって追い払われ、精兵と言われたボウロロプ侯の兵団はたった一人

の若い神官？に数千名が殲滅される憂目に遭った。

帝国側の国境に近い領地の幾つかは、ジルクニフ皇帝による「人道支援」という名の侵攻によって、帝国軍が駐屯している状況だ。すでに行方不明となった貴族も少なくない。

その結果、貴族派閥の体制はガタガタになり、破産したり王都や他の貴族の領地へ逃げ出す者が続出している。もう一方の王派閥でも、比較的被害が少ないものと同様の状況である。この事態にランポッサ3世は、王都へ流入した貴族の保護以外に為すすべがなく、事態を憂慮するというコメントを発表するしか出来なかった。

「そういった訳で漆黒の剣（白）には頑張つて貰いたい。万一でも青の薔薇や朱の雫が薬草を入手した場合、王の命令でポロポロープーに薬草が譲渡される可能性も否定できないのだ。いくらアダマタイト級チームといっても貴族の柵と無関係ではいられないからな。それに青の薔薇は第三王女の私的な依頼を請け負っているという噂もある。」

「でも……ぶつちやけた話し、俺達だけで大丈夫なのか？以前はアダマタイト級チームとミスリル級2チームで達成した依頼だろう？それに俺達は攻撃に特化したチームだ。採取とかはあまり得意じゃないだろ？」

今まで黙つて話しを聞いていたブレインが問いかける。彼が言うとおりの漆黒の剣

(白) はかなり攻撃に偏ったチーム構成だ。例の事情で回復手段をあまり必要としない事もあり、サーチ&デストロイが方針となっている。

「そんな心配が必要かね？ 君達のバックには「お嬢様」が付いているじゃないか♪いざとなれば……」

アインザックは彼らが失敗するなんて、これっぽっちも考えていなかった。



突如、感じた違和感にツアインドルクスⅡヴァイシオンは一気に意識を覚醒させる。忘れもしないこの感覚——間違いなく奴らの仕業だと確信する。

「どうしたんじやツアーよ？ お主がそんな表情をするとは……」

巨大な竜の前に佇むのは老婆だ。真っ白な髪と皮膚に刻まれた皺が年齢を感じさせるが矍鑠としている。腰には剣を下げており、只者ではない気配を漂わせている。彼女こ伝説に謳われる十三英雄の一人で「死者使い」の異名を持つリグリット・ベルスー・カウラウだ。

「リグリット……たった今、世界が汚された。」

「!!それはっ……ぶれいやーの仕業か？」

「こんな事が出来るのは、ぶれいやー以外に存在しないよ。この感覚は忘れもしない。八欲王の時と同じだ……」

白金の竜王とも呼ばれるツアーは、この世界に複数いる竜王の中でも別格の存在だ。特に知覚・感知能力には凄まじい物があり、地底深くの洞窟にしながら世界に起こる異変を感じる事が出来る。

「先日訪れていたカイレの話では、世界を滅ぼす様な存在ではないという事じゃったが……」

「どこまでいっても、ぶれいやーは世界にとつては異物なんだ。リーダーの様な存在は例外だよ。恐るべき力を持つとは聞いていたが……躊躇いも無く世界を改編するとは……」

最強の竜王として悠久の時を生きてきたツアーは「世界の均衡を守る事」を何より重んじている。そんな彼にとつて100年毎にこの世界へ紛れ込み、良くも悪くも様々な影響を引き起こすぶれいやーは招かれざる存在だ。誰もが凄まじい力を持っていて、あの八欲王のように世界の法則さえ捻じ曲げる力を持つ者さえ存在する。

こちらから敵対するつもりは無かったが、己の欲望のままに世界を創り変える（焼肉しかかっただけなんです）というなら話は別だ。何せ八欲王が齎した位階魔法は世界を一変させたのだ！今回はどんな影響（ナザリック関係者以外に影響はありません）が齎されたのか不明だが此のままにはしておけない。

「どうするんじや…戦うのか？」

「まずは会って話を聞いてみる。もしこれ以上世界を乱すというなら…」

純白の冒険譚（2）

「帝国主席魔導師フルーダ・パラダイン、偉大なるジルクニフ陛下に万代の忠誠を誓いますぞ。もつとも六代前より帝国に誠心誠意仕えてきた儂の忠誠心は、帝国の誰もが知る事ですがな。陛下の覇道に立ち塞がる敵は、我が魔法にて誅滅してみせましょう。」

「栄光ある帝国四騎士の重爆レイナス・ロックブルズ。敬愛するジルクニフ陛下に永遠の忠誠を！我が剣にて陛下に仇名す者どもを尽く切り伏せて御覧に入れます。」

「……（それならとある墳墓を支配する邪悪なアンデッドを滅ぼして来て貰いたいのだがな）」

ここは帝城の一室、バハルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスの前に平伏しているのは、皇帝が見ている前で掟破りのフリーエージェント宣言をブチかました挙句、移籍希望先から「チームの戦力構想に無い」という無慈悲な宣告を下された2名だった。

掌大回転のフルーダとレイナスに対して、言いたい事は山ほどあるジルクニフだったが、それをぐつと堪えているのは、ジルクニフ自身もまた、あの超越者^{オーバーロード}アインズ・ウール・ゴウンの掌の上で転がされるしかないからだ。アインズがどんな神算鬼謀を巡

らせているのかは解らない。だが既にジェットコースターは発進してしまった。自らシートベルトを外すのは自殺するのと変わらない。

ナザリック地下大墳墓で自爆テロ実行直前に拘束されたフルーダとレイナース。この2名に対してアインズが告げた言葉は無慈悲であり、2人を絶望の底へ突き落した。

「お前達はあれか？目の前にご馳走を出されたら、今食べている食事を床にブチまけて踏みにするのか？そしてまた新しいご馳走を出されたら、同じ事を繰り返してそれに飛びつくのか？犬でも3日飼えば恩を忘れないと言うのに……見下げ果てた奴らだ。」

2人ともアインズの言葉に思うところがあつたのか、がっくりと項垂れていた。だが2人を絶望の底へ突き落したのがアインズなら、そこから救いあげるのもまたアインズだった。

「まあ他国の人間に私がどうこう言ったり、何かをする立場にはない。彼らの処遇は主君たるジルクニフに委ねるべき事だ。だが——」

そういつてアインズは幾つものアイテムをジルクニフに手渡した。多数の魔法のスクロール（第七位階魔法）、豪華な短杖（蘇生魔法）、清浄な気配を漂わせる指輪（呪いを軽減）……

「ジルクニフへのちよつとした贈り物だよ。どう使うかは好きにしてくれて構わない。

（部下や他国の人間の前で顔を潰されたジルクニフが気の毒すぎる。俺なら立ち直れん）

「か、感謝するよアインズ。（何だ！いったい何が目的だ）」

アインズの機転によって、帝国を裏切りかけた2人はジルクニフにこれ以上ないと言うほどの忠誠を誓う事となった。なにせ2人はアインズに正面から拒絶されている。彼らが自分の願いを叶えるにはジルクニフが持つアインズが渡したアイテムに頼るしかない。そして彼らはアインズが語っていた「レベル上げ」なる物を目指してモンスター退治に明け暮れるようになった。

2人が張り切り過ぎた影響で、モンスター駆除を担っていた軍や冒険者組合、ワーカー達からは「俺達の仕事が無くなりそうです」という報告があがってきている。特に非正規雇用の冒険者やワーカーには廃業を考える者さえ出てきているらしい。

フルルダの居室がある「大魔法詠唱者の塔」からは夜な夜な奇怪な笑い声が響き渡り、四騎士の1人であるバジウツドからは「レイナースさんマジでヤバい。あれは重爆ではなく「超重爆」です」と語っていた。

「いったい帝国は…俺はどうなってしまうんだ。」



トブの大森林の奥地から伝説の薬草を採取するという依頼を受けた漆黒の剣（白）は、森から最も近くにあるカルネ村へ向かっていた。さっちゃんに依頼の事を報告したらカルネ村へ立ち寄るように指示を受けたのだ。

「カルネ村も随分と変わったらしいぜ。あれからそんなに経ってないのによ。」

「そのカルネ村はお嬢様と何か関係があるのか？」

「直接の関係はありませんね。お嬢様のお兄様が色々と協力しているそうです。私達の知り合いもカルネ村でお世話になってるんですよ。」

「俺の弟子なんだけどな。ンフィーレアはエンリちゃんとは仲良くやってんのかね？」

「お前に弟子？ いったい何を教えてるんだ？」

漆黒の剣（白）へ加入してから日の浅いブレインは詳しい事情が分からない。かなりヤバイ橋を渡る覚悟が必要になるとは聞いているが、ブレイン自身も陽の当たる場所で生きてきた人間ではない。彼が漆黒の剣（白）へ加入したのも、彼が身を寄せていた傭兵団「死を撒く剣団」の討伐へやってきた彼らと戦いになったのが原因だったからだ。

彼ら4人はブレインも驚くほどの強さで、死を撒く剣団は半数が倒される事になった。そして漆黒の剣（白）VSブレイン1人の戦いは1時間以上に渡って続いた。4人同時に相手をして互角というブレインの強さも凄まじかったが、漆黒の剣（白）も抜群のチームワークと謎の回復力によって徐々にブレインを追い詰めて行った。そして

唐突に現れた女騎士の「お嬢様がお呼びだぞ」の一声で戦いは中断した。

水を差された形となったブレインの抗議にも「一撃だけ付き合つてやろう」と言い放ち、ブレインの最強武技であった秘剣虎落笛を、宣言通りに一撃——それも峰打ちで、ブレインごと纏めて叩き伏せたのだった。

その後、さっちゃんとアインズから「有望そうな奴（死体）がいればスカウト（白くしろ）しておくように」と言われていた彼女に自ら志願（切腹）して使徒となり、漆黒の剣（白）の5人目のメンバーとなったのだ。

「ブレインの旦那は、お嬢様とは一度しか会つた事がないからな。」

「まあエヌスリー様がお仕えするお嬢様だ。只者じゃあないんだろ？」

「ナザリックへ行つたら驚きますよ。あそこは何というか……あははははは」

遠い目をして乾いた笑いをあげるペテル。他の者も頻りに頷いている。

「はあ!?! そんなに凄いのか？俺はエヌスリー様の存在だけで一杯一杯だぞ。」

「知らないという事は恐ろしい事なのである。彼の地にはエヌスリー様と同格の姉妹がお二人。それ以上の力を持つ方々が両手で足りない程に居られるという話である。」

「おいおいマジなのかよ……」

ブレインが驚くのも無理は無いだろう。彼の剣技を片手だけで切り伏せたエヌスリー。それ以上の存在など想像すら出来ない。

「あれがカルネ村か？ 辺境の開拓村と聞いていたんだが……」

「村全体がしつかりとした塀で囲われていますね。下手したら砦並みですよ！」

以前は獣避けの柵さえ無かったカルネ村が、高さだけならエ・ランテルの城壁に匹敵する様な塀に囲まれていた。門の脇には物見櫓が設置され、何者かがしつかりと周囲を監視している。漆黒の剣（白）の事にも気付いた様子で、少しだけ慌しい雰囲気だ。

「おいおい……あの門番めちやくちやバい雰囲気だぜ！」

村の門番を務めているのはかなりの体躯を誇る全身鎧の戦士——中身はデスナイト——だった。当然だが喋る事は出来ないので櫓の上から声がかかる。

「冒険者の兄さん方、この村に用ですかい？」

「私達はエ・ランテルのオリハルコン級冒険者チーム漆黒の剣（白）です。私達の事は事前にお知らせがあつたはずですが？」

声を掛けてきたのは弓を背負ったゴブリンだ。彼らもれっきとしたカルネ村の住民だ。

「その真つ白い姿は間違いねえみたいですね。失礼しやした。おーい門を開けてくれー。」

重厚な扉が門番によって開かれる。中から現れた仮面のマジックキャスターが彼らを出迎える。

「ようこそカルネ村へ。お待ちしております。私は皆様のサポートをさっちゃん様から仰せつかったカジツチャンと申します。いつぞやは大変なご迷惑を……」

「げっ…あの時の（ハゲ）!?!」

「ハハハ…オツサンもお嬢様の世話になってたのかい？」

「儂のほうはアインズ様のお世話になったのですよ。今はバレアレ研究所で警備の仕事をしております。」

「きちんと更生して働いているとは感心であるな。カジツチャン殿も我らの様に？（こいつは白くなくてもハゲてるから外見の変化が殆どないのは羨ましいかも）」

「儂は皆さんと違ってほれ…この通り。」

仮面の中から現れたのは人間の顔ではなかった。それ自体は多少の驚きもあるが問題は無い。だがブレインを除いた4人は思った。俺達の担当がお嬢様で良かった！アインズ様に雇われていたら白ではなく骨にされていたのか？と身震いした。

「まさか…彼女も（骨になって）カルネ村に？」

「クレマンティーヌでしたら、今は竜王国で冒険者をしていると聞いております——到着しましたな。ここが研究所です。」

案内されたのは周囲と全く溶け込んでいない、石造りの真つ黒な建物だった。建物の周囲は倍以上の高さの石壁に囲われて、周囲を複数の警備兵（デスナイト）が巡回して

いる。中に入るとすぐに地下への階段があり、地上部分に比べて数倍のスペースが確保されている。

「先生！それに皆さん、お久しぶりです。」

「ンフィーレアも元気でやってるみたいで安心したぜ。」

「すつかり回復した様なのである。」※戦犯のお前が言うな

「お嬢様や皆さんにはとてもお世話になりました。僕のせいで大変な目に遭われたと聞きました。その御姿も……」

すつかり白くなった彼らを見て気まずそうにするンフィーレアだが、気にしている者は誰もいない。

「お前が気にすることじゃねーよ。俺達もお嬢様に世話になりっぱなしだしな。」

「そう言ってもらえると気が楽になります。そちらの剣士の方は？」

「ブレイン・アングラウスだ。少し前から漆黒の剣（白）で世話になってる。」

「王国戦士長と互角に戦ったという、あのブレイン・アングラウスさんですか！凄いい！」
元王国領の人間にとつてブレインのネームバリューは結構なものがある。ンフィーレアも彼の名や噂を聞いたことが何度もあった。

「元気なお姿を見て安心しました。それにツアレ姉さんがお世話になっています。」

「ツアレさんは奥でお婆ちゃんとして作業中です。さつそく挨拶に行きましょう。」

ニニヤの姉ツアレはバレアレ研究所で働いていた。ここなら婆さんとハゲ（骨）のカップル、それにヘタレ（彼女持ち）の他はアンデッドしかいないので、男性に対しての恐怖心が拭えていない彼女でも安心だからだ。ツアレとしては自分を助けてくれたナイスミドルの執事長と一緒に働きたいと希望していたのだが……

「特技は家庭料理とありますが？」

「はい。ジャガイモを蒸した料理が得意です。」

「…で、そのジャガイモ料理がナザリックで働くうえで何のメリットがあるとお考えですか？」

「難しいでしょうか？」

「そうですね…ナザリックには調理スキルを持ったメイドが多数在籍していますので、もう少しレベルが高くないと難しいです。」

「でも私…ここで断られたら、他に行くところがないんです。」

「ご安心ください（ニッコリ）。ナザリックでの採用は難しいですが、関連会社の牧場でミンチを作る人を募集しています。そこならツアレさんのスキルを活かせると思いますよ。幸いな事に、私と懇意にしている者が牧場の責任者なので、私の紹介であれば採用されるでしょう。」

「そ、そうなんですか。じゃあ…お願いしてもいいでしょうか？」

じゃ。かなりの効果が期待できるはずじゃ！」

「お任せ下さい。組合長とは話しが付いていますので、間違いなくレイジーさんにお渡ししますよ。それと回復ポーションをこんなに提供して頂きありがとうございます。」

彼らにはバレーアレ研究所で制作されたポーション（赤）がたっぷりと提供されている。末端価格で金貨数千枚の代物だ。既にレイジーとンフィーレアは、アインズから材料と器具の提供を受けてユグドラシル産ポーションの作成に成功している。

研究所の目的はあくまでユグドラシルで制作不可能だったポーションの開発だったが、レイジーの懇願で「さつちん流ポーション作成術※第1話「野営（ナザリック基準）」参照」の指導を受けたのだ。ンフィーレアではまったく理解不能だった、さつちん流を理解したレイジーは、さすが周辺国家でも有数のポーション職人である。

「トブの大森林の奥地なんて、滅多に行けるもんじゃないからね。ンフィーレアや、他にも貴重な薬草があるはずだから、たっぷりと採ってきておくれ。ただしくれぐれも気をつけてな。」

「任せてお婆ちゃん。今回は漆黒の剣（白）の皆さん以外にも、凄い案内人がいるし大丈夫だよ！」

「森の賢王の案内と護衛付きなんて贅沢ですよね！」

「伝説の大魔獣まで手懐けているとはな…あのお嬢様はどれだけの力を持つてるってい

うんだよ!？」

さっちゃんの好意によってトブの大森林出身のハムスケも同行する事になっていた。この他に大森林の北部にあるリザードマン集落で宿泊・補給の手配までされている。手厚いバックアップに雇用主への感謝が尽きない。これなら組合長のアインザックが何の心配もしていなかったのも当然である。



「フハハハハハハハハハ！ようやく新しい魔法の取得に成功したぞ！それも遂に第七位階魔法に達する事が出来たのだ!!（ビクンビクン）」

フルーダ・パラダインが新たな魔法を身につけたのは、実に十数年ぶりの事だった。そして100年以上も昔に前人未到の第六位階に到達して以来、長く停滞していた魔法の位階がとうとう次の位階に昇る事となった歓喜の瞬間であった。

「思えば長く苦しい道程じゃった……導いてくれる師も居らず、ここ100年は自分以上の存在すら何処にも居ない。頼れるものなどない孤独で無頼な歲月……だがそれも既に過去の事——」

自分を導いてくれる師を持たなかったフルルダ。彼は常に先頭を1人で進んできた。たった1人で魔法という荒野に苦勞して道を拓き、後から続く者達の為に標を立て続けてきた。そして：そんな人生を誇りに思っていた。しかしその荒野にはしっかりと舗装された高速道路が敷設されていたのだ。

「足りない、足りないぞ!!フルルダ・パラダイン!お前に足りないもの、それは——魔法知識・前提魔法・アイテム・職業取得・職業構成!そして何よりも——レベルが足りない!!」

「Wikiを見てからレベル上げるしかないでしょ。頑張つてねお爺さん♪」

未だ神より賜わった言葉には理解出来ない事が多いが、今の自分出来る事は「レベルアップ」だ。実際こうして得る物があつたのだから間違つてはいないはずだ。レベルアップについて尋ねたが、神の言葉はあまりにも難解だった。

「テレレレッツテッテー♪だな。」

「ペレレレッツペッペー♪だね。」

純白の冒険譚（3）

トブの大森林に住む？ 生えている？ ドライアードのピニスン・ポール・ペルリアはとても焦っていた。このままでは世界が危ない！ そして自分もつと危ない！ 何故ならトブの大森林の奥地に封印されていた「破滅の魔樹ザイトルクワエ」の復活が迫っているからだ。ザイトルクワエは完全に復活すれば世界を滅ぼすと伝えられる恐ろしいモンスターである。

今を遡ること太陽が数え切れないくらい沢山昇った頃、ザイトルクワエの触手の一部が復活して暴れた事がある。その時は周辺の森に物凄い被害があつたのを覚えている。だが森の外からやって来た7人組が触手たちを倒して、森と仲間達を救ってくれた。彼らがいなければ自分だつて殺されていただろう。そして彼らはピニスンに約束してくれた。魔樹が再び蘇ることがあれば助けに来てくれると。

　　太陽がなかなか昇った頃

「なんか最近やばそうな雰囲気を感じるんだよね…小鳥さんは何か感じない？」

「ピーチクパーチク（知らんがな）」

　　太陽がけっこう昇った頃

「やっぱり変だ…ミツバチ君は何か知ってる？」

「ブーン？ブーン？（さあ？気のせいじゃないっすか？）」

　　～太陽がそこそこ昇った頃～

「絶対におかしい…：そういうえば最近、小鳥さんを見てないなあ…シマリス君は何か聞いてない？」

「キキイーツ！キキイーツ！（こんな所にいられるか！俺は森から逃げるぞ！）」

　　～太陽がちよつと昇った頃～

「誰も居なくなっちゃった…：何でだろう？」

　　～太陽が少し昇った頃～

「まさか魔樹が復活!?あわわわ…：どうしよう!?!…：あつ、そういうえばあの7人組がいたじゃん♪」

　　～太陽がほんのちよつと昇った頃～

「早くきてよ～！魔樹が復活したら助けてくれるって言ったじゃないかあああ～」

　　～太陽がほんの少し昇った頃～

「どどどどど、どうしよう?…このままじゃ世界が…：その前に僕が!?!」

　　～太陽が1回昇った頃～

「7人組——!!早くきてくれ——っ!!!」

（現在）

「動け、動け、動け、動け、動いてよー（僕の根っこ）！今動かなきゃなんにもならないんだ！今、動かなきゃ、ぼく死んじゃうんだ。そんなのやなんだよ！だから、動いてよー（僕の根っこ）！」



王都でも最高級の宿として知られる「王国ホテル」に併設された酒場。そこで王国が誇るアダマンタイト級チームの一つ「青の薔薇」の面々が、今後の活動について相談していた。

「それじゃボウロロップ侯からの依頼は、エ・ランテルのオリハルコン級チームが受けたんだな？あそこはミスリル級が最高だったはずだが、どんなチームなんだ？ティアとティナは何か知らねーのか？」

チームの頼れる兄貴役ガガーランが尋ねる。

「私達も知らない。エ・ランテルについては情報が殆ど入って来ないので困っている。」
「未確認情報ではアンデッドが大量発生して壊滅的被害を受けたとか、王国に反旗を翻して、王都からの使者を殺害したらしいとかあるけど、とにかく情報が錯綜している。」

ティアとティナは元イジャンニーヤの忍者姉妹である。その前職の経験を活かした諜報活動も今回は上手くいっていない様子だ。

「本当に困ったわ。只でさえ八本指による貴族への盗難事件が続発しているのに。」

チームリーダーのラクユースが溜め息をつく。彼女自身は冒険者であるが、アインドラ家の令嬢でもあるので、貴族関連と無関係ではられない。

頻発している盗難事件には、王国で暗躍する犯罪組織「八本指」の関与が疑われている。被害に遭った貴族の邸宅には「八本指参上！」と記された領収証がばら撒かれていた。もちろん八本指は「我々は潔白だ！」というコメントを発表していたが、他に手掛かりが全くないこともあり、一部というか大部分の貴族と蜜月な関係であった八本指の立場は急速に悪化していた。

「トブの大森林には用事が無いわけでもなかったんだがな……」

そう呟いたのは仮面で素顔を隠したマジックキャスターの少女だ。彼女はイビルアイ——その正体はかつて一国を滅ぼした恐るべき吸血鬼「国墮とし」であり、伝説の十三英雄とも知己がある。その実力は他のメンバー全員を相手に互角以上に戦える程であり、この世界でも屈指の強者である。

「何だ？ちびっこ。昔の知り合いでもないのかよ？」

「誰がちびっこだ！知り合いの知り合いだ……ガガーランも知ってるババアの知り合い

だ。」

「あの婆さんも顔が広いからな。どんな奴なんだ？」

「私は直接の面識がないが：ドライアードの少女という話した。何かあったら（現在、大變に困窮した事態に陥っています）力になってやって欲しいと言われていたんだ。」

「ドライアードねえ：」

さすがのイビルアイも100年以上も昔の記憶はあやふやになっていく様だ。

「それよりボス：例の依頼はどうする？」

「絶対にお断りよ！ 貴族によって苦しめられた王国民を助けている「国境なき神官団」を討伐しろだなんて！ 本当に腐りきっているわ！」

「冒険者は国同士の問題には手を出さねえからな。まあイツ等とは色々あるが、今回は感謝というか応援するぜ。」

「貴族達はあくまで「不法入国した謎の集団」と言い張っている。」

「いや、どう考えても法国の連中だろ。」

青の薔薇は、人間に無害な亜人まで迫害するスレイン法国に強い隔意を抱いている。過去に亜人の集落を襲撃中の部隊と交戦した事さえあり、法国とは因縁浅からぬ関係だった。

「まあ法国も色々とあるからな。決して一枚岩ではないというか：」

「某は草など食べないのでよく分からないのでござる。」

ハムスケの案内により比較的スムーズにいくと考えられていた、トブの大森林での行軍は思わぬ妨害？を受けていた。一行は大森林北部のリザードマン村を目指していたのだが、ンフィーレアの薬草採取に付き合う形で度々その歩みを止めていた。

「これで何度目だ？雇い主の意向に逆らう訳じゃないが、いくら何でも限度つてもんがあるだろう？」

「ブレインさんの言う事はもつともですけど、これは仕方ないでしょう。これだけの貴重な薬草なんて滅多にお目にかかれないですから。」

ニニヤの言うとおりの無理もないだろう。一行の現在地はかつてハムスケがナワバリとしていた場所だ。人間はおろかモンスターや獣さえハムスケを恐れて、足を踏み入れる事がほとんど無かったので貴重な薬草がそれこそ雑草の様に生えまくっているのだ。

「このエンカイシを採ったのは誰ですかあー!？」

「え、エンカイシですか？私には名前までは分からないのですが…もしかしてコレの事でしょうか？」

「何をしてるんですかペテルさん！このエンカイシというのはですね！ごく限られた期間しか採集出来ない貴重な薬草で！根に近い部分に薬効成分が溜まっているんです！だから根を残しておけばまた生えてくるので、根っこごと引っこ抜いたりしたらダメな

んです！常識じゃないですか！」

「も、申し訳ありません。少しでもお手伝いを、と思ったのですが……」

「チツ……ド素人が。」

「おお！ベベヤモクゴケまで見つかったのである！」

「さすがダインさん！それに引きかえ……」

この様に、あちこちに群生している薬草を見つけるたびに、ンフィーレアの抜き取りチャンスが発生するので予定の半分程度しか進めていなかった。彼らの中ではドルイドのダインくらいしか採取スキルを持っていないので、下手に手伝おうとすると、かえって邪魔になってしまうのだ。結局リザードマン村に到着したのは、予定を大夫オーバーしてからだった。



トブの大森林北部にある湖の南側の湿地帯に、部族ごとに分かれて暮らしていたリザードマン達は、彼らの新しい支配者の命令で「鋭き尻尾」という部族の村があった地域に、大規模な部族連合村を築いて暮らす事になった。

元来リザードマンは排他的な閉鎖社会であり、部族間の交流すら殆ど無かったのでト

ラブルも懸念されていた。しかし神を否定し祖霊を敬い強者を尊ぶリザードマンにとつては、ドラゴンという圧倒的強者をさらに支配するダークエルフ姉弟すらも支配するオーバーロードの存在は、リザードマン達が躊躇い無く宗旨替えするのに十分過ぎる理由だった。

「ようこそリザードマン村へ！私は部族連合長のシャースーリユー・シャシャと申します。」

「これはご丁寧に。私達は人間？の冒険者チーム漆黒の剣（白）です。今回はお世話になります。」

「ンフィーレア・バレアレです。」

「ハムスケでござる。」

リザードマン達は、彼らにとつて初めての客人を快く歓迎した。かつてのリザードマンからは考えられない様子だ。

「あの魔獣と剣士…凄まじい強者だな。」

「……おう、お前も気になるか？それに他の連中もかなり強えな。それにしても連中…クルシユの親戚じゃねえのか？」

「いや…それはない、と思うんだが??（否定できない白さだ）」

リザードマンでも屈指の戦士であるザリユースとゼンベルは、強そうな客人に興味

津々だった。

「こちらにはさっちゃん様から届けるように言われたポーションです。」

「おお！これは忝い。我らにとつて人間が作った魔法のポーションは貴重品でしてな。今夜は盛大な宴を催させて頂きますぞ！」

「それはありがたい。期待させてもらいますね。」

同じナザリックに關係する者同士、彼らは交流を深め合うのだった。そしてリザードマン村でしっかりと休息して英気を養った漆黒の劍（白）はトブの大森林のさらに奥深くへと向かうのだった。



「なあ？あのドライアード…何やってるんだ？」

「どうしたんでしょう？何か必死と言うか鬼気迫るといふか…」

漆黒の劍（白）の目の前では、本体と思われる樹木を懸命に引つ張ったり、押ししたりしているドライアードの少女の姿があった。

「もー！遅いじゃないかっ！ずーっと待ってたんだぞ！」

「????????」

「さあつ！世界を滅ぼす魔樹の復活が迫っているんだ。一刻も早く魔樹をやっつけて森に平和を取り戻してくれ！」

当然だが漆黒の剣（白）には何の事か分からない。何やら不穏な単語が聞こえたが、もしそれが事実なら、そんな物騒な場所からはさっさと避難する必要がある。

「ですから！何度も言っている様に人違いです。私達は薬草採集にきた通りすがりの冒険者であつて、その7人組とは面識も無いのです。私達に言われても困るんですよ。」

他の種族にも言える事だが、ドライアードのピニスンにとつて人間と言うのは見分けが付き難い。漆黒の剣（白）一行がハムスケとンファイレーアを併せて7人？という事もあり「これで勝つる！」となつたのも無理はない。

「某も長く森で暮っていたでござるが、そんな魔樹の話は初耳でござるよ。」

「でもピニスンさんが言っている事が事実なら放っておけませんよ。世界を滅ぼすなんて言われても信じられ——」

「まあ世界を滅ぼせる御方には心当たりがあるけどな…」

彼らにとつて「世界を滅ぼせる化物」というのはけっこう身近な存在だったりする。「どうするんだ？とても俺達の手を負えそうにないぞ。」

「とりあえずお嬢様に報告するしかないでしょう。メッセージの魔法で連絡しましょう。」

ニニヤはメッセージの魔法を発動させるが、特に慌てた様子は無い。彼女が崇拜する主人達であれば魔樹の1本や2本が復活したところで、鎧袖一触だと信じているからだ。

〈へプルルル…プルルル…プルルル…プルルル…〉

〈へあれ？なかなか繋がらない〉

〈へ只今、メッセージに出る事が出来ません。しばらくたつてからお掛け直し下さい〉

「あの…どうします？」

「これってヤバくないか？」

「戦略的撤退を進言するのである。」

時として冒険者というのはその名に反して「冒険」しない。勝てない相手からは逃げるというのは恥でも臆病でもない。合理的判断だ。

「そんなあく!?置いてかないで!」

「落ち着けて、別に今すぐ復活するとかいう話じゃないんだろ?」

「とりあえず魔樹の姿だけでも確認しておきます?」

「全員で行く必要はないだろ?フライの魔法を使えるニニヤが、植物に詳しいインフイーレア君を連れて様子を見てくればいいんじゃないか?」

「樹木系は専門外ですけど…まあ見るだけなら。」

「それなら私達はピニスンさんの本体を掘り起こすようにしましょう。」
 「えっ?! 助けてくれるの?」

何だかんだ言ってもお人よしな漆黒の剣(白)であった。

「さすがに放置するのも寝覚めが良くないしな。」

こうしてペテル達はピニスンの掘り起こし、ニニヤとンフィーレアは魔樹の調査に向かう事になった。



「すごい! 羊さんがいっぱい居るよ♪あっちには牛さんも!」

「そうだな。さすがはデミウルゴス牧場だ。(何とか間に合ったか…)」

スレイン法国とローブル聖王国の間にあるアペリオン丘陵に造られたデミウルゴス牧場。ここでは大自然の中で家畜達が伸び伸びと育てられている…という事になっている。

元は魔法を込めるスクロールの材料になる「聖王国両脚羊」という家畜を扱っていたのだが、情報収集と研究が進んだ結果、他の羊皮紙でも代用が可能となった事もあり、一時は存続が危ぶまれる事態となっていた。

しかし牧場長が新規事業の開拓に成功し、現在では家畜の品種改良や食肉業を中心に業績をあげている。特に人気なのが「地産地消」をモットーに営業するレストランだ。ここでしか味わえないメニューが売りで、予約が必要になる程の人気店だ。利用客には著名なNPCも多く、プレアデスのソリュシャンやエントマも常連客だ。

そんなデミウルゴス牧場の噂を聞いてしまったさっちゃんが「牧場を見てみたい！あとジンギスカン♪」と言ったのが今回の発端である。当然だが牧場の実態を知られる訳にはいかないのです、突貫工事でデミウルゴス牧場の改装（偽装）が行われたのだ。

「こ、これはこれはオーナー様。ようこそいらっしゃいました。私は従業員のバザーと申します。」

「わぁー！お兄ちゃん、山羊だよー！山羊のおじさんだよー！」

「ご苦労…今日は世話になる。」

ペコペコしながら挨拶するのはバフォルクという亜人だ。オーバーオールに身を包み、頭に被った麦わら帽子からは立派な角が飛び出ている。非常に立派な体躯で只者ではない雰囲気を漂わせているような気がするが、服装のおかげで農家のおっさんに見えるなくもない。

彼の正体はアベリオン丘陵で複数の部族を率いるバフォルクロードであり「豪王」や「破壊王」の二つ名で恐れられ、ローブル聖王国の名だたる聖騎士を何人も討取ってきた

猛者だが、現在は牧場の一従業員（臨時採用）にすぎない。

バザーがこんな事をさせられているのも、アベリオン丘陵に君臨する大悪魔ヤルダバオトによって部族全員を人質にとられているからだ。特にオーナーの妹君に粗相があれば「アベリオン丘陵で暮らすバフォルクを一匹残らず殺し尽くすぞ」と通告されているので、彼の一挙手一投足に全バフォルクの運命が掛かっている。

「えー…この牧場ではたくさんの羊や牛が、明るい太陽の下で伸び伸びと育てられています。ヤル…ゲフンゲフン、デミウルゴス様からお預りした大切な牛や羊ですから、一頭一頭、心を込めて大切にお世話しております。」

牧場の牛や羊はヤルダバオトの号令一下、亜人達が聖王国各地から掻き集めて来たものだ。たったの一日で千頭近い家畜を集めて来た事からも、亜人達がいかにヤルダバオトに心酔しているかが伺える。

「ふーん…山羊だから羊に詳しいんだ。ピツタリだね！」

「はっ！お褒めに預かり光栄であります。（そんな訳あるか！でも逆らったら殺される…）」

「バザー君はこれでなかなか優秀でして、私も頼りにしております。へその調子だ。そのままさっちゃん様をレストランへ案内しろ。失敗すれば…分かっているだろうな？」

「ヒイイーツへははは、はいー」

バザーは心の底から恐怖していた。デミウルゴス（ヤルダバオト）の恐ろしさはイヤと言うほど身にしみている。アベリオン丘陵で名を馳せた亜人の猛者達を、言葉一つで平伏させたのだから。

「どうしたのかな？いきなり鳴き声なんてあげて？」

「バザー君？〈部族全員ミンチになりたいのかね？〉」

「メエーメエー！メエーメエー！こ、これはパフォルク特有の感激の仕草でございませう！」

デミウルゴスとしても苦肉の策であった。アベリオン丘陵には多種多様な亜人が生息しているが、その中でも従業員役が務まりそうなのが、このバザー位しか居なかったのだ。

牧場という事で獣人系中心に面接をしたのだが、挙動があまりにも不安定だったり、知性や品格が著しく不足している種族や、外見上問題のある種族が多く選考は困難を極めた。多少は粗暴な面があるものの、堂々とした物腰や、そこそこの知性と教養を身に付けていたのがバザーの不幸であった。



「家畜の盗難が多発している？それは聖騎士の仕事とは違うだろう。どこのコソ泥の仕業か分からないが、一般兵に任せておけばいい！私は不穏な動きを見せる亜人の動向を注意せねばならん！」

ローブル聖王国聖騎士団団長レメディオス・カストディオは、部下からの報告に簡潔に答えた。乱暴な物言いにも聞こえるが、これは決して彼女が横暴という訳ではない。聖王国最強の聖騎士であるレメディオスには他にも重要な使命があるのだ。

聖王国では少し前から村ごと住民が失踪するという事件が多発したり、国土に隣接するアベリオン丘陵から定期的に攻め入ってくる亜人の対策があったりして多忙を極めていた。最近では亜人達に組織的な動きが観られ、何か不吉な前兆では？と国民の間にも不穏な空気が漂っている。

「それがですね姉様。家畜を連れ去ったのは亜人の連合軍という話です。人間には一切目もくれずに連れ去っていったそうです。」

彼女はケラルト・カストディオ。聖王国神官団団長にしてレメディオスの妹である。第五位階の信仰系魔法を行使可能な最高峰の神官で姉とともに聖王女カルカ・ベサーレスを支えている。

「どうして亜人が家畜を？さっぱり意味が分からないぞ。」

「食べるために…でしょうか？普通に考えれば牛や羊の方が美味しいはずですから。」

そう答えたのはローブル聖王国聖王女カルカ・ベサーレス。某皇帝曰く「八方美人、不愉快」との事だが、愛らしさと凛々しさを備えた美貌（補正あり）は「ローブルの至宝」と評されている。彼女もまた優秀な信仰系魔法の使い手で、高い戦闘力を持っている。

「成るほど！カルカ様の言う通りだ！亜人共もパンやケーキを食べればいいのだ！」

「何とか亜人の食生活を改善出来れば良いのですが…：そうすれば争いも減って、悲しむ民も…」

「いや、その理屈はおかしい」

純白の冒険譚（4）

「あれが世界を滅ぼす魔樹——ザイトルクワエですか……なんて禍々しいんだ!? それにこの大きさは……たしかにこんな怪物が暴れたら、どれ程の被害が発生するか想像もつかない。」

「ニニヤさん、もう少し近づいて下さい。もっと近くで確かめないと……」
ザイトルクワエの状態を確認する為にやって来た2人は、想像を超える巨大さと禍々しさに驚きを禁じ得ない。

「この距離でこれだけ大きく見えるという事は……高さ100m以上だ!」
「ニニヤさん、もう少し近づいて下さい。もっと近くで確かめないと……」

少しでも情報を得ようとするンフィーレア。前髪の隙間から覗く眼光はザイトルクワエの頭頂部に集中している。

「大丈夫ですかンフィーレアさん?」

「ニニヤさん、もう少し近づいて下さい。もっと近くで確かめないと……」
「えっ……さすがにこれ以上は危険ですよ?」

何時の間にかザイトルクワエは目と鼻の先に迫っていた。そしてその頭頂部には

毒々しい色の薬草が生えている。間違い無い……あれが今回の目的だ。あとほんの少しだけ手を伸ばせば届きそうな……

「本気でヤバいですよンフィーレアさん！なんかグゴゴゴゴって聞こえますよ！」

「あと少し……もうちよつと……」

ンフィーレアはニニヤの制止を振り切ってザイトルクワエの頭頂部へ縋りつく。そこには見た事も無い草がびっしりと群生していた。これこそ伝説の薬草に間違いないと確信する。

「やっぱり！これが伝説の薬草です！間違いありません。」

「そうだったんですか？でも危険ですよ。ザイトルクワエはいつ復活してもおかしくありませんから……」

「今は復活してはいないじゃないですか。じゃあ、いつ採るか？今でしょ！」

こうして当初の偵察に留めるという予定を変更して、薬草採取を始める2人であった。



「もうお終いだあああ〜」

「走れ走れ！追いつかれるぞ！」

「無理無理無理無理！」

「おーい」

遂に復活したザイトルクワエは、その巨体の数倍の長さの触手を振りまわして、周囲の木々を手当たり次第に引き抜いては、自分の身体に養分として取込んでいた。既に半径数百メートルの範囲が被害に遭っている。

「お嬢様はっ？まだメッセージは繋がらないのか？」

「駄目です！さつきからリダイヤルを続けているんですが、反応がありません。」

「お嬢様あああーっ！助けて下さあいーっ！」

「おーい、聞こえないのか？」

頼みの綱のはずのメッセージは通じない。きっと今頃はどこかの牧場でジンギスカンに舌鼓を打っているに違いない。だが経営者が従業員用の保養施設を利用するのは、従業員にとってもプレッシャーになるかもしれないので控えた方が良いだろう。

「ンファイレアさんが欲張るからいけないんですよ！僕は危険だっけ言っただのに！」

「そんなっ！ニニヤさんだっけ共犯じゃないですか！どうせなら根こそぎ抜いてしまえっけ!!」

「俺は生きる！生きてナーベラルと添い遂げるっ！」

「いいから逃げろおーっ!!」

「おいっ、さつきから呼んでるんだから返事をしろ!」

彼らに声を掛けていたのは漆黒の剣（白）を眷属にしたエヌスリーだ。以前、ちよつと目を離している間にクレマンティーヌにやられてしまった（うわっ…私が雇った冒険者、弱すぎ…?）彼らを心配して、さっちゃんが派遣していたのだ。いつもは不可知して浮遊霊の様にしているが、彼らがギリギリまで頑張っても如何にもならない（時間切れ or 命令違反）時に突然現れては、全てを解決してしまう漆黒の剣（白）の最終決戦秘奥義である。

「え、エヌスリー様っ…よくぞよくぞ…」

「師匠ーっ!!」

「へへっ♪これで怖いモン無しだぜえ!」

「来いよザイトルクワエ! 触手なんて捨ててかかって来いよ!」

「静まれ、静まれい。このお方を何方と心得る! 恐れ多くもナザリツク地下大墳墓の偉大にして至高なる支配者アインズ・ウール・ゴウン様の究極の妹君さっちゃんお嬢様の直属護衛エヌスリー様であらせられるぞお! エヌスリー様の御前である。頭がたかーい! 控えおろう!」



ズガガガガガガガガッ——

リザードマン達目掛けて、弾丸のようにザイトルクワエの種子がばら撒かれる。しかし先頭に立った女騎士が剣を振るうと同時に、全てが撃ち落とされる。

「いくらでも撃つて来い！（エヌスリー様達が）全て撃ち落としてやる！」

リザードマンの勇者ザリユースが吼える。その手にはリザードマンに伝わる四至宝の一つである、凍牙の苦痛が握られている。

「2本らんんー。がはあはあ…はははあっ！」

同じくりザードマンの戦士であるゼンベルの武技が炸裂し、ザイトルクワエの触手の先から、さらに枝分かれしていた触手が滅びていった。戦いぬいたゼンベルには判る。あの（触手の先から枝分かれした）触手1本でさえゼンベルと互角の強さだろう。

「行けやあぁザリユースっ！」

「喰らえっ！氷結爆散っ!!」

ザリユースは 氷結爆散を つかった！ザイトルクワエ（触手A）に 13ポイントのダメージ！ザイトルクワエ（触手B）に 10ポイントのダメージ！ザイトルクワエ（触手C）に 12ポイントのダメージ！

「うおおっ！くらえっ！」

グの こうげき！ザイトルクワエ（触手A）に 17ポイントのダメージ！

「これでどうじゃ！《ライトニング／雷撃》」

リユラリユースは ライトニングを となた！ザイトルクワエ（触手A）に 15
ポイントのダメージ！ザイトルクワエ（触手A）をたおした！

トブの大森林各地から集った勇敢な戦士達が、世界を滅ぼす魔樹ザイトルクワエと激戦を繰り広げていた。リザードマンの他にもトロールやナーガまでいる。もちろん漆黒の剣（白）も彼らと共に戦っている。全くの異なる種族同士が協力して、中には敵対関係にあった物同士さえいるが、全員が心一つにして戦っていた。

どうしてこんな事になっているのか？それを語る為に少しでも時間を遡る……

完全復活したザイトルクワエは凄まじい強さだった。ナザリックでもかなり上位の戦闘力を誇るエヌスリーでさえ梃子摺る強さだった。とにかくタフでいくらダメージを与えても怯まない。

「その身に刻めっ！《ニールン・ヴァレスティ》」

エヌスリーは ニールン・ヴァレスティを つかった！ザイトルクワエに 134
9ポイントのダメージ！

「手ごたえはあったが、まったく堪えていないな。どれだけタフなんだ……」

彼女は防衛寄りの能力に優れた戦士の為、どうしても火力が不足がちだ。1000レベルに相応しい能力ではあるがレイドボス級のHPを誇るザイトルクワエ相手では分が悪い。このまま戦い続けても、負ける事はないにしても倒し切るのは困難だろう。

「お、俺達だつてやれるぞ！」

「そうです！僕達だつて！」

「ウオオオオ！いくぞザイトルクワエエエ！武技《神閃》！」

ブレインは 神閃を つかった！ザイトルクワエに 29ポイントのダメージ！

「いけつ《バーンランス／炎焼騎士槍》」

ニニヤは バーンランスを つかった！ザイトルクワエに 41ポイントのダメージ！

ジ！

「お前らは逃げるおーっ！その程度の攻撃ではコイツには掠り傷にしかならない！逆にコイツを刺激するだけだ。」

「たとえ掠り傷でも、与え続ければ大きな傷になるのである！《剛撃》」

ダインは 剛撃を つかった！ザイトルクワエに 10ポイントのダメージ！

「こいつを喰らいなつ 《早撃ち》」

ペテルは 早撃ちを つかった！ザイトルクワエに 3ポイントのダメージ！ザイ

トルクワエは いきりたつた！

ザイトルクワエの こうげき！ペテルを ねらったが エヌスリーが かばった！
エヌスリーは 193ポイントの ダメージを うけた！

「ぐっ…コイツらでは1撃でもくらえば即死だ。私が防御に徹すれば守りきれるが…」
「なるほど！エヌスリー殿が囷となつて攻撃を引き受けている隙に、某達が集中攻撃を
するという作戦でござるな！」

「おお！何て冷静で的確な作戦なんだ！」

「ふざけるなあーっ！ヘイト管理するこつちの身にもなつてみるおっつ！」

こうしてザイトルクワエVS漆黒の剣（白）+1の戦いが始まった。漆黒の剣（白）に
とつては、文字通りの大樹を小さな鋏で切り倒そうという絶望的で無謀な戦い。約1名
にとつてはとんでもない縛りプレイを強制される大変に不本意な戦いであつた。そし
てその戦いを見ていたドライアードの少女は……

「みんなが僕の為に（違います）あんなに必死に…それなのに、僕には見ているだけしか
出来ないなんて…僕はなんて無力なんだ…ああ、皆があんなに頑張っているのに——」

必死に戦う彼らの勇姿が、無力感と絶望感に苛まれていたピニスの心に光を灯す。
それは彼女の中に眠っていた力——タレントを覚醒させる！

「この溢れる力…これが僕に出来る、僕にしか出来ない事！」

「トブの大森林のみんな！僕は森に住むドライアードのピニス。この森を…いや世界

を滅ぼすほどの恐ろしい魔樹が復活して暴れているんだ！今は僕の友達が森の奥で必死に魔樹と戦っている！でも彼らだけじゃ勝てないんだ！（彼女だけなら時間を掛ければ勝てます）このままじゃ負けちゃうかもしれない！だから皆の力を貸してほしいんだ！」

ピニスのタレントは「自分が心から伝えたいと思った事を、森の仲間達の心に直接訴える」という能力だった。ピニスの願いは一斉配信され、トブの大森林に住む者達の心に響き渡った。

くりザードマン村く

「兄者……このメツセージは！」

「ああ、きつと彼らが戦ってくれているに違いない！」

「俺達リザードマンだつて森に生きる仲間だ！黙つて見てる訳にはいかねーぜ。」

「だが大勢で行つても犠牲が増えるだけ……行くのは精鋭部隊だけにすべきだ。そして万が一の時に部族を纏める存在が必要だ。クルシユは残つてくれ！」

「……正論ですね。シャースーリユ？」

「うん。ザリユース、ただしい。」

くトブの大森林の東にある洞窟く

「このグ様に助けを求めるとは、なかなか分かっているじゃないか！いくぞお前ら！俺

達の力を見せつけてやるんだ！」

「イー……ッ!!!」

くトブの大森林の西部く

「成程……森の奥から漂う不穏な気配の理由が分かった。」

「ど、どうしますかりユラリユース様？」

「行くしかないじやろう。このメッセージは真実を伝えておる。儂の能力がそう告げている。」

こうしてピニスンの一斉配信を受け取った勇者達は、トブの大森林各地から決戦の地に向かつて集結していった。総勢で100体以上の軍勢である。そしてピニスンの願いはもう一つの奇跡をおこしていた。

「お兄ちゃん見て見て！何か面白そうな事になってるよ。」

「どれどれ……ほほう！これは興味深い……」



「おお！東の巨人も来ておったか。お前もピニスンのメッセージを聞いたのじゃな。」

「ふん……このグ様にかかれれば魔樹など簡単に切り倒してやる！」

「ガハハハ！ すぐえじゃねーか。これだけの数の戦士が集まるとはな！」

「そうだな。強い戦士が多ければ多いほど彼らの力になる！」 ※むしろ迷惑なんですけど……

決戦の地からすぐ近くの空き地に勇者達が集まっていた。彼らがメッセージを聞いて出発してから1時間も経っていない。いったいどのような力が働いたのであろうか？

「それにしても……あの白い箱は何だったんじゃ？ あの白い箱の横腹が開いたと思ったら……」

「私達もです。何か黒い影に羽交い締めされたと思ったら……」

「ふん！ よく分からんが、あのピとかいう奴の仕業だろう。」

彼らは謎の白い箱の力によって、この場に連れてこられたのだ。彼らの背後に突然現れた白い箱、その横側の扉から伸びた黒い手が、彼らを箱の中に押し込めた。目と口を塞がれて、気が付けばこの場に放り投げられたのだった。

「こうしてはいられない！ 彼らが戦っているのはこの先だ。早く行かなければ。」

「そうじゃな。今は一刻を争う時じゃ。」

こうして勇者達が決戦の地へと集結したのだった。



「ちつくしよおー！何度も攻撃が当たっているのに!？」

「諦めてはいけません！攻撃あるのみです。」

「パライ！パライ！パライ！パライ！（ダメだ！防御で手一杯で攻撃する暇が無いぞ！）」

既に戦闘開始から1時間以上が経過しているが、ザイトルクワエの猛攻は衰えを見せない。漆黒の剣（白）達は何度もザイトルクワエに全力の攻撃を加えていたが、膨大なHPを持つザイトルクワエにとっては決定的なダメージにはならず、一方で彼ら自身は体力と精神力を疲弊させていた。

ちなみにザイトルクワエに与えたダメージはエヌスリーが2583ポイント（有効打2発）で、その他全員で1095ポイント（有効打40発以上）だった。

「リザードマン精鋭部隊参上！我らも故郷を守る為に戦います！」

「グ様が来たからには心配ないぞ！」

「この森に生きとし生けるもの全ての戦いじや！」

遂に集結した勇者達。思わぬ援軍に漆黒の剣（白）も勇気づけられる。すぐ近くにいた彼らにもピニスのメッセージは届いていたのだが、これほど早く援軍が、それも大

量に駆けつけてくれるとは思ってもみなかったのだ。

「みんなっ、来てくれたんだね！ありがとう。」

「これなら何とかなるかもしれません！」

「俺達の戦いはまだまだこれからだ！」

「?!?（ふぎけるな！これ以上の面倒なんて見きれないぞ！いくらテイフエンスには定評

がある私にも限度というものが…）」

〈サンちゃん、聞こえてる？何かすごい事になっちゃったね〜（チューチュー）〉

〈おおっ！さっちゃん様！不甲斐無いのですがもう限界です。何とぞお力添えを〉

〈えっ？これから森の仲間達による友情パワーが炸裂して大逆転じゃないの？（チュー

…ガボボ）〉

〈複数パーティが参加するレイド戦はとても興味深い。もう少し見ていたいのだが

（パリポリ）〉

〈アインズ様までっ?!しかし彼らの攻撃ではダメージが少なすぎるのです！それにこ

の人数を守りきるのはいくら何でも無理があります〉

〈まったく情けない。それでもアインズ様に召喚されたNPCですか？（ズズー）〉

〈アインズ様ノ御言葉ハ全テニ優先スル（ムシャムシャ）〉

〈ぐぬぬ…そこまで言われて引きさがる訳には…〉

彼らの戦いを見ていたアインズ達の声援がエヌスリーの闘志を燃え上がらせる。アインズとしてもここまで大規模なレイド戦は珍しい。だからカウチポテトでじっくりと観戦したいので、もう少し頑張つて欲しいと思つている。

「確かに1人では厳しいか……そういう事なら応援を送るが、あくまで戦法はこのままだ。お前達は防衛に徹して現地の者に攻撃させるのだ。特に漆黒の剣（白）とハムスケを優先しろ。経験値稼ぎに丁度いい。（パリポリ）」

「あ、ありがとうございます、アインズ様！」

「へお前と一緒に召喚した2人を派遣する。彼女達も出番が無くて手もち不沙汰らしくてな。あ、それとザイトルクワエのHPは53万だ。ほんとにレイドボスみたいだな！（パリポリ）」

自分と他の2人の境遇の違いに複雑な思いを抱くエヌスリーだったが、アインズの「ザイトルクワエのHPは53万」という言葉に驚愕する。漆黒の剣（白）達の与える平均ダメージが30未満、いくら手数が増えて負担も減るとはいつても……



「これで最後だザイトルクワエッ！ 《クロスブレイク》」

「喰らえっ《領域》からの《神閃》に加え《四光連斬》だっ!!（この武技は《枝切り》と名付けよう）」

ペテルとブレインの放った武技が同時にザイトルクワエに炸裂する。そしてそれが止めになり、ズズズーンという音とともに巨体が倒れて行く。ついに魔樹を倒したのだ！

「ついにやったぞ！俺達の…森の仲間達の勝利だ！」

「うおおおー！」

「ワツシヨイトワツシヨイトワツシヨイトワツシヨイトワツシヨイト」

互いの健闘を称え合い、共に喜ぶ勇者達。彼らの戦いは一昼夜におよぶ激戦だった。あまりに時間がかかったので、途中から「少し手伝ってやれ、但し止めはさすなよ」「おやすみー。私もう寝るから」「終わりそうになったら教えてくれ」「えっ…まだ戦ってたの？」などの遣り取りもあったのだが、彼らの活躍（3人の涙ぐましい忍耐と努力）によってザイトルクワエは滅んだのだった。

「凄い…体中から力が溢れて…」

「ふははは…このグ様にかかればこんなものだ。ペにブもやるではないか。ザにゼもなかなかだったぞ。」

「これは…確かに力が漲ってくる。」

「ふふふ…以前とは比べ物にならない位にレベルアップしたようでごさるな。」

レイドボス撃破の報酬はさすがで、全員がかなりのレベルアップを果たしていた。特に攻撃の主力となっていた漆黒の剣（白）とハムスケは10レベル近いレベルアップだ。実力的にはアダマンタイト級どころか漆黒聖典クラスといっても過言ではない。

ちなみに東の巨人グが他人の名前を短縮しているのは、彼なりの敬意である。トロールの風習では名前は短いほど、その者が強く勇敢とされているからだ。ペはペテル、ブはブレインの事だ。

こうして伝説の薬草を入手し、さらに世界を滅ぼす破滅の魔樹さえ討伐した漆黒の剣（白）はエ・ランテル初のアダマンタイト級冒険者チームとなったのだ。



「それでは彼女をナザリック地下大墳墓へ派遣するという事でよろしいのですね。」

「白金の竜王はふれいやー様の出現でこちらへの警戒を弱めている。今なら奴の目も誤魔化せるはずだ。」

「彼女の補佐に第一席次を同行させる。他の者では足手纏いにしかならん。」

「しかしレベル100超えの従属神…それすら最初のボスに過ぎないとは。」

遂にスレイン法国最強不敗の番外席次が出撃する事になった。出撃の決定を聞かされた彼女はとても満足そうに呟いた。

「ついに敗北を知る時がくるのね♪」